那谷金比羅山古墳
那谷金比羅山窯跡群

1989

石川県立埋蔵文化財センター

那谷金比羅山古墳
那谷金比羅山窯跡群

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は那谷金比羅山(なたこんぴらやま) 古墳・那谷金比羅山窯跡群の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は小松市那谷町地内である。

3　調査要因は、石川県農林水産部が所管する県営公害防除特別土地改良事業で、同部耕地整備課が石川県立埋蔵文化財センターに発掘調査を依頼したものである。

4　調査に係る費用は、石川県農林水産部耕地整備課が負担した。

5　現地調査に係る期間・面積・担当は下記のとおりである。

第1次調査

期　間　昭和57年(1982)7月 1 日～同年10月31日

面　積　2,500㎡

担　当　石川県立埋蔵文化財センター主事 浜野伸雄

補助員　杉野洋一郎

第2次調査

期　間　昭和58年(1983)4月25日～同年9月6日

面　積　2,000㎡

担　当　石川県立埋蔵文化財センター主事 浜野伸雄

補助員　田中孝典・松山和彦

第3次調査

期　間　昭和59年(1984)5月1日～同年12月20日

面　積　4,500㎡

担　当　石川県立埋蔵文化財センター主事 福島正実・山本直人

補助員　石田和彦・浜崎悟司・本田秀生

6　本書の執筆分担は次の通りである。

第1章・第2章　三浦純夫

第3章　伊藤雅文

第4章　第1節　三浦、第2節　川畑　誠

7　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 方位は座標北であり、座標は建設省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

(2) 水平基準は海抜高であり、T.P.(東京湾平均海面標高) による。

(3) 遺物番号は挿図・観察表・写真に符合する。

目　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4

第３章　那谷金比羅山古墳 …… 7

第１節　立地と墳丘 …… 7
第２節　埋葬施設 …… 10
第３節　出土遺物 …… 16
第４節　小結 …… 18

第４章　那谷金比羅山窯跡群 …… 19

第１節　遺構 …… 19
1. 概要 …… 19
2. 須恵器窯 …… 19
3. 竪穴状遺構 …… 23
第２節　出土遺物 …… 69
1. 概要 …… 69
2. 4号窯 …… 69
3. 1号窯 …… 81
4. 6号窯 …… 87
5. 11号窯 …… 93
6. 7-1号窯 …… 101
7. 7-1・2号窯灰原 …… 105
8. 7-2号窯 …… 109
9. 8号窯 …… 116
10. 5号窯 …… 120
11. 10号窯 …… 123
12. 5・10号窯灰原 …… 125
13. 2号窯 …… 131
14. その他の遺構 …… 140
15. 包含層、陶棺、円面硯、土馬等 …… 142
16. 小結 …… 152

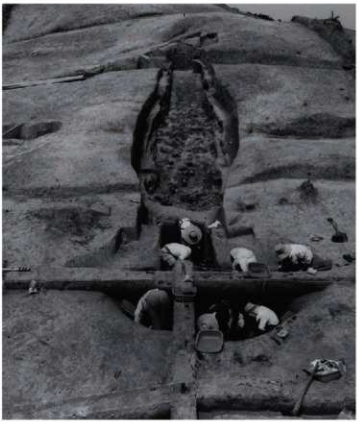
第１章　調査の経緯と経過

本遺跡の発掘調査は県営公害防除特別土地改良事業（梯川流域地区）に使用する客土用土砂の採取に係るものである。この事業は、小松市尾小屋町に存在した尾小屋鉱山の排出水に含まれていたカドミウムが梯川流域の農用地を汚染したため、客土をして土地改良することを目的とするものである。発掘調査を行った小松市那谷地域は客土採取地に選定され、那谷丘陵に存在する遺跡が影響を受けることになったのである。

工事に先立ち、石川県農林水産部耕地整備課長は昭和57年5日4日付けで石川県立埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）に対し、小松市那谷町地内における埋蔵文化財の分布調査および発掘調査を依頼した。内容は、約30,000㎡の分布調査と存在が予測される複数の窯跡の発掘調査である。埋蔵文化財センターは、同年5月15日～6月30日に分布調査を実施し、事業地内に10 基前後の須恵器窯跡が存在することを確認し、耕地整備課長あて回答した。その結果、工事の影響が及ぶ範囲について発掘調査を実施することとなり、埋蔵文化財センターが担当することとなった。なお、昭和57年9月9日付けで、追加の客土採取予定地約13,000㎡について分布調査依頼を受け、同年9月27日から29日まで実施したが、この範囲には埋蔵文化財は確認されなかった。発掘調査は例言の通り、昭和58年・59年にも実施した。

金比羅山遠景（東から）

第1次調査は、1号窯～3号窯を対象とした。１号窯は金比羅山西側斜面の中腹に築かれた須恵器窯で、全長15mを超える大型の窖窯である。2号窯は金比羅山の北西斜面に築かれており、全長は約9m



4号窯調査風景

である。焚口付近から焼成不良の須恵器が大量に出たほか、前庭部から陶馬も出土している。3号窯は山裾で検出したもので、操業の形跡が認められず遺物は確認できなかった。

第2次調査は、前年度の分布調査にもとづき金比羅山の南西地区を発掘対象とした。4号窯および那谷金比羅山古墳の調査である。4号窯は、1号窯同様西斜面に築かれている。遺存状態は良く、煙出しや燃焼部の天井も残っている。

那谷金比羅山古墳は径10mに満たない小型円墳で、横口式石槨を内蔵する終末期古墳である。墳丘は流出しており石槨のみ遺存していた。周溝は背後にのみ確認できる。石槨からの遺物はないが、前庭付近から須恵器杯蓋の小片が出ている。この横口式石槨は、第2次調査終了後石川県立埋蔵文化財センターへ搬入し、復元・展示を行っている。

第3次調査は、第1・2次調査箇所の中間区域である金比羅山の南斜面を対象に、5・6・7-1・7-2・8・9・10・11号窯の8基を発掘した。また、6・7号窯間の狭い平坦面では竪穴状遺構を検出した。

以上、3次に及ぶ発掘調査で確認したのは、1基の古墳と12基の須恵器窯、1基の竪穴状遺構である。12基の窯のうち2基は操業に到っていない。

なお、第3次調査で8号窯周辺から「与野評」ではじまり6行に及ぶ文字を刻んだ須恵器平瓶が出土した。7世紀後半の製作とみられるもので、加賀における「評」制の施行を明らかにし、「江沼郡」以前に「与野評」が存在したことを示す重要な資料であることから、昭和59年8月6日に記者発表を行った。

本遺跡の発掘調査に関して次の概要報告を刊行している。

浜野伸雄1983「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『拓影第13号』石川県立埋蔵文化財センター。福島正実1984「那谷金比羅山窯跡群第3次調査と銘文須恵器」『拓影 第16号』石川県立埋蔵文化財センター。福島正実1985「那谷金比羅山窯跡群」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』石川県立埋蔵文化財センター。

出土遺物の整理は、社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託して下記の通り実施した。

昭和57年度　洗浄(第1次調査分)
昭和58年度　洗浄(第2次調査分)
昭和59年度　洗浄(第3次調査分)
昭和60年度　記名・分類・接合・復元・実測・トレース
昭和61年度　記名・分類・接合・復元・実測・トレース

第１図　金比羅山地形図と工事範囲（S＝1/2,000）
（アミかけ部分が工事範囲）

第２章　遺跡の位置と環境

那谷金比羅山古墳・那谷金比羅山窯跡群は小松市那谷町9部1・2・3、通称金比羅山に所在する。那谷金比羅山古墳は古墳時代終末期の古墳、那谷金比羅山窯跡群は古墳時代後期の須恵器窯跡群である。

小松市は石川県の南西部に位置しており、北に手取川、南に今江・木場・柴山潟の加賀三湖、東に能美・江沼丘陵、西には小松砂丘・日本海がある。本遺跡が立地する小松市南東部の丘陵は、標高40mから100mの低丘陵で、小松市戸津町・林町から加賀市松山町にかけての那谷丘陵には南加賀窯跡群と呼ばれる石川県内最大規模の窯業地帯が存在する。ここでは須恵器・土師器・埴輪・陶器などが生産されており、古代から中世にかけて江沼・能美両郡に製品を供給してきた。

南加賀窯跡群は須恵器生産を主体とするが、土師器、埴輪、瓦も生産されている。操業が始まるのは6世紀で、二ツ梨殿様池窯跡、同豆岡山窯跡群があげられる。二ツ梨殿様池窯跡では須恵器とともに埴輪が焼成されており、矢田野エジリ古墳をはじめとする三湖台古墳群に供給されている。6世紀後半になると動橋川流域で操業が始まり、本窯や那谷桃の木山窯跡、分校窯跡群などがこの地区に含まれる。7世紀に入ると林窯跡群、戸津六字ヶ丘窯跡群が出現する。8世紀に入ると、戸津オオダニ地区、二ツ梨オオダニ地区で生産が始まり、9世紀には馬場川流域で生産が始まる。南加賀窯跡群の須恵器生産は10世紀中頃に戸津オオダニ地区で終焉を迎える。

窯跡群とともに石川県内において最大規模で分布するのが南加賀製鉄遺跡群である。南は加賀市箱宮町、北は小松市東山町まで広がっており、小松市戸津町・二ツ梨町では須恵器窯の分布と重複している。生産が始まるのは7世紀後半で、12世紀前半まで続いている。窯の形態は、木炭窯、箱型炉、竪型炉である。

集落遺跡を見ると、動橋川流域に勅使遺跡・分校Ａ遺跡・分校Ｂ遺跡が存在するが、様相は明らかではない。

東部丘陵の南西端では古墳時代前期から後期まで古墳が造営されている。前期古墳では、北側の沖積地に面して分校カン山古墳群、分校チャカ山古墳群が営まれる。前者では前方後円墳、円墳、方墳が築造されている。群中最も大きいのは前方後円墳の分校カン山１号墳で、全長37mを測る。発掘調査が行われ、方格規矩鏡四神鏡一面のほか鉄斧・管玉などが確認された。4世紀前半の築造と推定され、南加賀最古の前方後円墳に位置付けられている。中期では松山古墳群が営まれ、後期になると法皇山横穴墓群、栄谷丸山横穴墓群が出現する。法皇山横穴墓群は、凝灰岩からなる丘陵に築かれたもので、6世紀後半に始まり7世紀後半まで続いている。総数は全山で100基以上に及ぶと見られる。被葬者は村長層とその家族とみられ、累世的に営まれた家族墓の様相を見ることができる。終末期になると本書で報告する那谷金比羅山古墳が出現する。8世紀初めに築かれた円墳で、北陸で唯一の横口式石槨を内蔵しており、畿内の横口式石槨内蔵古墳との関連が想起される。

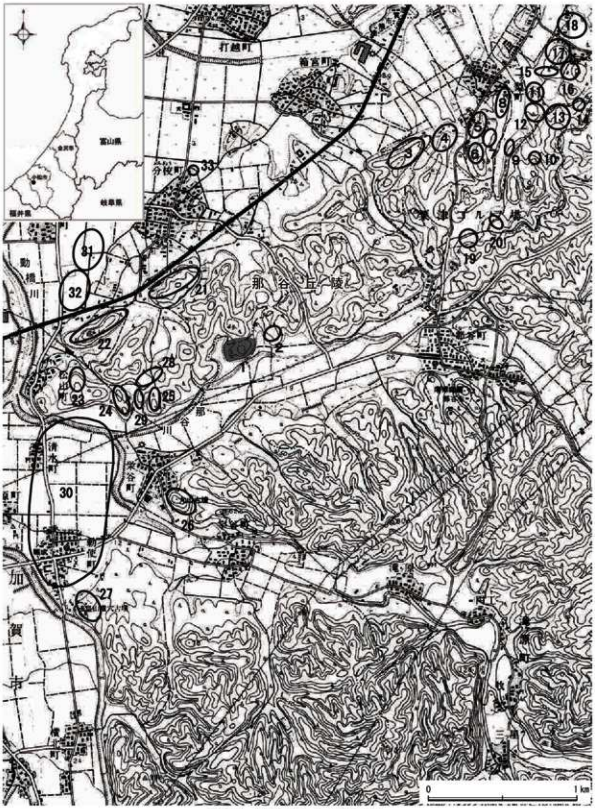
参考文献

加賀市教育委員会　1975 『法皇山横穴古墳群』

石川考古学研究会　1978 『石川考古学研究会々誌 第21号』

小松市教育委員会　1979 『南加賀古窯跡群詳細分布調査事業報告書』

浜野伸雄　1983 「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『祁影 第13号』 石川県立埋蔵文化財センター



第２図　遺跡分布図（S＝1/25,000）

第１表　遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	内容
1	那谷金比羅山古墳・那谷金比羅山窯跡群	小松市那谷町	古墳・窯跡	古墳	古墳１基、須恵器窯 12 基
2	那谷桃の木山窯跡	小松市那谷町	窯跡	奈良	須恵器窯１基、土師器窯１基
3	箱宮窯跡群	加賀市箱宮町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯８基
4	矢田野長尾山遺跡	小松市矢田野町	窯跡・製鉄跡	古代・中世	
5	二ツ谷釜谷窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯３基
6	矢田野向山窯跡	小松市矢田野町	窯跡	奈良	須恵器窯１基
7	二ツ梨脇釜窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良	須恵器窯１基
8	二ツ梨東山窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・奈良	須恵器窯
9	二ツ梨横川窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良	須恵器窯
10	二ツ梨カセイデ窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯２基
11	二ツ梨丸山窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳	須恵器窯
12	二ツ梨峠山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・奈良	須恵器窯６基
13	二ツ梨サンマイダニ窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	平安	須恵器窯５基
14	上荒屋窯跡群	小松市上荒屋町	窯跡	奈良	須恵器窯２基
15	二ツ梨殿様池窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・平安	須恵器・埴輪兼業窯、土師器窯
16	二ツ梨豆岡山向山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯５基、瓦・硯も焼成
17	二ツ梨豆岡山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・平安	須恵器窯４基
18	二ツ梨一貫山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯・土師器窯 10 基以上
19	那谷横穴墓群	小松市那谷町	横穴墓	古墳	横穴墓６基
20	矢田野横穴群	小松市矢田野町	横穴墓	古墳	横穴墓２基
21	分校カン山古墳群	加賀市分校町	古墳	古墳	古墳 19 基
22	分校チャカ山古墳群	加賀市分校町	古墳	古墳	古墳 18 基
23	松山古墳群	加賀市松山町	古墳	古墳	古墳５基
24	松山東古墳群	加賀市松山町	古墳	古墳	古墳４基
25	分校古墳群	加賀市分校町	古墳	古墳	古墳７基
26	栄谷丸山横穴墓群	加賀市栄谷町	横穴墓	古墳	横穴墓 12 基
27	法皇山横穴墓群	加賀市勅使町	横穴墓	古墳	横穴墓 76 基
28	分校窯跡群	加賀市分校町	窯跡	古墳	須恵器窯５基
29	松山窯跡群	加賀市松山町	窯跡	古墳	須恵器窯３基
30	勅使遺跡	加賀市勅使町	集落跡	古代・中世	
31	分校Ａ遺跡	加賀市分校町	散布地	古墳	
32	分校Ｂ遺跡	加賀市分校町	散布地	平安	
33	分校高山古墳	加賀市分校町	古墳	古墳	前方後円墳

第３章　那谷金比羅山古墳

第１節　立地と墳丘

那谷金比羅山古墳は終末期古墳に特有な、いわゆる「山よせ」に作られている。古墳と那谷金比羅山窯跡群が作られた丘陵には東西の二つの高まりが存在し、窯跡の多くが東側の高まりの西側斜面に展開するのに対し、古墳は西側の高まりの南斜面に作られている。水田面標高が15m前後、西側の丘陵頂部が約40mであるので、標高22mから25mの位置にある古墳は丘陵の下位に位置していることになる。したがって、現前に広がる動橋川支流の那谷川がつくりだす狭長な平野への眺望は期待できないとともに、平野からの視認も期待できない。

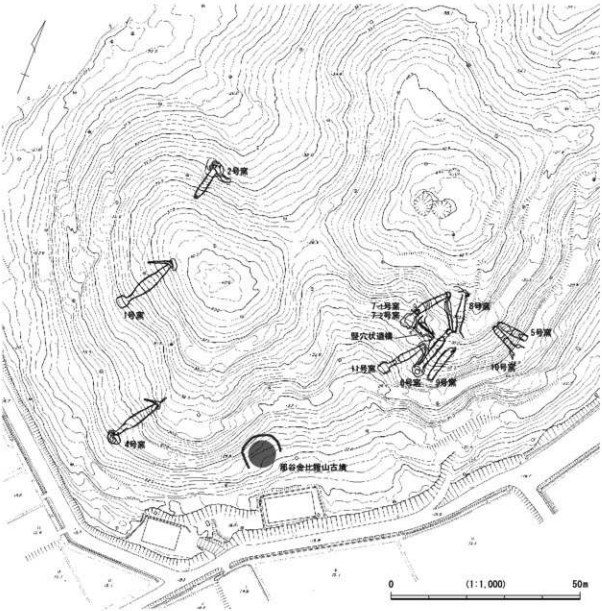
丘陵西の高まりから南南西方向に延びる尾根筋があり、丘陵の南西コーナーを作っている。東西の高まりの鞍部を頂点とする谷は浅く、南南西に延びる尾根筋との間にさらに小さな尾根を作っているが、墳丘が構築されている標高22～24mの高さでは尾根筋が不明確となって緩斜面となっている。丘陵の東の高まりから南に延びる尾根筋がこの緩斜面を遮るように延びている。このような地形的特徴から、この東の尾根筋に6～9、11号窯跡が作られているわけだが、古墳から見た場合、この尾根が古墳の墓域東限として意識されていたと思われる。一方の西については明確な境界を示す地形的な特徴は見出し難く、強いてあげれば南南西に延びる尾根筋がそれに該当しよう。

墳丘背後の斜面は標高25～30mで傾斜が緩やかになっており、東西約40m、南北30m弱の範囲で緩斜面の平場のような観を呈しており狭い。このような空間の西北隅に接するように墳丘が位置している。後述するが、墳丘の南半分が盛土によって構築されている可能性が考えられ、この盛土が墳丘のみならず平場全体に施工されていると考えることもできよう。つまり、古墳祭祀に必要な範囲が墓域として意識され、盛土が施されたのである。

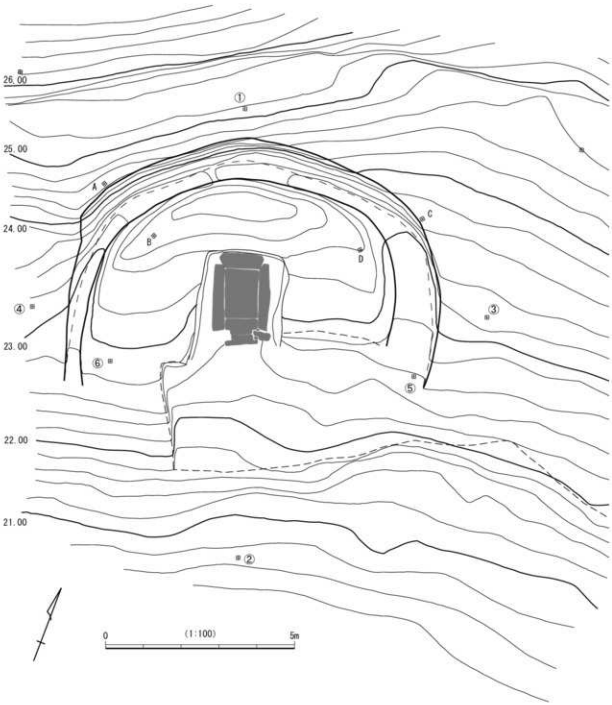
調査当初、墳丘としての高まりは認識されておらず、重機による表土除去によって円弧を描く周溝と「コ」字にみえる石槨が検出されるにおよび古墳と判明した。丘陵での調査ということもあって、基盤層である地山まで下げる意識があったと思われ、古墳の南半分の土層が撹乱と認識されていた。そのために撹乱と認識された土が除去された状態で調査完了時の墳丘測量図を作成している。この撹乱と認識された土質の記録は残っていない。調査時の写真には石槨玄門から「ハ」字にひらく三石からなる石列があり、それが石槨床面と連続するように観察されるので、一体的な構築物と考えることもできる。このように解釈すれば、撹乱と認識された土は古墳構築に伴う整地土の可能性が高くなる。本報告では撹乱かどうか判断できない。

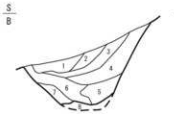
調査では墳丘の盛土は確認できなかったし、その認識もなかった。直径約8mの円墳に、山側に最大幅2mの周溝がめぐる。山側の周溝底の標高が23.28mで、山側の検出位置からすれば1.5mほどの深さとなる。周溝土層断面から見れば墳丘との接点の造作があまく、墳丘裾が明確に作られていない。調査後の墳丘裾平面形が直線的な部分を含む円弧を呈しており、平面形だけ見れば多角形のように見える。しかし、以下の点で、円墳と判断した。

周溝には、石槨背後を中心に西に1本、東に2本の土層観察アゼが設定されており、掘削に合わせてアゼが外されていった。石槨背後のアゼを境に次のアゼまで直線的な墳丘ラインを見せており、掘削者の無意識の手の動きが直線を志向していたものと考えられる。仮に直線を志向した墳丘形を作るためには裾を明確に、すなわち周溝と墳丘の区別を明らかにする意識が必要であり、不明確な墳丘裾状

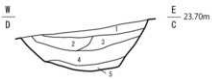


第3図　墳丘位置図（S=1/1000）と検出時の古墳





1 暗黒色粘質土（炭化物含む）
2 濁灰色粘質土
3 黄灰色粘質土
4 黄褐色粘質土
5 赤褐色粘質土（層のしまり悪くばらつく）
6 黄灰色混砂粘質土（若干炭化物含む）
7 赤褐色粘質土
8 地山土（黄色砂質土）



1 茶色粘質土
2 暗黒色粘質土（炭化物含む）
3 濁灰色粘質土
4 黄褐色粘性土
5 黄色粘性土

0 (1:50) 2m

第4図　墳丘図（S=1/100）・周溝断面図（S=1/50）

況にあっては多角形をつくることは難しい。

現状で確認された周溝底の最高所は石槨背後になり周溝の東西で22.80mまで遺存している。おおむね墳丘の中ほどにあたり、約4mで60cmの高さが減じるように、緩やかな傾斜である。検出された周溝はどこの部位でも石槨床面より周溝底が低くなることはないようで、おそらくすでに失われた南の墳丘裾の位置で高低差が解消されるものと想定できよう。

石槨背後の周溝は墳丘からの土砂の流入は見られず。山側からの緩慢な堆積状況が見て取れる。それは、周溝底から約50cmの厚みで暗灰褐色粘質土があり、土壌化が進んでいることから容易に理解できる。西45度のアゼでは墳丘からの流土である赤褐色粘質土がわずかにみられ、同系土と思われる土層が約20cmの厚みで見られる。東45度のアゼでも溝底から20cmの厚みで土壌化した層が見られ、安定した堆積である。この堆積後に墳丘の破壊が及んだようで、石槨背後アゼの4層(黄褐色混砂粘性土)が削平された墳丘の上に覆っていることからわかる。これより上部の土層は炭化物を多く含むものが見られるなど、地形の高い方から流入する土砂によって漸次埋積したものである。したがって、石槨背後の周溝内の埋土には墳丘側からの土砂の流入はなく、そのためにこの周辺からの遺物の出土はわずかに№18の須恵器堤瓶小片のみである。

周溝からの遺物は、石槨背後の東西45度付近から小破片となった土器が多数出土している。いずれも周溝底からかなり浮いた状態で出土しており、古墳に直接伴う遺物であるかどうか明確な根拠はないが、同時代の窯の操業がないことから古墳に伴う遺物である蓋然性が高い。西45度では№19～21が須恵器壺の体部片で、より具体的な器種は不明、東45度では№15が須恵器壺体部片、№16が須恵器甕体部片と片口状の鉢口縁片、№17が須恵器杯身片2個体分と壺体部片とかなりの小破片となって出土している。また、東側周溝の南端には石槨材小片が0.5×1mの範囲で広がっており、その破壊に伴うものであろう。須恵器の器種が杯・堤瓶・壺・甕と多様で極めて小破片であること、および石槨破片を含まないことからすれば、これらの遺物が石槨内にあった可能性は低い。

第2節　埋葬施設

南に開口する横口式石槨である。石槨主軸は、磁北から22度西に傾いており、真北からでは29度西に振れていることになり、南に指向する方向性は認められるものの、西日本各地の横口式石槨に比べて、真南北への厳密性は認められない。なお、石槨の左右は奥壁から見た場合である。

調査時の認識では、撹乱等による石槨の破壊によって横口式石槨の玄室部のみ築造当初の姿を残している、であった。石槨入口から約45度の角度で開く3石からなる石列が東側に存在する。この位置は調査時に石槨破壊時ないしはそれ以降に手が加えられた撹乱と認識された土層中にある。すなわちこれと同一層と認識した三つの石列は築造当初にないものと判断された。しかし、以下にあげる根拠から築造時の姿、すなわち「ハ」字に広がる前庭部を構成する構造を示唆する可能性も考えられる。

①三石の石材が切石のような形状を呈する

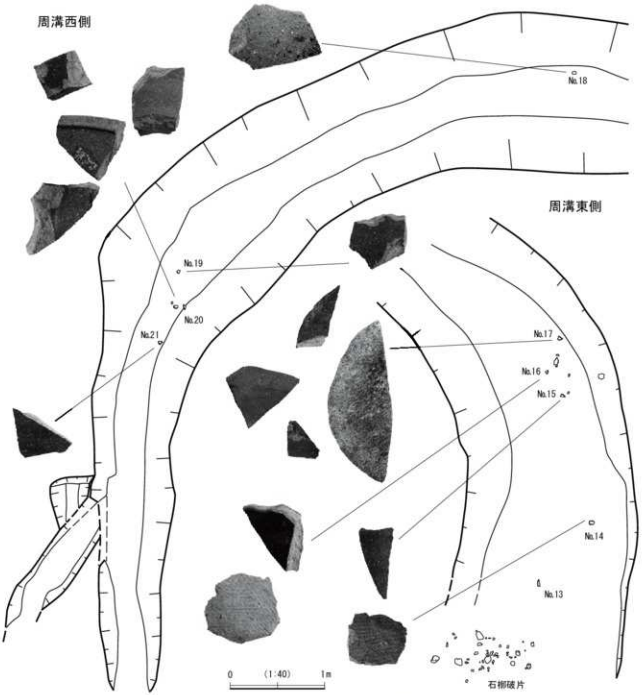
②三石の面がほぼそろっている

③三石のうち中央石材が南の石材に荷重がかかるように組まれている

④三石下面標高の記録はないが、隣接する土器№4が22.595mで床面標高22.597mと同じである

⑤石槨玄室掘り形がその相似形を呈しており、玄門付近から西側の掘り形が広がる

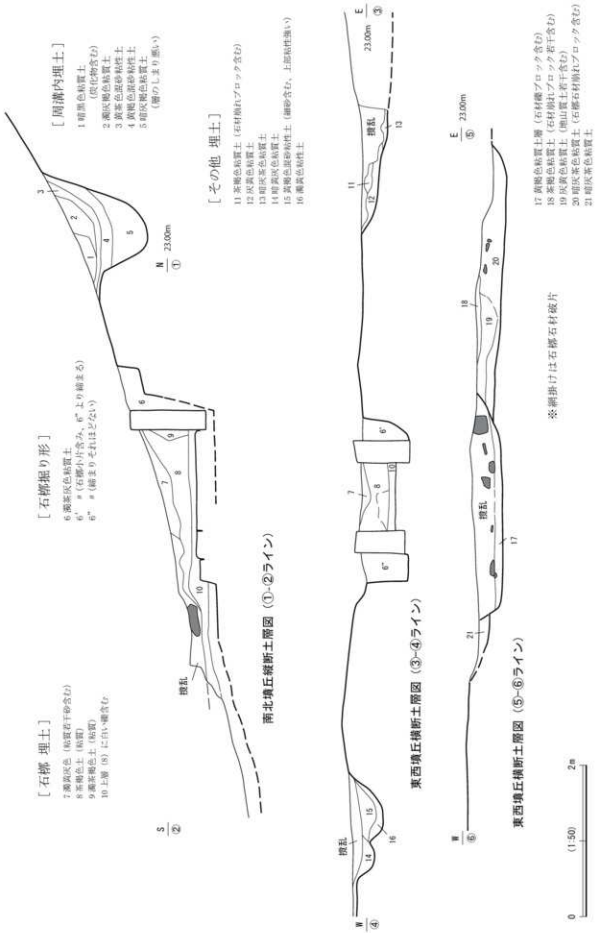
玄室部のみ遺存し、奥壁1石、左右の側壁各1石からなり、床石がこれら石材の内側にある。すなわち床石の上に奥・側壁がのらない構造である。床石は現状で3石からなり、奥側が最も大きく、玄門部周辺が2石である。玄門部には失われた部材があり「門柱石」と仮称する。したがって、門柱石まで



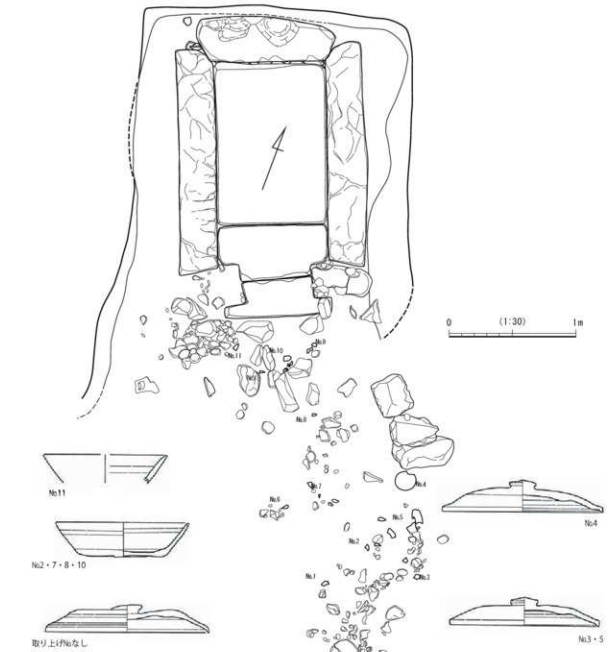
№19 ～ 21 出土状況写真

№15 ～ 17 出土状況写真

第5図　周溝遺物出土状況図（S=1/40）



第6図　墳丘断面図（S=1/50）



№4 出土状況

№5 出土状況

第7図　石椁と遺物・石材出土状況（S=1/30）

を「玄室」とし、門柱石部を「玄門」それよりも開口部側を「前庭」という語を用いて記述する。

石槨は地山に掘り形を掘って構築されている。玄室掘り形は平面「コ」字状で、奥壁部分は段掘りとなっている。掘り形西壁は直に掘り込まれているのに対し北・東壁は擂鉢状となっている。石材外縁が壁の傾斜の下端に合致しており、北と東側壁がまず設置され、次に床石、西側壁という順序で置かれたと想定でき、構築作業が西側からおこなわれたことがわかる。掘り形埋土は濁茶褐色粘質土で、石槨石材破片を混入する部分がある。土を叩きしめた痕跡はなく、一気に埋め戻したようである。

石材は白色の強い凝灰岩で、きめが細かいものの、1～2cmの気泡所の空隙が無数にあいており、きわめて軽くてやわらかい石材である。左側壁材に顕著だが、数センチから十数センチの角礫が混入しているほか、材木状軽石が見られる。おそらく近隣で採取したものと考えられるが、河田山12号墳などの終末期横穴式石室の石材とは異なり[1]、また能美地域横穴式石室で多用された凝灰岩とも異なる。

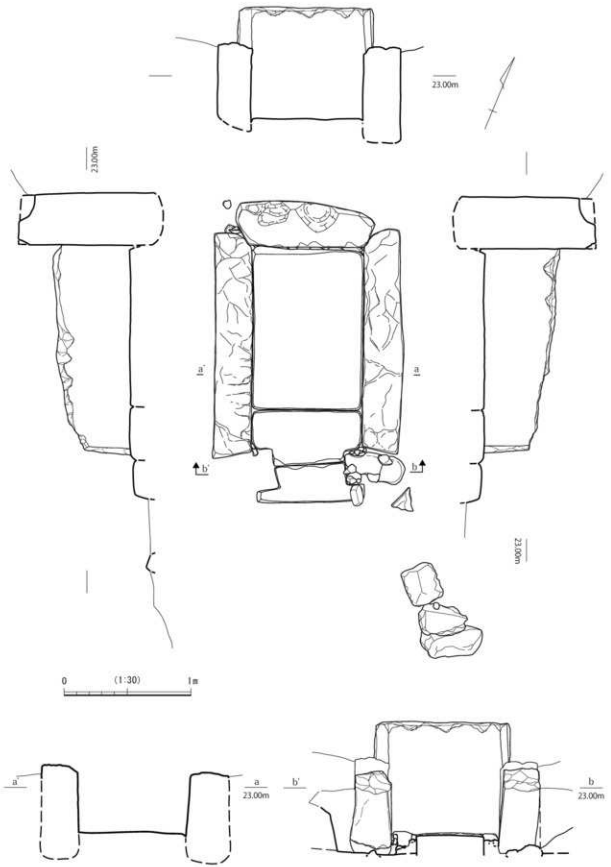
このような石材であるので加工痕跡は明瞭に残っていない。奥壁と側壁の接する部位の加工には幅5～6cm、長さ7～8cmのチョウナ痕があり、また側壁には奥壁に向かって連続する同種の痕跡が認められる。全体的な加工度が低いのは、稚拙な技術レベルを示すのか、それとも軟質な石材ゆえの摩耗具合を示すのかわからない。

奥壁の外寸は縦115cm、横110cm、厚さ40cmを測る。上部の一部が欠損しているが、面をなすことから天井石をのせることを意図している。奥壁は床石側面に接しておかれているが、段などの特別な加工をしていない。奥壁と側壁が接する部分は、石材の隅を斜めに長さ18～23cmにわたってカットしており、側壁の方でも同じような細工をすることによって合わせている。南加賀の石室石材の組み合わせは切組することを常としており、このような方法は稀有な例である。奥壁の石槨内寸は、縦88cm、横89cmのほぼ正方形である。

左右の側壁はともに同じ大きさと形状を呈しており、床石と接する部分には加工がないのは奥壁と同じである。右側壁外寸は長さ165cm、高さ70cm(現存値)、厚さ30cmを測る。上面はなだらかに開口部に向って下がるように削平を受けている。奥壁と接する部分は幅14～15cmにわたって斜めにカットされており、奥壁と接する。開口部側は石材小口面全体が約12度の角度で斜めになっており、想定される門柱石に接する。左側壁は長さ162cm、高さ75cm(現存値)、厚さ30cmを測る。右測壁同様に、上面はなだらかに開口部に向って下がるように削平を受け、奥壁と接する部分は幅15～18cmにわたって斜めにカットされ、開口部側は石材小口面全体が約15度の角度で斜めになっており、想定される門柱石に接することとなる。右側壁と異なるところは、小口のカットの方向が逆となっている。すなわち側壁全体としてみれば、「ハ」字に小口がカットされている。石槨内寸長は右側で160～162cm、左側で157cmと多少の違いがある。

床石は三石で構成されている。玄門部は凸形をした二石が凸部を合わせるように組まれており、その形状から左右に門柱石がかつて存在していたことがわかる。床石のすべての隅角が丸い仕上がりとなっており、隙間が生じている。奥1石目は長さ128cm、幅89cmを測る。厚さの記録は残っていない。床石と奥壁との接する部分には空隙が生じており、隙間から小石が見える。2石目の凸部を3石目のそれと合わせて一体としている。凸部の幅は55cmで、木棺幅を反映するものであろう。この凸部を子細に観察すると、凸部が作り出す南北の空間が石槨主軸と微妙に斜交し、その度合いが左右側壁で異なり、右側の方の斜交の度合いが強い。その一方で、床石の南端は石槨主軸に対して直交している。以上より、門柱石までの玄室空間長は、左側壁156cm、右側壁160cmで幅88～89cmである。

門柱石は東側の基底のみかろうじて残っていた。上方から潰されたかのように不正形である。しかし輪郭をたどると、おおむね床石と側石で区画された横長方形の空間にはまり込んでいると思われ



第8図　石柳図（S=1/30）

る。この門柱石が3石目側面まで続く「L」字状になっているかどうか不明である。石榔に対して「ハ」字に広がる位置にある3石からなる石列の延長が3石目の凸形のコーナーにあたることからすれば、門柱石から石組による前庭部が存在した可能性も考えられる。

また、この位置に床石があるということから、3石目の凸形石に閉塞石がはめ込まれたものと考えられるが、それをのせるための加工痕跡は見られない。

なお、石榔幅が89cm、奥壁高88cmであることからすれば、唐小尺の3尺にほぼ相当する。

第3節　出土遺物

図化したものは、石榔前庭部から原位置を動いた状態で出土したものである。1354～1357は須恵器杯蓋で、1357のみ鈕を欠く小破片である。1354～1356の口径が16～17cmにまとまっているのに対し1357の図上口径が一回り大きいのは、3cm程度の小破片のための計測ミスである。胎土はすべて同じで、黒い粒子とともに長石などがはいり、ザラッとした触感である。1354の口縁端部は三角形状に屈曲する。器高の立ち上がりはそれほどなく、頂部は平坦面を持つ。鈕を除く器高は2.2cm。外面に灰が被り一部自然釉となっている。1355の口縁端部は小さく垂下しなだらかに天井部にいたる。灰被りはない。鈕のある頂部の平坦面は少なく、鈕を除く器高は2.4cm。1356は1355よりもさらに垂下する口縁端部で、器高の高い大きな天井となっている。鈕を除く器高は3.0cm。灰の被りはない。1357の口縁端部は1536に類似する。

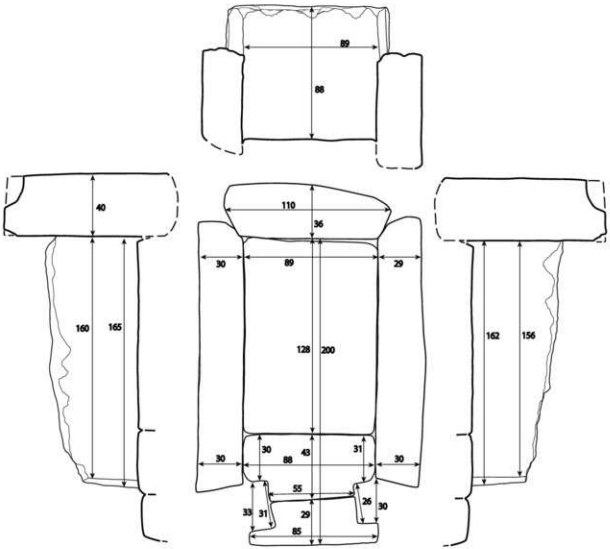
1358～1360は須恵器杯身である。底部を欠損する1359・1360はおそらく器形の傾きから高台をもたず、すべて杯Aであろう。1358・1359の口径は13～14cmであるのに対し、1360の図上の口径が15.6cmであるのは、計測誤差であるので、遺物観察表の口径数値が正しい。1358は微妙に内湾しながら口縁端部に続き、底部はほぼ平らである。ヘラ切り痕跡を明瞭に残し、反時計回りのロクロ回転である。内面全体に灰が被り、外面は重ね焼きによる焼きムラが見える。0.5～2mm大の黒色粒子(噴出物のよう)がある。1359は直線的な体部で、現状の下端が底部にかかる部位のために曲がり始めている。白色の粒子(長石)を含む。器壁が滑らかで、1358・1360とは異質である。1360は口縁端部が成形時の指圧によって若干出ている。現状の下端が少し丸みを帯びていることから、底部近くと思われるものの、この状態では丸く底部に続くこととなる。胎土や焼成は1358と同じである。1361は杯蓋口縁部のようだが、3cm程度の小破片で不確実。口縁端部を水平にすると立ち上がることから、焼き歪みによるものであろうか。1362は壺口縁部である。口縁端部は小さく外反し、直線的な口縁である。内外面に灰が被り、

第2表　那谷金比羅山古墳出土土器観察表

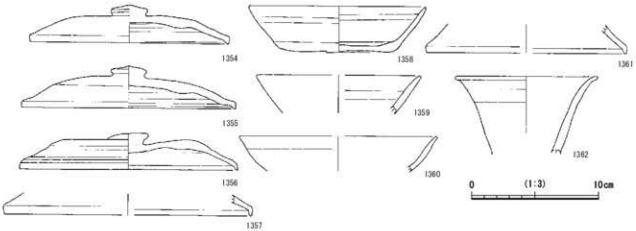
検出遺構	番号	出土位置	器種	法量 (）は現寸、cm	胎土	焼成	色調	調整	コタツ回転	備考	写真番号
9	1354	石榔南壁及Na2・5	杯蓋	口径15.8、器高3.1、鈕径3.8	長石、黒色粒子含む	良好	外：褐灰色 内：明灰色	外：指灰によりやや不明 内：ロクロナデ	右回り	口径定形、外面指灰、自然釉	83214
9	1355	石榔南壁及Na1	杯蓋	口径16.8、器高3.3、鈕径3.4	長石および黒色粒子多く含む	良好	外：暗灰色 内：明灰色	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ロクロナデ	右回り	定形	86209
9	1356	石榔南壁北	杯蓋	口径17.0、器高3.9、鈕径3.2	長石、黒色粒子含む	良好	外：灰色 内：明灰色	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ロクロナデ、強指圧痕、ヘラケズリ	右回り		83213
9	1357	石榔南壁北	杯蓋	口径18.0、器高(1.7)	長石、黒色粒子含む	良好	外：灰色 内：灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	2cm程度の小破片、口径計測不可	86363
9	1358	石榔南壁及Na2・7・8・9・10	杯A	口径13.9、底径8.8、器高3.8	長石、黒色粒子や噴出物多く含む	良好	外：明灰色 内：明灰色	外：ロクロナデ、ヘラ切り 内：指灰によりやや不明	右回り		83211
9	1359	石榔南壁及Na11	杯身	口径13.6、器高(3.6)	雲母など石粒含む	良好	外：明灰色 内：明灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	杯A か、6cm程度の小破片、焼の上海と窯焼成なら	86362
9	1360	石榔南壁北	杯身	口径15.9、器高(2.8)	長石、黒色粒子や噴出物多く含む	良好	外：明灰色 内：明灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	右回り	杯A?	86364
9	1361	石榔南壁北	杯蓋?	口径16.0、器高(2.2)	長石、黒色粒子含む	良好	外：灰色 内：灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	焼き歪み?	86356
9	1362	不明	壺	口径11.0、器高(6.1)	長石、黒色粒子含む	良好	外：黄灰色 内：黄灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	底欠損か、胴区により首長種	83212

第3表　那谷金比羅山古墳出土石器・鉄器属性表

検出遺構	番号	出土位置	器種	出土状況	備考
—	石鏃A	1916yr	剥製石鏃	長さ29.1mm、幅19mm、厚3.9mm、重さ1.1g	平基式、緑色凝灰岩?、側縁の一部欠損は調査時によるもの、全面研磨痕残す
—	石鏃B	不明	打製石鏃	長さ25mm、幅17mm、厚5.9mm、重さ1.5g	凹基式、凝灰岩、明灰色、先端を欠損する。両小基部の側ケエル	写真のみで報告
—	石鏃C	不明	打製石鏃	長さ23mm、幅19mm、厚3.9mm、重さ1.9g	凹基式、頁岩、側縁が細調整、深い基部の側ケエル	写真のみで報告
—	鉄A	不明	鉄製品?	長さ17mm、幅7.5mm、厚さ1.5mm	短側縁が欠損する。	写真のみで報告



※数値はセンチメートル



第9図　石槨各部計測値（S=1/25）、出土遺物（S=1/3）

外面一部に厚い自然釉として付着する。胎土は1354などと同じである。

出土した須恵器は、おおむね飛鳥Ⅴ期である[2]。なお、土砂のフルイがけをした。

未実測遺物を報告する。専門家による石材の同定はしていない。石鏃Aは凝灰岩製磨製石鏃で、茎部のない三角形を呈し、基部が直線状をなす平基式である。中央には明瞭な鎬を作り出し、根挟み部分は比較的小さい。石鏃Bは安山岩製打製石鏃で、凹基式の基部を持つ。基部は大きく刳りこまれ、刃部は打割によって鋸歯状となっている。石鏃Cは凝灰岩製打製石鏃で、凹基式の基部を持つ。刃先は欠損し、基部の刳りこみは浅い。鉄Aは幅約7mmの細長い小鉄板で、両短辺が欠損しているので、細長いものである。1.5mmと薄く、刃部等の加工はない。一方の短辺が曲がりかけているように観察され、そうすると鎹のような可能性も考えられるものの、製品を特定することはできない。鉄Bは周りを欠損した小鉄板で、一方面に木質が残っている。鉄Cは鍛造品特有の薄く剥離した鉄板である。錆化による砂等の付着がないので、より大きな鉄製品の剥離した一部と思われる。刀であろうか。なお、厚みのある磨製石器の小破片が出土しているが、器種は不明である。

第4節　小結

那谷金比羅山古墳は、東西の直径約8mを測る円墳で、南半分が失われている。墳丘中央より北に位置して凝灰岩切石による横口式石槨を内蔵している。墳丘背後は直線的だが周溝掘削による調査時の誤差の可能性が高く、円墳と判断した。横口式石槨部は、通例のような奥壁や側石が床石の上にのる構造ではない。門柱石も想定される。それより開口部の構造は破壊されており不明である。石槨石組構造は床石までと考えられるが、さらに側石が延びて羨道部あるいは前庭部となる可能性もあり、また、「ハ」字に開く石列に続いて前庭部を構成する可能性もある。さらに絞り込むための調査所見はない。

石槨幅が89cmと唐小尺の3尺(1尺≒29.7cm) で作られているようである。この観点からすれば、玄室高3尺、門柱石までの玄室長が5.5尺、門柱石幅1尺と規格されたものであろう。側石幅が約1尺であるので、切り出された石材もまた、1尺を目安に切られたものであろう。その一方で、玄門幅が約1.8尺となり整数となっていない。玄門幅が棺幅に規定されたものであろう。そうすれば、石槨構築に唐尺とともに従来からの慣用尺も使われたことになる。

石槨が墳丘と一体となって構築されたと考えるのが一般的であり、石槨と同じ唐尺で作られていると考えられる。それは、玄室奥と墳丘規定との距離が2.4mで8尺となり、墳丘との一体性は明らかである。現状の墳丘幅は26尺とすると約7.8mとなり、切りのいい数値ではない。墳丘が切りのいい数字であるとすると、そして石槨主軸と床石南端交点を設計基準とすると、そこから西4.5m(15尺) で墳丘裾となる。それを東に反転させると直径9m(30尺) となるが、実際に検出された墳丘裾が約2尺西である。調査所見とは異なるが、これが設計時の思惟を表すと考えられる。

最後に、調査時における土層の認識が撹乱土であるという解釈によって、墳丘南側の考古学的情報が失われたことは確実である。

註

(1)　小松市教育委員会 樫田誠氏のご教示による。

(2)　奈良国立文化財研究所　1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ

第４章　那谷金比羅山窯跡群

第１節　遺構（須恵器窯・竪穴状遺構）

1. 概要

金比羅山は那谷丘陵の南西部に位置している。那谷川の右岸にある低丘で、長さは東西約250m、南北約150mである。頂部には二つの高まりがあり、西の高まり（以下、西丘）は標高41m、東の高まり（以下、東丘）は45mを測る。第1図に示した通り、ほぼ全域が土砂採取の対象となった。

金比羅山全体で発掘した遺構は、須恵器窯が12基、竪穴状遺構が１基、古墳が１基である。古墳は第3章で報告しており、本章では窯と竪穴状遺構について報告する。

窯の分布を見ると、東端に3号窯が単独で存在する。東丘の南斜面には5号・6号・7-1号・7-2号・8号・9号・11号の7基の窯が近接して築造されている。なお、7-2号窯は7-1窯廃絶後に同じ場所で築造されたものである。これらの30m西には那谷金比羅山古墳が築かれている。西丘の西南斜面には1号窯、4号窯が距離をおいて存在する。北斜面には2号窯が窯尻を北に向けて存在する。これらの窯のうち3号窯、9号窯は築造途次で放棄されたものである。なお、第2図で見られる等高線の乱れは、分布調査でトレンチを設定したことに起因するものである。このほか竪穴状遺構が7号窯と11号窯の間につくられており、その位置からみて窯に関わる遺構と考えられる。

窯の形態はいずれも地下式の窖窯である。平面形をみると、排煙口に溝が連結する形態と、溝が見られない形態に大別できる。

前者は、1号・4号・7-1号・8号・11号窯である。窯体の平面形は、7-1号窯のみ寸胴形で、他は胴張形である。煙道は、7-1号窯のみ直立し、他は緩い傾斜で立ち上がる。燃焼部は、いずれも焼成部と明瞭に区画をもっている。後者は2号・5号・6号・7-2号・10号窯である。窯体平面形はいずれも寸胴形である。煙道は、7-2号窯で明確に確認できなかったが、他は直立している。燃焼部と焼成部の境は、2号・6号・10号窯が不明瞭、5号・7-2号窯は明瞭である。

2. 須恵器窯

現地調査で付した窯番号順に報告する。窯の主な計測箇所および部位名称は第12図に示した通りである。

窯体長とは、傾斜に沿って計測した燃焼部と焼成部の長さの合算値である。窯体の水平距離も示した。幅は、焼成部・燃焼部では基底の幅で、前庭部では上端の寸法を示す。図示した箇所以外では、煙道では高さ、傾斜角を示した。また、排煙口が残るものについても記録した。主軸は、座標北に対する角度である。

(1)　1号窯

西丘の西斜面に位置する。標高は31～38mである。窯体の平面形は胴張形を呈する。窯尻から鋭角をもって溝が連結している。焚口と排煙部は絞り込まれている。天井部はすべて崩落しており、焼成部は200cmに及ぶ崩落土や流土で埋まっている。

焚口の幅は120cm、燃焼部は長さ140cmを測る。燃焼部と前庭部の主軸は焼成部より東に振っており、N59°Eとなっている。

焼成部の実長は1520cm、水平長は1270cmである。燃焼部と焼成部を合わせた水平長は1410cmである。

最大幅は中央部にあり、E-F断面の幅(基底部幅:以下、窯体の幅はすべて基底部幅) 305cmを測る。このほか、G-H断面で304cm、C-D断面で198cm、I-J断面は150cm、K-L断面は112cmである。傾斜角は31°、主軸はN48°Eである。奥壁(窯尻) の幅は96cmである。

前庭部は長さ284cm、幅304cm、深さ36cmを測る。覆屋の存在を示すピットは検出していない。

窯尻に連結する溝は、焼成部主軸に対して39°の鋭角で西に延びている。長さは646cm、O-P断面で幅44cm、深さ44cm、Q-R断面で幅30cm、深さ18cmである。A-B断面で深さ60cmを測る。

床面の補修は2回以上行われている。

(2) 2号窯

本窯跡群で唯一北斜面に築かれた窯である。標高は31～37mを測る。窯体平面は寸胴形を呈し、燃焼部と焼成部の境は明確ではない。焚口の幅は178cmを測る。燃焼部と焼成部を合わせた実長は920cm、水平長は808cmである。焼成部では中央に遺物が集中している。傾斜角は24°、主軸はN33.5°Eである。A-B断面は幅166cm、C-D断面は180cmで最大幅である。

奥壁・煙道は高さ160cm、76°の急角度で立ち上がり、上部で広がりを見せる。排煙口は82×64cmを測る。奥壁幅は114cmである。

前庭部は、幅800cm、長さ590cmの平坦面をつくり、その中に幅400cm、長さ288cm、深さ54cmの土坑をつくっている。前庭部の西では、北に向かって溝が延びており、幅38cm、長さ230cmを測る。排水を目的としたものと考えたい。また、複数のピットは覆屋の柱穴になる可能性がある。

床面の補修は1回である。

(3) 3号窯

金比羅山の東端で検出された窯で、構築途中で放棄され操業に到っていない。標高は23～25mである。窯体の平面形は胴張形を呈する。水平の全長は1420cmを測る。縦断面を見ると、焚口から432cm入った場所に段を作っており、ここまでを燃焼部として構築したものであろう。窯尻と焚口は絞られている。主軸はN75°Wである。焼成部は約400cmの長さをほぼ平らにつくる。窯体の最大幅は250cm、C-D断面で228cm、窯尻A-B断面は幅126cm、燃焼部E-F断面は幅102cmを測る。

(4) 4号窯

金比羅山の西端に構築されており、標高は22～30mを測る。窯体は胴張形であるが、張りは大きくない。焚口、奥壁を絞っており、窯尻から鋭角で溝が連結している。

焚口は幅110cmである。燃焼部と焼成部は明確に区分していない。窯体の実長は1420cm、平面長は1330cmである。主軸はN52°Eで、傾斜角は32°である。床面の補修は2回確認でき、2回目の床面は縮小している。E-F断面で2時期の壁面を窺うことが可能で、1次の基部幅は256cm、2次の基部幅は210cmである。このほかC-D断面では幅188cm、G-H断面では200cm、I-J断面は燃焼部で120cm、G-H断面は200cmである。いずれも基部幅である。2次床面の焼成部では下半に遺物が集中している。奥壁は幅90cm、奥壁・煙道の高さは140cmで、煙道の傾斜角は64°である。

前庭部は、2段に掘られており、上端の幅426cm、長さ302cm、深さ74cmである。付設された溝は窯体主軸と内角50°をもって西に延びており、先が細くなっている。長さ450cm、K-L断面で幅42cm、深さ80cm、M-N断面で幅30cm、深さ16cmを測る。また、窯体主軸と同じ方向に溝が210cm延びている。幅32cmで、深さは窯尻近くで10cmである。灰原では、前庭部の南に馬蹄形に遺物が分布している。

4号窯北土坑 4号窯近くに存在する不整楕円形の土坑である。長さ500cm、幅186cm、深さ44cmを測る。覆土から少量の須恵器が出ている。立地から見て4号窯との関わりが考えられるが、機能につ

いては明らかにできない。

(5)　5号窯

南斜面の群中にあり、最も東に位置する。10号窯を切って築かれており、標高29～35mに位置を占めている。窯体は寸胴形で、燃焼部と窯尻をわずかに細くする。

焚口は幅162cm、燃焼部と焼成部の境はわずかに区分する。燃焼部は平面長270cmで、I-J断面で深さ40cmの凹みをつくっている。焼成部の長さは670cmで、窯体の平面長は850cmとなる。実長は900cmである。主軸はN63°W、焼成部は傾斜角26°である。基底幅は、G-H断面が最も広く、200cmある。E-F断面では196cm、天井部が遺存しており、高さ124cmを測る。A-B断面の基底幅は176cm、C-D断面では190cmである。また、第48図C-D断面では10号窯との切り合いを確認でき、基底幅164cmで床面が東に傾斜していることがわかる。床面の補修は1回確認できる。

奥壁は内傾しており、幅104cm、高さ50cmを測る。煙道は高さ80cmで、傾斜角92°とほぼ直角に立ち上がっている。

灰原は南に広がり、10号窯の灰原と重なっている。

(6)　6号窯

南斜面の群中にあり、9号窯と11号窯の間に築かれている。標高は30～36mである。窯体は寸胴形である。奥壁近くの天井部が遺存している。

焚口の幅は110cm、窯体は実長で1500cm、水平長で1210cmである。主軸はN37°Eである。焼成部との境は明瞭ではないが、燃焼部の水平長は約280cmと推定でき、焼成部長は930cmを測る。燃焼部G-H断面で、幅は86cm、I-J断面の幅は104cmである。焼成部の最大幅はE-F断面にあり、154cmを測る。このほか、A-B断面では144cm。C-D断面で見る窯体は外開きである。傾斜角は27°である。奥壁・煙道は直立しており、高さ50cmを測る。

排煙口は幅130cmである。前庭部は、上端で長さ306cm、幅336cm、深さ108cmを測る。焚口の両側に見られるピットは覆屋を構成する柱穴になる可能性がある。

床面の補修は3回確認できる。

(7)　7-1号窯

南斜面の群中にあり、標高32～36mを測る。窯体平面は寸胴形であるが、中央部でわずかに膨らみを見せる。前庭部・燃焼部と焼成部の主軸が異なっている。窯尻に溝が連結し、南に延びている。本窯廃絶後に同じ場所に7-2号窯が規模を縮小して構築されている。

焚口の幅は100cm、燃焼部の長さは204cm、焼成部は886cmである。窯体の平面長は1090cmで、実長は1200cmを測る。燃焼部から焼成部にかけて「舟底状ピット」が存在する。長さ162cm、幅110cm、深さ23cmである。

窯体の主軸はN62°Eであるが、舟底状ピットから前庭部にかけてはN44°Eとなり、西に振れている。燃焼部の傾斜角は26°である。基底幅は、C-D断面が最大で192cm、E-F断面では146cm、A-B断面では140cmである。前庭部は長さ384cm、幅392cm、深さ126cmを測る。

窯尻に凹みをつくっており、奥壁は幅116cm。奥壁・煙道の高さは116cm、煙道の基底は主軸方向に96cmのテラスをつくっている。煙道の傾斜角は85°である。

床面の補修は2回確認できる。

溝は主軸を南北方向にとり、焼成部主軸に対して内角71°で南に延びる。奥壁との連結部は強く酸化している。長さは1000cmで、先細りとなる。断面逆台形の深い溝である。幅はK-L断面で最大で150cmである。深さ166cm、底面は平坦で幅34cmを測る。M-N断面では幅76cm、深さ36cmである。

(8)　7-2号窯

7-1号窯の内側に、時間を隔てて築かれた窯で、標高は33～36mに位置を占める。燃焼部と焼成部の境は明瞭につくる。窯体平面は寸胴形である。焼成部下半で膨らみを見せるが大きなものではない。

焚口の幅は124cm、燃焼部の長さは134cm、焼成部の長さ556cmで、窯体水平長は690cmとなる。実長は734cmである。主軸はN61°E、焼成部の傾斜角は28°である。焼成部の中央部に甕をはじめとする遺物が集まっている。焼成部の最大幅はA-B断面で156cm、奥壁幅は120cmである。前庭部は長さ336cm、幅440cm、深さ40cmで、南に開口している。複数見られるピットは覆屋の柱穴になる可能性がある。

床面の補修は1回確認できる。

(9)　8号窯

南斜面の群中に築かれた窯で、7号窯の東に位置しており、標高は34～39mである。窯体は胴張形で窯尻から溝が延びている。

焚口は幅90cm、燃焼部は長さ130cm、最大幅はG-H断面で100cmである。G-H断面での高さは90cmに復元できる。焼成部は、下半4mはほぼ水平につくるが、上半は31°の傾斜角をもつ。平面長890cm、実長1054cmで燃焼部を含む窯体は平面長1020cm、実長1166cmである。窯体の最大幅はE-F断面にあり、206cmである。C-D断面では116cm、A-B断面で80cmである。窯体の主軸はN95°Eである。奥壁は幅66cm、煙道は高さ90cm、傾斜角50°である。前庭部は開いている。

窯尻からL字形の溝が連結しており、窯体主軸に対し72°の内角をもって西に736cm延びている。底面の傾斜角は25°で、西に下っている。そこからいったん高くなって内角99°で折れ、南に520cm延び、先端は細くなっている。O-P断面で幅100cm、深さ46cmである。また、窯尻から東へも100cm突出している。このようにL字形の溝が付く窯は本窯跡群では他に見られないが、福井県武生市王子保窯跡群2号窯で近似例を確認できる。同窯は7世紀後半に比定されている(武生市教育委員会 1986『王子保窯跡群 第1次発掘調査概要報告』)。

床面は1回の補修が確認できる。

(10)　9号窯

南斜面で、6号窯の東に並行して位置する窯である。築造途中で放棄されて操業に到っていない。標高は30～34mである。窯体は寸胴形である。焚口幅158cm、窯体の平面長は1120cm、実長1160cmを測る。主軸はN35°Eである。燃焼部の最大幅はA-B断面で200cmある。C-D断面では196cm、E-F断面では160cmを測る。窯体下半は傾斜角6°と少ないが、上半では33°を測る。窯体の覆土に、流れ込んだ須恵器が数点含まれている。

(11)　10号窯

南斜面の群中にあり、隣接する5号窯に切られている。寸胴形の窯体で、窯尻を細くつくっている。天井部が一部遺存している。焚口幅はG-H断面で130cm、燃焼部と焼成部の境は明瞭ではない。窯体の平面長は814cm、実長は870cmである。主軸はN41°Wにとる。幅は、E-F断面が最大で164cm、この部分の天井が残っており、106cmの高さを確認できる。C-D断面では150cm、A-B断面は128cm、G-H断面は130cmの幅をもつ。横断面の形状は、C-D断面で蒲鉾形であるが、A-B断面、C-D断面で箱形を呈し、側壁は傾斜角95°でやや外開きに立ち上がる。

窯尻は絞られており、その長さは66cmである。奥壁幅は80cmを測る。奥壁は「く」字形に内傾しており、高さ80cmを測る。煙道の傾斜角は103°で高さ126cmを測る。

床面には甕の胴部を転用した焼台が見られ、この下部に排水施設が確認できた。窯体基底に沿って溝を設け、奥壁寄り264cmは須恵器片で溝を覆っている。長さ680cm、溝の幅14～16cm、深さ3～5cmを

測る。前庭部は外開きで、平坦である。長さ210cm、幅444cmを測る。

床面の補修は3回確認できる。

(12)　11号窯

南斜面の西端に位置する。6号窯の西に隣接しており、標高は27～33mである。窯体は胴張形で、溝が東に接する6号窯の窯体を切って南に延びている。焼成部下半部で天井部が遺存している。

焚口幅106cm、燃焼部は長さ130cm、幅はO-P断面で98cmである。焼成部の平面長が930cmで、窯体の平面長は1060cmとなる。実長は1092cmである。焼成部の基底幅はI-J断面が最大幅で、170cm、M-N断面では128cm、K-L断面では146cm、E-F断面では114cmである。M-N断面では天井部が残っており、90cmの高さを確認できる。

床の補修状況はI-J断面で明瞭に窺うことができる。窯体の主軸はN59°Eである。奥壁・煙道傾斜角45°で緩い。奥壁幅は60cm、奥壁と煙道を合わせた高さは172cmである。

溝は基部から2条に分かれており、1条は南東へ延び6号窯の窯体に入っている。もう1条は南西に延び、6号窯の窯体西側を抉っている。この溝は窯体主軸に対し28°の内角で屈曲している。現長560cm、幅はG-H断面で112cm、深さ100cmを測る。

前庭部は長さ280cm、幅312cm、深さ70cmで底部は丸い。壁に沿って見られるピットは覆屋の柱穴となる可能性がある。覆土の大半は黒灰色の灰混じり土層である。

床面の補修は4回以上行われている。

(13)　窯のまとめ

窯の平面形は、排煙口に溝が連結する形態と、溝が見られない形態に大別できる。前者は、1号・4号・7-1号・8号・11号窯で、後者は2号・5号・6号・7-2号・10号窯である。

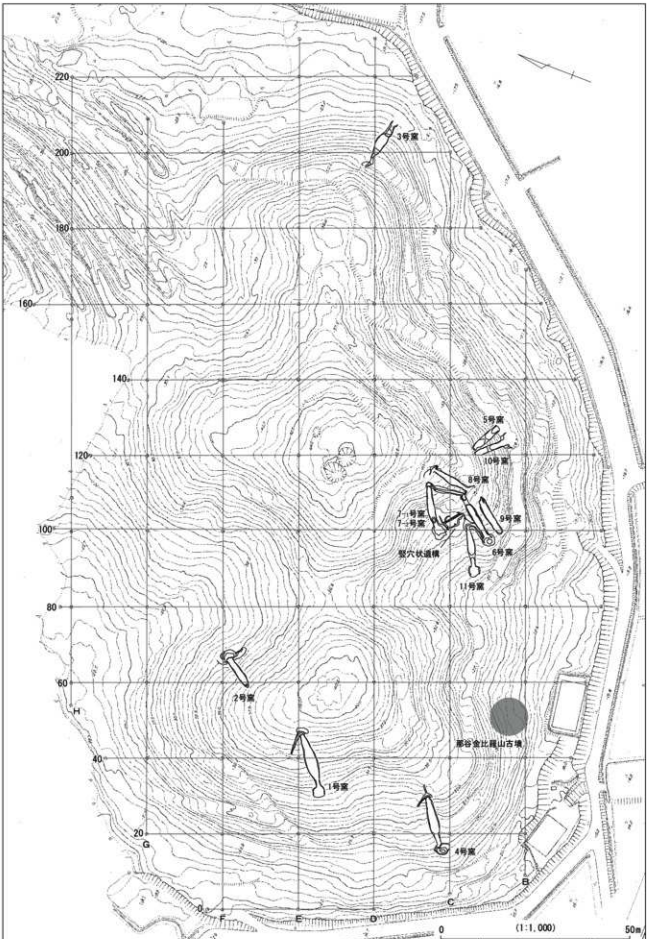
溝が連結する形態の特徴をみよう。窯体の平面形は、7-1号窯のみ寸胴形で、他は胴張形である。煙道は、7-1号窯のみ直立し、他は緩傾斜で立ち上がる。燃焼部は、いずれも焼成部と明瞭に区画をもっている。床面の傾斜は、7-1号が26°であるが、他は30°から32°である。煙道の傾斜は、7-1号が85°ときついが、他は緩い傾斜である。

溝が見られない形態では、窯体平面形はいずれも寸胴形である。煙道は、7-2号窯で明確に確認できなかったが、他は直立している。燃焼部と焼成部の境は、2号・6号・10号窯が不明瞭、5号・7-2号窯は明瞭である。床面の傾斜は、最も緩いものが20°で、最も急な7-2号でも28°と溝をもつ形態に比べて緩い。

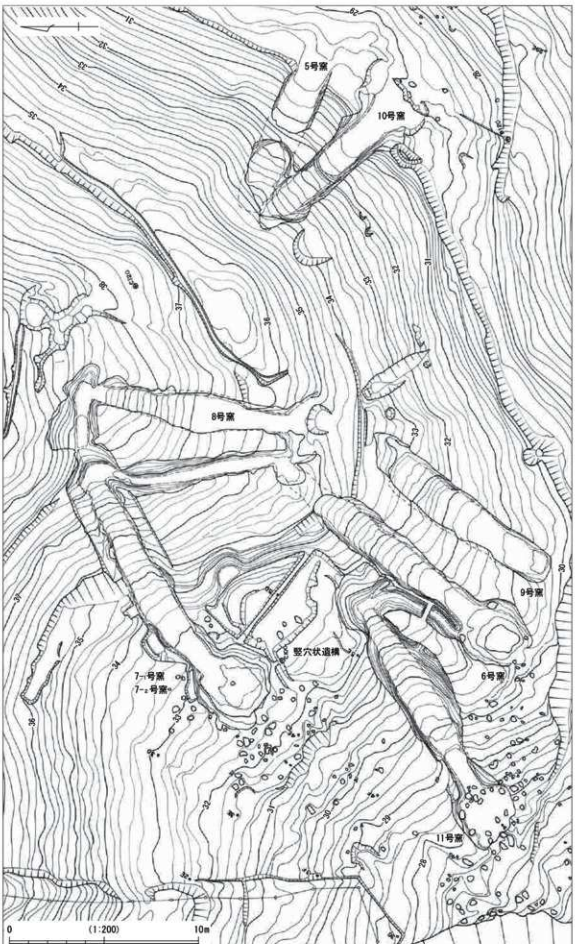
3. 竪穴状遺構

南斜面にあり、7号窯の前庭部と11号窯の煙道の間に造られている。東西長6m、南北長5.2m、深さ132cm。北側、高いほうは2段に造る。7号窯の前庭部に接していることから、この窯に関わる可能性があり、作業用の土坑と考えられる。

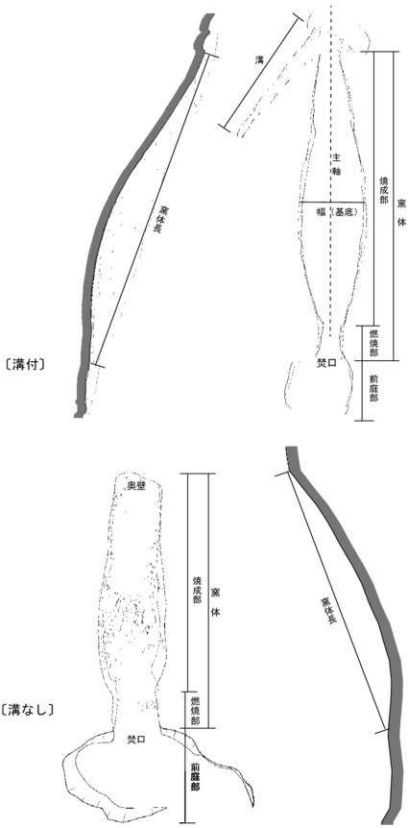
遺物は、覆土から須恵器の杯、蓋、甕、提瓶、横瓶などが少量出ている。



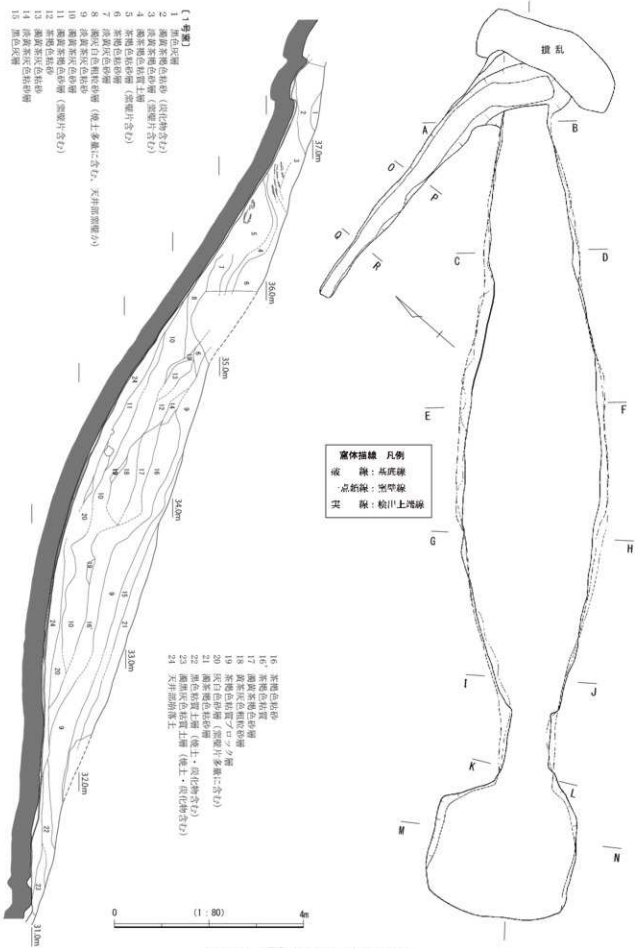
第10図　遺構配置図（S=1/1,000）



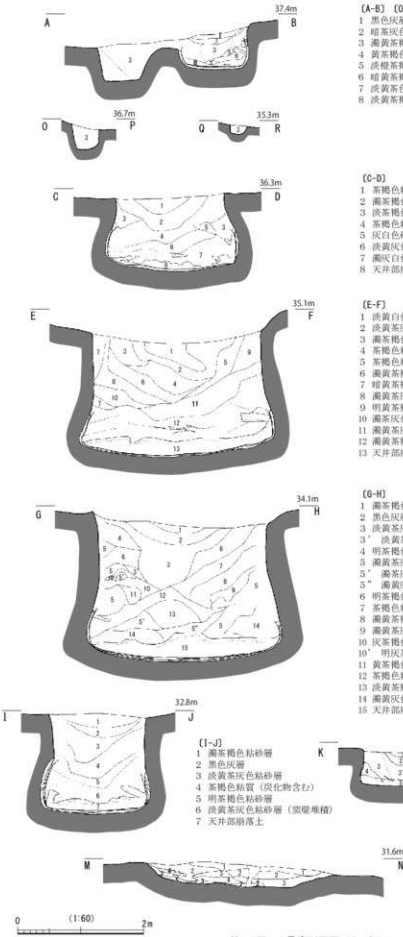
第11図　5～11号窯・竪穴状遺構配置図（S=1/200）



第12図　窯の主要部位名称と計測箇所



第13図 1号窯平面図・断面図（S=1/80）



[A-B] [O-P] [Q-R]
1 黒色灰層
2 暗茶灰色粘砂層
3 濁黄茶褐色粘砂層（炭化物含む）
4 黄茶褐色粘砂層（淡黄白色砂ブロック含む）
5 淡橙茶褐色粘砂層（窯壁含む）
6 暗黄茶褐色粘砂層（炭化物含む）
7 淡黄茶色粘砂層（ブロック）
8 淡黄茶褐色砂層（粘質層・窯壁含む）

[C-D]
1 茶褐色粘砂層
2 濁茶褐色粘砂層
3 淡茶褐色粘砂層（灰白色砂ブロック含む）
4 茶褐色粘砂層（黄灰色砂ブロック含む）
5 灰白色砂層
6 淡黄灰色砂層
7 濁灰白色粗粒砂層（焼土・窯壁多量堆積）
8 天井部崩落土

[E-F]
1 淡黄白色粘砂層
2 淡黄茶灰色粘砂層
3 濁茶褐色粘質土層
4 茶褐色粘質土層（粗粒砂含む）
5 茶褐色粘質土層
6 濁黄茶褐色粘砂層
7 暗黄茶褐色粘砂層
8 濁黄茶灰色粘砂層
9 明黄茶褐色粘砂層
10 濁茶灰色砂層
11 濁黄茶灰色砂層
12 濁黄茶褐色砂層（窯壁堆積）
13 天井部崩落土

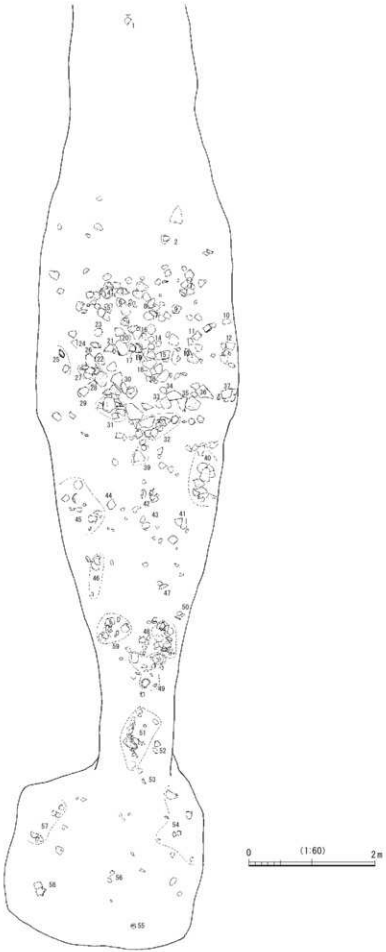
[G-H]
1 濁茶褐色粘砂層
2 黒色灰層
3 淡黄茶灰色粘砂層
3' 淡黄茶灰色粘砂層
4 明茶褐色粘砂層
5 濁黄茶灰色砂層
5' 濁茶灰色砂層
5" 濁黄灰褐色砂層
6 明茶褐色粘砂層
7 茶褐色粘砂層
8 濁黄茶褐色粘砂層（粗粒砂多量に含む）
9 濁黄茶灰色砂層（砂質強い）
10 灰茶褐色粘砂層
10' 明灰茶褐色粘砂層
11 黄茶褐色粘砂層
12 茶褐色粘砂層
13 淡黄茶褐色粘砂層
14 濁黄灰色砂層（窯壁含む）
15 天井部崩落土

[I-J]
1 濁茶褐色粘砂層
2 黒色灰層
3 淡黄茶灰色粘砂層
4 茶褐色粘質（炭化物含む）
5 明茶褐色粘砂層
6 淡黄茶灰色粘砂層（窯壁堆積）
7 天井部崩落土

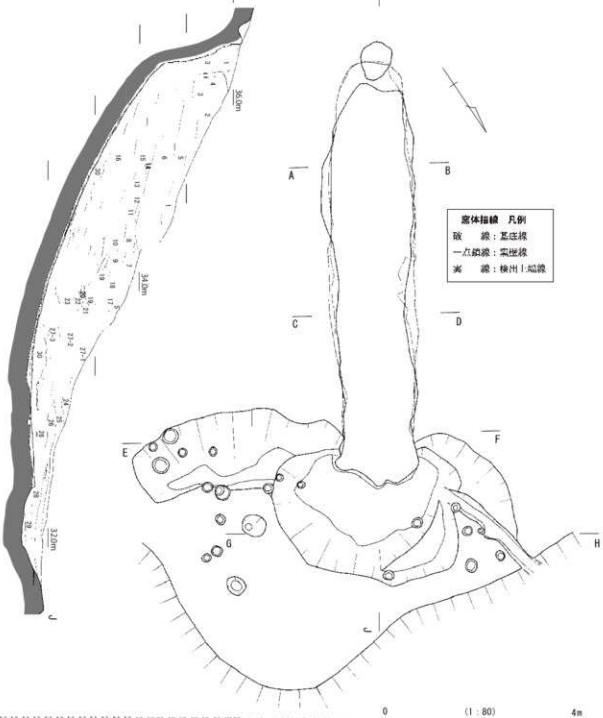
[K-L]
1 黒色灰層
2 濁茶褐色粘砂層
3 淡黄茶褐色粘砂層（土器含む）
3' 淡黄茶灰色粘砂層
4 橙茶褐色焼土層
5 黒色炭化物層（土器含む）

[M-N]
1 暗茶褐色粘砂層（炭化物・焼土含む）
2 黒色炭化物層（焼土・土器含む）
3 暗黄茶褐色粘砂層（炭化物・焼土含む）
4 濁黄褐色粘砂層（焼土多量に含む）
5 濁黄茶褐色土層（地山質土層）

第 14 図　1 号窯断面図（S=1/60）



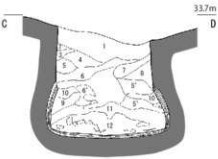
第15図　1号窯遺物出土状況（S=1/60）



1 黒灰色灰質層(炭化物・焼物含む)
2 暗黒茶褐色砂質層
3 暗黒茶褐色砂質層
4 暗黒茶褐色砂質層
5 黒灰茶褐色砂質層
6 茶褐色砂質層
7 茶褐色砂質層
8 茶褐色砂質層
9 茶褐色砂質層
10 茶褐色砂質層
11 暗黒茶褐色砂質層(炭化物含む)
12 暗黒茶褐色砂質層
13 暗黒茶褐色砂質土層
14 暗黒茶褐色砂質層(赤褐色砂質含む)
15 黒茶褐色砂質層
16 黒茶褐色砂質層(地山砂質土)
17 暗茶褐色砂質層
18 暗茶褐色砂質層
19 黒茶褐色砂質層(地山砂質土)
20 暗黒茶褐色砂質土層
21 黒茶褐色砂質層
22 黒茶褐色砂質層
23 暗黒茶褐色砂質層
24 暗黒茶褐色砂質層(黒色灰質・炭化物含む)
25 黒色灰質層(焼土含む)
26 黒色灰質層(焼土含む)
27 暗黒茶褐色砂質層
27-2 暗黒茶褐色砂質層
27-3 黒灰色(色砂質層
28 暗黒茶褐色砂質層(焼物・焼土・炭化物含む)
29 暗黒茶褐色砂質層(炭化物・土器含む)
30 天井部崩落土

第 16 図　2 号窯平面図・断面図 (S=1/80)

〔A-B〕
1 黒灰色砂層(炭化物・土器含む)
2 褐灰茶褐色粘砂層
3 淡黄茶褐色粘砂層
4 茶褐色粘砂層
5 淡黄灰色砂層(地山崩落土、天井部崩落焼土含む)
5' 淡黄茶褐色粘砂層(天井部崩落焼土含む)
6 淡黄茶褐色粘砂層
7 黄茶褐色粘砂層
8 明黄茶褐色砂層
8' 明黄茶褐色粘砂層
9 淡黄灰茶褐色砂層
10 淡茶灰色粘質土層
11 淡茶褐色粘砂層
12 褐黄茶灰色砂層
13 天井部崩落土

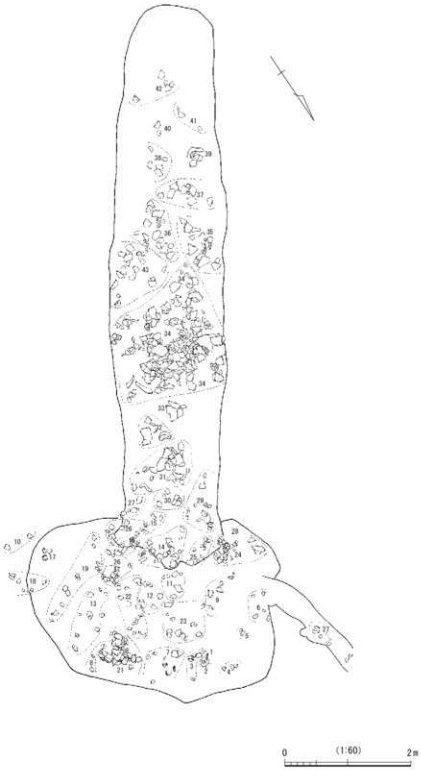


〔C-D〕
1 淡茶褐色粘砂層
2 淡黄灰色砂層
3 茶褐色粘砂層
4 明茶褐色粘砂層(地山質)
5 淡黄灰色砂層(地山崩落土)
5' 淡黄灰色砂ブロック
6 褐茶褐色粘砂層
6' 褐茶褐色粘砂層(焼土ブロック若干含む)
7 褐茶褐色粘砂層(炭化物若干含む)
8 明茶褐色粘砂層(褐茶褐色粘質土含む)
9 茶褐色粘砂層
10 褐茶褐色粘質土層
11 褐茶褐色粘質土層(淡黄茶褐色砂ブロック・焼土含む)
12 淡黄灰色砂層(地山崩落土、天井焼土壁・炭化物・土器含む)

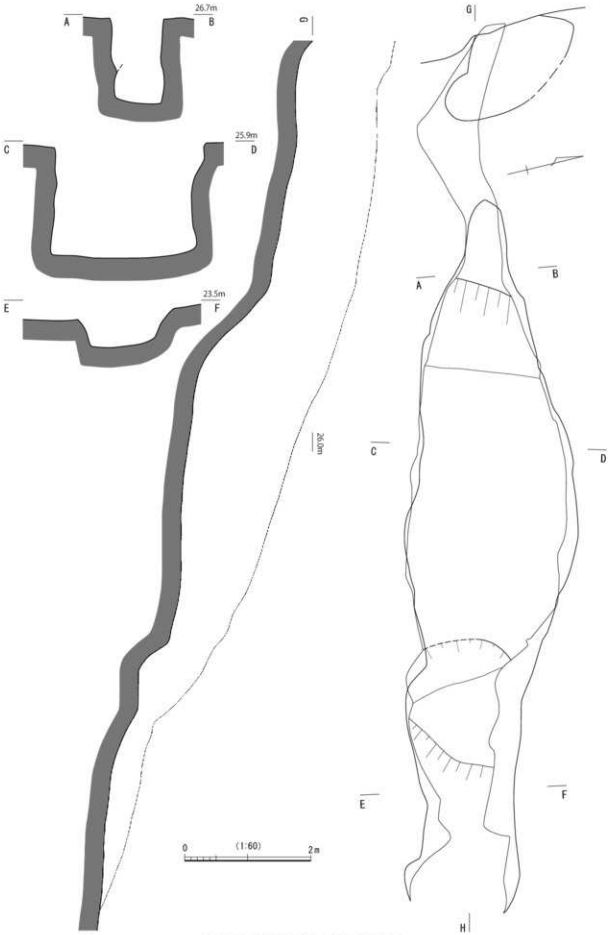
〔E-F〕
1 暗黄茶褐色粘砂層
2 黒色灰層(炭化物・焼土含む)
3 暗茶灰色粘砂層
4 褐黄茶褐色粘砂層(炭化物・焼土・土器含む)
5 暗茶褐色粘砂層(炭化物・焼土・土器含む)
6 褐黄茶褐色粘砂層(地山質)

〔G-H〕
1 暗黄茶褐色粘砂層
2 黒色灰層(炭化物・焼土含む)
3 暗茶褐色粘砂層(炭化物・焼土・土器含む)
4 黒色炭化物層
5 褐茶褐色粘砂層
6 褐黄茶褐色粘砂層(地山質)

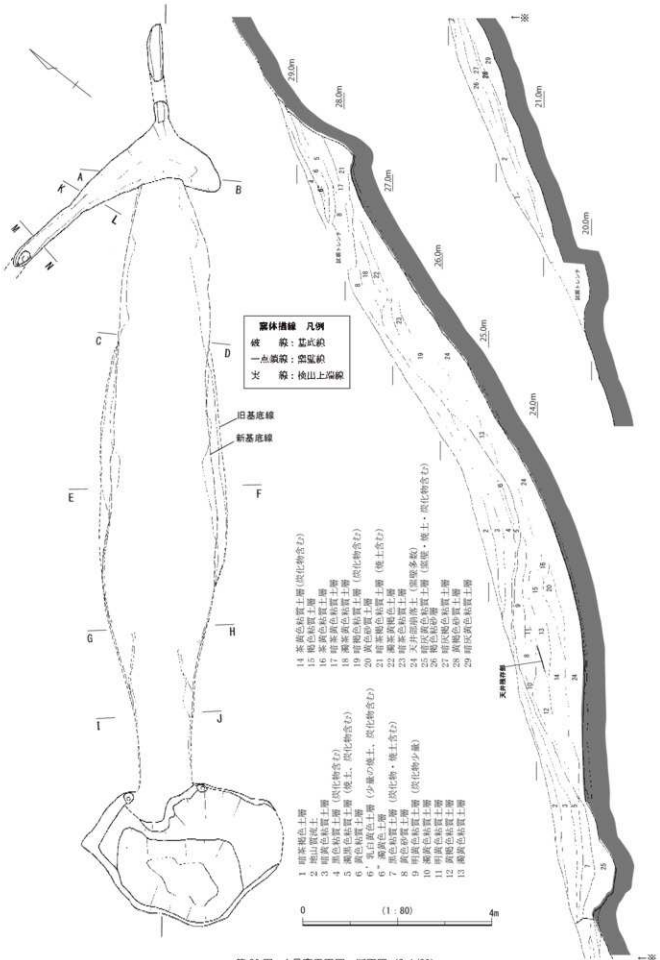
第 17 図　2 号窯断面図 (S=1/60)



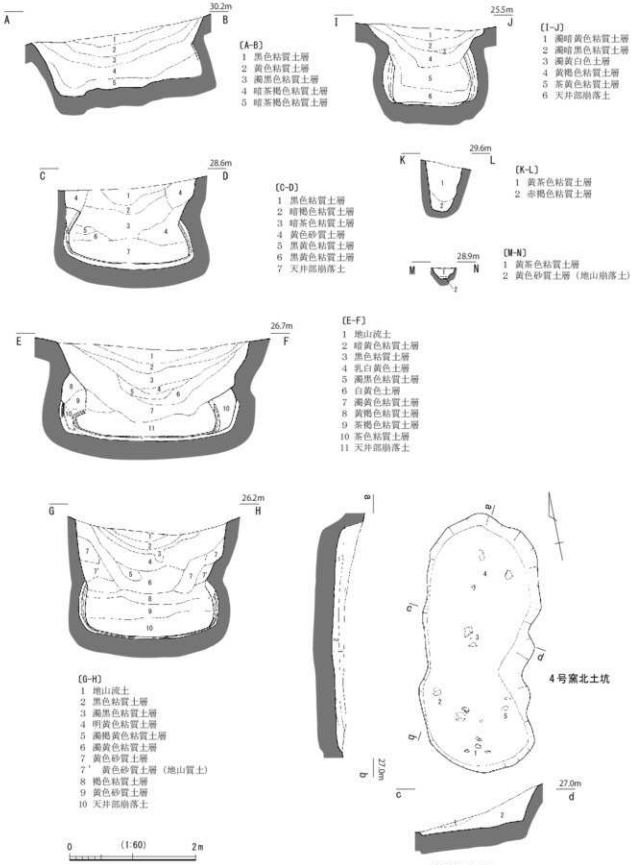
第18図　2号窯遺物出土状況（S=1/60）



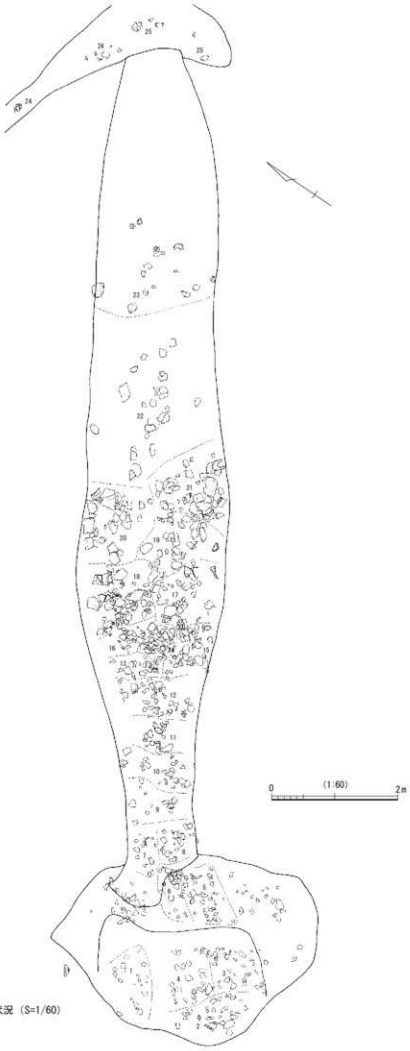
第19図　3号窯平面図・断面図（S=1/60）



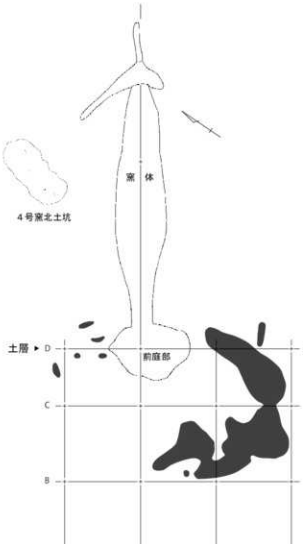
第 20 図　4 号窯平面図・断面図（S=1/80）



第 21 図　4 号窯断面図・4 号窯北土坑実測図（S=1/60）



第22図　4号窯遺物出土状況（S=1/60）

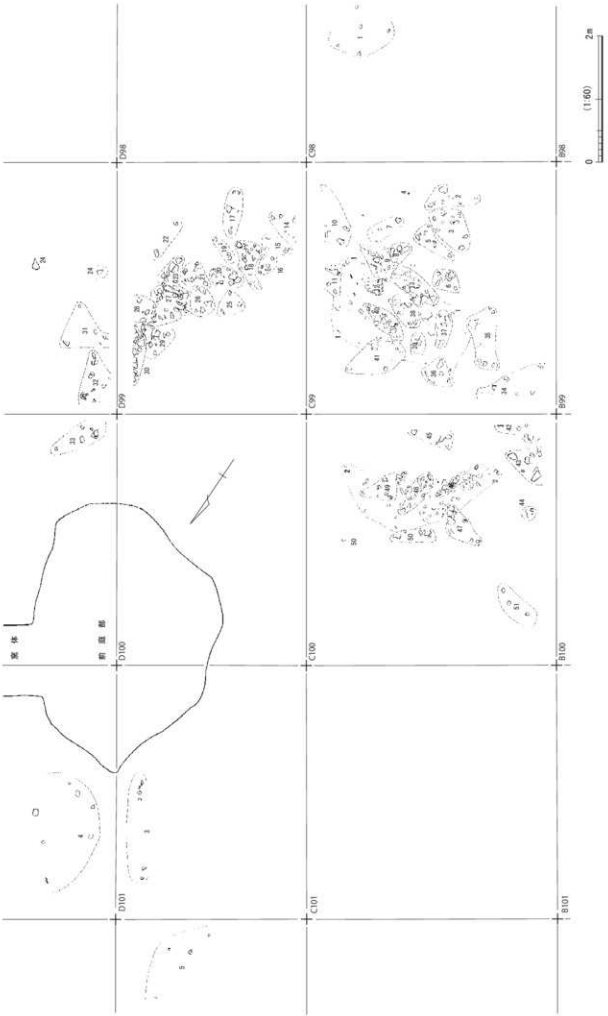


4号窯灰原グリッド配置図

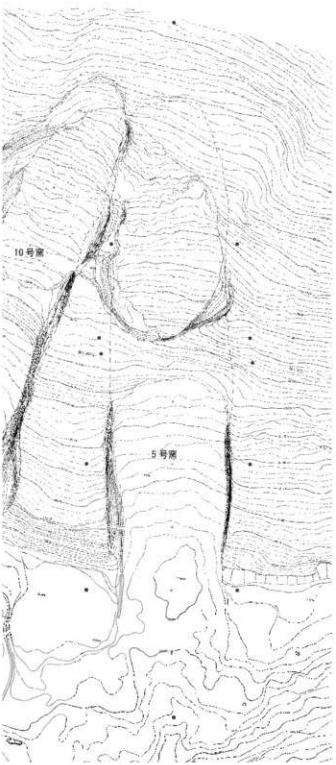
・このグリッドは調査区全体のグリッドと合致しない。
・グリッド間隔は、A-B、B-C間が4m、C-D間は3m。
・網かけは、須恵器分布範囲。

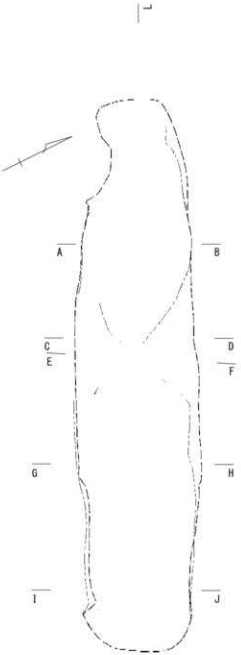
0 (1：200) 10m

第23図　4号窯前庭部断面図・灰原グリッド配置図（S=1/80・1/200）



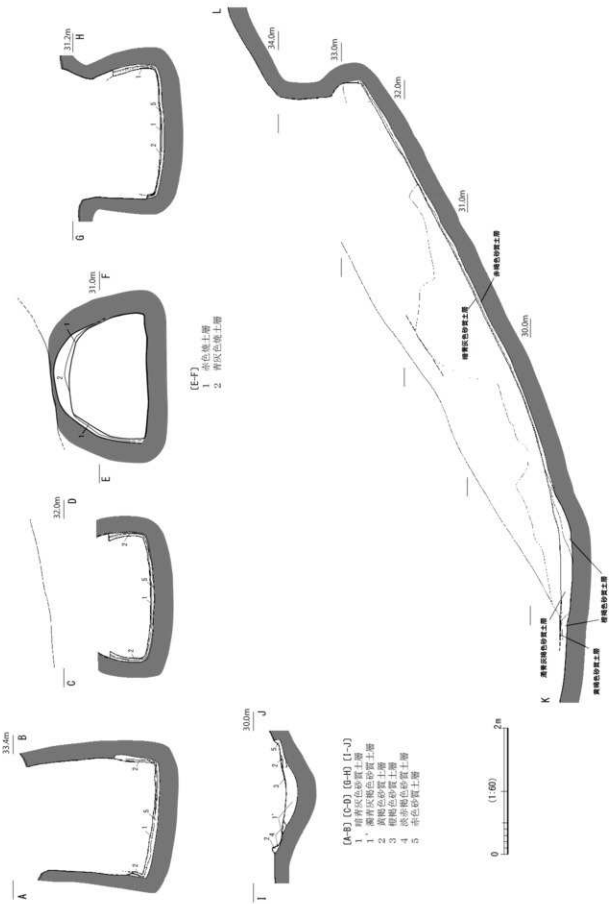
第 24 図　4 号窯灰原遺物出土状況（S=1/60）



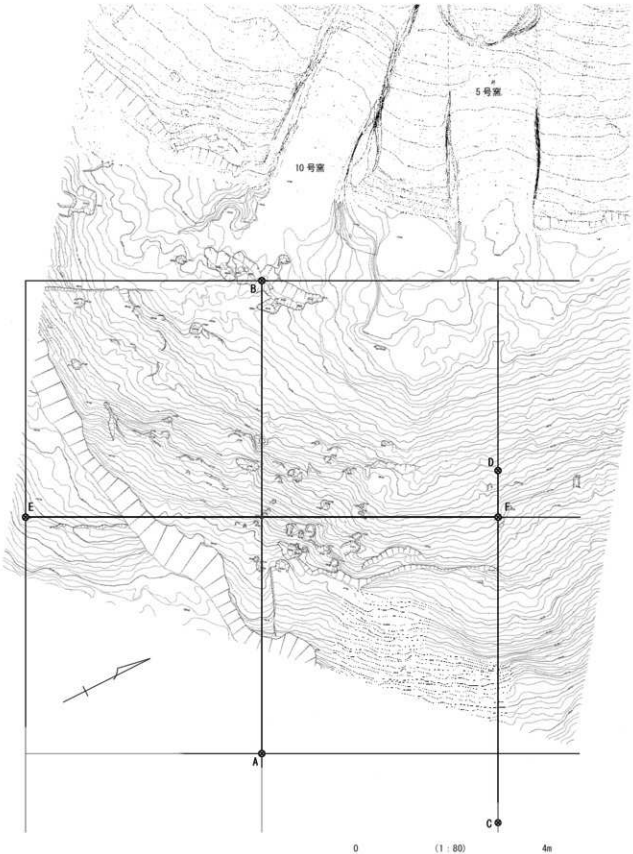


0　(1:60)　2m

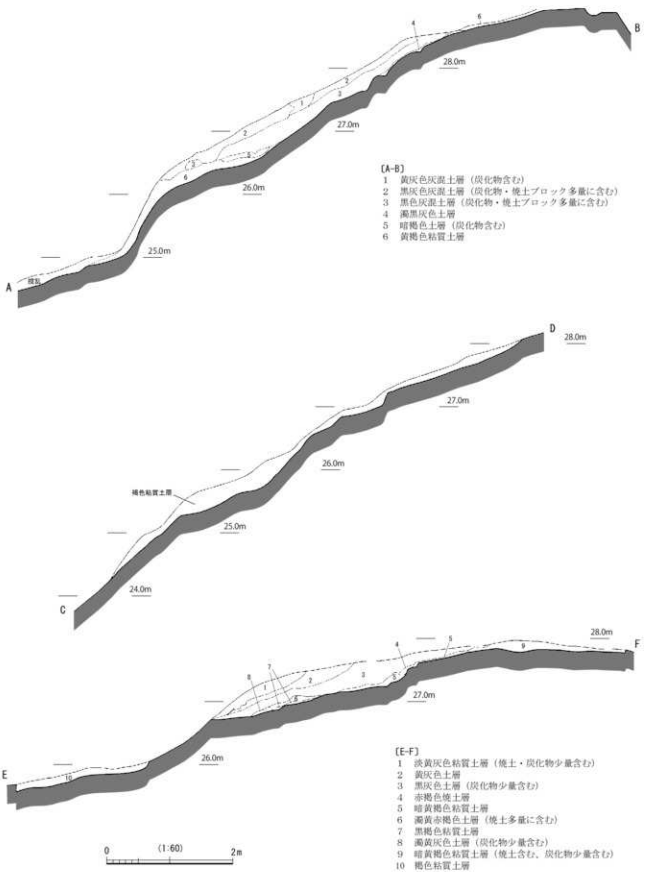
第25図　5号窯平面図（S=1/60）



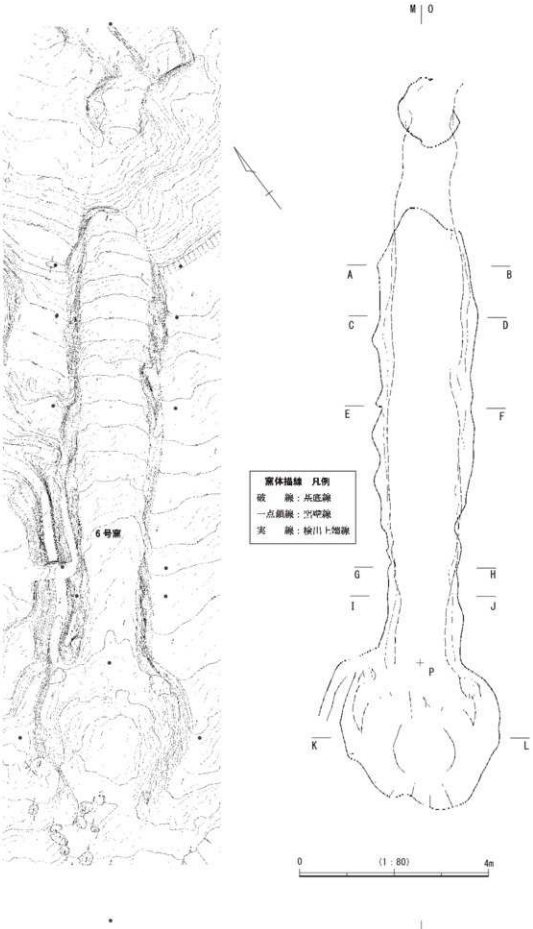
第 26 図　5 号窯断面図（S=1/60）



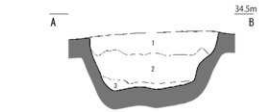
第27図　5号窯・10号窯灰原平面図（S=1/80）



第 28 図　5 号窯・10 号窯灰原断面図（S=1/60）

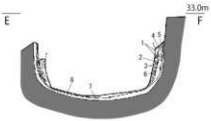


第29図　6号窯平面図（S=1/80）

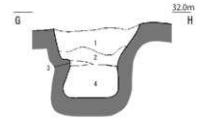


〔A-B〕
1　茶褐色粘質土層
2　天井崩落土
3　青灰色砂質土層（床面）

〔C-D〕
1　暗灰色砂質土層
2　青白色砂質土層
3　赤色砂質土層

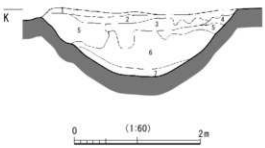


〔E-F〕
1　暗青灰色砂質土層
2　青白色砂質土層
3　青灰色砂質土層
4　黄褐色砂質土層
5　橙褐色砂質土層
6　暗褐色粘質土層
7　黄褐色砂質土層
8　赤色砂質土層



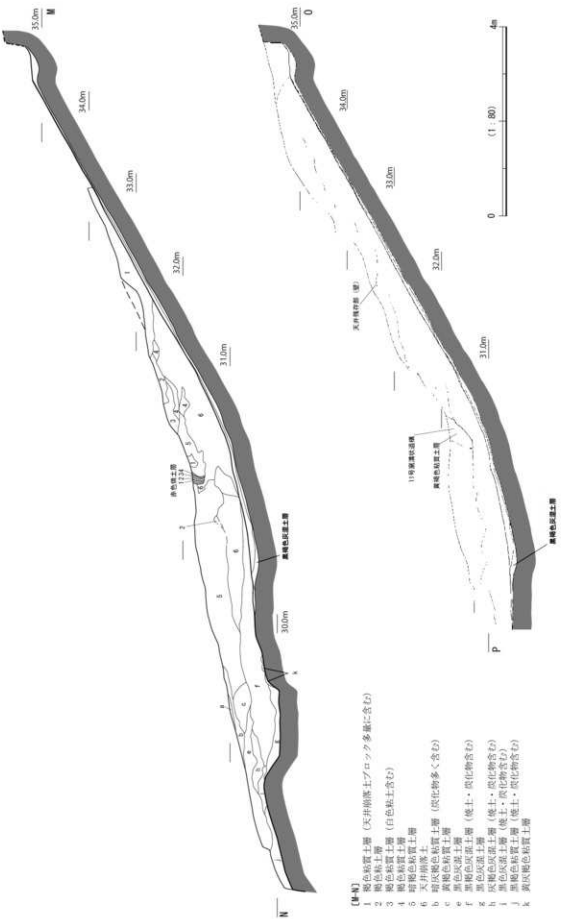
〔G-H〕
1　茶褐色粘質土層
2　橙色粘土層
3　白色粘土層
4　天井崩落土（赤色焼土＋青灰色焼土）

〔I-J〕
1　暗青灰色砂質土層
2　青灰色砂質土層
3　青白色砂質土層
4　黄褐色砂質土層
5　赤色砂質土層
6　暗橙褐色砂質土層
7　黒褐色粘質土層

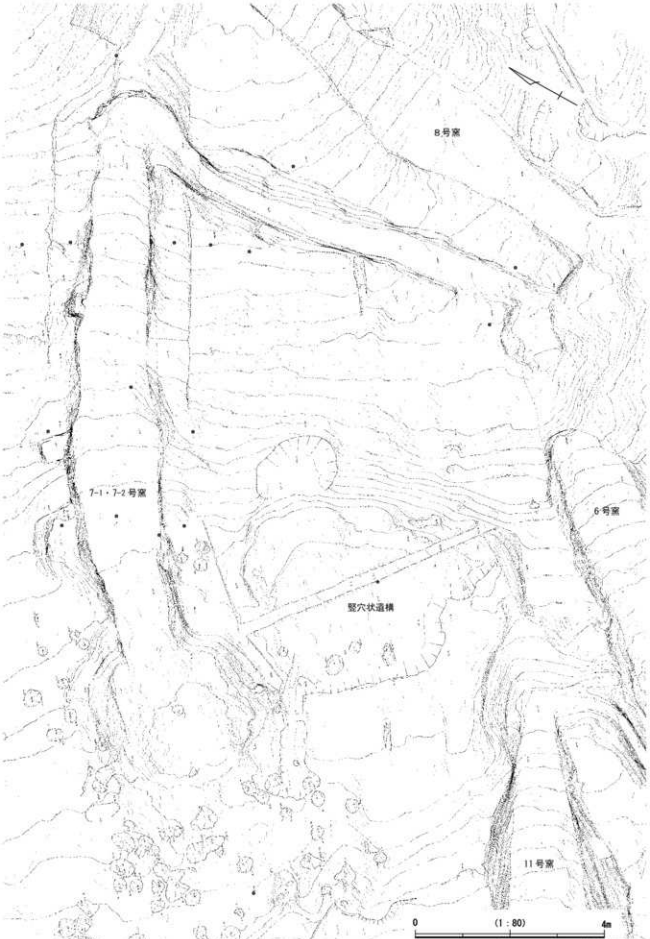


〔K-L〕
1　灰褐色粘質土層（炭化物少量含む）
2　暗灰褐色粘質土層（炭化物多く含む）
3　黄褐色粘質土層
4　黒灰褐色粘質土層
5　黒色灰混土層（炭化物多量に含む）
6　黒褐色灰混土層（赤色焼土、炭化物多量に含む）
7　黒色灰混土層

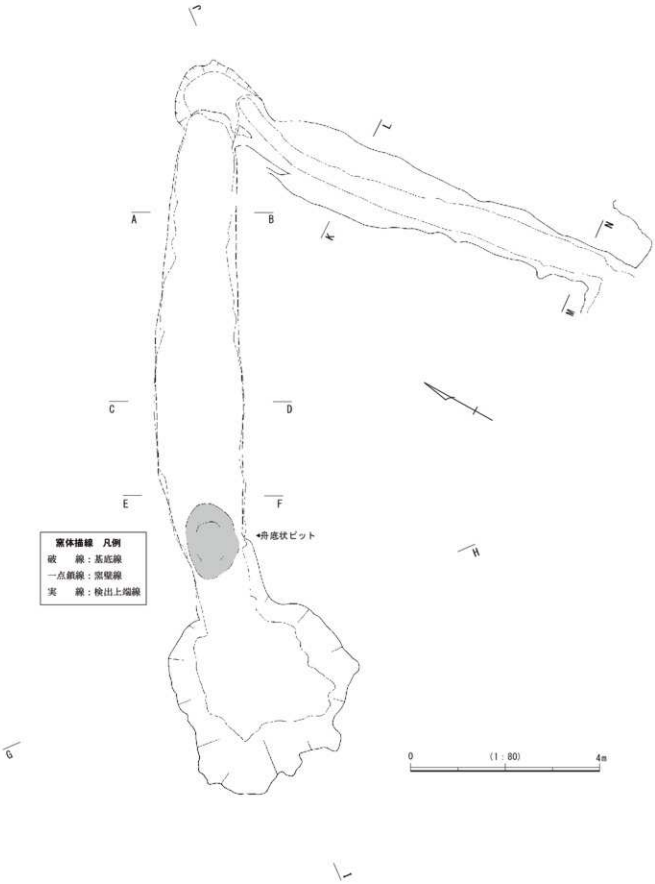
第 30 図　6 号窯断面図 1（S=1/60）



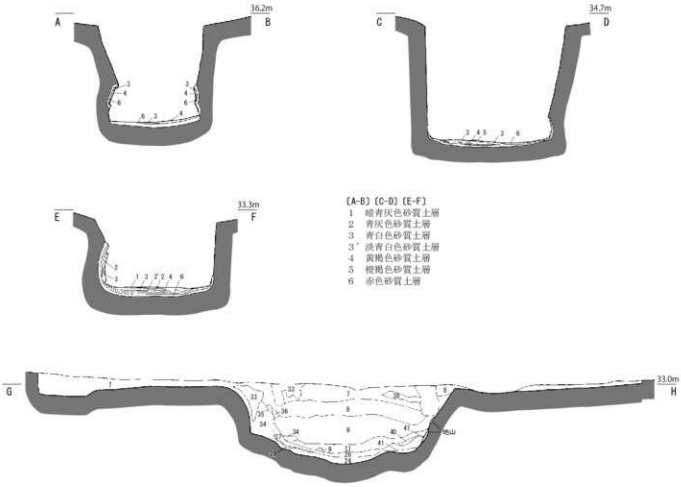
第 31 図　6 号窯断面図 2（S=1/80）



第32図　7-1・7-2号窯平面図（S=1/80）

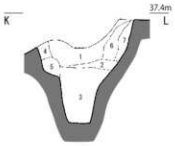


第 33 図　7-I 号窯平面図（S=1/80）



〔A-B〕〔C-D〕〔E-F〕
1　暗青灰色砂質土層
2　青灰色砂質土層
3　青白色砂質土層
3'　淡青白色砂質土層
4　黄褐色砂質土層
5　橙褐色砂質土層
6　赤色砂質土層

〔G-H〕
7　I-J 断面第 7 層に同じ
8　I-J 断面第 8 層に同じ
9　I-J 断面第 9 層に同じ
11　I-J 断面第 11 層に同じ
24　I-J 断面第 24 層に同じ
28　I-J 断面第 28 層に同じ
33　淡黒褐色砂質土層（焼土・炭化物含む）
34　褐色粘質土層（焼土粒含む）
35　明黄褐色粘質土層
36　暗黄褐色粘質土層
37　暗褐色粘質土層（炭化物含む）
38　黄褐色粘質土層
39　黄色粘質土層
40　黄灰色粘土層
41　灰色粘土層

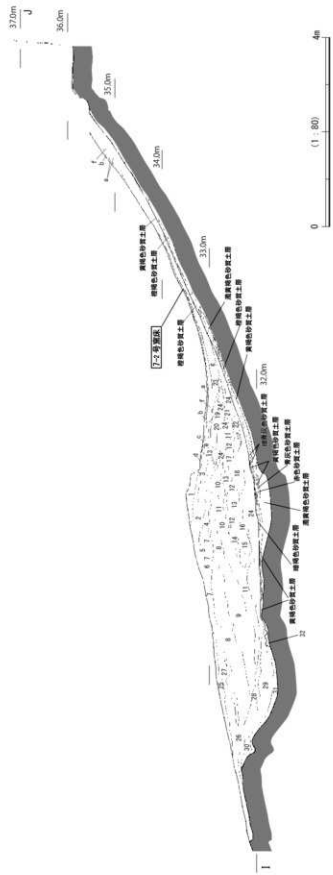


〔M-N〕
1　黄褐色粘質土層
2　黄褐色粘質土層（焼土ブロック含む）

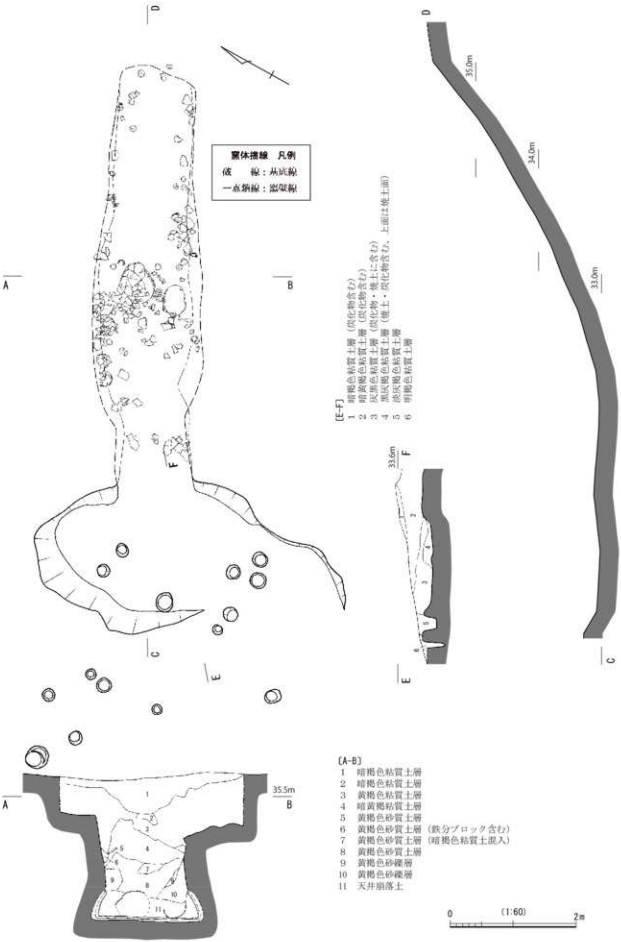
〔K-L〕
1　褐色粘質土層
2　暗灰褐色粘質土層
3　暗褐色粘質土層
4　黄灰褐色粘質土層
5　黄褐色粘質土層
6　暗黄褐色粘質土層
7　灰褐色粘質土層

0　(1:60)　2m

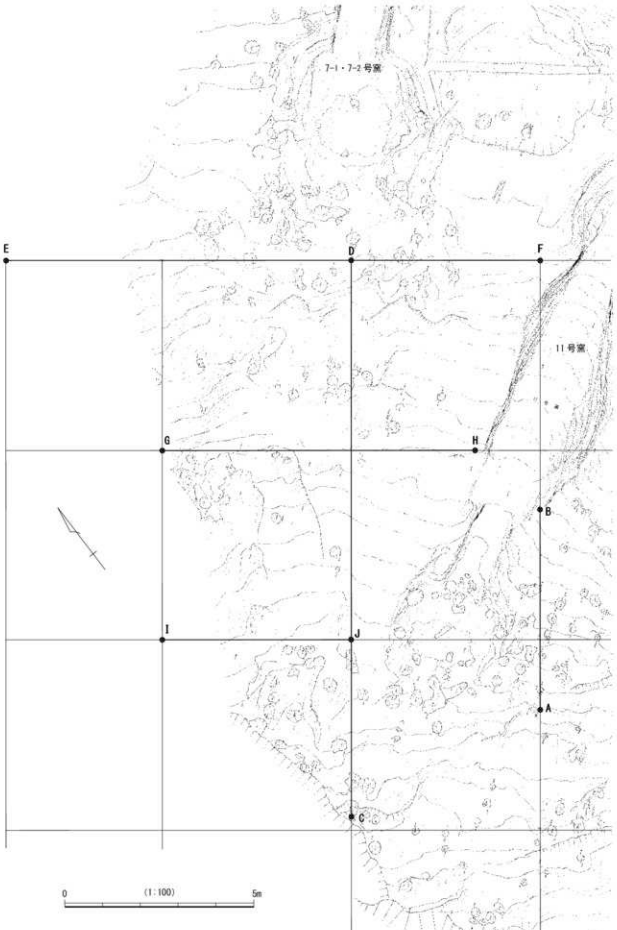
第 34 図　7-1 号窯断面図（S=1/60）



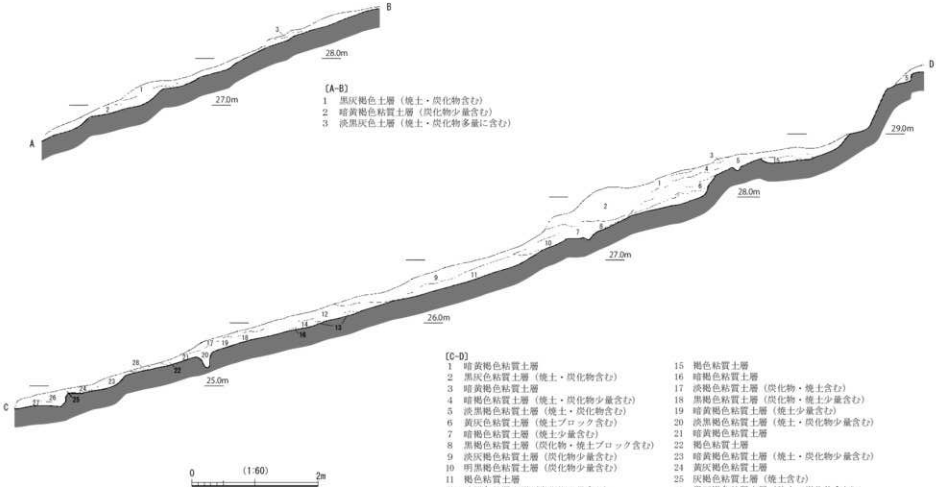
第 35 図　7-1 号・7-2 号窯断面図（S=1/80）



第 36 図　7-2 号窯平面図・断面図（S=1/60）



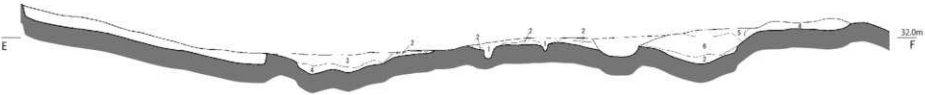
第37図　7-1・7-2号窯灰原平面図（S=1/100）



[A-B]
1　黒灰褐色土層（焼土・炭化物含む）
2　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
3　淡黒灰色土層（焼土・炭化物多量に含む）

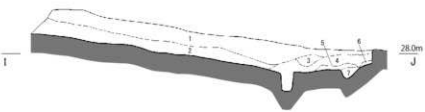
[C-D]
1　暗黄褐色粘質土層
2　黒灰色粘質土層（焼土・炭化物含む）
3　暗黄褐色粘質土層
4　暗褐色粘質土層（焼土・炭化物少量含む）
5　淡黒褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
6　黄灰色粘質土層（焼土ブロック含む）
7　暗褐色粘質土層（焼土少量含む）
8　黒褐色粘質土層（炭化物・焼土ブロック含む）
9　淡灰褐色粘質土層（炭化物少量含む）
10　明黒褐色粘質土層（炭化物少量含む）
11　褐色粘質土層
12　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
13　褐色粘質土層
14　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
15　褐色粘質土層
16　暗褐色粘質土層
17　淡褐色粘質土層（炭化物・焼土含む）
18　黒褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
19　暗黄褐色粘質土層（焼土少量含む）
20　淡黒褐色粘質土層（焼土・炭化物少量含む）
21　暗黄褐色粘質土層
22　褐色粘質土層
23　暗黄褐色粘質土層（焼土・炭化物少量含む）
24　黄灰褐色粘質土層
25　灰褐色粘質土層（焼土含む）
26　黒灰褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
27　灰褐色粘質土層（焼土含む）

第 38 図　7-1・7-2 号窯灰原断面図 1（S=1/60）



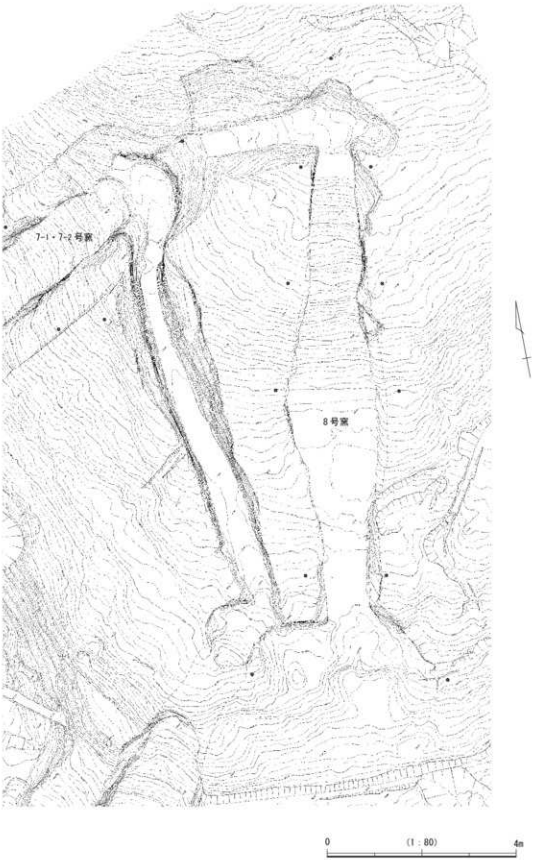
〔E-F〕
1　淡黒灰色灰混土層（炭化物少量含む）
2　濁黄灰褐色粘質土層
3　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
4　褐色粘質土層
5　暗灰褐色粘質土層
6　黒灰色土層（炭化物多量含む）

〔G-H〕
1　黄褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
2　黒灰色粘質土層（炭化物・焼土含む）
3　灰白色砂質土層（炭化物少量含む）
4　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
5　褐色粘質土層（焼土含む）
6　暗黄褐色粘質土層
7　暗黄灰褐色粘質土層（炭化物多量、焼土少量含む）
8　黒褐色粘質土層（炭化物・焼土ブロック含む）
9　淡黒灰色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
10　褐色粘質土層
11　淡灰褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
12　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
13　暗黄褐色粘質土層
14　褐色粘質土層
15　褐色粘質土層

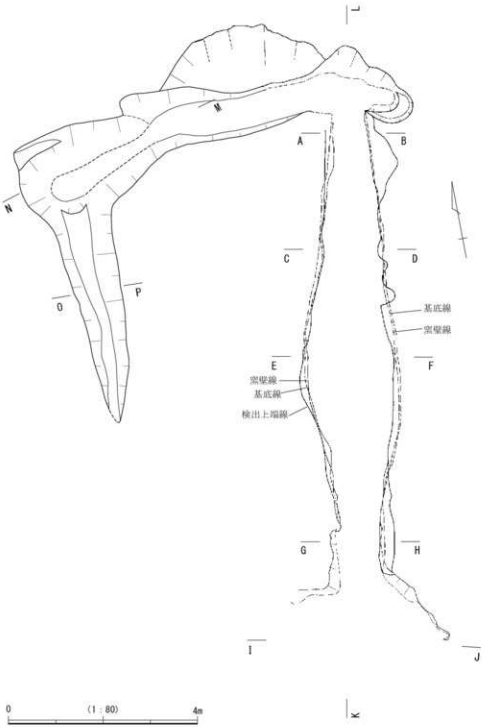


〔I-J〕
1　黄褐色粘質土層
2　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
3　淡黒褐色粘質土（炭化物少量含む）
4　黒褐色粘質土（炭化物・焼土含む）
5　淡褐色粘質土層（焼土少量含む）
6　淡黄褐色粘質土層
7　暗褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）

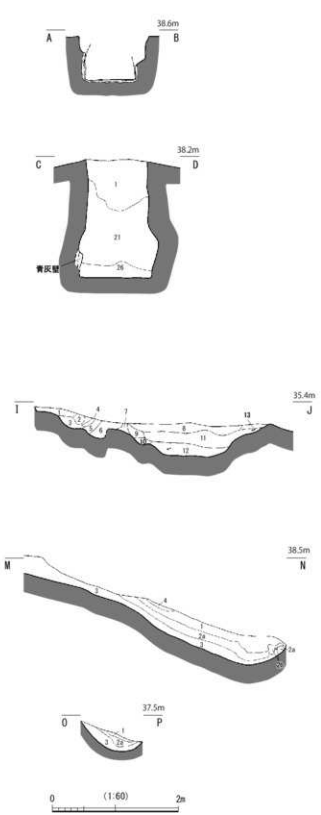
第39図　7-1・7-2号炉原断面図2（S=1/60）



第40図　8号窯平面図1（S=1/80）



第41図　8号窯平面図2（S=1/80）

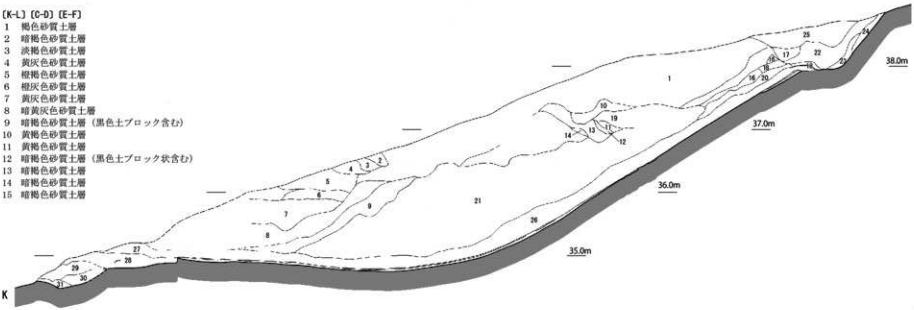


〔I-J〕
1　暗茶褐色粘質土層（焼土含む）
2　暗茶褐色粘質土層
3　黄褐色粘質土層
4　黒褐色粘質土層
5　淡灰褐色粘質土層
6　暗茶褐色粘質土層（炭化物含む）
7　明灰褐色粘質土層
8　黒褐色粘質土層（炭化物多量に含む）
9　濁黄褐色粘質土層
10　濁黄褐色粘質土層（粘土ブロック含む）
11　濁黒黄褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
12　濁黄褐色粘質土層（炭化物含む）
13　暗茶褐色粘質土層

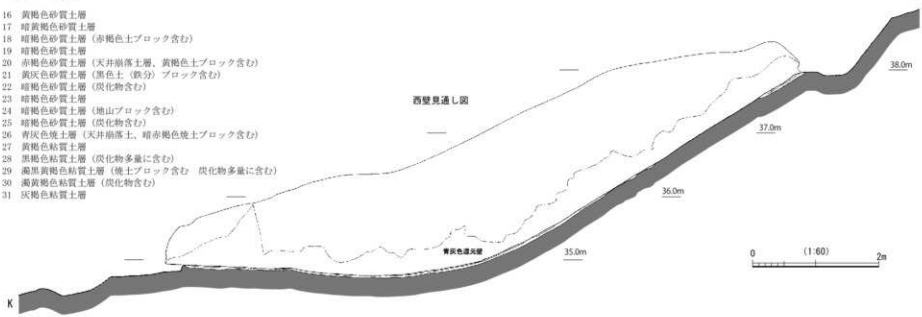
〔M-N〕〔O-P〕
1　黒灰色粘質土層（炭化物含む）
2a　灰褐色粘質土層
2b　灰褐色粘質土層
3　黄灰色粘質土層
4　明灰褐色粘質土層

第 42 図　8 号窯断面図 1（S=1/60）

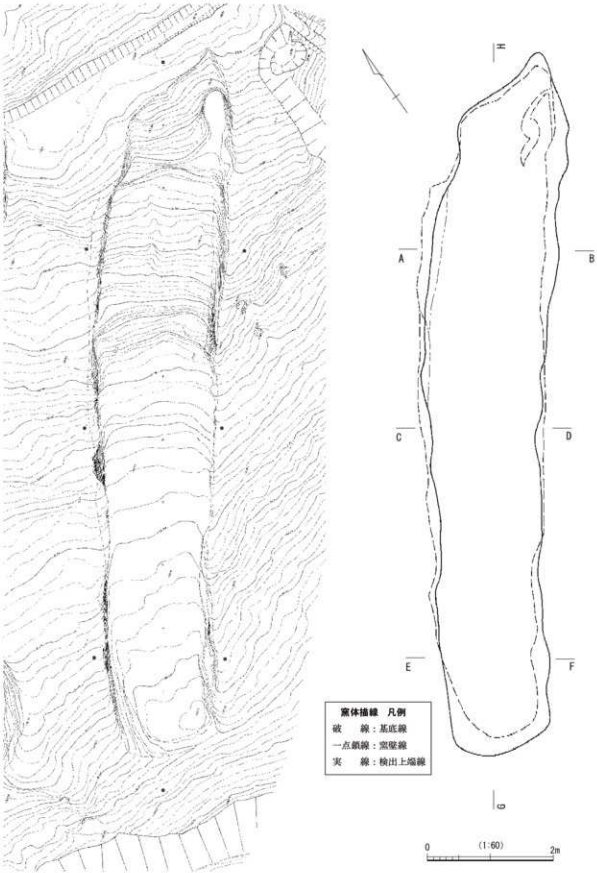
[K-L] [C-D] [E-F]
1 褐色砂質土層
2 暗褐色砂質土層
3 淡褐色砂質土層
4 黄灰色砂質土層
5 橙褐色砂質土層
6 橙灰色砂質土層
7 黄灰色砂質土層
8 暗黄灰色砂質土層
9 暗褐色砂質土層（黒色土ブロック含む）
10 黄褐色砂質土層
11 黄褐色砂質土層
12 暗褐色砂質土層（黒色土ブロック状含む）
13 暗褐色砂質土層
14 暗褐色砂質土層
15 暗褐色砂質土層



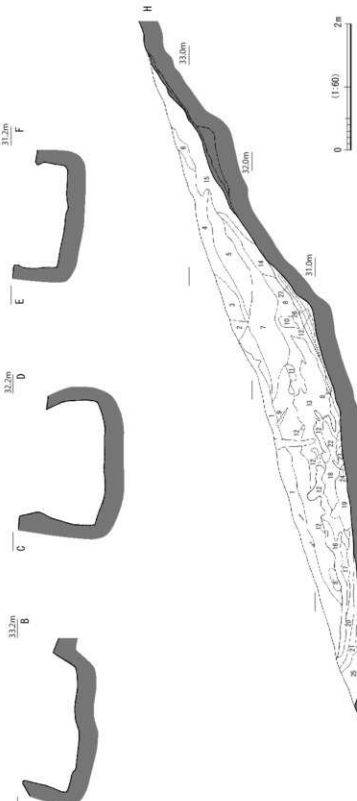
16 黄褐色砂質土層
17 暗黄褐色砂質土層
18 暗褐色砂質土層（赤褐色土ブロック含む）
19 暗褐色砂質土層
20 赤褐色砂質土層（天井崩落土層、黄褐色土ブロック含む）
21 黄灰色砂質土層（黒色土（鉄分）ブロック含む）
22 暗褐色砂質土層（炭化物含む）
23 暗褐色砂質土層
24 暗褐色砂質土層（地山ブロック含む）
25 暗褐色砂質土層（炭化物含む）
26 青灰色焼土層（天井崩落土、暗赤褐色焼土ブロック含む）
27 黄褐色粘質土層
28 黒褐色粘質土層（炭化物多量に含む）
29 濁黒黄褐色粘質土層（焼土ブロック含む　炭化物多量に含む）
30 濁黄褐色粘質土層（炭化物含む）
31 灰褐色粘質土層



第43図　8号竪穴断面図2（S=1/60）

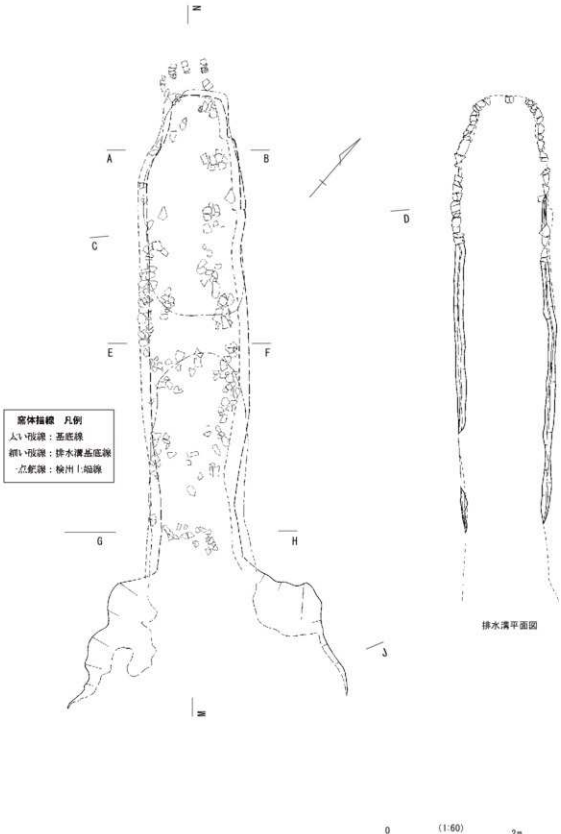


第 44 図　9 号窯平面図（S=1/60）

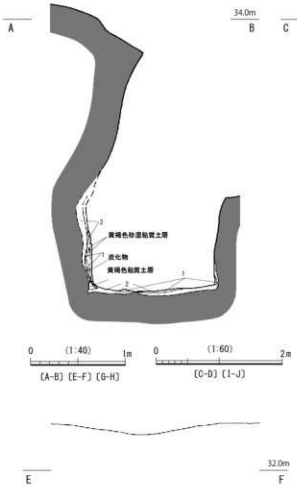


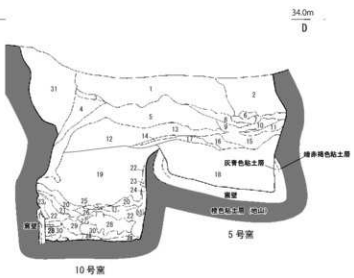
第 45 図　9 号窯断面図（S=1/60）

第46図　10号窯平面図1（S=1/60）



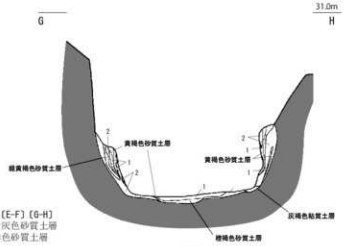
第 47 図　10 号窯平面図 2 (S=1/60)

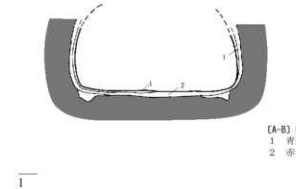




〔C-D〕

1 褐色粘質土層
2 黄灰褐色粘質土層
3 灰褐色粘質土層
4 淡黄灰色粘質土層
5 黄灰色粘質土層
6 橙褐色粘質土層
7 暗褐色粘質土層
8 暗黄灰褐色粘質土層
9 暗灰褐色粘質土層
10 橙褐色粘質土層
11 暗灰褐色粘質土層
12 灰褐色粘質土層
13 暗灰褐色粘質土層
14 暗灰褐色粘質土層
15 暗灰褐色粘質土層
16 暗黄灰褐色粘質土層
17 黄赤褐色砂質土層
18 天井崩落土
19 黄灰褐色砂質土層
20 黄褐色粘土層
21 橙褐色強粘質土層
22 白黄褐色強粘質土層
23 暗黄灰褐色粘質土層
24 白灰褐色粘土層
25 炭化物層
26 暗赤褐色粘土層
27 赤褐色粘土層
28 天井崩落土
29 茶褐色粘質土層（崩落土粒含む）
30 黄褐色粘質土層
31 黄灰褐色砂質土層





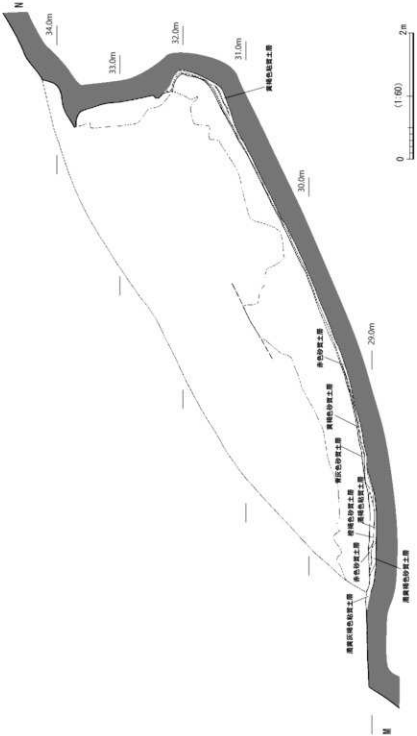
〔A-B〕〔E-F〕〔G-H〕

1 青灰色砂質土層
2 赤色砂質土層

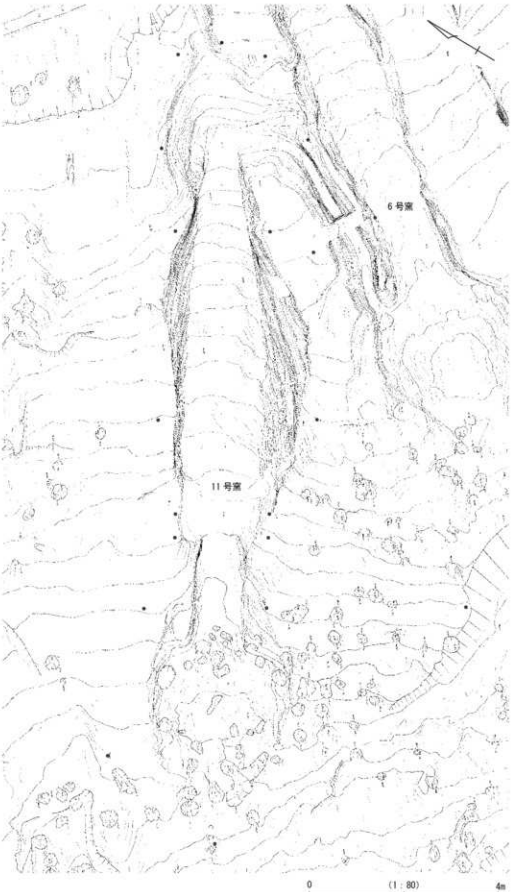
〔I-J〕

1 黒褐色灰混土層（赤色焼土・炭化物含む）
2 黄褐色粘質土層
3 暗褐色粘質土層（炭化物含む）
4 暗灰褐色粘質土層（赤色焼土・炭化物含む）
5 黄褐色粘質土層
6 褐色粘質土層（炭化物含む）

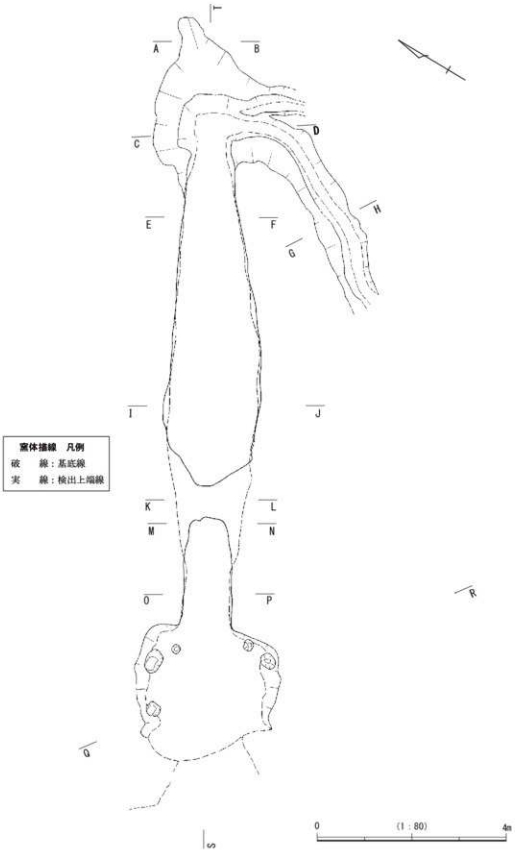
第 48 図　10 号窯断面図 1（S=1/40・1/60）



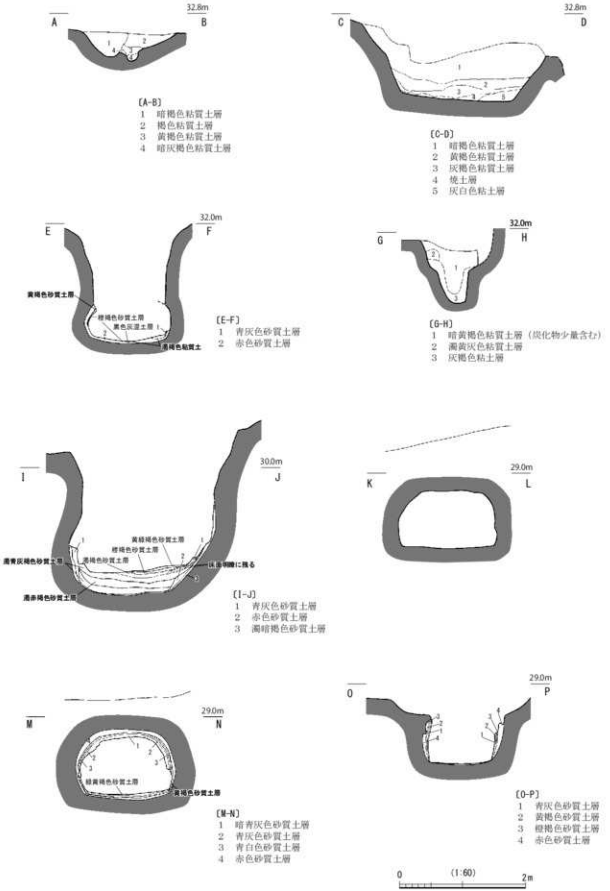
第 49 図　10 号窯断面図 2（S=1/60）



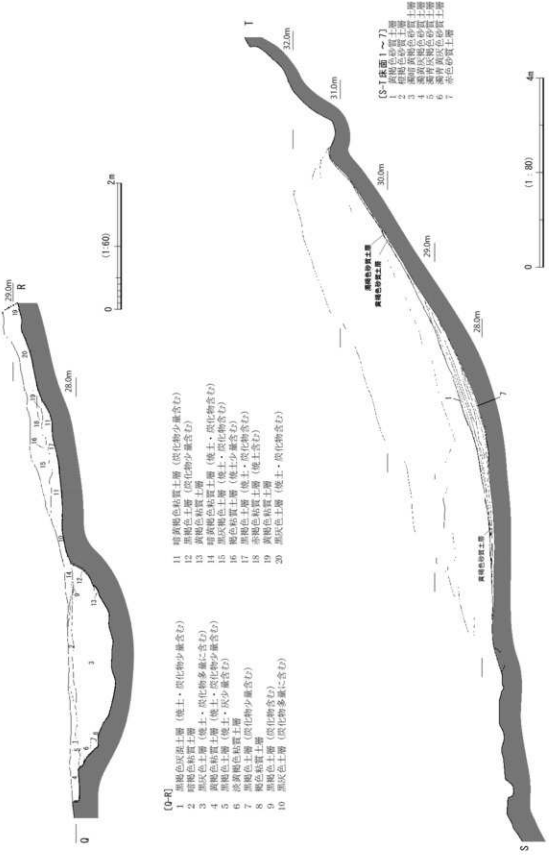
第50図　11号窯平面図1（S=1/80）



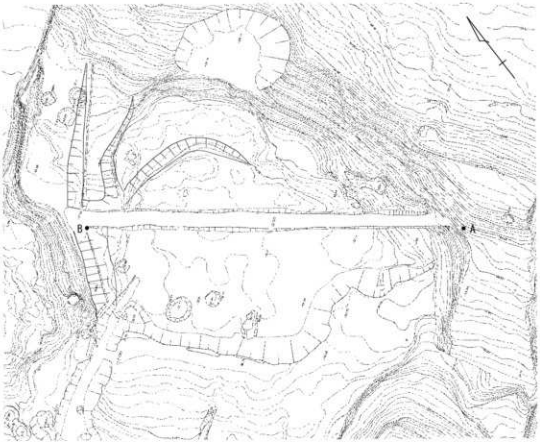
第 51 図　11 号窯平面図 2 (S=1/80)

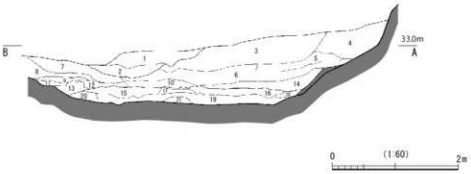


第52図　11号窯断面図1（S=1/60）



第 53 図　11 号窯断面図 2（S=1/60・80）





[A-B]
1　濁暗黄灰褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
2　濁淡黒灰褐色土層（灰混り、焼土ブロック・炭化物多量に含む）
3　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
4　濁褐色粘質土層（焼土含む）
5　黄褐色粘質土層（ブロック状に粘土含む）
6　濁黄褐色粘質土層（ブロック状に粘土含む、炭化物・焼土少量含む）
7　濁黄褐色粘質土層（焼土ブロック多量、炭化物少量含む）
8　褐色粘質土層
9　濁暗黄褐色粘質土層
10　濁黄灰褐色粘質土層（粘土ブロック含む、焼土・炭化物少量含む）
11　褐色粘質土層
12　濁黄灰色粘質土層（焼土含む）
13　濁褐色粘質土層（焼土ブロック含む）
14　褐色粘質土層
15　濁暗黄灰褐色粘質土層
16　濁暗黄灰褐色粘質土層（粘土ブロック・焼土含む）
17　淡褐色粘質土層
18　濁黄灰褐色粘質土層
20　濁灰褐色粘質土層粘土ブロック・炭化物少量含む）
21　濁褐色粘質土層（粘土ブロック含む）

第 54 図　竪穴状遺構平面図・断面図（S=1/60）

第２節　出土遺物

１．概　要

第1～3次調査で出土した遺物は、ほとんどが須恵器生産関連遺物であり、整理箱(LⅡ型コンテナパッド)で115箱程度を数える。うち、約90箱が本窯跡群で焼成された須恵器であり、他に土師器甕、瓦器、石鏃や奈良時代の須恵器坏・盤等が出土した。また、焼き台(置き台)に使用した自然石や、サンプルとして切り取った窯壁片等が約25箱を数える。

以下、第1節の窯番号順ではなく、調査・整理担当者が作成した、おおむね遺物の様相が古い窯番号の順に、出土状況、器種組成、坏類、高坏、壷・瓶類、甕等の主要器種ごとに説明を加え、複数の地点から出土した陶棺、円面硯、土馬等については第15項で説明をおこなう。また、個々の遺物の詳細に関しては、観察表(第30～53表)に記載している。なお、須恵器の焼成が行われなかった3号窯は出土遺物がなく、同じく未焼成の9号窯は窯体への流込土から遺物が出土した。

２．4号窯　(第55～63・108・113図、第4・5・30～33・52・53表)

出土状況等　4号窯の床面は、1回以上の補修が認められる。出土遺物は、他窯から離れて立地する位置関係から、意図的に持ち込まれた焼成品以外の混入は比較的少ないと考えられる。第22図で示した出土状況のとおり、生焼け品を含めて窯体内からの出土遺物は多く、第55図1～第57図47、第113図1301・02・05・06が窯体内(主に焼成部床面)から、第57図48～第59図87、第108図1266、第113図1299・1304が前庭部から、第59図88～第63図176、第113図1300・03・07が灰原から、第63図177が煙道部から、それぞれ出土した。また、灰原出土品は、窯体内焼成品と類似する焼成具合・色調を示すa群(焼成は良好、淡灰～灰色)と、器面に小さな焼き膨れが目立ち、黒色の小さなゴマ状の噴き出しをもつ灰白色を呈したb群の2群に大別でき、b群は焼成時に鮮やかな緑灰色の自然釉が熔着して焼き歪んだ個体が多い。4号窯の焼成順でいえば、b群からa群、そして窯体内出土の生焼けの群に推移したと考えられる。窯体内の出土点数が限られること等から、以下では器種ごとに説明を行う。なお、1号窯北側の土坑から第63図178の坏H身、同図179の非ロクロ成形の球胴形を呈する土師器甕が出土した。

器種構成　出土遺物は、灰原を含めて整理箱で23箱(破片数4,603点)を数える(第4表)。確認した器種は、坏H、高坏A(有蓋長脚、脚部3方2段透かし)、高坏B(無蓋長脚、脚部3方2段透かし)、高坏C(無蓋短脚)、壷類3種(壷G含む)、瓶類5種、鉢類3種、甕4法量であり、器形を含めて比較的斉一性を保持した器種組成といえる。量比は、口縁部計測法[1]でみれば、坏Hが約38%、高坏A・Bが約22%、瓶類が約19%、甕9%、鉢類が約8%、壷類が約4%の比率を示し、食膳具が全体の約60%を占める他、鉢類の比率が比較的高い。また、破片数計測法でみれば、甕が約61%、坏H・高坏が各約12%、瓶類が約10%、壷類が約4%、鉢類が約2%の比率を示し、灰原から出土した多量の高坏脚部片と甕胴部片(定量の焼き台転用破片を含む)を反映した数値となる。

坏H　窯体内出土の1～27、前庭部出土の49～54、灰原出土の88～104を図化し、基本的に1法量である(第5表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向である。成形方法は、体部下半～周縁部外面に指で目安をつけた後に、斜め方向にヘラ状工具を差し込んで回転ヘラ切りで余分な粘土を削りとり、その後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行い、結果として底部(蓋は天井部)が比較的狭く、器形は丸く仕上

がる。指をあてた凹線状のくぼみ痕は蓋6・16・97、身22・99等で、また斜め方向のヘラ状工具の差し込み痕は回転ケズリ痕を図化した個体(蓋17、身26等)で特に明瞭に残る。底部外面の仕上げは、中心に残るヘラ切り痕(盛り上がった粘土残)をそのまま残し、周縁を雑になで消す程度で未調整に近い印象を受ける。雑なナデ調整の後に施したクシ状工具痕[1]を残す個体も定量存在する。底部(蓋は天井部)内面は、回転ヘラ切り作業に伴う中央付近の突出を修正するため、1方向の軽いナデ調整を行う。また、灰原出土の蓋90の天井部内面中央に、高坏Aで認められる技法である同心円叩き痕が確認できる。焼成状況は、大半の個体で焼き歪みが目立ち、窯体内で生焼けの個体が半数程度(蓋実測個体18点中9点、身同9点中5点)ある一方、焼き台(置き台)に転用された個体は第55図蓋2が確認できる程度である。灰原出土遺物が、a・b群の2つの群に分かれるのは前述のとおりである。また、重ね焼きは、1対の蓋と身を使用する形でセットし、正位で焼成することを基本としており、身27のような倒位焼成は比較的少ない。

蓋は、比較的狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁基部で明瞭に屈曲、先細る口縁端部を丸く仕上げた個体が多く、10・89・92のような平坦な天井部から直線的に口縁基部に至る器形も客体的に存在する。口縁基部の形態に若干の差異が認められ、口縁基部で明瞭に屈曲して口縁端部が直下におりる形態(5・10・92等)、口縁基部で明瞭に屈曲して先細る口縁端部が小さく外反する形態(7・93等)、口縁基部の屈曲が弱い形態(11・90・96等)があり、数量では前2者の形態が主体を占める。焼成良好品の法量は口径13.6～14.6cm、器高3.7～5.3cm(4cm弱と5cm弱が中心か)に、生焼け品は口径14.0～15.2cm、器高4.2～5.0cmにそれぞれ分布し(第5表)、焼成時の粘土縮小率の差を反映して、口径で約1cmの分布域のずれが生じている。

身は、蓋と同様に、比較的狭い底部から丸みをもちながら立ち上がり、内傾する口縁部が反り立つ個体が主体を占め、体部が直線的に外傾しながら立ち上がる53・98・102等の器形は客体的である。また、受け部の形態に若干の差異が認められ、受け部直下の強い回転ナデ調整により受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態(19・53・101等)と、口縁基部と受け部の境を明瞭にするための強い回転ナデ調整により受け部が短く横または斜め上方向にのびる形態(26・103等)があり、前者の形態が主体となる。焼成良好品の法量は口径12.2～13.0cm、器高3.6～4.2cmに、生焼け品は口径13.2～14.2cm、器高4.1～4.5cmにそれぞれ分布し、蓋に比して焼成時の粘土縮小率の差は顕在化しない。

高坏　窯体内出土の28～33、前庭部出土の55～68、灰原出土の105～125を図化した。高坏A(有蓋長脚、3方2段透かし)と、高坏B(無蓋長脚、3方2段透かし)は、口縁部計測法で約2対1の比率を示し、高坏C(無蓋短脚)は灰原出土の1点(125)のみである。また、焼成は、高坏Aが蓋・身をセットとした倒位焼成、蓋のない高坏Bが正位焼成を厳格に保持し、高坏A蓋外面には径約13cmの他個体との重ね焼き痕が残る。

高坏A・Bは、胎土・焼成具合からa群に属し、緑灰色の自然釉や淡黄灰色の降灰が厚く熔着した個体が多い。高坏A蓋は、偏平な鈕を付け、天井部外面に丁寧な回転ケズリ調整、内面中央に明瞭な複数の同心円叩き痕を残す。屑部の稜は、面取りのにぶい稜(106・107)、簡略な段状の稜(28・55等)、稜をつくらないもの(56)があり、簡略な段状の稜をつくる個体が主体をなす。また、灰原出土品より窯体内出土品で簡略化が進む傾向を示す。口径は、大きく焼き歪んだ106・107が16.5cm強、その他が16cm弱を測る。

高坏A身は、脚端径14.2～17.8cmを、全形の分かる113で口径13.0cm、器高18.0cm、脚端径14.2cmをそれぞれ測る。2条1単位の沈線と透かしで加飾する脚は、上段の透かしが全て内面に貫通しておらず、蓋でみられた稜の表現とともに、後述する1号窯より簡略化した加飾となる。また、下段の沈線と脚端部の間はロクロひだが目立つ。高坏Bは、口径13cm前後、脚端径12cm前後を測る。坏部下半を2段の面取りの鋭い稜で加飾する。灰原出土の高坏C(125)は脚端径10.8cmを測り、脚端部を平坦に仕上げる。他に類似個体片がないことや、焼成具合・胎土が高坏A・Bと異なり、他窯からの混入品の可能性を多分に残す。

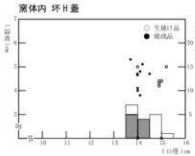
第４表　４号窯出土遺物計測表

	計	坏H		高坏A		高坏B	高坏C・不明	蓋類			鉢類						椀類				皿類						その他・不明
		蓋	身	蓋	身			蓋A	蓋G	その他・不明	壺		甕類	平鉢	鍋類	その他・不明	椀A	椀C	その他・不明	大型	中型	その他・不明					
口縁部計測法（口縁量）	2,207	794	473	313	183	174	13	38	13	49	46	28	20	61	152	129	159	34	6	88	69	34	12				
口縁部計測法（補正口縁量）	2,324		873		313	174	13			99				137	152	129	159	34	6	88	69	34	12				
比率（%）	100%		37.6%		13.5%	7.5%	0.6%			4.3%				6.0%	6.5%	5.5%	6.9%	1.5%		3.8%	3.0%	2.5%	0.5%				
破片数計測法（点）	4,603	804	404	194	208	144	19	41	32	63	24	17	22	28	210	93	9	75	6	129	65	2,256	50				
破片数計測法（補正点）	4,848		404		208	144	19			148				83	210	93	9	75	6	129	65	2,256	50				
比率（%）	100%		11.3%		7.4%	3.0%	0.4%			3.5%				2.1%	5.2%	2.3%	0.3%	1.9%		3.2%	1.6%	55.7%	1.2%				

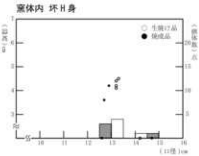
※灰掛を含む。口縁部計測法の口縁量は○○%の数値。また、補正口縁量、補正点は有意間隔で数値が大きいものを選択した後の数値をいう。

第５表　４号窯実測坏Ｈ法量分布表

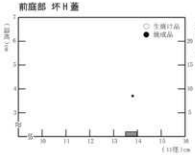
窯体内 坏Ｈ蓋



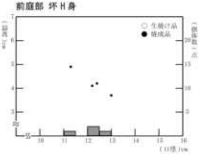
窯体内 坏Ｈ身



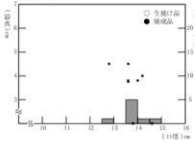
前庭部 坏Ｈ蓋



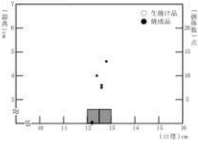
前庭部 坏Ｈ身



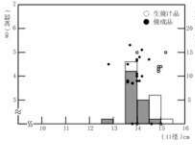
灰原 坏Ｈ蓋



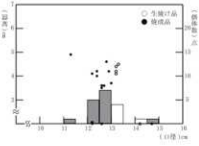
灰原 坏Ｈ身

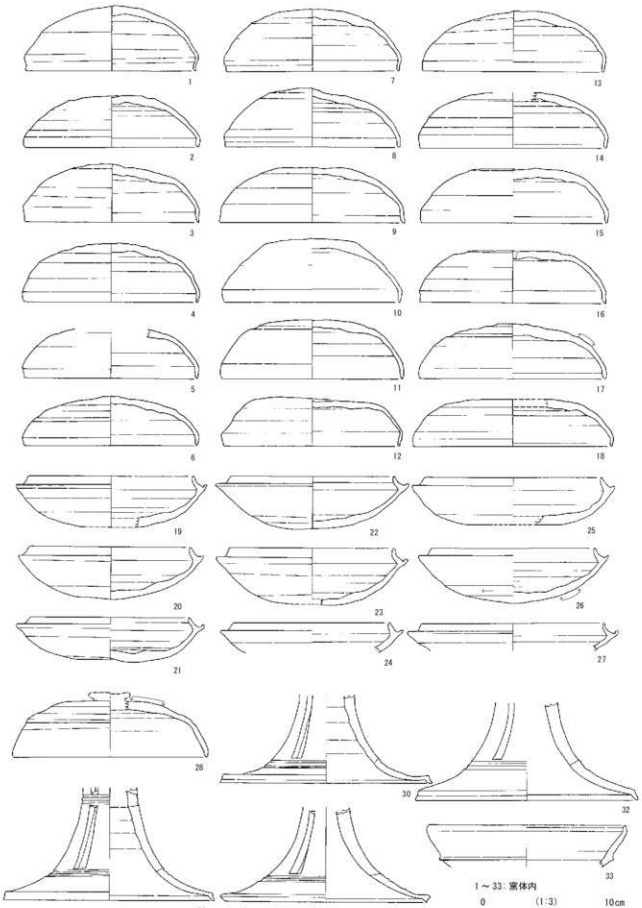


全体 坏Ｈ蓋

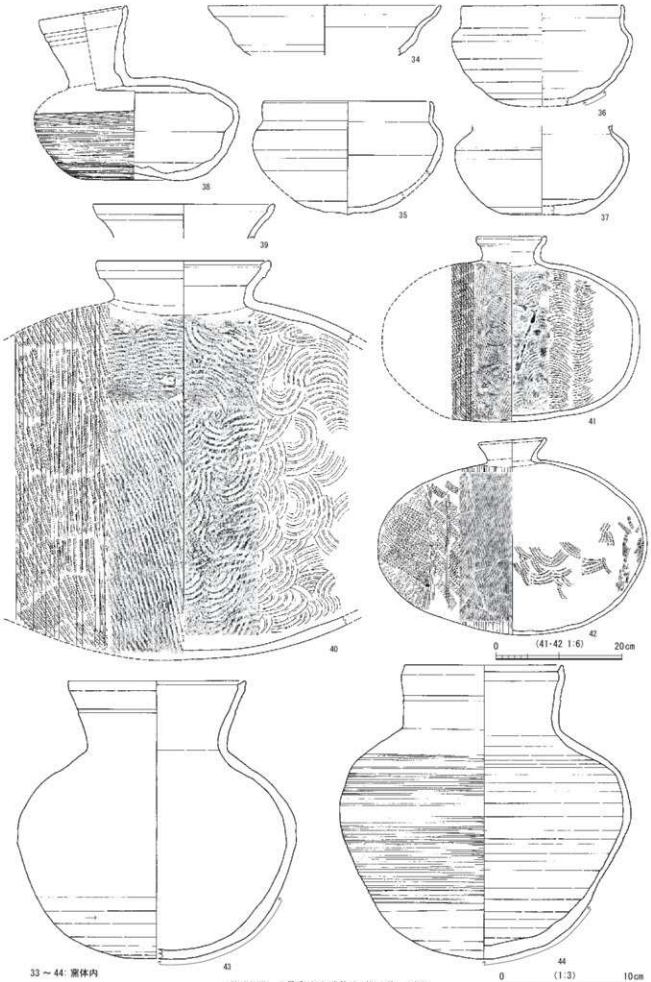


全体 坏Ｈ身

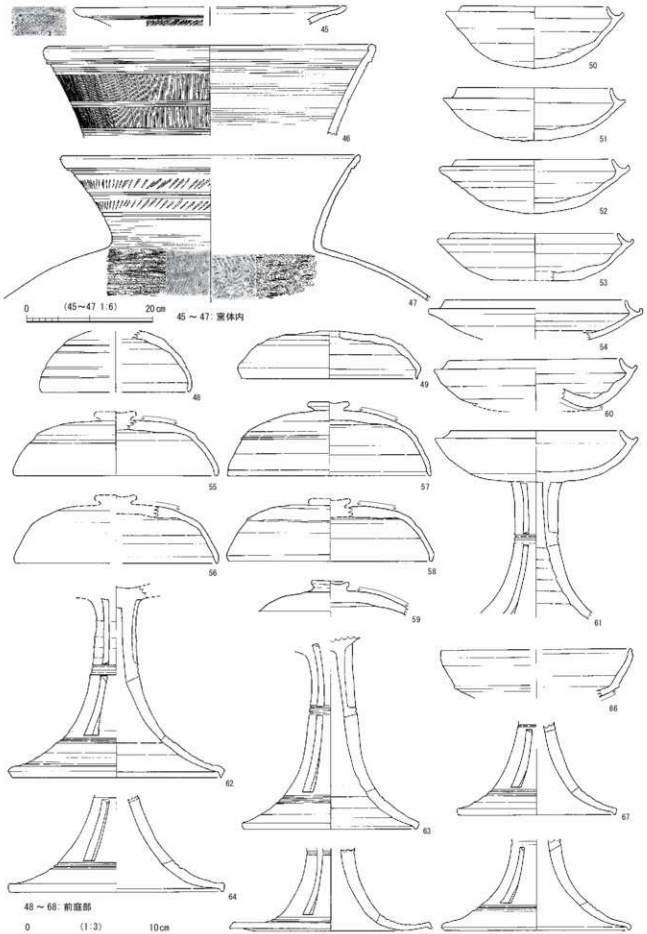




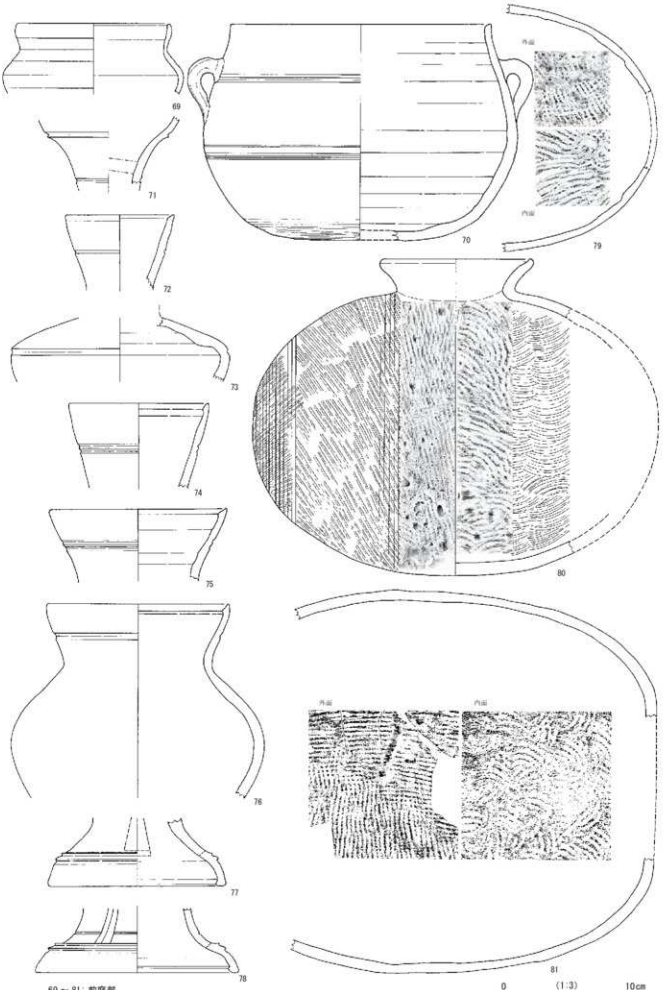
第 55 図　4 号窯出土遺物 1 (S=1/3)



第 56 図　4 号窯出土遺物 2 (S=1/3、1/6)

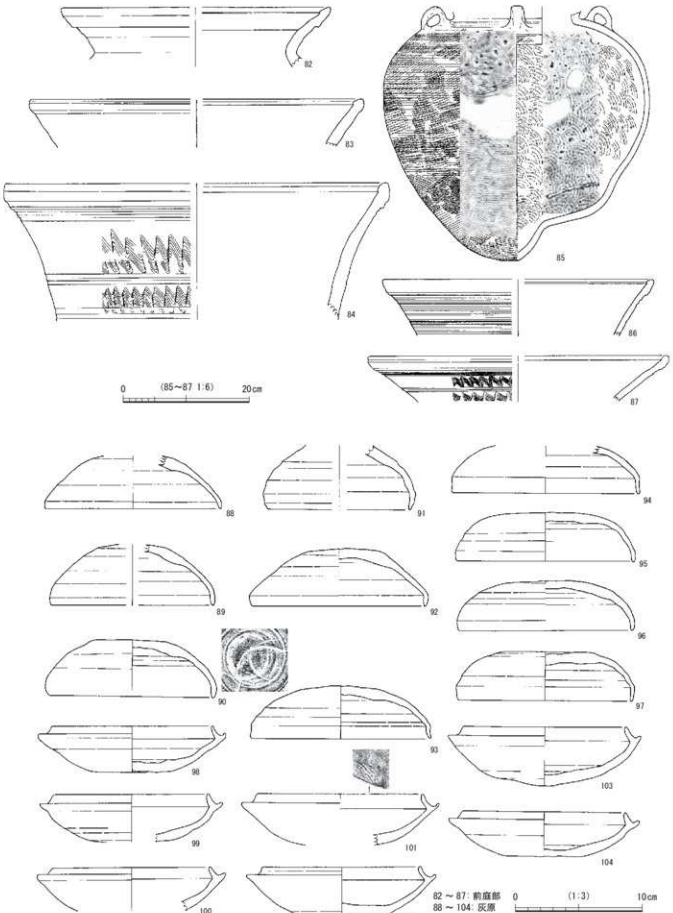


第 57 図　4 号窯出土遺物 3（S=1/3）

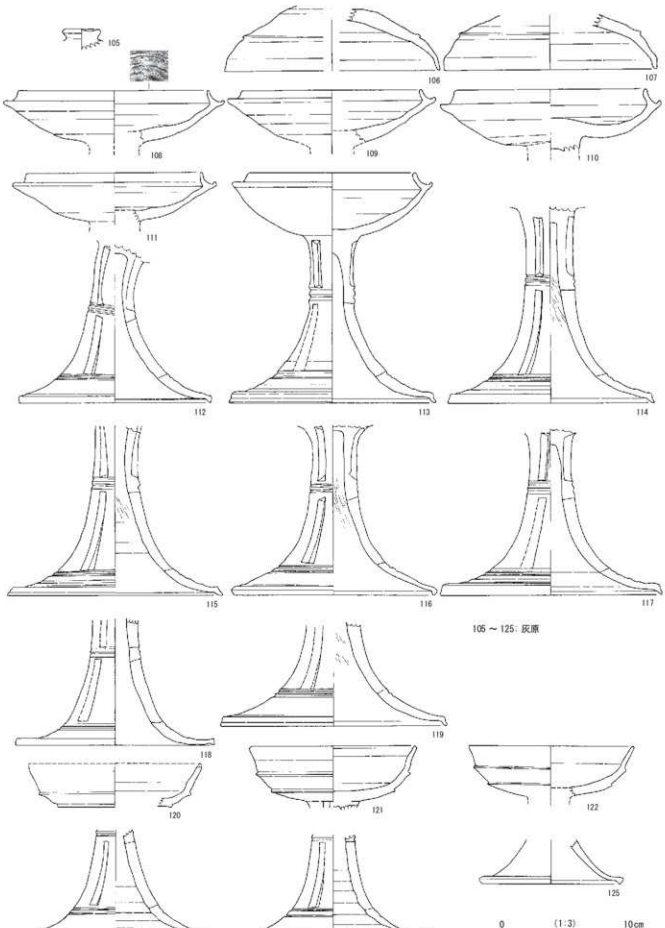


69～81：前庭部

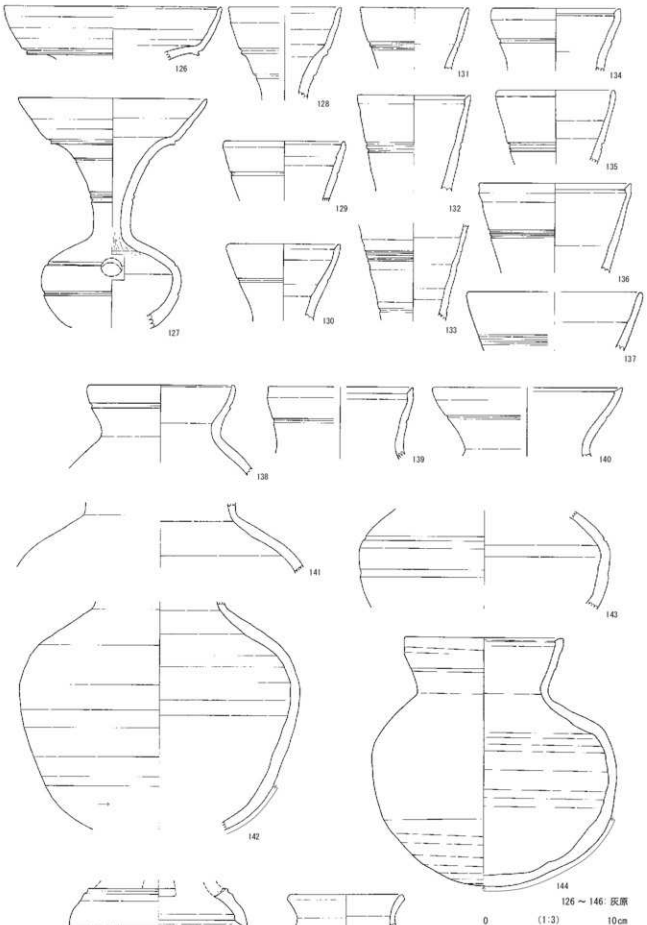
第 58 図　4 号竪出土遺物 4 (S=1/3)



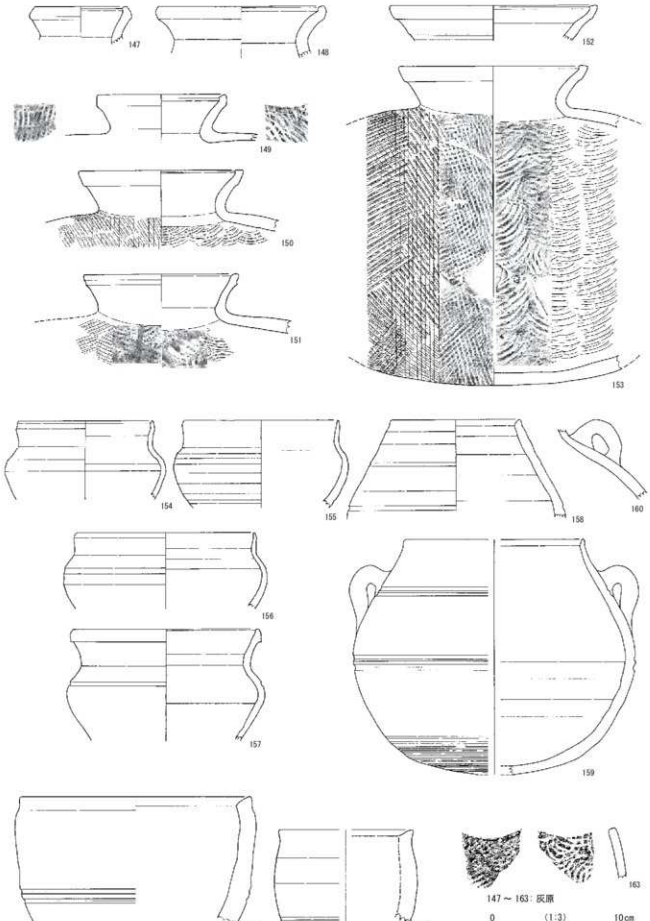
第59図　4号窯出土遺物5 (S=1/3、1/6)



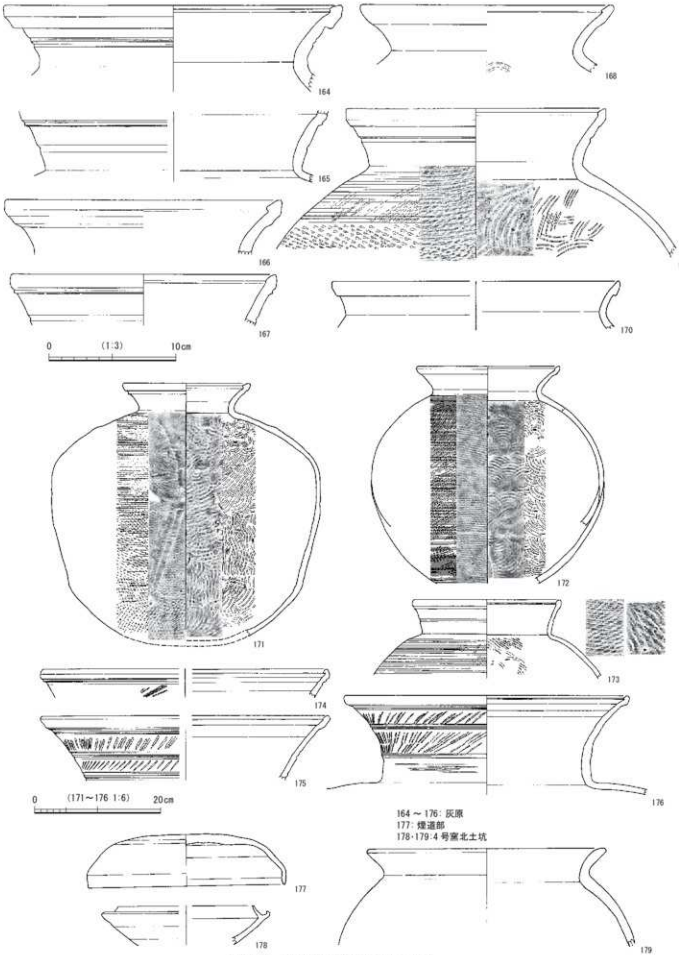
第60図　4号窯出土遺物6（S=1/3）



第61図　4号窯出土遺物7（S=1/3）



第 62 図　4 号窯出土遺物 8（S=1/3）



第63図　4号窯出土遺物9（S=1/3、1/6）

壷類　無蓋で球胴・丸底形を呈するA類(43・44・76・144等)と、仏器的器種である無花果形のG類(70、158～160)、小型壷146が出土、A類が定量焼成される。A類は、外面下半に回転ケズリ調整を、口縁部外面中程に1条の沈線をそれぞれ施し、内湾する口縁端部を内傾・肥厚させる点で共通する。また、44は胴部を粗いカキメ調整で加飾する。法量は、口径10～11.4cmの個体群(134・138)と、口径12.4～14.8cm、器高20～23cmの個体群に分かれるようだ。焼成具合は、窯体内出土品が生焼けに近い個体が多く、灰原出土品がｂ群に属する個体が多い傾向を示す。

2ヶ所に環状の把手を付す壷G類は、胴部下半～底部外面をカキメ調整、胴部中程を2列の沈線で加飾し、口縁端部は内傾した平坦面をもつ。胎土・焼成具合はｂ群に属し、正位・無蓋で焼成、焼き歪みが大きい。図上復元した70が口径約20cm、器高約17cm、159が口径約14cm、器高約18cmを測る。小型壷146は口径8.8cmを測り、破断面に自然釉が熔着する。

瓶類　瓢、長頸瓶、提瓶、平瓶、横瓶が確認でき、口縁部計測法による比率は5:3:2:6:15程度を示す。瓢(71、126～128)は口縁部下端に鋭い稜をつくり、頸部と胴部を沈線で加飾する。法量は、126が口径17.0cm、127が口径14.8cm、器高約18cmと、数法量が存在するようだ。いずれも正位で焼成され、胎土・焼成具合はｂ群に属する個体が多い。正位焼成の長頸瓶(73・77・78・145等)は胎土・焼成具合からｂ群に属する。脚端径13.6～15.8cmを測り、脚端部は内面が肥厚する。また、3方に台形の透かしを穿ち、2条の鋭く仕上げた稜により屈曲部を加飾する。窯体内から出土した生焼けの平瓶38は、口径6.9cm、器高13.7cmを測り、底部内面に粘土の絞り痕が、天井部内面に閉塞円盤痕がそれぞれ残る。また、胴部下半～底部にカキメ調整を施し、長くのびた口縁部は端部で肥厚・内傾する。

量比が多い横瓶(39～42・79～81・148～153、第107図1266)は、口径10.0～14.7cmを測り、口縁端部は断面方形に近い形状を基本とする。自然釉の熔着状況から主に横位で焼成したことが分かる。また、焚口出土の41の胴部片の1点が、焼き台(置き台)に転用され1号窯焼成部床面から出土した(第22図№20)。

鉢類　丸底で口縁部が直立するA類(35～37・69・154～157)、タタキ技法を用いるB類(163)、厚底のC類(161・162)が確認できる。A類は口径11～14.5cm、器高8～9cmを測る小型品である。うち、灰原出土の157は口縁部が肥厚し、肩部に1条の沈線を施すことから、37とともに古相を示すと考えられる。157は胎土・焼成具合がb群に属し、厚い自然釉から正位無蓋の焼成が復元できる。157以外の口縁部は、先細りながら内湾する。なお、浅い鉢形に近い器形の34は、口縁部が大きく外傾し、現時点ではA類に含める。B類の163は、甕と共通する技法でつくられる。内面を同心円叩き・外面を平行叩きで成形した後、外面にカキメ調整を加え、口縁端部をヘラ状工具で平坦に切りそろえる。厚底の鉢C類は、体部外面を沈線で加飾し、口縁端部は内傾する。胎土・焼成具合はｂ群に属し、161が口径18.0cmを測る。

甕　口径は20cm前後(82・166～169・171・172)、26cm前後(83～85・164・170)、41cm(86)、44～50cm台(87・174～176)に分布する。中型甕は、外面を沈線で加飾し、肥厚する口縁端部を内傾させることを基本とし、外面に波状文を施す84、肩部4ヶ所に環状の把手を付す85、器肉が薄い170、胴部外面に丁寧なカキメ調整を施す169・173等が確認できる。口径40cm以上の大型甕は、口縁部が肥厚し、外面の加飾が多様である。46は縦位の粗いハケ調整後に沈線を、47・174～176は2条1単位の沈線間に乱れた斜行刺突文を、86はカキメ調整後に沈線を、87は2条1単位の沈線間に波状文を、それぞれ施す。

その他　蓋48は口径約11cmを測り、外面を4条の沈線で加飾する。また、灰原を中心に焼き台(置き台)に転用した坏H片、瓶片、甕片や、10～20cm程度の自然石が多く出土した。

3. 1号窯　(第64～67・113図、第6・7・33・34・52表)

器種構成等　1号窯は、床面に1回の補修痕が残る。遺物の大部分は、第15図のとおり窯体内床面か

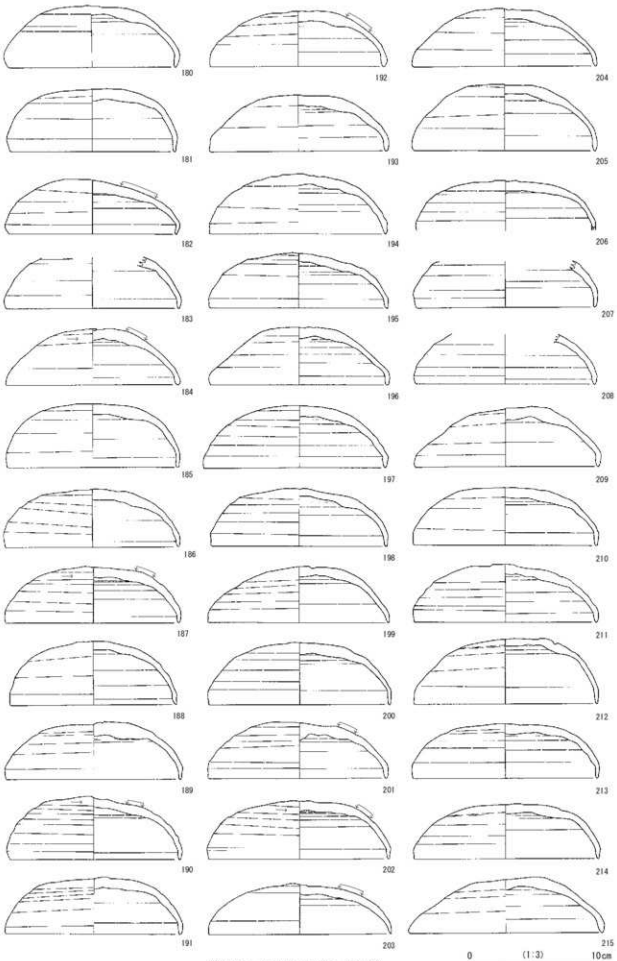
ら出土しており、少量の前庭部出土遺物を含めると整理箱で9箱(破片数1,273点)を数える(第6表)。量比は、口縁部計測法でみれば、焼き歪んだ完形品が多い坏Hが約87%と圧倒的に多く、高坏A、同B、横瓶等の瓶類、甕が各3%前後、壺類はさらに少ない比率を示す。また、破片数計測法でみれば、甕が約47%、坏Hが約40%、瓶類12%の比率となる。破片数計測法による比率は、焼き台(置き台)に転用された甕胴部片と、第66図283・284で代表させた外面に粗いカキメ調整を施す提瓶胴部剥離片がともに多出したことによる。これらから、出土遺物は、最終操業段階で焼き歪み・焼き割れ等の理由で窯内に放置された坏H、高坏、壺・瓶類(定量の提瓶を含む)の小片と、甕胴部片転用焼き台(置き台)で構成されることがわかる。なお、焼き台(置き台)に用いた20cm以下の自然石が出土している。

坏H　第64図180～第66図267を図化しており、基本的に1法量である(第7表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向である。回転ヘラ切りの範囲を狭くするための成形方法は、4号窯と同様である。体下部の指をあてた凹線状のくぼみ痕が蓋189・200、身226・264等で、斜め方向のヘラ状工具の差し込み痕が回転ケズリ痕を図化した個体(蓋182・187、身236等)で、それぞれ明瞭に残る。また、底部(蓋は天井部)外面の仕上げは、回転ヘラ切り時に中心に残る粘土痕をなで消す等、4号窯より丁寧であるが、基本的に回転ヘラ切り痕を雑になで消す程度で未調整に近い。クシ状工具痕を残す個体も定量存在する。底部内面中央の軽い1方向のナデ調整も4号窯と共通する。なお、4号窯でみられた底部内面中央に同心円叩き痕を残す個体は確認できない。焼成状況は、ほとんどの個体で焼き歪み・焼き割れが目立ち、生焼けの個体が定量存在する。一方、焼き台(置き台)に転用した個体は183・189・206等、限定的である。また、蓋201・221・223、身224・237・245・250は堅緻な焼成で外面に緑灰色の自然釉が厚く熔着する個体群であり、蓋184・185・197、身233・240・241・244・246・261は口縁部や立ち上がり周縁が焼成不良に起因して黒色を呈する生焼けの個体群である。自然釉の熔着状況等から復元できる重ね焼きの様相は、4号窯と同様である。

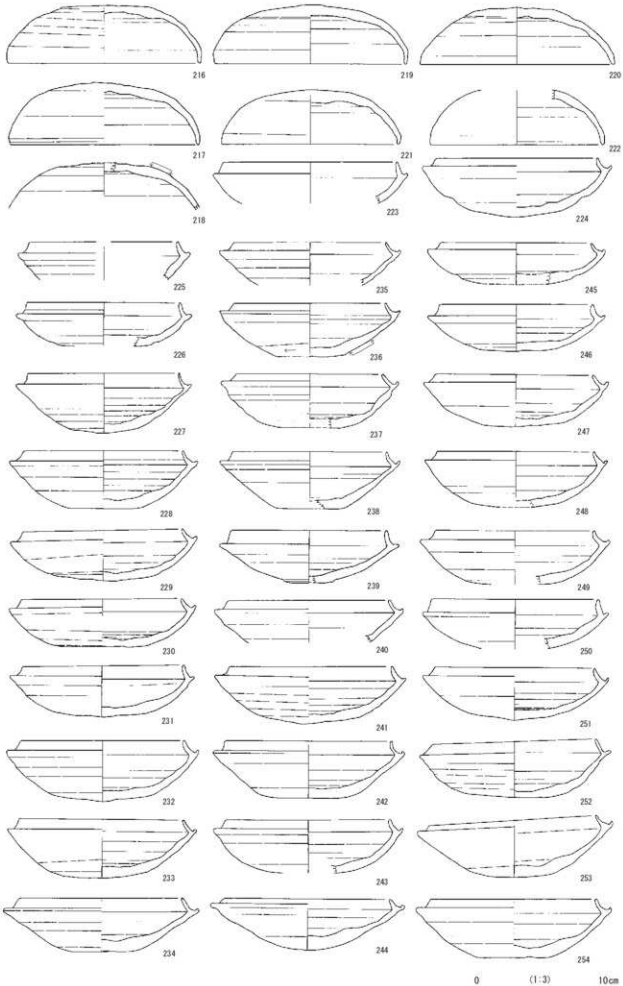
蓋(180～222)は、全体的に器高が高く、比較的狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁部に至り、ほとんど外反しない口縁端部を丸く仕上げる器形を呈する。口縁端部のナデ調整の順序により口縁基部の形状に若干の差異が認められ、口縁基部で明瞭に屈曲して口縁端部が直下におりる形態(181・198等)を主体に、口縁基部の屈曲が弱い形態(184・203等)があり、口縁端部が外反する個体はほとんどない。口縁基部の屈曲が弱い形態は、生焼け品に多い傾向を示す。焼成良好品の法量が口径12.9～14.5cm、器高4.3～5.2cm、生焼け品が口径13.1～15.2cm、器高3.9～5.1cmにそれぞれ分布し(第7表)、焼成時の粘土縮小率の差を反映して、4号窯と同様に口径で約1cmの分布域のずれが生じている。

身(223～267)は、蓋と同様に、比較的狭い底部から丸みをもって立ち上がり、内傾する口縁部が反り立つ個体が主体を占める。体部が直線的に外傾しながら立ち上がる234・253等の器形は、生焼け品の中に客体的に存在する。また、受け部の形態に4号窯と類似した若干の差異が認められる。受け部直下の強い回転ナデ調整により受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態(237・242・254等)と、口縁基部と受け部との境の強い回転ナデ調整により受け部が横または斜め上方向に短くのびる形態(239・241等)があり、前者が大部分を占める。焼成良好品の法量は口径11.6～13.6cm、器高3.7～4.7cmに、生焼け品は口径12.0～14.8cm、器高3.2～4.8cmにそれぞれ分布し、4号窯と同様に粘土縮小率に起因する法量差は顕在化しない。

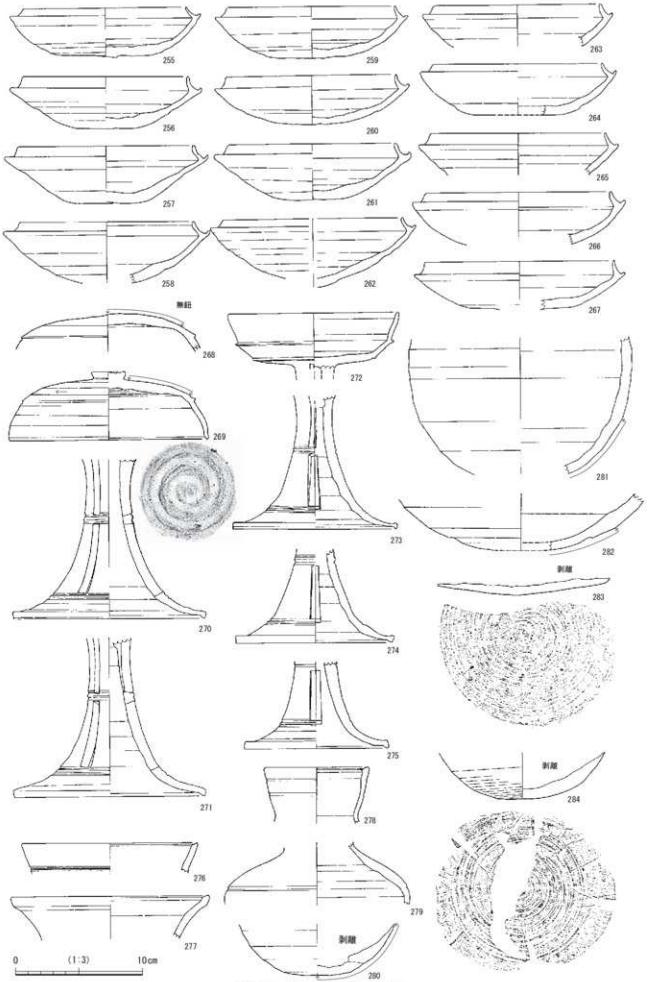
高坏　第66図268～275を図化した。高坏A(有蓋長脚、3方2段透かし)と、高坏B(無蓋長脚、2方2段透かし)が同数程度存在し、いずれも焼成堅緻で自然釉の熔着が目立つ。高坏A蓋は、還元の弱い無鈕蓋(268)と焼成堅緻な鈕付き蓋(269)が出土、いずれも肩部の稜を鋭く仕上げる。269は天井部内面中



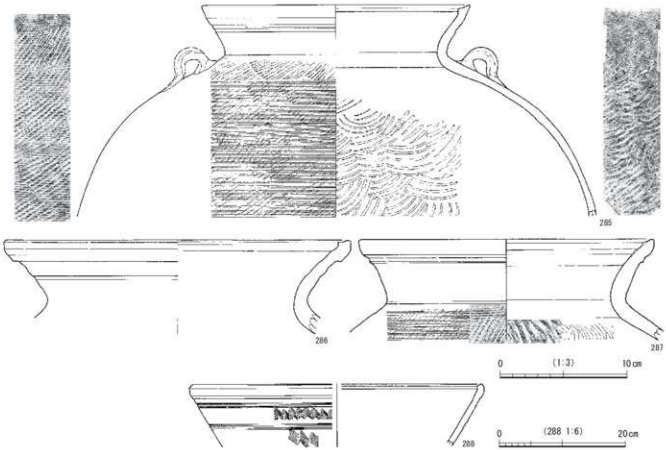
第 64 図　1 号窯出土遺物 1 (S=1/3)



第 65 図　1 号窯出土遺物 2 (S=1/3)



第 66 図　1 号窯出土遺物 3 (S=1/3)



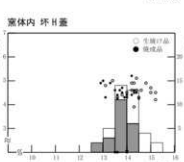
第 67 図　1 号窯出土遺物 4 (S=1/3、1/6)

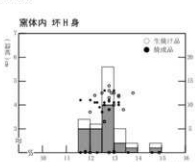
第 6 表　1 号窯出土遺物計測表

	計	坏H		高坏A		高坏B	高坏C・不明	蓋類		鉢類						甕類				壺				その他・不明
		蓋	身	蓋	身			蓋A	その他・不明	椀		鉢	器台	平瓶	横瓶	その他・不明	甕A	甕C	その他・不明	大壺	中壺	小壺	その他・不明	
口縁部計測点（口径値）	2,080	1,080	827	40	6	43	6	2	3	6	6	6	6	6	11	30	6	6	6	2	28	2	6	6
口縁部計測点（補正口径値）	1,253		1,080		40	43	6		2					6	11	30	6	6	6	2	28	2	6	6
比率（%）	100%		86.9%		3.2%	3.4%	-		0.2%					-	0.9%	2.4%	-	-	-	0.4%	2.2%	0.2%	-	-
最大整計測点（点）	1,273	665	230	11	15	17	6	1	1	6	4	89	6	23	7		6	6	6	2	7	2	469	6
最大整計測点（補正点）	1,042		665		15	17	6		2				93	23	7		6	6	6	2	7	2	469	6
比率（%）	100%		38.9%		1.4%	1.4%	-		0.2%				8.9%	2.2%	0.7%		-	-	-	0.2%	0.7%	0.2%	45.0%	

※図版出土遺物なし。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値、また、補正口径値、補正点は有効部種で数値が大きい方を選択した値の数値をいう。

第 7 表　1 号窯実測坏 H 法量分布表





央に同心円叩き痕がかすかに残り、口径15.6cm、器高5.4cmを測る。脚部(270・271)は脚端径約15cmを測り、2条1単位の沈線と透かしで加飾、下段の沈線と脚端部の間はロクロひだが目立つ。透かしは切り幅が狭く、特に上段の透かしは内側で幅数mmと、かろうじて内側に貫通する。高坏Bは2方透かしのみが確認でき、4号窯が3方透かしであることと様相が異なる。口径13.3cm、脚端径11.2～12.8cm、高さ15cm前後を測り、沈線・稜による加飾具合や、透かし幅の狭さは、高坏Aと共通する。焼成時の据え方は、高坏Aが蓋・身をセットとした倒位焼成、高坏Bが正位焼成と、4号窯と同様に厳格に分けられる。

壺・瓶類　小片での出土が大部分を占める。壺は、短頸の276、なで肩を呈する279、底部外面に回転ケズリ調整を施すA類底部片280～282が出土した。瓶類は、口縁端部を断面方形状に肥厚させる横瓶277や、口縁部が直立気味に長くのびる278の他、最終操業段階に属する提瓶胴部剥離片283・284が出土した。提瓶は、前述のとおり胴部剥離片が多出しており、かなりの数の焼成が想定できる。

甕　口縁部片は285～288の4個体の出土にとどまり、うち286・287は焼き台(置き台)転用品である。285は口径21.1cmを測り、肩部2ヶ所に環状の把手をつける。286は口径27.2cmを測り、肥厚した口縁部内面に突帯をもつ。生焼けの287は、口縁端部を286と類似した形状に仕上げ、外面下端に突帯を巡らす。287は、坏Hの184等の個体群と焼成具合が近似し、最終操業段階に属する個体となる。

4．6号窯　(第68～70・114図、第8・9・34・35表)

出土状況　6号窯は床面に2回以上の補修痕が確認できる。その出土遺物は、窯体内出土の1箱を含めて整理箱で13箱(破片数738点)を数え(第8表)、第68図289～320が窯体内焼成室最終操業段階の床面および焚口から、第69図321～第70図360が前庭部から、また同図361～386が灰原から、それぞれ出土した。他窯と位置的に近く、灰原出土品には他窯焼成品が混入する可能性を多分に残す。

器種構成　器種構成は、坏H、高坏、壺・瓶類、鉢類、甕に加え、鋺、大型鉢、有溝把手をもつ甑1点、重ね焼きされた円面硯2点を確認した。小片が多いため、高坏BとD、また壺・瓶類と鋺類身との区分を明瞭にできない個体が定量存在した。量比は、口縁部計測法でみれば、焼き歪み破損した坏Hが約47%と最も多く、鋺類蓋が約20%、瓶類が約12%、壺類と高坏B・Dが各約4%の比率を示す。鋺Gの定着と、壺類に対する瓶類の優越がみてとれる。また、破片数計測法でみれば、甕が約53%、坏Hが約21%、瓶類約9%、高坏B・Dと鋺類が各約4%、高坏Aが約3%の比率を示す。

坏H　第68図289～302、第69図321～333、第70図361～372を図化した。基本的に1法量であり(第9表)、身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行う。回転ヘラ切りの範囲を狭くするための身底部(蓋は天井部)の成形技法は、1・4号窯と同様であるが、底部～体部下縁にやや丁寧な回転ナデ調整を加えるため、斜め方向のヘラ状工具の明瞭な差し込み痕は身296・369で確認できる程度と少ない。また、底部外面中心に残る回転ヘラ切り時の粘土痕跡は、ほぼなで消しており、その後にクシ状工具を用いたナデ調整を多用する。外面にクシ状工具痕が残る個体は、蓋289・291・323～325、身296・301・332・368がある。底部内面中央の軽いナデ調整は1・4号窯と共通する。焼成状況は、ほとんどの個体で焼き歪み・焼き割れが目立ち、焼き台(置き台)に転用した個体が定量存在する。また、堅緻な焼成で外面に緑灰色の自然釉が厚く熔着する個体が多く、自然釉の熔着状況等から復元できる重ね焼きの様相は蓋・身を1セットとして倒位で焼成した場合が比較的多い印象を受ける。一方、生焼け品は身302、蓋326・372等がある程度で、限定的な存在である。

蓋(289～294、321～325、361～363)は、全体的に狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁部に至り、口縁端部を丸く仕上げる器形を基本とする。1・4号窯で主体となった口縁基部で明瞭な屈曲する器形は325・361等に限られる。法量は口径12.3～13.8cm、14.7cm、器高3.1～4.6cmを測り、1・4号窯

と比して明らかに口径の縮小化が進む。なお、焼き歪みや焼き台（置き台）転用により290・322は扁平な器形を呈する。

身（295～302、326～333、364～372）は、蓋と同様に狭い底部から丸みをもって体部が立ち上がる。内傾する口縁部は、そのまま短くのびる個体が増加し、口縁端部が反り立つ個体は比率を減じる。体部が直線的に外傾しながら立ち上がる器形は、368が確認できる程度である。また、受け部の形態は、1・4号窯でみられた、受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態（327・365・366・371等）、受け部が横方向に短くのびる形態（329・370・372等）、体下部から連続する傾きを保持したまま斜め上方向に短くのびる形態（298・330・367等）が確認でき、前2者は灰原出土品に多い傾向を示す。*身*の法量は、口径10.6～13.2cm、器高3.5～4.2cm、4.8cmに分布し、蓋と連動して口径が縮小化する。

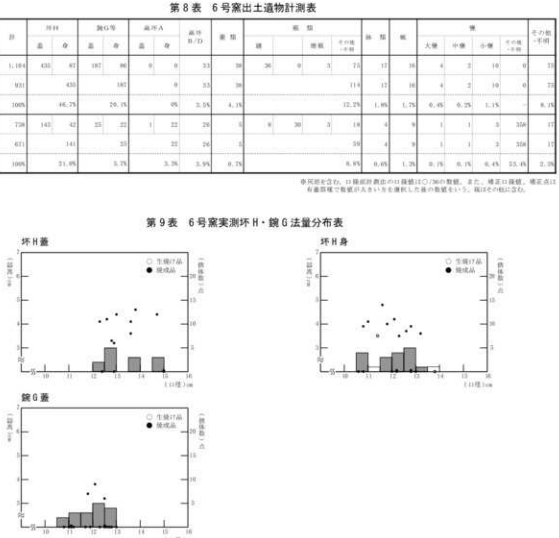
鋺　金属器的器種であり、蓋（窯体内303～310、前庭部334～339、灰原374～378）は定量確認できるが、焼き歪んだ小片が多い*身*（窯体内311～313、前庭部340～342・348～351、灰原382）の様相には不明な部分を残す。蓋は、天井部からなだらかに口縁部に至り、断面三角形状の返しが口縁端部より下の高さまでしっかりと突出、やや崩れた乳頭形または擬宝珠形の小振りな鈕を付す器形を基本とする[3]。また、自然釉の熔着でみえない個体も多いが、天井部外面に回転ケズリ調整を施す個体が主体で、一部カキメ調整を施す個体（305・307・310）もある。細部では、形が崩れた鈕を付すもの（336）、返しが口縁端部より下に突出しないもの（305・375）、扁平な器形を呈するもの（376）が確認できる。法量は、口径

第８表　６号窯出土遺物計測表

	計	坏H		鋺G等		蓋坏A		蓋坏B/D	器類	瓶類					鉢類	甕類	壺					その他・不明
		蓋	身	蓋	身	蓋	身			鋺		燈明	その他・不明				大壺	中壺	小壺	その他・不明		
口縁部計測出（口径値）	1,184	435	87	187	96	9	0	33	38	36	9	3	73		17	16	4	2	10	0	73	
口縁部計測出（補正口径値）	921		435		187		9	33	38				114		17	16	4	2	10	0	73	
比率（%）	100%		46.7%		20.1%		0%	3.5%	4.1%				12.2%		1.8%	1.7%	0.4%	0.2%	1.1%		8.1%	
破片数計測出（点）	759	143	42	25	22	1	22	29	5	6	30	3	18		4	9	1	1	3	350	17	
破片数計測出（補正点）	621		141		25		22	24	5				59		4	9	1	1	3	350	17	
比率（%）	100%		21.6%		3.7%		3.3%	3.5%	0.7%				8.8%		0.6%	1.3%	0.1%	0.1%	0.4%	53.4%	2.3%	

※灰原を含む。口縁部計測出の口径値は口／360で数値、また、補正口径値、補正点は有効部位で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。他はその他に含む。

第９表　６号窯実測坏Ｈ・鋺Ｇ法量分布表



10.8～13.0cm、返し径7.5～10.0cm、器高2.3～3.8cmと、比較的幅広い分布を示す。全形のわかる305が口径12.1cm、器高3.8cmを、307が口径12.5cm、器高3.2cmを、376が口径12.5cm、器高2.3cmをそれぞれ測る。身とセットで正位焼成され、外面に緑灰色の自然釉が厚く熔着する個体が多い。

身の様相は判然としないが、いずれも精良な胎土で堅緻に焼き上がり、外面に自然釉や降灰が熔着した個体が多い。大きくは、深身で筒形器形(第103図1153類似)と、坏G精製品のような坏形器形(鉢G、11号窯: 第71図410)を想定しており、前者の器形は脚が付す個体も存在する。深身の筒形器形として312・313・340・341、その脚として348・382を、坏形器形(鉢G)として349～351をそれぞれ考える。筒形器形では、340が内湾する体部外面をカキメ調整と1条の沈線で加飾し、復元口径約16cmを測る。また、312・341の体部は大きく内湾し、底部付近は焼き歪みが特に顕著である。312で復元口径約15cm、341で同12cmを測る。313の体部は直線的にのび、外面に沈線を施す。筒形器形の脚と考えた348・382は、蹠口縁部と類似しており、屈曲部を稜で加飾、端部を平坦に仕上げる。坏形器形(鉢G)は、薄手で口縁端部は小さく内傾する特徴をもち、復元口径13～14cmを測る。現時点では、蓋と身の法量差が大きいことから可能性を指摘するにとどめ、蓋でみられた多様性の整理を含めて類例の増加を待ちたい。

高坏　前庭部出土の第69図345～347、灰原出土の第70図373・379を図化した。高坏A(有蓋長脚、脚部3方2段透かし)と、高坏B(無蓋長脚、脚部2方2段透かし)に加え、高坏Bが縮小化した器形をもつ高坏Dが定量確認でき、破片数計測法では高坏Aと高坏B・Dが同程度の比率を示す。他窯焼成品を含む可能性を残す灰原出土の高坏A蓋379は、無鍵で天井部外面にカキメ調整を施し、肩部の稜を鋭く仕上げる。口径14.4cm、器高3.9cmを測り、正位で焼成したと考えられる。扁平な高坏A身373は口径13.7cmを、脚345は脚端径15.6cmをそれぞれ測る。高坏Bの346は口径12.8cmを測り、坏部外面を2段の鋭い稜で、脚部をカキメ調整で加飾する。正位で焼成しており、坏部内面全面に降灰が認められる。高坏D脚347は脚端径11.0cmを測り、外面の加飾方法は高坏Bに準じる。

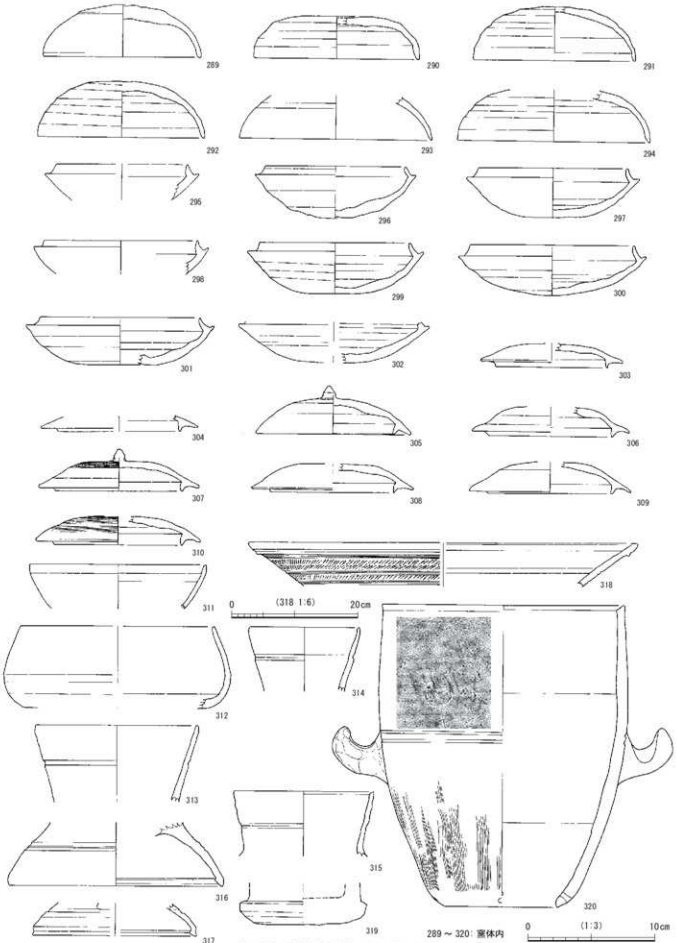
壷・瓶類　壷は小片の出土にとどまる。壷A類の315は口径13.5cmを、短頸の小型壷356は口径5.3cmを測る。直線的にのびる瓶とした313は、前述のとおり鉢の可能性をもつ。瓶類は、蹠、長頸瓶、提瓶が確認できる他、314・352の口縁部片が出土した。蹠380・381は口径12cm前後を測り、直線的に外傾する口縁部は端部で先細る。348・382は前述のとおり、鉢脚部の可能性をもつ。長頸瓶は、無台・丸底形の353と、透かしと沈線で加飾する有台脚部片316・354・355が出土した。提瓶383・384は胴部にカキメ調整を施す。

鉢類　厚底の鉢C類(385・386)の他、大型の357や厚手の口縁部片342等が出土した。385・386は焼成時に体部が剥離し、386の底部外面には静止ケズリ痕が残る。大型・深身の357は、底部を含めて外面にカキメ調整を施し、内面には自然釉が熔着する。342は生焼けである。

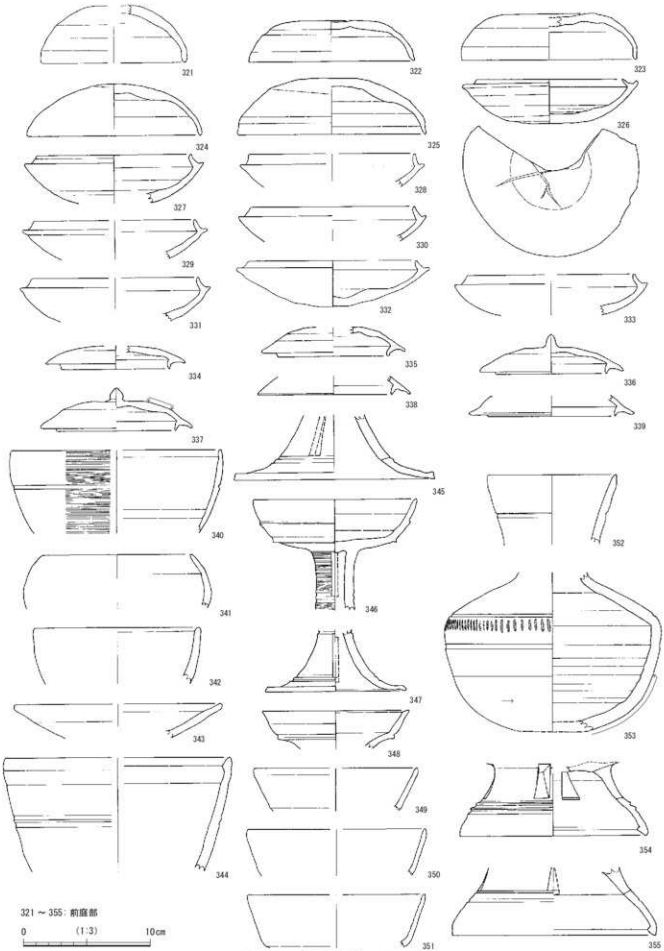
甑　窯体内床面から320が出土した。320は口径19.0cm、器高23.0cm、底径9.0cmを測り、内面を横方向のナデ調整、外面下半をハケ調整、外面上半をカキメ調整で仕上げる。また、2ヶ所の把手はヘラ状工具で中央に溝を刻む他、胴部下端4ヶ所に円孔を穿つ。なお、未実測だが4G撹乱層から、生焼けで同様の溝をもつ把手片が出土している(図版第37)。

甕　口縁部片のうち318、358～360を図化した。窯体内床面出土の大型甕318は復元口径約60cmを測り、外面を突帯、沈線、斜行刺突文で加飾する。焼き台(置き台)に転用されるため、図化した径・傾きに不安を残す。前庭部から出土した中型甕358は、口縁部が上方に肥厚する。また359・360は、肥厚した口縁端部下端に鋭い突帯を巡らし、同一個体の可能性をもつ。なお、焼き台(置き台)に転用した甕胴部片は、比較的少ない。

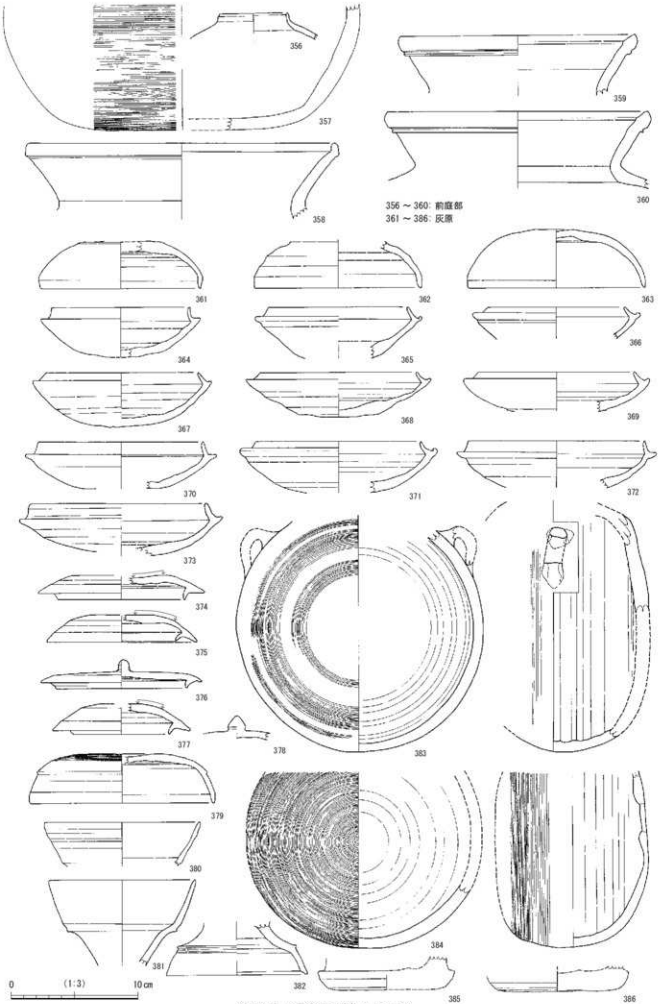
円面硯　焼成室最終床面から、第112図1276の重ね焼きした円面硯片が出土しており、後述する。



第68図　6号窯出土遺物1（S=1/3、1/6）



第69図　6号窯出土遺物2（S=1/3）



第 70 図　6 号窯出土遺物 3 (S=1/3)

5．11号窯　(第71～75・114・115図、第10～12・36～38・53表)

出土状況等　11号窯は、窯跡が密集する丘陵斜面下位に位置し、床面に3回以上の補修痕が残る。窯体内、前庭部から出土した遺物は多く、整理箱で24箱(2,207点)を数える。ただし、窯体内出土遺物のうち窯体または煙道部の流込土から出土した遺物は、本窯廃絶後に丘陵斜面上方から流れ込んだ他窯(7-2号窯か)の甕胴部片を中心とした小破片であり、焼成室床面内・最終床面・天井崩落土から出土した本窯操業段階の遺物は比較的少ない(第10表)。以下では出土箇所ごとに説明を行い、第11表に参考として陶棺を除いた破片数の計測結果を示した。

焼成室床面内　最終操業段階の床面内から出土し、いずれも小破片である。388・391・393は坏H蓋である。388は口径12.6cmを測り、口縁基部で明瞭に屈曲する。391は口径13.4cmを測り、肩部に回転ナデ調整を施す。生焼けの393は口縁基部で明瞭に屈曲する。坏H身399は、内面の返しと受け部の境で明瞭に屈曲する。完形の精製品である埦G蓋402は、口径11.5cm、器高3.2cmを測り、祭祀的理由で床面に埋設された可能性をもつ。小振りな鉢を含めて、外面全体に灰色の降灰が厚く熔着する。高坏A脚422は脚端径14.5cmを測る。高坏D脚426は2方透かしと考えられる。鹿439は口径10.4cmを測る。有台の壷底部片446は生焼けである。台部片447は生焼けに近く、成形にロクロを用いない。448は鉢A類の可能性が高い。

第74図460・461に代表される大型の用途不明品は、焼成室床面内・最終床面を中心に破片が出土しており、同窯最終操業段階以前の焼成と考えられる。接合したいずれの個体も、破片間の色調差が大きく、焼成の失敗のため破片化しており、中には焼き台(置き台)に転用した破片も存在する。成形方法は、須恵器技法を基本とする。まず、頂部(透かし窓の位置より上の部分)以外の体部を、倒位(完成品の上方向から下方向)で円筒形に成形する。この成形は、甕・鉢と同様に粘土紐を積み上げ、内面に同心円叩き、外面に平行叩きを用いて叩き締めながら、完成品の底の高さとなるまでつくったと考えられる。その後、断面略方形を呈する完成品の器形となるまで、板状工具によるナデや指ナデを用いて大きく器壁を変形し、肥厚する両端部をヘラ状工具や指ナデで粗く整える。最後に、体部を反転して据え置き、外側から幅約12cmの粘土板を透かし窓ができるよう弧状に貼り付け、頂部とする。また、体部2ヶ所に基部径約4cmの把手痕を残すが、形状は不明である。法量は、460が底辺35～37cm、推定高さ約60cm、461が推定透かし窓高約4cmを測る。なお、未実測だが、類似の製品と考えられる破片群が約60点出土、中には面取りをおこなった底端部内面を粗く指ナデ整形する破片や、底端部を丸く仕上げる破片(外面ハケ調整)がある(図版第41)。細部の調整方法の異なる類似製品を一定数焼成したものと考えられる。

焼成室床面　最終操業段階と考えられる遺物群で、6点を図化した。417は、高坏Bの系譜をもつ高坏Dで、内湾気味の坏部下半に鋭い稜を巡らせる。高坏Bの431は倒位で焼成され、上段の透かしは内面まで貫通している。壷A類444は丁寧な回転ケズリ調整とカキメ調整を施し、外面は黒化する。甕457は環状の把手痕が残る。大型の用途不明品461は前述のとおりであり、他に生焼けの甕片等が出土した。

焼成室天井崩落土　図化した23点中11点が生焼けであり、最終操業段階の遺物を多く含むものと考えられる。生焼け品は、坏H蓋390・392・394・395、高坏Aの425、高坏Bの418・424・429、長頸瓶脚437、壷類440、壷A類445である。坏H蓋は、肩部にナデ調整を加えることで口縁基部の屈曲はほとんど目立たず、丸みをもった器形を呈する。口径は13.4～14.5cmに分布し、395で口径14.5cm、器高4.5cmを測る。坏H身397・400は、口縁部の立ち上がりが短く、受け部は斜め上方にのびる。鋺G身と考えられる410は口径11.8cm、器高4.0cmを測り、底部内面全体にナデ調整を、外面に回転ケズリ調整をそれぞ

れ加える。414・416は正位無蓋焼成の高坏Dで、口径12cm弱を測る。416の稜は、高坏Bの418とともに1条の可能性が高い。生焼けの418は口径14.5cmを測る。高坏脚423～425・427～429のうち、424は3方2段透かし、427・429は2方2段透かしである。脚端径は13.3～15.8cmに分布し、427・428は倒位に焼成される。生焼けの長頸瓶437は、長くのびる脚を3ヶ所の三角形の透かしと1条の沈線で加飾する。壺類口縁部と考えられる440は口径約16cmを測り、生焼けである。生焼けの提瓶441の残存する1ヶ所の環状把手の位置は、胴部閉塞円盤上にある。鉢A類449は口径17.6cmを測り、肩部が明瞭に屈曲する。

窯体流込土　出土遺物は多く、前述のとおり他窯焼成品と考えられる。坏H、坏G、盤類、高坏、壺・瓶類、甕胴部の小片があり、焼き台(置き台)転用を含む甕胴部片が大部分を占める。ロクロひだが目立つ坏H蓋389は、天井部外面に板状工具を用いて1方向の粗いナデ調整を密に施すため平坦な器形を呈する。坏H身401は口径12.8cm、器高3.3cmを測る。坏G蓋403～405は口径10cm前後を測る。坏G身407・409の体部は若干外傾する。焼き歪んだ盤411は口径約21cm、器高3.4cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。底部内面は同心円叩きの後に粗いナデ調整を、底部外面は回転ケズリ調整をそれぞれ加える。薄手の盤412は、正位焼成で大きく焼き歪み、端部が肥厚する脚を外展して付す。口径約27cm、器高約10cmに復元でき、内湾する体部外面をカキメ調整と3条の沈線で丁寧に加飾する。他に未図化だが大きく焼き歪んだ2個体分の破片が出土した。高坏A蓋413は天井部外面にカキメ調整を施す。生焼けの高坏B坏部419・420は口径15cm強を測り、稜を段状の起伏で表現する。421は高坏Aである。長頸瓶433は口径8.2cmを測り、生焼けの胴部片436は中程をカキメ調整の後に刺突文で加飾する。壺A類434は口径11.4cmを測り、頸部が締まった器形を呈する。球胴形の壺443は口縁部が断面三角形状に肥厚し、底部外面に平行叩きを用いて丸底に仕上げる。生焼けに近い底部は焼き割れが顕著である。倒位焼成の鉢C類450は、底部を内側から穿孔し、体部中程に環状の把手痕が残る。甕453は口径14.4cmを、454・455は口径25cm前後を測り、大型の甕459は口縁下部外面を突帯と沈線、粗い波状文で加飾する。なお、流込土からは、後述する平瓦様製品1271、陶棺1274、円面硯1276の破片の一部や、土馬1279が出土した。

窯体その他　焼成室から大型・厚手の鉢である第74図462・463が出土し、いずれも生焼けで同胎土を用いる。462が口径54.4cm、器高27cm以上、463が口径約57cm、器高22cm以上を測り、胴部を叩き締めながら成形した後、口縁部を板状工具または指ナデで粗く仕上げる。最終操業段階に属すると考えられる。

煙道流込土　窯体流込土出土遺物と同様の性格をもつ遺物群である。坏G蓋404、底部がやや台状を呈する坏G身408、生焼けの瓶類435、台坏鉢と考えられる438、大甕458に加え、平瓦様製品1269の破片の一部が出土した。438の体部は焼き割れ、1条の沈線で加飾した台部を外反して貼り付ける。大甕458は口径49cmを測り、加飾方法は459と類似する。

前庭部　坏G蓋406は口径10.7cm、器高2.7cmを測り、擬宝珠形の鈕は中心をずれる。高坏Dの415は口径12.4cmを測り、焼き台(置き台)に転用する。430は2方2段透かしを穿つ高坏Bで、上段にカキメ調整を施す。甕451は、内傾気味の口縁部に窯土が熔着する。坏H蓋である第75図464・465はナデ調整により丸みをもった器形に仕上げる。坏H身467～474は偏平な器形を呈する。467～469・472・474は生焼けであり、468・470の底部外面にはクシ状工具痕が残る。鉢G蓋475は天井部外面にカキメ調整を施し、476は焼き台(置き台)に転用される。鉢G身478は口径約11cmを測り、正位無蓋で焼成する。無鈕の高坏A蓋466は、天井部内面中央の同心円叩きをナデ調整で消している。高坏A身479は焼き歪みが著しい。高坏Bの480・481は同胎土である。高坏Aの482は倒位で、484は正位で焼成する。高坏C脚485・486は脚端径11cm弱を測る。蹴487の口縁部は大きく外反する。厚底の鉢C類448は倒位で焼成され、焼き歪みが著しい。底部外面に工具の接触痕が残る。生焼けの小型瓶492は、底部外面に手持ちケズリ調整を加える。493は、調査で唯一出土した土錘であり、両端部は鋭利な切り口痕を残す。中型甕494・495は肥

厚する口縁部下端に突帯を巡らすのに対して、496・497は口縁端部を平坦に仕上げ、外面を1条の沈線で加飾する。生焼けの大型甕498は口径47.2cmを測り、外面をカキメ調整の後に沈線と波状文で加飾する。

第10表　11号窯実測遺物出土箇所一覧表

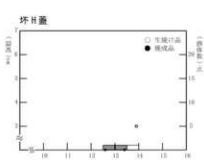
出土箇所	遺物番号
焼成室 床面内	388、391、393、399、402、422、426、439、446～448、452、460(用途不明品)
焼成室 最終床面	417、431、444、456、457、461
焼成室 天井崩落土	387、390、392、394、395、397、400、410、414、416、418、423～425、427～429、437、440、441、445、449、1312
窯体 流込土	389、396、398、401、403、405、407、409、411～413、419～421、433、434、436、442、443、450、453～455、459、 1271(平瓦様製品片)、1274(陶棺片)、1276(円面硯)、1279(土馬)
窯体 その他	432、462、463
煙道 流込土	404、408、435、438、458、1269(平瓦様製品片)
前庭部	406、415、430、451、464～498、1309～11、1313～15、1338

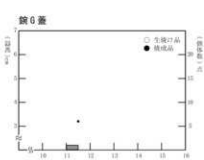
第11表　11号窯出土遺物計測表

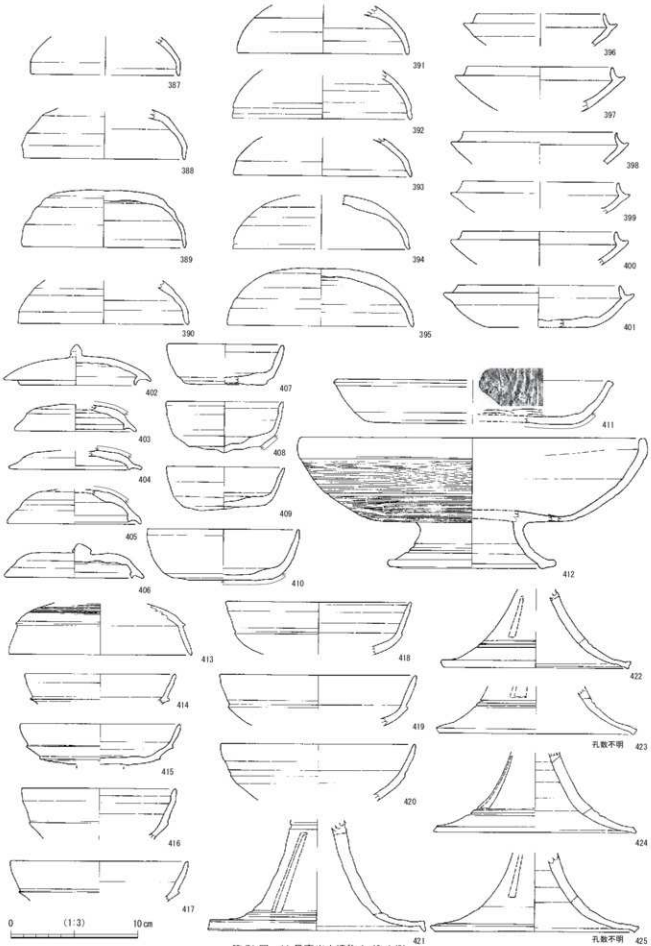
	計	坏H		鍔G		坏G		高坏A		高坏B～D	壺類	甕類	鉢類	鉢類	蓋			その他・不明
		蓋	身	蓋	身	蓋	身	蓋	身						大蓋	中蓋	小蓋	その他・不明
口縁部計測品(口縁部)	1,283	322	153	50	3	74	48	10	49	133	23	38	52	67	117	30	19	2	99
口縁部計測品	1,063	322		50		74		49		133	23	38	52	67	117	30	19	2	99
比率(%)	100%	30.3%		4.7%		6.9%		4.5%		12.5%	2.2%	3.6%	4.9%	6.3%	11.0%	2.8%	1.8%	0.2%	9.3%
総計数計測品(点)	2,207	149	102	6	1	7	13	7	44	118	20	27	134	22	194	20	4	1,219	129
総計数計測品(補正点)	2,090	149		6		13		44		118	20	27	134	22	194	20	4	1,219	129
比率(%)	100%	6.7%		0.3%		0.6%		2.1%		5.6%	1.0%	1.3%	6.4%	1.1%	9.3%	1.0%	0.2%	58.3%	6.2%

※民間出土遺物なし。流込土を含む数値。口縁部計測品の口縁部は口/36の数値。また、補正は不足数値で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

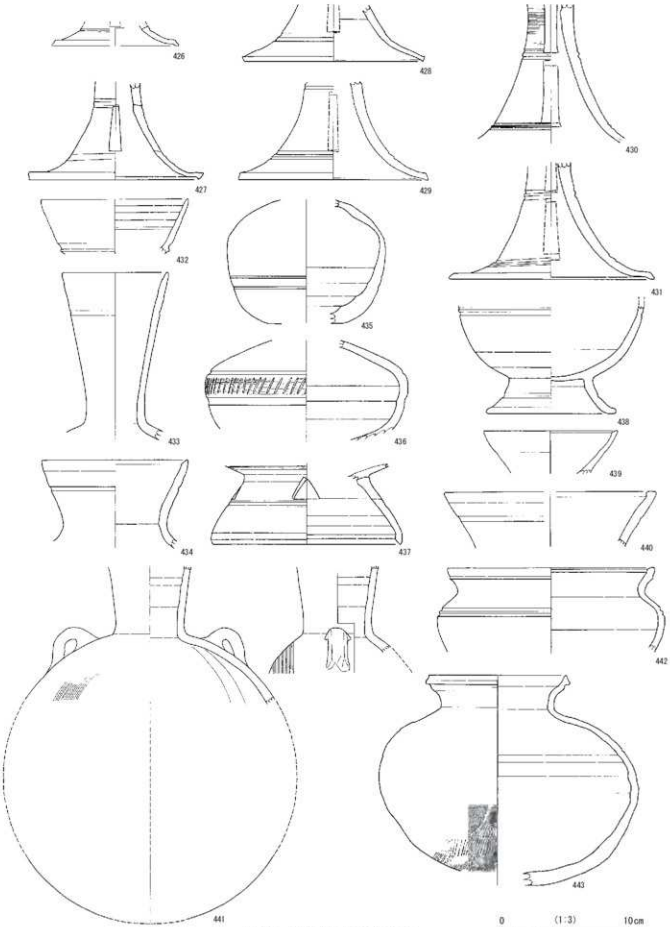
第12表　11号窯実測坏H・鍔G法量分布表



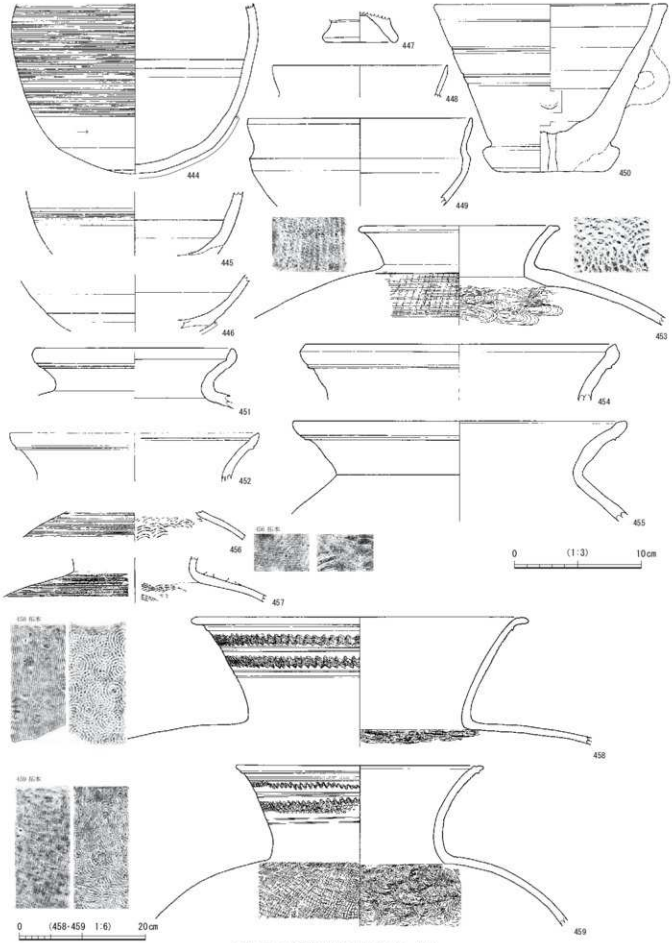




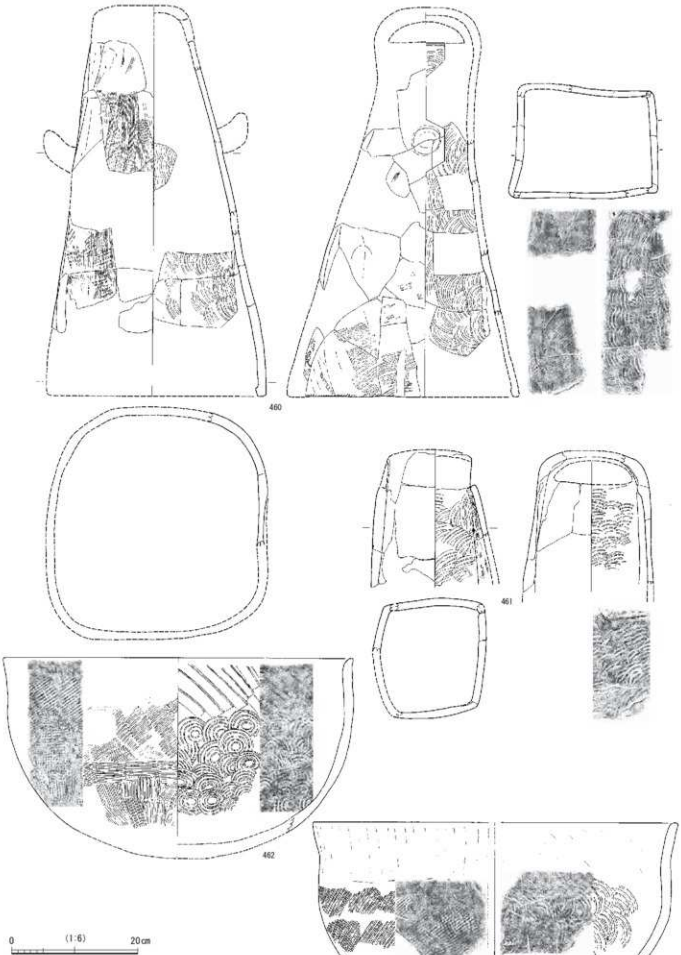
第 71 図　11 号窯出土遺物 1 (S=1/3)



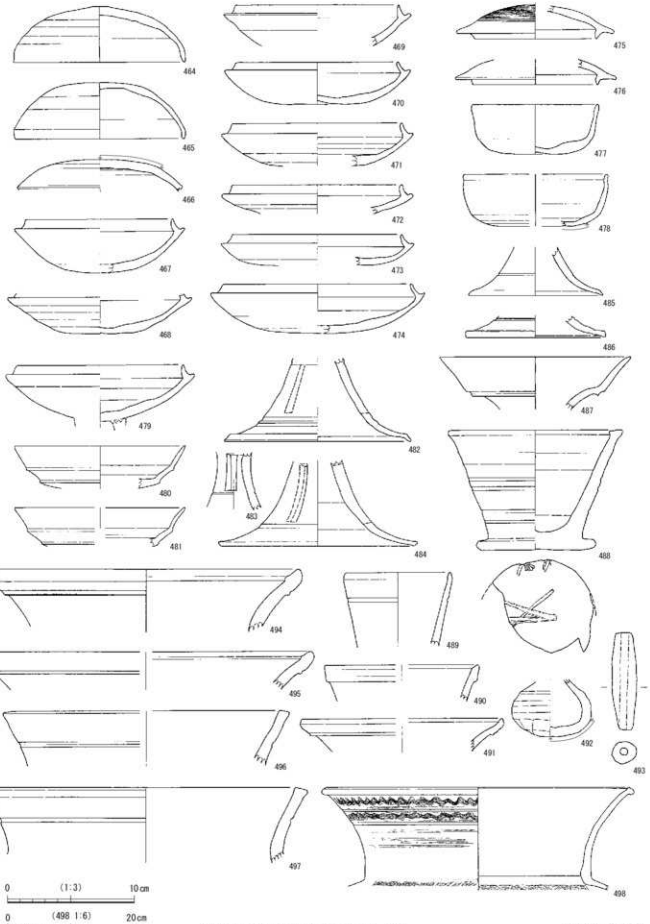
第 72 図　11 号窯出土遺物 2 (S=1/3)



第 73 図　11 号窯出土遺物 3 (S=1/3、1/6)



第 74 図　11 号窯出土遺物 4 (S=1/6)



第 75 図　11 号窯出土遺物 5（S=1/3、1/6）

464～498：前庭部

6．7－1号窯　（第76･77･108･114図、第13･14･38･39･52･53表）

出土状況等　7-1号窯は、窯跡が密集する丘陵斜面東側上位に位置し、床面に1回の補修痕が残る。遺物は、窯体内弁底状ピットと前庭部から多くが出土しており、灰原を除いて整理箱で7箱（破片数646点）を数える（第13表）。窯体内では、最終操業段階の床面内から499･501･511･513･524･527･528･533･538･543･547･1317が、床面上から1267･1316が、また焼成室流込土から500･506･514･529･530･541･542･546が、煙道流込土から558･559･1286･1287･1289がそれぞれ出土し、後2者は他窯焼成品の可能性が高い。

器種構成　流込土を含めて、坏H、鉢G、坏G、高坏A･C･D、鉢C類、壺・瓶類、甕の他、大型坏とした523、波状文で加飾する鉢とした526～528、鉢類身と考えた532、土馬片等が少数確認できる。量比は、口縁部計測法で、焼き歪みや焼き台（置き台）転用品を含む坏Hが約41%、坏Gが約19%、横瓶等の瓶類が約18%、高坏が約8%となり、少数の鉢G、坏Gを加えると食膳具が全体の約71%の比率を示す。また、破片数計測法では、焼き台（置き台）転用を主体とした甕が約49%、坏Hが約18%、瓶類が約15%となり、総点数が比較的少ないことから、完形に近い横瓶538の影響を受けた比率と示す。

坏H　第76図499～522･536･537、第77図548～550を図化した。基本的に1法量であり（第14表）、身底部（蓋は天井部）の切り離しを回転ヘラ切りで行う。回転ヘラ切りの範囲を狭くするための身底部（蓋は天井部）の成形技法は、6号窯と同様で、底部～体部下縁外面にやや丁寧な回転ナデ調整を加えるため、斜め方向のヘラ状工具の明瞭な差し込み痕はほとんど確認できない。また、底部外面中心に残る回転ヘラ切り時の粘土痕跡はクシ状工具を用いたナデ調整を多用して、ほぼ消される。底部外面を粗い回転ナデ調整にとどめ、クシ状工具痕が確認できない個体は、蓋506（流入土）･508･510･537、身522がある程度となる。底部内面中央の軽い1方向のナデ調整は6号窯と共通し、ほぼすべての個体で確認できる。焼成状況は、ほとんどの個体で焼き歪み・焼き割れが目立ち、生焼け品は蓋499･503･504、身519･521等、定量存在する。

また、猿投系と考えられる器形が2点確認できる。いずれも生焼けで、胎土は他焼成品と類似しており、搬入品とは考えにくい。偏平な蓋503は口径13.4cm、器高3.2cmを測り、内面は磨滅する。平坦な天井部外面に丁寧な回転ナデ調整を施し、肩部に稜をつくる。深身の身512は口径9.4cm、器高3.9cmを測る。蓋と同様に丁寧な回転ケズリ調整を施し、受け部直下に稜状の起伏や長くのびる口縁部に特徴をもつ。また、前庭部出土の身548も深身の器形を呈しており、影響を受けた器形と考えられる。

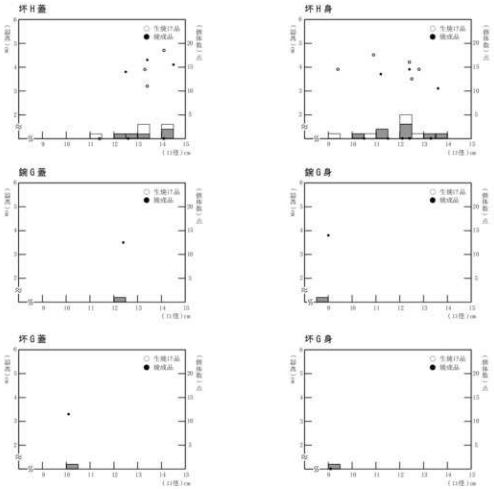
蓋は、最終操業段階の床面内から499･501･511が、床面・天井崩落土から502～505･507～510が、流込土から500･506が出土した。全体的に偏平で、狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁部に至り、口縁端部を丸く仕上げる器形を呈する。焼き歪んだ507･508は、より扁平となる。1･4号窯で主体となった口縁基部で明瞭な屈曲する形態は504･505･509等に限られる。猿投系を除く法量は、口径12.5～14.5cm、器高2.8～4.7cmを測り、ばらつきをみせながらも1･4号窯と比して明らかに口径の縮小化が進む。身は、513が最終操業段階の床面内から、512･515～522が床面・天井崩落土から、514が流込土から出土、513･514は焼き台（置き台）に転用した小片である。狭い底部から丸みをもって立ち上がる扁平な器形が多く、体部が直線的に外傾する器形は521が確認できる。。口縁部は内傾しながら短く仕上げる個体が増加し、口縁端部が反り立つ個体は比率を減じる。また、受け部の細部形態は、1･4･6号窯でみられた受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態はなく、受け部が短く横方向にのびる形態（513･522等）より、体下部から連続する傾きを保持したまま斜め上方向にのびる形態（517･519･549等）が主体となる。身の法量は、口径10.9～13.6cm、器高3.1～4.5cmに分布し、蓋と連動して縮小

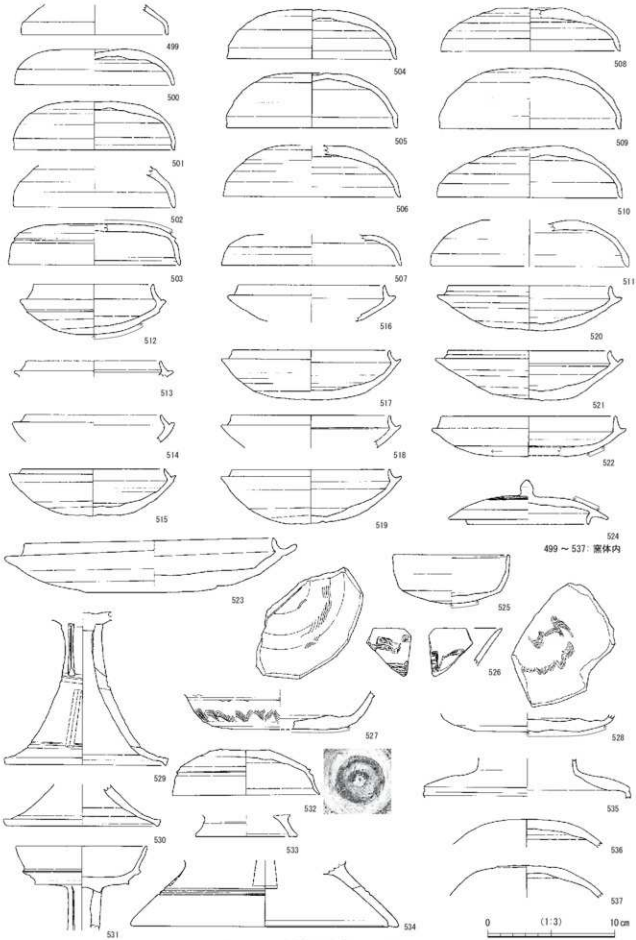
第 13 表　7-1 号窯出土遺物計測表

	計	坏H		鉢G		坏G		高坏A		高坏C	高坏D	壺 類	甕類	鉢 類	甕				その他一括
		蓋	身	蓋	身	蓋	身	蓋	身						大型	中型	小型	その他（不明）	
口縁部計測法（口縁部）	781	201	223	12	19	22	103	5	17	15	10	8	98	16	0	3	0	3	26
口縁部計測法（補正口縁部）	541		223		19		103		17	15	10	8	98	16	0	3	0	3	26
出率（%）	100%		41.2%		3.5%		19.0%		3.1%	2.8%	1.8%	1.5%	18.1%	3.0%	0%	0.6%	0%	0.6%	4.8%
底径数計測法（点）	646	106	68	1	5	5	18	3	6	8	17	10	88	8	0	1	0	286	26
底径数計測法（補正点）	584		106		5		18		6	8	32	10	88	8	0	1	0	286	26
出率（%）	100%		18.2%		0.9%		3.1%		1.0%	1.4%	5.5%	1.7%	15.1%	1.4%	0%	0.2%	0%	49.0%	3.4%

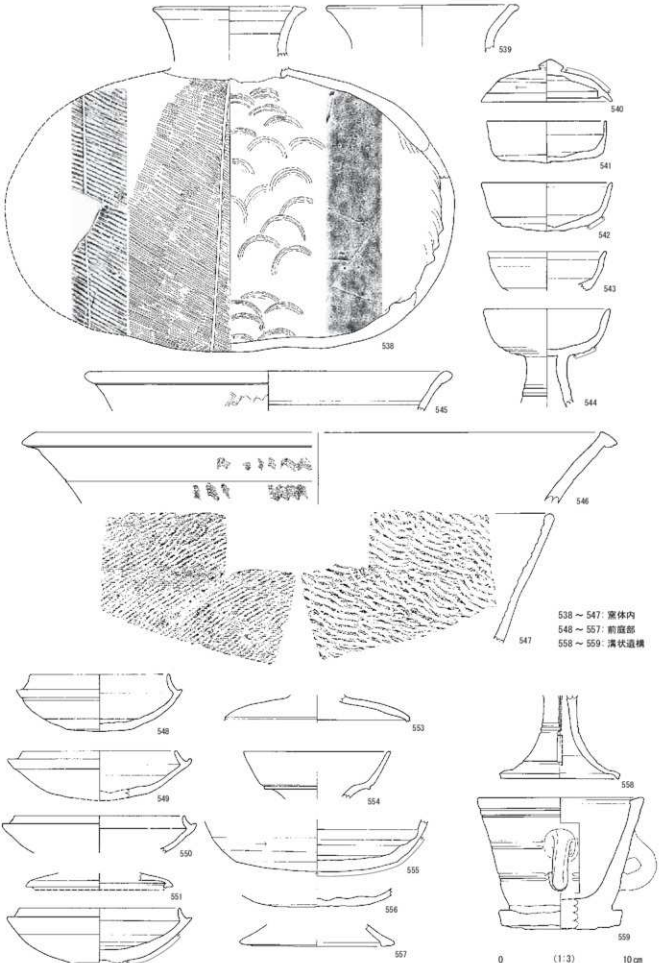
※尖底を除き、底径を含む数値。口縁部計測法の口縁部は口/360の数値。また、補正口縁部、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 14 表　7-1 号窯実測坏 H 等法量分布表





第76図　7-1号窯出土遺物1（S=1/3）



第77図　7-1号窯出土遺物2（S=1/3）

化する。

鉢G　最終段階の床面内から蓋524が、天井崩落土から身525が出土した。焼き歪んだ524は口径12.4cm、器高3.5cmを測り、天井部外面に丁寧なカキメ調整を施す。薄手の525は口径9.0cm、器高3.8cmを測り、突出気味の底部に丁寧な回転ケズリ調整を施す。

坏G　最終段階の床面内から身543が、床面から蓋540が、流込土から身541・542が出土した。生焼けに近い蓋540は口径10.1cm、器高3.3cmを測り、天井部外面に粗目の回転ケズリ調整を施す。541の体部は直立するのに対し、542の体部は外傾気味である。また542には、回転ヘラ切り時の斜め方向のヘラ状工具の差し込み痕が明瞭に残る。541が口径9.3cm、器高3.3cm、542が口径10.1cm、器高3.8cmを測る。

高坏　高坏Aは法量の縮小化が進み、身552が口径12.6cmを、3方2段透かしと倒位焼成を保持する脚529が脚端径12.5cmをそれぞれ測る。高坏Bの系譜をもつ531・558も同様であり、高坏Dとした法量である口径約10cmに近づく。ただし、坏部外面の2段の鋭い稜と脚部の透かしによる加飾はしっかりと保持される。坏形の身をもつ高坏Cは544、第108図1267が出土し、544で口径9.8cmを測る。正位無蓋で焼成され、脚部を2条の沈線で加飾する。

壺・瓶類　壺類は、同一個体の可能性をもつ肩の張る器形535・553や、短頸の小型壺（未図化）が確認できる程度である。瓶類は、甕554、大型の長頸瓶脚534、提瓶胴部片555、横瓶538・539が出土し、538以外は生焼けである。甕557は口径11.5cmを測り、比較的鋭い稜で加飾する。534は脚端径20.9cmを測り、小片のため透かし孔の数は不明である。破断面に自然釉が熔着する。横瓶538は口径10.4cm、器高約27cmを測り、成形後、胴部外面中央付近に1条の太い沈線を施す。

鉢類　叩きを用いるB類547と、厚底のC類559が出土した。547の体部は直線的にのび、口縁端部をヘラ状工具で粗く切りそろえる。559は口径12.9cm、器高10.3cmを測り、外面を2条1単位の沈線で加飾する。環状を呈する把手の数は不明であり、倒位で焼成したため外面に自然釉が熔着する。

甕　口縁部まで残る個体は限られ、焼き台（置き台）に転用した545と546（608と同一個体）を図化した。中型の545は小片で、口縁端部は丸みをもって仕上げる。大型の546は胴部との接合に係る平行タタキ痕が残り、外面の加飾はやや乱れる。

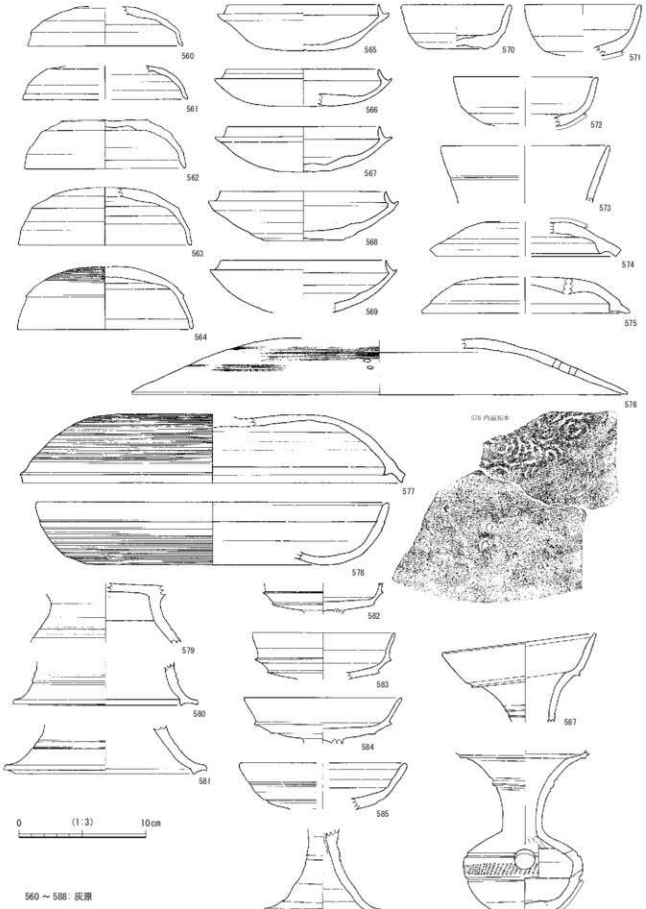
土馬　後述する第112図1286・87・89が焼成室流込土から出土しており、他窯焼成品の可能性を残す。

その他　大型坏523、鉢とした526～528、坏形の532、器種不明の小片551・557が出土した。生焼けに近い有蓋の大型坏523は坏Hを模した器形を呈し、口径19.5cm、器高4.2cmを測る。底部内面全体にナデ調整を、底部外面に周縁部に回転ナデ調整とクシ状工具を用いたナデ調整をそれぞれ施す。鉢526～528は生焼けに近い。底部内面と体部両面を粗目の波状文で文様を描く他、底部外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。532は高坏B坏部を模した精製品であり、口径11.5cm、器高3.6cmを測る。各部の仕上げは鋭く、底部外面に密なクシ状工具痕が残る。

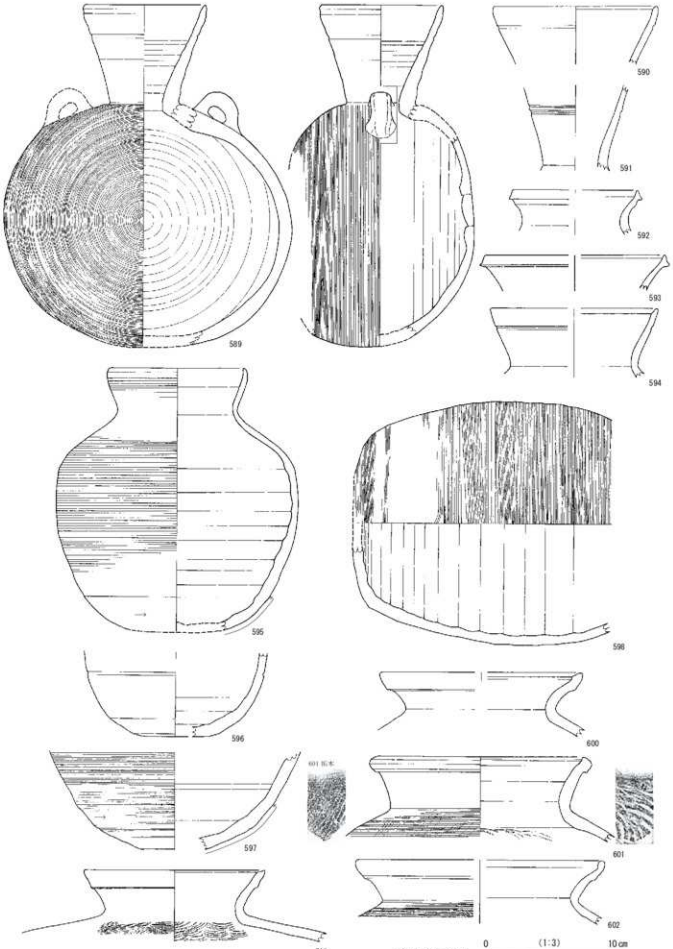
7．7－1・2号窯灰原　（第61・78～80図、第39・40表）

出土状況等　第61・78～80図は、重複する7-1号窯、7-2号窯の灰原から出土した遺物であり、出土量は、甕胴部片を中心に整理箱で22箱を数える。うち、570～572、574～581は7-2号窯焼成品の可能性が高い他、他窯焼成品が混ざる可能性をもつ。

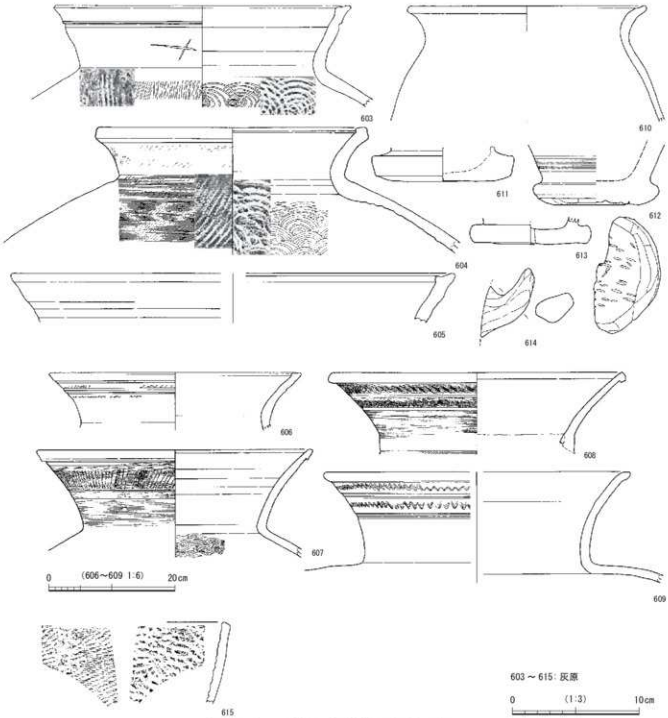
坏H　蓋560～562、身565～569を図化した。背の低い560は口縁基部で明瞭に屈曲後、比較的長い口縁部が外反しながらのびる。外面に自然釉が厚く熔着するため、調整は不明である。562の底部外面は回転ヘラ切り後、未調整に近い。565～569は偏平な器形を呈し、口径12～13cm、器高3.5～3.9cmを測る。565・568の体部が直線的に立ち上がるのに対して、566・567の体部は丸みをもって立ち上がる。



第 78 図　7-1・2 号窯灰原出土遺物 1（S=1/3）



第 79 図　7-1・2 号窯灰原出土遺物 2（S=1/3）



第80図　7-1・2号窯灰原出土遺物3（S=1/3、1/6）

また、568の底部は台状を呈し、外面にクシ状工具痕が残る。

坏G　身570は、口径8.4cm、器高3.5cmを測り、体部は外傾しながら立ち上がる。

高坏　蓋563・564、身571・572、582～586を図化した。無鈕の蓋563・564は高坏Aに属し、焼成は堅緻である。563が丁寧な回転ナデ調整による屈曲で肩部の稜を表現するのに対して、カキメ調整を施す564は突出した稜をつくる。生焼けの571・572は高坏Cと考えられ、身は深く、底部外面に回転ケズリ調整を施す。無蓋の高坏Dの582～584は口径11～12cmを測り、正位で焼成される。2段の稜を非常に鋭く仕上げる点、底部外面を平坦にする点で共通する。582には脚部3方透かしが、焼き歪んだ584には脚部2方透かしの痕跡がそれぞれ残る。高坏Eと考えられる585は口径約13cmを測り、体部は大きく外傾する。高坏Cの脚586の内面には、成形時に生じた絞り痕が明瞭に残る。

盤類　第78図574～581を図化した。内面に幅の広い返しをもつ蓋574・575は大きく焼き歪み、倒位焼成のため内面に自然釉が厚く熔着する。復元口径14～16cmを測り、574が口縁端部を平坦に面取りするのに対して、575は口縁端部を先細らせる。いずれも天井部外面にナデ調整を施し、無鈕の可能性が高い。576～581は大型の盤類で、焼成具合は577～581が共通する。やや焼き歪む蓋576は口径39cmを測り、2孔1対の円孔を垂直やや斜め方向に穿つ。天井部は、内面が同心円叩きの後に粗いナデ調整を、外面がカキメ調整をそれぞれ施す。やや焼き歪んだ蓋577の口縁端部は、574と形状が類似する。577は口径30.0cmを測り、578と同様に内面全体をナデ調整で、外面をカキメ調整で仕上げる。有台と考えられる578は、大きく焼き歪んでおり、図上復元したものである。復元口径27.6cmを測り、丸みをもって立ち上がる体部外面にカキメ調整を施す。大型鉢類の脚部片579～581は外面を2条の沈線で加飾する。580・581は脚端部に小さな平坦面をもち、接地面が断面三角形状を呈する。脚端径は15cm前後を測り、正位で焼成される。なお、未実測だが、578と同器形を呈する大型盤が1点出土、外面を沈線と波状文で加飾する(図版第44)

壷類　573・590は口径約13cmを測り、外面を1条の沈線で加飾する。594～597は壷A類である。全形のわかる595で口径10.6cm、器高約21cmを測り、外面は内傾する口縁部付近までカキメ調整を施す。

瓶類　瓮587・588、提瓶589、横瓶599等が出土した。瓮587は倒位で焼成され、各部のつくりは鋭い。588の口縁部は大きく焼き歪み、肩部に刺突文と沈線文を施す。提瓶589は正位で焼成され、焼き膨れが著しい。横瓶599の口縁端部は内傾した平坦面をもち、外面が幅広く肥厚する。598・600は横瓶の可能性が高い。第61図129は口径9.4cmを測り、第79図592・593の口縁部は断面三角形状に外側に肥厚する。

鉢類　611～613は体部が剥離した厚底の鉢C類、615は叩き成形の鉢B類である。611・613が底部をナデ調整のみで仕上げるのに対して、612は周縁部を含めてヘラ状工具で削った後に不規則な刺突を加える。

甕　口径20cm未満の601・602、口径21～23cmの603・604、口径約40cm以上の605～609が出土した。601は口縁部が丸く肥厚するのに対して、602は口縁部が内屈気味に上方にのびる。いずれの胴部外面も叩き成形の後にカキメ調整を加える。603は焼成前にヘラ記号を刻み、破損後に焼き台(置き台)に転用する。605は606と同一個体の可能性が高い。606は口径39.0cmを測り、外面に乱れた波状文と沈線を施す。607は口径42.6cmを測り、カキメ調整の後に2条1単位の沈線を施し、その間に斜行刺突文を加える。608は口径45.6cmを測り、カキメ調整の後に沈線と波状文で加飾する。609は口径約47cmを測る。

土師器甕　610は球胴形を呈する非ロクロ成形の甕で、口縁部は外反する。口径18.4cmを測る。

円面硯等　円面硯1276・77、陶棺1273・74の各破片が出土した。第15項で説明をおこなう。

8．7－2号窯　(第81～84・107図、第15～17・40～42・51表)

出土状況等　7-2号窯は、7-1号窯の直上に築かれた窯で、床面の補修は認められない。灰原を除き、窯

体内床面、前庭部から出土した遺物は、整理箱で11箱（破片数2,769点）を数える。これらの遺物は、焼成状況から第15表のa～d群に分類できる。焼き台（置き台）転用を含むa群は最終操業段階より前の焼成品、b～d群は最終操業段階の焼成品であり、特に厚手のd群は窯体内床面のみで出土し、b・c群とは胎土（および製作単位）の違いを反映する色調をもつ。d群には、脚付鉢700や大型・有台長頸瓶714、厚手の高坏C、格子状タタキで成形した壷・甕といった特徴的な個体が含まれる。なお、窯体内床面から焼き台（置き台）に転用した甕胴部片や、生焼けで破損したd群を主体とする甕胴部片が多数出土した。

器種構成　坏Gを主体に、坏H、高坏C・D、盤類、壷・瓶類、甕に加え、脚付鉢（700・701）、丸底の埦（698）、円面硯（1277）、平瓦様製品（1269・70）、陶棺（1273）といった製品を焼成したと考えられる。量比は、口縁部計測法でみれば、坏Gが約76%と圧倒的に多く、瓶類が約9%、甕が約4%、高坏・壷類が各約3%、坏Hが2%弱の比率を示す。また、破片数計測法でみれば、多くの焼き台（置き台）を含む甕が約64%、瓶類が約12%、坏Gが約6%、高坏が約3%の比率を示し、瓶類の中では横瓶が目立つ存在である。

坏H　前庭部最終床面等から少量が出土したにとどまり、第84図728・729を図化した。扁平な蓋728はb群に属し、口径13.2cm、器高3.7cmを測る。天井部から丸味をもって口縁基部に至り、端部は若干外反する。天井部外面は、回転ナデ調整の後にクシ状工具によるナデを施す。扁平な身729はb群に属し、口径13.3cm、器高2.9cmを測る。底部外面は回転ナデ調整の後にクシ状工具によるナデを施す。

坏G　窯体内出土の第81図616～第82図697、前庭部出土の第84図731～737を図化、基本的に1法量と考えられる（第17表）。身底部（倒位で成形する蓋は天井部）の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てで時計針の回転方向となる。身底部（蓋は天井部）は、体部下半～周縁部外面に斜め方向でヘラ状工具を差し込み、回転ヘラ切りで余分な粘土を粗く削りとった後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行う。斜め方向にヘラ状工具を差し込んだ痕跡は、身666・692で特に明瞭に残る。

蓋（616～661、731～734）は、天井部からなだらかに口縁部に至り、粘土ヌタ等を利用して断面三角形状の小さな返しをつくる。また、鈕はやや崩れた擬宝珠形を呈し、蓋中心を大きくずれた個体も存在する。天井部の調整は、天井部と肩部の2回に分けて、口縁基部付近までの比較的広い範囲に粗い回転ケズリ調整を施すことを基本とするが、丁寧な回転ケズリ調整を施す個体（630・632等）、手持ちケズリ調整とする個体（618・629・635・647等）、回転ナデ調整を加える個体（d群の一部、648・654・657・658）のように細部での差異がかなり認められる。また、同一胎土と考えられるd群に属する631・636・648・654～658をみても、細部形態は統一感が乏しく、657は口縁端部に平坦な面取りを行う。焼成良好品の法量は口径9.1～11.5cm、12.2～12.9cm、器高2.5～4.2cmに、生焼け品は口径9.9～12.0cm、器高3.0～4.3cmにそれぞれ分布し、d群のうち天井部に回転ナデ調整を加える個体（648・654・657・658）の口径が一回り大きい。

身（662～697、735～737）は、扁平で体部が直立する器形（663・669・674・675・682等）、扁平で体部が外傾する器形（666・670・683・689等）、深身で底部を丸底風につくる器形（667・673・681・686等）等の器形があり、蓋と同様に細部での差異がかなり認められる。また、底部内面中央付近に1方向の軽いナデ調整を、底部外面に回転ヘラ切り後粗いナデ調整をそれぞれ施すことを基本とするが、深身で底部丸底風の器形には回転ケズリ調整を加える個体（673・681・686・690）が目立つ他、ヘラ切り未調整に近い個体（668等）も存在する。成形時の粘土切れ等に起因する補修痕も670・682・683で確認できる。焼成良好品の法量は口径8.5～10.5cm・11cm、器高2.9～3.5cm・4cm強に、生焼け品は口径9.2～10.8cm・11.5cm、器高3.3～4.2cmにそれぞれ分布する。なお、口縁端部に平坦面をもつ蓋657と、底部外面に回転ケズリ調整を施す身の深い673・681・682・690のセットは、坏Gの中でも法量が若干大きく、鉢を指向した別

器種となる可能性をもつ。

高坏・脚付鉢　d群に属する700～706・708～711、e群に属する高坏Dの707・712、高坏Cの713を図化した。脚付鉢とした700は口径16.4cm、坏部高7.2cmを測る大型品で、内湾する体部外面に回転ケズリ調整を、内面全体にナデ調整をそれぞれ加える。701が脚になると考えられ、外面を2条の沈線で加飾する。702～706・708・709・711は、脚付鉢を模した高坏Cと考えられ、坏部704は身が深い。脚706・708・709は、端部を平坦に面取りし、脚端径は約8cmを測る。高坏Dに属する707は口径9.8cmを測り、体部は外傾する。脚712は刻みに近い幅の狭い透かしを3方に穿つ。710も高坏Dの可能性をもつ。

第15表　7-2号窯実測遺物焼成状況等分類一覧表

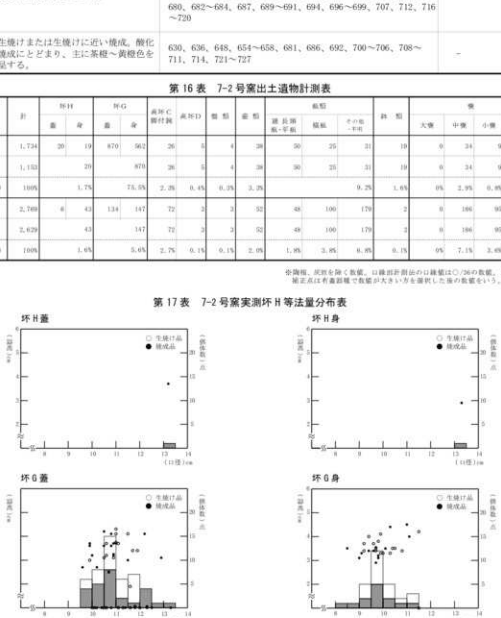
区　分	焼成状況の特徴	窯体床面出土	前庭部出土
a 群	焼成堅緻で、自然釉の熔着が著しい。焼き台(置き台)転用を含む。	616、623、631、659、663～675、677、685、688、693、1269・70（平瓦模製品）、1277(円面硯)	730、736、737、739、740
b 群	焼成は良好で、主に灰～暗灰色を呈する。自然釉の熔着は少ない。	617、618、622、634、639、641、662、666、672、676、679、695、713、715	728、729、731、732、735、738、741、742
c 群	生焼けまたは生焼けに近い焼成。主に淡黄灰～淡灰色を呈する。	619～621、624～629、632、633、635、637、638、640、642～647、649～653、660、661、664、665、667～671、673、678、680、682～684、687、689～691、694、696～699、707、712、716～720	733、734
d 群	生焼けまたは生焼けに近い焼成。酸化焼成にとどまり、主に茶橙～黄橙色を呈する。	630、636、648、654～658、681、686、692、700～706、708～711、714、721～727	-

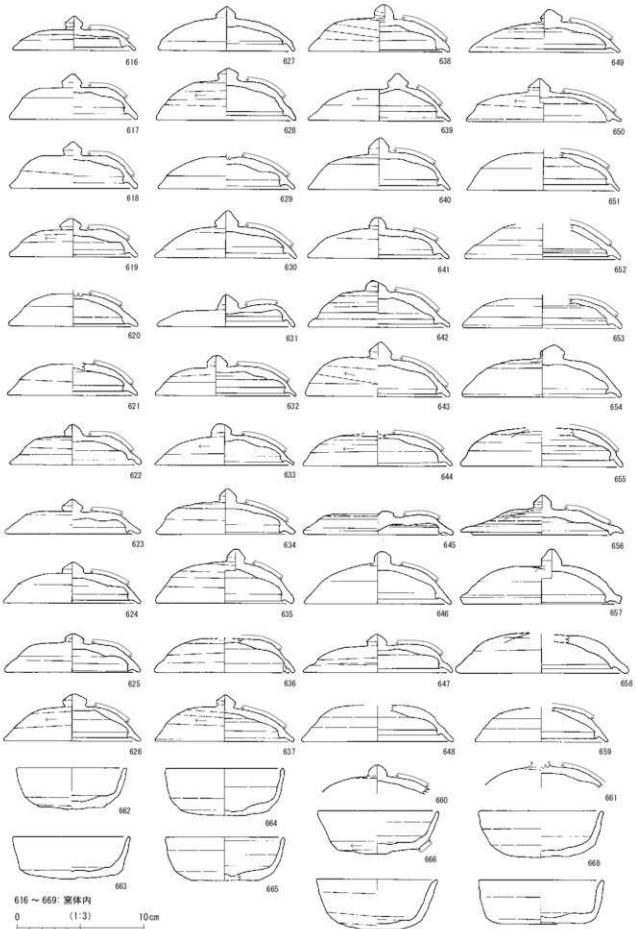
第16表　7-2号窯出土遺物計測表

	計	坏H		坏G		高坏C脚付鉢	高坏D	甕類	壺類	鉢類			鉢類	蓋類	甕					その他一不明
		蓋	身	蓋	身					須恵器・平瓶	模倣	その他一不明			大甕	中甕	小甕	その他一不明		
口縁部計測品（口縁数）	1,734	20	19	870	562	26	5	4	38	50	25	31	19		0	34	9	6	16	
口縁部計測品（補正口縁数）	1,153		20		870	26	5	4	38	50	25	31	19		0	34	9	6	16	
比率（%）	100%		1.7%		75.5%	2.3%	0.4%	0.3%	3.3%			9.2%	1.6%		0%	2.9%	0.8%	0.5%	1.4%	
破片数計測品（点）	2,769	6	43	134	147	72	3	3	52	48	100	179	2		0	186	95	1,670	29	
破片数計測品（補正点）	2,629		43		147	72	3	3	52	48	100	179	2		0	186	95	1,670	29	
比率（%）	100%		1.6%		5.6%	2.7%	0.1%	0.1%	2.0%	1.8%	3.8%	6.8%	0.1%		0%	7.1%	3.6%	63.5%	1.1%	

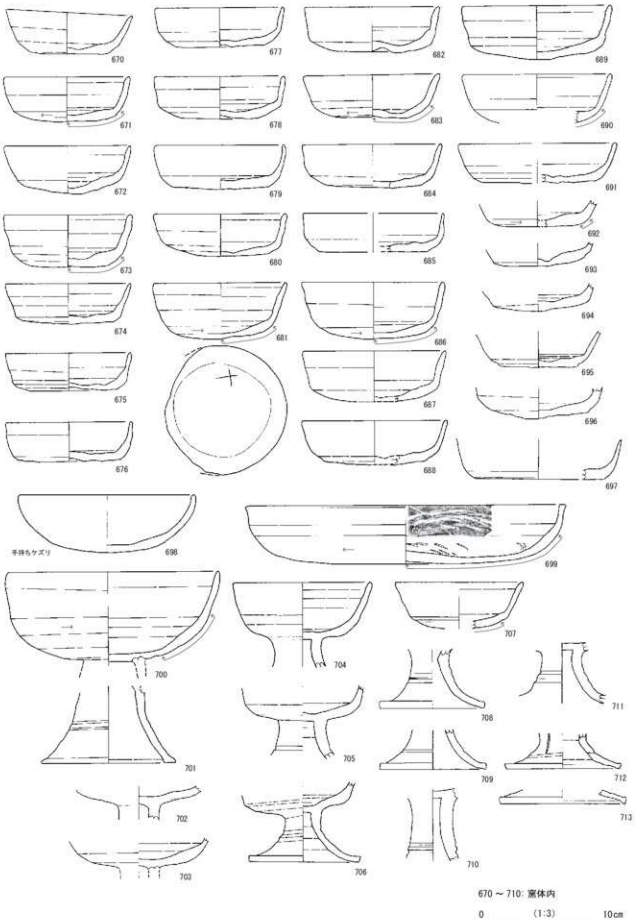
※陶棺、炭窯を除く数値。口縁部計測品の口縁数は○/26の数値。また、補正口縁数、補正点は有蓋部種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第17表　7-2号窯実測坏H等法量分布表

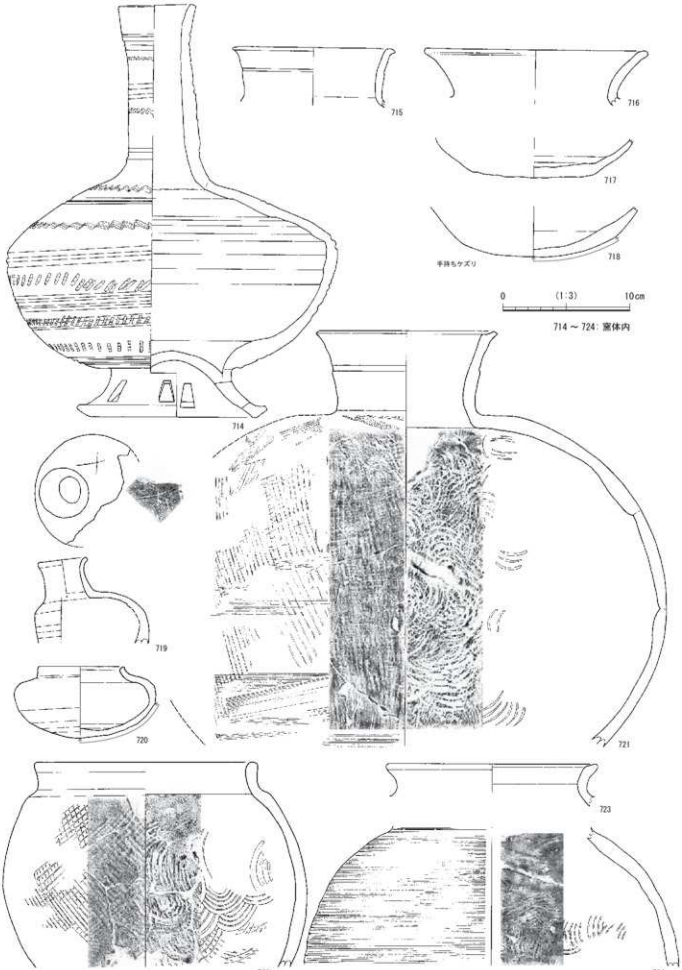




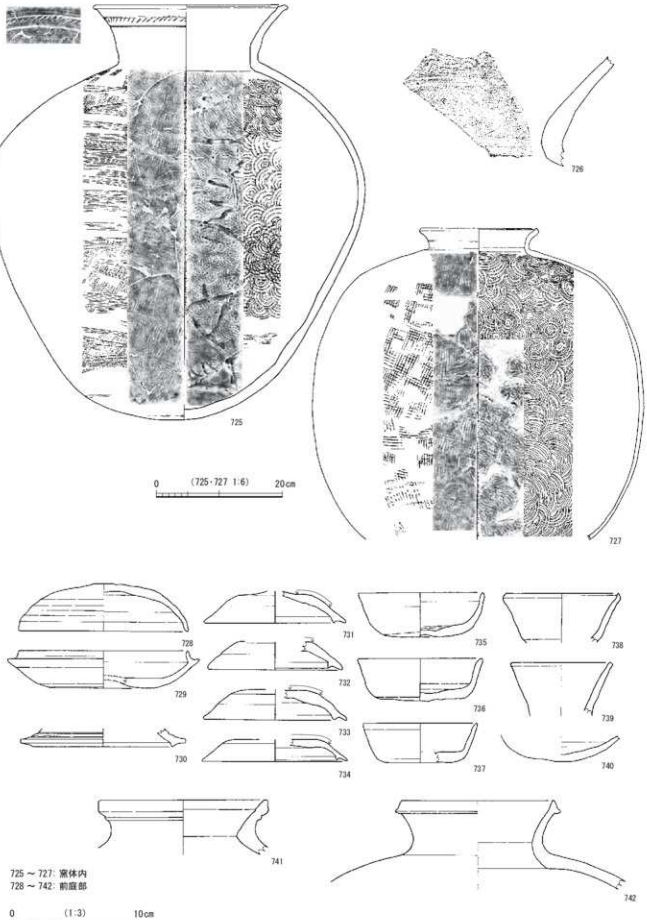
第 81 図　7-2 号窯出土遺物 1 (S=1/3)



第 82 図　7-2 号窯出土遺物 2 (S=1/3)



第83図　7-2号窯出土遺物3（S=1/3）



第 84 図　7-2 号窯出土遺物 4（S=1/3、1/6）

盤類　c群に属する699が出土した。口径24.9cm、器高4.6cmを測り、肥厚気味の口縁端部を平坦に仕上げる。底部内面は同心円叩きを用いて粘土を締めた後に全面にナデ調整を、外面は丁寧な回転ケズリ調整を施す。また、730は、灰原から出土した第78図579～581と同形態を呈する盤脚部の可能性が高い。730は外面を2条の沈線で加飾し、脚端部に平坦面をつくる。

壷類　丸底のA類と考えられる底部片717・718・740・1259、口縁部が外傾する716、短頸の722～724、小型壷720が確認できる。717は、底部外面には回転ケズリ調整を施さない。第107図1259はナデ肩を呈し、外面にカキメ調整を施す。器肉が厚い短頸壷722～724はd群に属し、口径約17cmを測る。722の胴部は格子状叩きと同心円叩きを用いて成形し、724の胴部外面にはカキメ調整が残る。c群に属する小型壷720は口径6.6cm、器高5.6cmを測り、底部外面に粗い手持ちケズリを加えて丸底に仕上げる。

瓶類　罐と考えられる738、大型・有台の長頸瓶714、平瓶719、横瓶721・741・742等が出土した。738は口縁端部を上方に小さく折り曲げる。d群に属する長頸瓶714は、口径5.6cm、器高32.5cmを測る精製品であり、口縁端部を平坦に仕上げる。外面全体をやや乱れた波状文、斜行刺突文、2条1単位の沈線で加飾し、外展する台部に台形透かしを穿つ。c群に属する小型の平瓶719は、閉塞円盤が残り、外面肩部にヘラ記号「×」を焼成前に刻む。横瓶721は胴部外面に格子状叩きの後、ミガキ状の丁寧なカキメ調整を施す。長くのびる口縁部は、端部を斜め上方にひきのばす。741・742の口縁端部は、外面下端が肥厚する。

甕　d群に属する725～727を図化した。725で口径29.5cm、器高65.5cmを、胴部が張った727で口径18.2cm、器高48cm以上をそれぞれ測り、727は胴部に比して口縁部が小さい印象を受ける。また、727は口径18.2cmを測り、外面に格子状叩きと平行叩きが、内面に同心円叩きが残る。

その他　丸底の浅い埦698の他、円面硯1277、平瓦様製品1269・70、陶棺1273の各破片が出土した。窯体内床面出土の698は口径13.7cm、器高4.6cmを測り、底部内面にナデ調整を、外面に粗いケズリ調整をそれぞれ加える。ロクロ成形の可能性が高いものの、器形を含めて当該期の非ロクロ土師器埦と共通する要素が多い。円面硯、平瓦様製品、陶棺については、項を改めて説明する。

9．8号窯　（第85～87・107・114図、第18・42・43・51・53表）

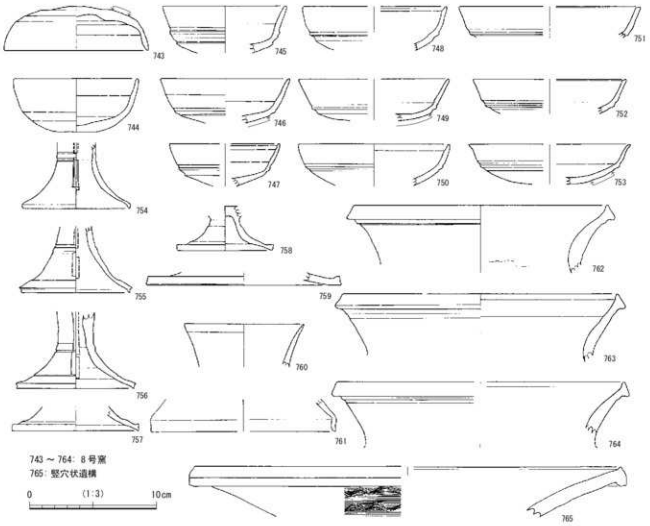
出土状況等　8号窯は床面の補修が認められない。出土遺物は限られ、前庭部、窯体内を中心に灰原を含めて整理箱で2箱（破片数159点）を数える。窯体内から744・745・747・754・755・758・759・1329が、前庭部から746・749～753・757・760・763・764・1250・1327・1328が、窯体流込土から743・756が、灰原から762が、それぞれ出土しており、焼成具合からみれば744と第114図1329及び未実測の甕胴部片の一部が生焼けである。胎土等から743・1250は他窯焼成品の可能性が高い。また、8号窯焚口埋土（流込土）から刻書をもつ平瓶766の破片の一部が、周辺の表土等から748・761がそれぞれ出土した。

器種構成　流込土を含めて、坏H蓋、坏G身、鉢、高坏C・D類、高坏Dの坏部を模した埦（753）、瓶類、甕が出土した。量比は、口縁部計測法で高坏が約57%、破片数計測法で甕胴部片が約62%、高坏が約26%の比率となる。参考資料として、第18表に流込土を含めた計測値を示す。

坏H　煙道付近の流込土から蓋743が1点のみ出土した（破片数は10点）。焼成具合・色調が、本窯出土の他焼成品と異なるため、他窯焼成品と考えられる。743は口径11.0cm、器高3.4cmを測り、肩部は丸みをもって仕上げる。火だすき痕が残る天井部外面は、ナデ調整の後にクシ状工具を用いて粗いナデ調整を加える。なお、蓋761は不定形土坑出土の小片で、焼き歪みが目立つ。

坏G　焚口から生焼けの744が1点のみ出土した。深身で丸底風の器形を呈し、体部は外傾しながら長くのびる。口径9.6cm、器高4.2cmを測る。

鉢　前庭部から脚部片である第107図1250が1点出土した。焼きのあまい1250は褐付近に突帯を巡ら



第 85 図　8 号窯等出土遺物（S=1/3）

第 18 表　8 号窯出土遺物計測表

	計	坏H		坏G		鉢Gか	埦か	高坏C	高坏D	高坏不明	壺類	底類	甕			
		蓋	身	蓋	身								大甕	中甕	小甕	その他・不明
口縁部計測法（口縁量）	137	12	0	0	22	0	3	0	78	1	0	9	0	12	0	0
口縁部計測法（補正口縁量）	137		12		22	0	3	0	78	1	0	9	0	12	0	0
比率（%）	100%		8.8%		16.1%	0%	2.2%	0%	56.9%	0.7%	0%	6.6%	0%	8.8%	0%	0%
破片数計測法（点）	159	1	0	0	10	1	1	3	37	2	3	1	0	3	0	88
破片数計測法（補正点）	159		1		10	1	1	3	37	2	3	1	0	3	0	88
比率（%）	100%		0.6%		6.3%	0.6%	0.6%	1.9%	23.3%	1.3%	1.9%	0.6%	0%	1.9%	0%	61.6%

※焼書平瓶を除き、灰原・表採土を含む数値。口縁部計測法の口縁量は○/360の数値。また、補正口縁量、補正点は有器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

【釈文】

与野評□□

□須〔カ〕

□×

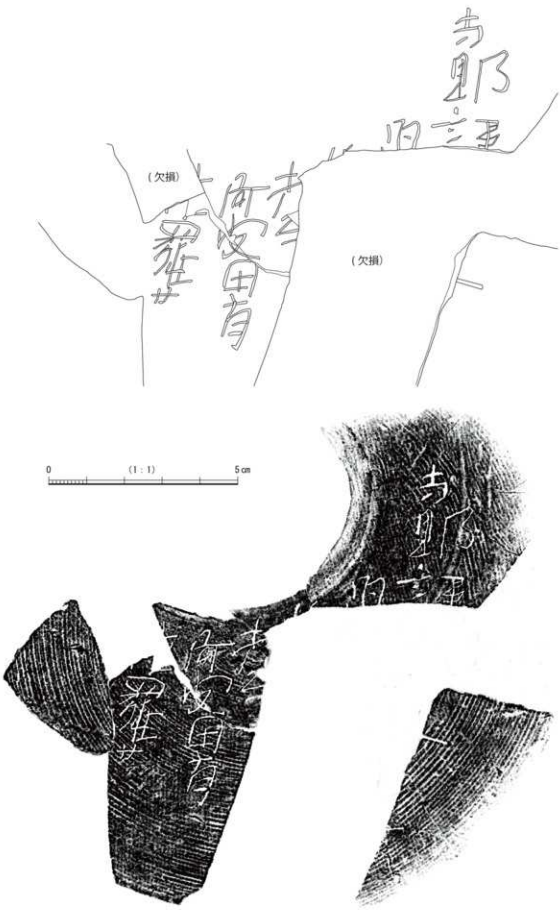
□□×

阿皮田□〔有カ〕

□羅廿

0 (1：2) 10cm

第86図　刻書平瓶1（S=1/2）



第87図　刻書平瓶2（S=1/1）

し、脚端径10.1cmを測る。胎土中に細砂が多く混ざり、他窯焼成の可能性が高い。

高坏　焼成具合から同じ焼成を経たと考えられる41点の小片が出土、うち第85図745～752・754～759を図化した。坏部745～747には754～746の脚が付き、正位焼成の高坏Dと考えられる。薄手の坏部は口径約10cmを測り、745が体下部に細い稜に加え底部との境に稜状の段をもつのに対して、746・747は体部と底部の境に太めの稜をつくる。脚部754～756は脚端径9cm前後を測り、2方透かしを丁寧にいれる。脚が不明な坏部749～752は、口径約12cmを測り、体下部に稜を表現する。749・750が口縁端部を先細らせるのに対して、751・752は内傾した平坦面をつくる。757・758は高坏Cで、759は脚端径15.2cmの小片である。

埦　埦753は、高坏754～746坏部と同器形を呈する。口径約12.6cmを測り、口縁端部は小さく外反する。底部外面に粗いクシ状工具痕が残る。

瓶類　前庭部から760が出土した。760の口縁部は外反気味で、内外面に自然釉が熔着する。

甕　灰原出土の762、同一個体の可能性をもつ前庭部出土の763・764を図化した。いずれも焼成良好な小片で、口径20～22cmを測る。口縁端部を斜め下方向に引きのばし、その直下に突帯状の起伏をつくる。

刻書平瓶　第86・87図766は、刻書をもつ平瓶である。8号窯焚口埋土(流込土)を中心に、7-1号窯の溝状遺構流込土、11号窯煙道部埋土(流込土)から出土した約10片の破片を接合しており、焼成した窯は判然としない。口径7.1cm、器高16.0cm、胴部最大径15.8cmを測り、胴部外面上半にカキメ調整を、下半に回転ケズリ調整をそれぞれ施す。焼き歪みのない焼成良好品で、胴部内面天井部の閉塞円盤を切って、口縁部をつける。文字は、焼成前に肩部の曲面にあわせながら鋭利なヘラ状工具を用いて刻まれる。6行から成り、第1行目の最初の3文字は「与野評」、5行目の文字は「阿皮田□、6行目は「□羅廿」と釈読できる。

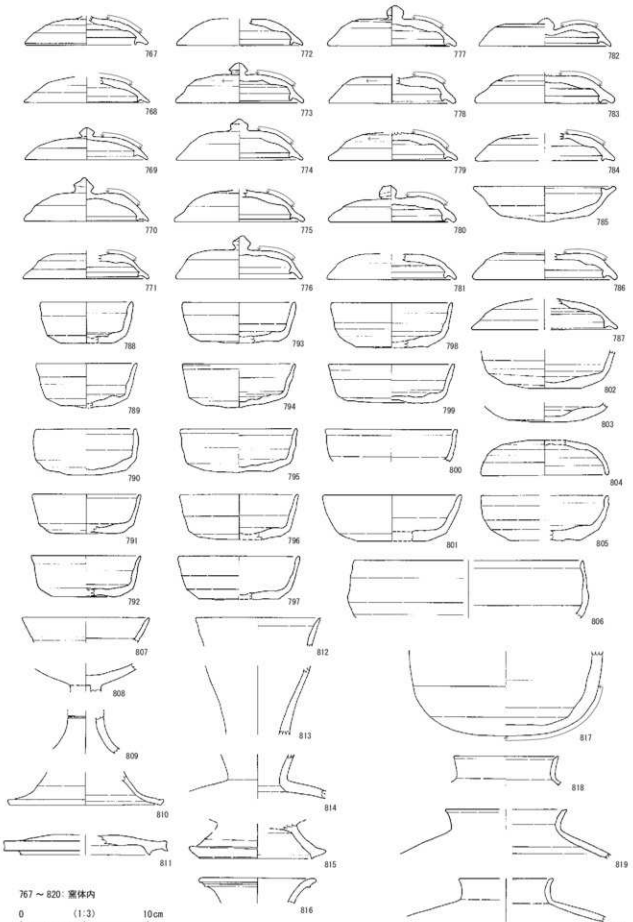
10. 5号窯　(第88・89・115図、第19・20・43・44・53表)

出土状況等　5号窯は、10号窯を一部壊して築かれた窯で、床面には2回以上の補修痕が残る。窯体内床面・舟底状ピットを中心に出土した遺物は、整理箱で6箱(破片数462点)を数える。焼成具合は、ほとんどが焼成良好な小片であり、淡灰オリーブ～灰緑色の自然釉が熔着した個体はない。10号窯焼成品と同様に、外面に火だすき痕や黒化が認められる程度の焼成具合であり、第7項までに記した窯焼成品と比して相対的な熱量が少ないか、窯構造を含めた窯焚きの技術や燃料に用いた主要樹種が異なることが想定できる。生焼け品には高坏807・808、瓶類813・814、甕822・823、鉢825が、また焼き台(置き台)に転用した個体には坏G身798・799、鉢類806がある他、坏G蓋771・778・782も焼き台(置き台)に転用した可能性を残す。なお、焼き台(置き台)に用いた径約20cm、短径約10cmを最大とする自然石が出土している。

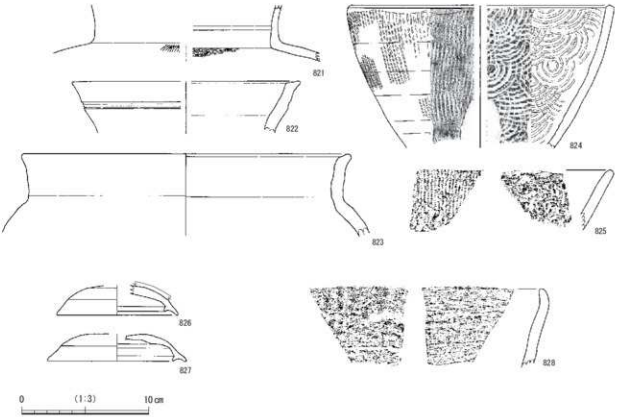
器種構成　坏G、高坏C、壷・瓶類、鉢類、甕に加え、坏H(785・804)や盤類蓋(811)、鉢G身片、土馬片が出土した。量比は、口縁部計測法でみれば、坏Gが圧倒的に多く約87%を占め、瓶類が約4%、鉢類が約2%と続く(第19表)。坏Hと考えられる個体の比率は約2%にとどまる。また、破片数計測法でみれば、坏Gが約45%、甕が約41%、瓶類約9%、鉢類約23%となり、破損や焼き台(置き台)転用の甕胴部片が比率を増す。なお、5・10号窯灰原出土遺物(第91～94図)には、高坏C・E、無蓋の盤類、鉢類、小型壷、平瓶、長頸瓶等の比較的多様な器種が確認でき、一部は本窯焼成品となる。

坏H　窯体内出土の蓋804、身785を図化した。いずれも坏G を倒位にした器形をもち、法量も坏Gと変わらない。蓋804は口径10.0cmを測り、天井部～肩部外面に回転ヘラ切り後にナデ調整を加えて、丸みをもった器形に仕上げる。身785は口径11cm、器高2.8cmを測り、口縁端部の形状は坏G蓋と近似する。ただし、坏G蓋とは、体部と底部の境の屈曲度合いや、天井部外面が粗いナデ調整にとどまる点で異なる。

坏G　767～784・786～803・805・826・827を図化し、基本的に1法量と考えられる(第20表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全



第 88 図　5 号窯出土遺物 1 (S=1/3)



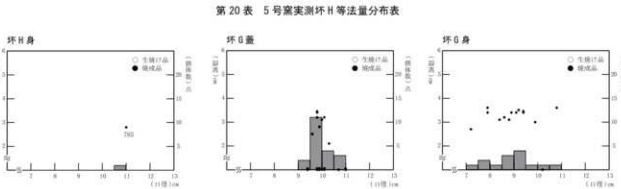
第 89 図　5 号窯出土遺物 2（S=1/3）

第 19 表　5 号窯出土遺物計測表

	計	坏H小		坏G		脚G小	高坏	盤蓋小	鉢短	壺 短	甕 短	甕				その他一括
		蓋	身	蓋	身							大甕	中甕	小甕	その他一括甕	
口縁部計測法（口縁値）	1,018	13	8	387	541	1	7	2	14	6	26	0	6	3	0	6
口縁部計測法（補正口縁値）	623		13		541	1	7	2	14	6	26	0	6	3	0	6
比率（%）	99%		2.1%		86.8%	0.2%	1.1%	0.3%	2.2%	1.0%	4.2%	0%	1.0%	0.5%	0%	0.6%
破片数計測法（点）	462	1	1	58	181	1	3	2	7	3	36	0	1	3	160	3
破片数計測法（補正点）	460		1		181	1	2	2	7	3	36	0	1	3	160	3
比率（%）	99%		0.3%		45.3%	0.3%	0.5%	0.5%	1.8%	0.8%	9.0%	0%	0.3%	0.8%	40.0%	0.8%

※灰黒を除く数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有効数値で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 20 表　5 号窯実測坏 H 等法量分布表



てで時計針の回転方向となる。蓋は、天井部～肩部外面に比較的丁寧な回転ケズリ調整を施して丸みをもった器形に仕上げ、背の高い鈕を付す。内面の返しは断面三角形状を呈し、小振りだがしっかりとした印象を受ける。法量は、口径9.4～10cm強・11cm弱、器高2.5～3.5cmに分布する。全形のわかる769が口径9.6cm、器高2.5cmを、777が口径10.1cm、器高3.2cmを測る。身は、801以外は、体部が直立した箱形の器形を呈する。細部の形態は、体部下半～底部周縁部外面に斜め方向のヘラ状工具を差し込んだ後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行うため、体下部外面が明瞭に屈曲する。また、内面は体部を直立させるため、体部と底部の境に強い回転ナデ調整を加えることから、境は凹状に薄くなる。中でも793は回転ナデ調整が強すぎ、底部内面中途に段状に起伏する。底部外面は粗いナデ調整を加える程度で、回転ヘラ切り痕をほぼ残す。身の法量は口径7.2～9.9cm・10.8cm、器高2.7～3.6cmに分布し、全形のわかる788が口径7.2cm、器高2.7cmを、799が口径9.9cm、器高3.0cmを、体部が外傾する801で口径10.8cm、器高3.6cmを測る。なお、805は大きく焼き歪み、未実測だが身3個体分を重ね焼きした口縁部片が出土した(図版第50)。

高坏　807～810を図化、いずれも小片である。坏部807は外面に沈線が残り、脚部810とともに高坏Dとなる。808は丸みをもつ形態から、第92図908～912と同じ高坏Eと考えた。809は高坏C脚部である。

盤類　811は、内面返しと平坦な口縁端部を特徴とする盤類の蓋と考えた。口径約10cmを測り、天井部外面にナデ調整を施す。7-1・2号灰原(第78図574・575)、5・10号窯灰原(第91図890～895)に類似品がある。

鉢類　深身器形の806、成形に叩き技法を用いるB類824・825の他、B類類似の828が出土した。薄手の806は鉄鉢形に近く、焼き台(置き台)に転用したため焼き歪みが目立つ。824は口径約20cmを測り、焼き歪む。生焼けの小片825は、口縁端部を丁寧にヘラ状工具で切りそろえる。828は内外面ともナデ調整を施し、口縁端部は先細りながら内傾する。

壷類　短頸の小型壷818～820が出土、口径約8cmを測る。他にA類と考えられる口縁部小片が出土した。

瓶類　813～817が出土、814・817は提瓶と考えられる。815はしっかりと外展し、内端で接地する。

甕　821～823が出土した。短頸の823は口径25.6cmを測り、短い口縁部は端部が内傾する。

土馬　焼成部床面から尾部1291が出土した。

11. 10号窯　(第90・115図、第21・22・44・53表)

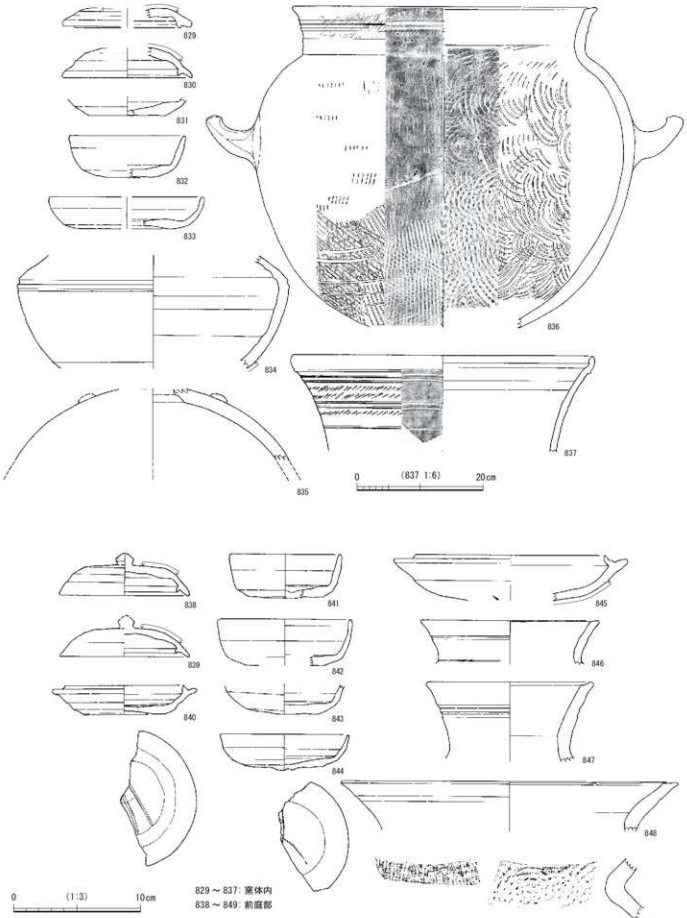
出土状況等　5号窯に先立ち築かれた10号窯は、床面に排水溝が掘られた窯で、床面の補修は認められない。窯体内床面および前庭部から出土した遺物は少なく、整理箱で7箱(破片数396点)を数え、多くは焼き台(置き台)に転用または排水溝に被せた甕胴部片である。焼成具合は、内面に淡灰オリーブ色の自然釉が熔着する坏G身842と生焼けの瓶類847以外は、5号窯と同様に外面に火だすき痕や黒化が認められる程度の焼成具合を示す。

器種構成　器種は限られ、坏G、高坏A、提瓶等の瓶類、甕に加え、坏H身840が出土したにとどまる。なお、5・10号窯灰原出土遺物(第91～94図)には、高坏C・E、無蓋盤、鉢類、小型壷、平瓶、長頸瓶等の比較的多様な器種が出土した。破片数は少ないが、第21表に口縁部計測法、破片数計測法による比率を示す。

坏H　坏H身840は、坏G蓋を倒位にした器形をもつ。前庭部出土の840は、口径9.3cm、器高2.3cmを測り、法量も坏G蓋とほとんど変わらない。ただし、坏G蓋とは異なり、内面の返しが発達し、底部外面は回転ヘラ切り後、やや粗いナデ調整を施すにとどまる。

坏G　蓋838・839、身841～844を図化、1法量と考えられる(第22表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向となる。

蓋は口径10.2cm前後に分布、全形のわかる839で口径10.2cm、器高3.3cmを測る。天井部外面は施工



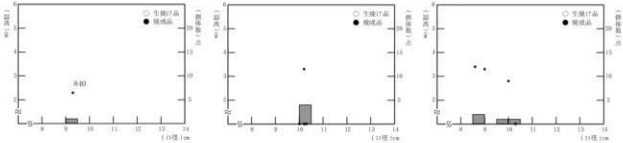
第 90 図　10 号窯出土遺物（S=1/3、1/6）

第 21 表　10 号窯出土遺物計測表

	計	坏H か		坏G		高坏	壺 類	瓶類	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身				大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	223	0	16	57	92	10	0	26	4	18	0	0	0
口縁部計測法（補正口縁値）	166		16		92	10	0	26	4	18	0	0	0
比率（%）	100%		9.6%		55.4%	6%	0%	15.7%	2.4%	10.8%	0%	0%	0%
破片数計測法（点）	396	1	1	7	26	1	1	30	6	7	0	311	5
破片数計測法（補正点）	388		1		26	1	1	30	6	7	0	311	5
比率（%）	99%		0.3%		6.7%	0%	0%	7.7%	1.5%	1.8%	0%	80.2%	1.3%

※灰原を除く数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 22 表　10 号窯実測坏 G 等法量分布表



単位がわかる、やや角張った回転ケズリ調整を施す。身底部は、体部下半～底部周縁部外面に斜め方向でヘラ状工具を差し込んだ後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行い、底部外面に回転ヘラ切り痕をほぼ残す程度の粗いナデ調整を施す。身の法量は、口径8.6～9.0cm・約10cm、器高3.4cmを中心に分布する。なお、833は正位で焼き台(置き台)に転用しており、大きく焼き歪む。

高坏　前庭部から大型の坏部845が出土した。灰原出土例（第92図903・904）から、幅の狭い3方透かしを穿つ長脚が付く。845は口径15.0cmを測り、内傾する口縁部は基部外側が屈曲しながら肥厚する。この口縁基部の特徴は、灰原出土品と共通する。

瓶類　窯体内から834・835が、前庭部から846・847が出土した。834は、明瞭に屈曲する肩部を2条の沈線で加飾する。提瓶835はボタン状の鈕を付し、焼き台（置き台）に転用される。846は口径14.0cm、生焼けの847が口径12.9cmを測り、口縁端部を内傾した平坦面に仕上げる。

甕　窯体内から836・837が、前庭部から848・849が出土した。球胴形を呈する836は口径23.4cm、器高25cm以上を測り、胴部中程に鉤状の把手をつける。大型甕837は口径47.2cmを測り、外面をやや乱れた3列の斜行刺突文と沈線で加飾する。848は小片のため、図化した傾きに不安を残す。

12. 5・10号窯灰原　（第91～94図、第23、44～46表）

5・10号窯の重複した灰原から出土した遺物は、甕胴部片を中心に整理箱で25箱を数える。

坏H　身865を図化した。865は口径10.2cm、器高2.8cmを測り、坏G蓋と法量帯は変わらない。肉厚な底部と体部の境は明瞭に屈曲、坏G蓋とは異なり、底部外面に粗いナデ調整を施す。坏G蓋とした小片856・864も、口縁部が受け部より突出気味で、天井部外面にナデ調整を施すことから、坏H身の可能性が高

い。なお、灰原出土の天井部外面の調整がわかる未実測の坏G蓋を観察したところ、92点中13点(約14%)が前述の特徴から坏H身の可能性をもつ。また、坏H蓋の可能性をもつ坏G身片2点や、他窯焼成品と考えられる口径12～13cm台を測り、口縁部が長くのびる身小片12点が出土している。

坏G　蓋は、850～864を図化した。850～855、857～863は、天井部～肩部外面に5・10号窯と共通する比較的丁寧な回転ケズリ調整を施し、丸みをもった器形を呈する。法量は、口径9.5～10.1cm、器高2.5～3.5cmに分布する(第23表)。また、同じ焼成具合の850・851の天井部外面には、焼成前に刻まれた「×」のヘラ記号が残る。身は866～888を図化した。866～876、878～882・884・887・888は、5・10号窯出土遺物と同様に体下部外面で明瞭に屈曲し、体部が直立した箱形に近い器形を呈する。また、腰部を丸く仕上げて体部が外傾する丸底風の器形(883・886等)もある。883・886は底部が台状を呈し、平方向の回転ヘラ切りのみで底部の切り離しを行った可能性が高い。底部外面の回転ヘラ切り後のナデ調整は、5・10号窯出土遺物と同様に粗いナデ調整で済ませる個体が多く、876・879・888は未調整に近い。法量は、口径8.8～10.5cm、器高2.9～4.0cmに分布し、5号窯で出土した口径11cm前後の個体は確認できない。また、867・869・881・884に焼成前に刻まれたヘラ記号が残る。

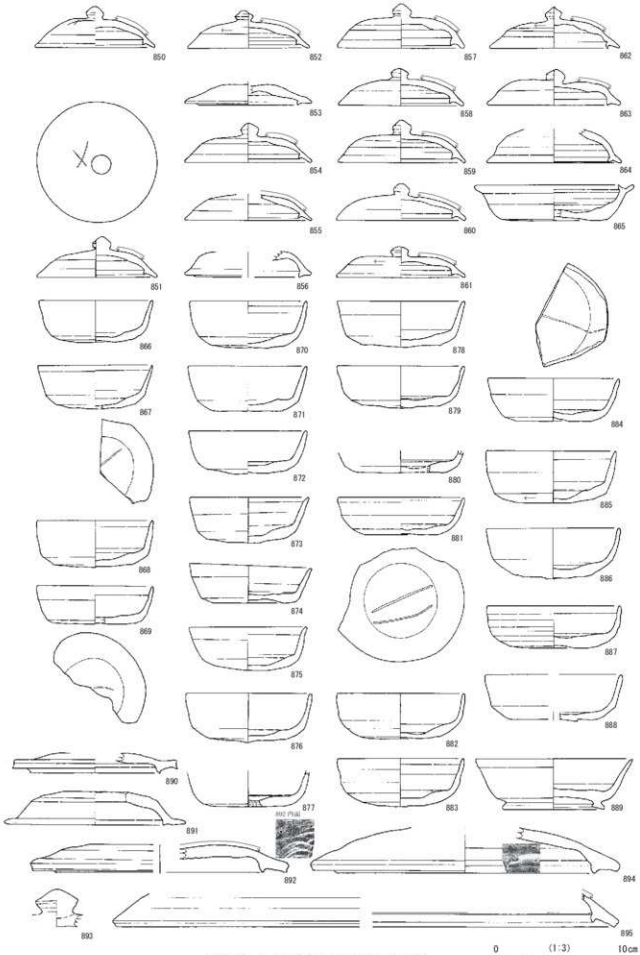
高坏　高坏Aの系譜をもつと考えられる903～905、高坏Eとした無蓋で焼形の坏部をもつ906～912、高坏Cとした小型の913～919が出土した。有蓋の903・904の坏部は、内傾する口縁部と発達した受け部に特徴をもち、903が口径12.2cm、904が口径15.4cmを測る。脚部は上半に幅1～2mmの線状の透かしを内面まで穿ち、脚下半は905のように2条1単位の沈線を2列施す。また、904・905には、坏部と脚部の接合面を強化するための同心円叩き痕が残る他、905は正位で焼成する。なお、蓋は不明である。高坏Eは口径13～14cmを測る精製品で、坏部は体部下端～底部外面に丁寧な回転ケズリ調整、底部内面全体にナデ調整を加える。脚部は2号窯出土品(第97図1104)から、長脚で透かしのない906・907が付すと考えられる。また、907と911の焼成具合から正位・無蓋での焼成が復元できる。高坏Cの坏部は箱形を呈し、体下端部外面を1条の沈線で加飾する。口径は10cm弱、器高は脚の長い916で8.3cm、脚の短い918で6.0cmを測る。脚端部は、平坦なに仕上げる913・916と、先細る918・919があり、脚長と相関関係をもつ可能性がある。

盤類　盤類蓋と考えた890～895、大型の身896～898が出土した。蓋890～895は身が判然とせず、891は倒位で焼成する。口径は13～14cm、20～24cm、約39cmの3法量が確認でき、大型品には893の算盤珠形の鈕が付されると考えられる。口縁端部は平坦な面をつくることを基本とし、先細る891も確認できる。また、891は天井部を内面から大きく穿孔しており、中型の892・894内面には成形に用いた同心円叩き痕が残る。無蓋の盤896・897は、肥厚気味の口縁部を平坦に仕上げる。口径は、896が約17cm、897が約23cmと、2法量が存在する。無蓋の盤898は口径27.0cmを測り、口縁端部が大きく外反する。底部内面全体にナデ調整を、外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。盤896～898は、底部は不明で有脚の可能性をもつ。

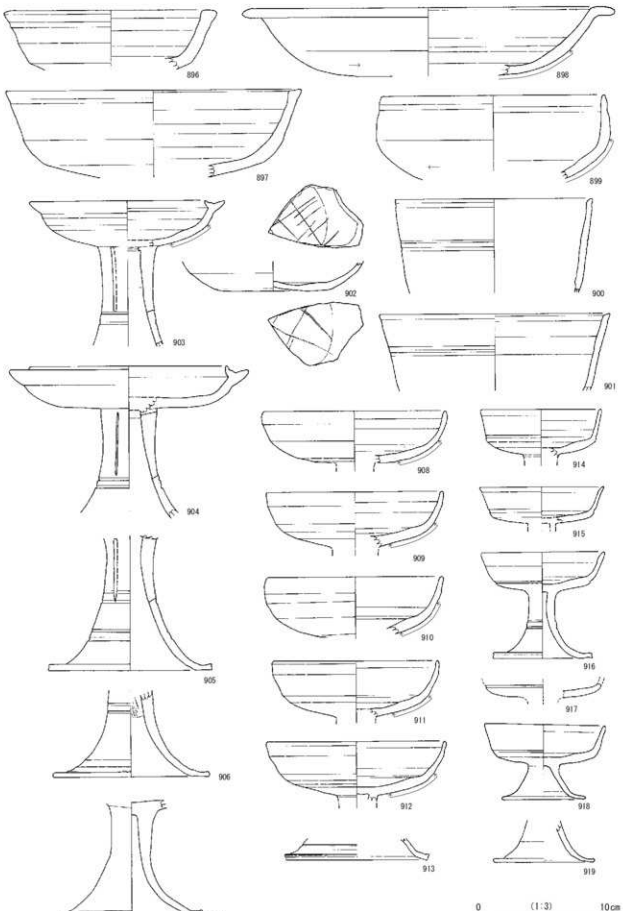
鉢類　鉄鉢に近い器形の899、筒形器形の900・901、叩き技法を用いるB類952・953、厚底のC類950が出土した。外面が降灰する899は口径17.4cmを測り、有脚の可能性をもつ。筒形器形の900・901は外面を沈線で加飾する。口径は、900が15.4cm、901が18.0cmを測り、外面のみに降灰が熔着する。鉢C類950は、底部外面周縁に丁寧なケズリ調整を施し、倒位で焼成する。

壺類　小型で丸底の933・934が出土した。933は正位有蓋焼成で、倒位焼成の934は口径7.6cmを測る。

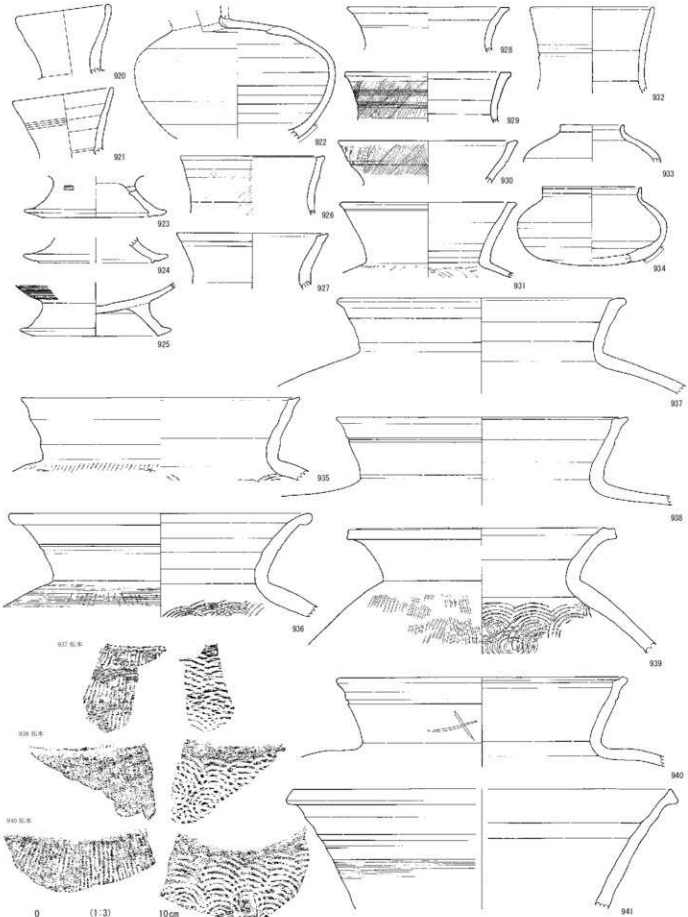
瓶類　920～932は瓶類で、うち920～922が平瓶、927・931が横瓶となる。920・921は口径7cm台を測り、口縁部はやや内湾する。922は器肉が薄く、閉塞円盤を残す。壺類の脚部片と考えられる923～925は、大きく外展し、内端で接地する。焼き割れが顕著な923は、外側から断面長方形の孔を不規則に3ヶ所穿つ。926～931は口縁端部を外側に肥厚させ、平坦に仕上げるのに対して、口縁部が直立する932は



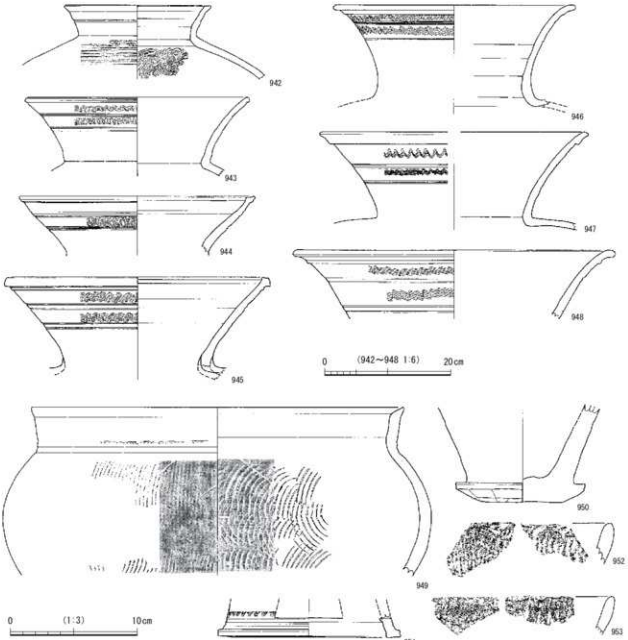
第91図　5・10号窯灰原出土遺物Ⅰ（S=1/3）



第 92 図　5・10 号窯灰原出土遺物 2（S=1/3）

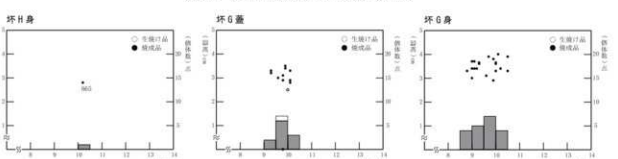


第 93 図　5・10 号窯灰原出土遺物 3 (S=1/3)



第 94 図　5・10 号窯灰原出土遺物 4（S=1/3、1/6）

第 23 表　5・10 号窯灰原実測坏 G 等法量分布表



端部が先細る。他に甕胴部片が出土した。

甕　935～940・942は口径19～22cmを測り、口縁端部は外側に肥厚する。940には焼成前に刻まれたヘラ記号「×」が残る。941・949は口径約30cmを測り、短頸の949は横に張り出した球胴形を呈する。大型甕943～948は、長くのびる口縁部を2条1単位2列の沈線と2列の乱れた波状文で加飾する。口径は、943・944が35cm前後、945～947が37～39cm、948が48.6cmをそれぞれ測る。

円面硯等　薄手の埴器形の902、円面硯951、平瓦様製品1273の破片の一部が出土した。902は、内外面にナデ調整を施した後に、一度刻んだ線刻を消し、粗い格子状に文様風の線を刻む。951・1273は後述する。

焼き台　877は、坏G身の器形をもつ。底部を焼成前に内側から穿孔し、焼き台(置き台)に用いる。

その他　奈良時代前葉に位置付けられる有台坏899が出土した。口径12.2cm、器高4.0cmを測る。

13. 2号窯　(第95～100・115図、第24～26・46～49・53表)

出土状況等　2号窯は、1号窯北側に単独に築かれた窯で、床面の補修は認められない。第18図で出土状況を示したとおり、窯体内床面、焚口、前庭部から出土した遺物は、整理箱で16箱(破片数2,811点)を数える。実測遺物は、主に焼成具合状況から第24表のa～e群に分類できる。窯体・焚口からの出土遺物は、a群が最終操業段階以前の焼成品または最終操業段階の焼き台(置き台)に、c～e群が最終操業段階の焼成品となる。また、大部分の瓶類・甕を含む酸化焔焼成のc・e群は、窯体内・焚口のみから出土しており、横瓶・甕類内面へのナデ調整の多用という特徴から、b・d 群とは胎土や製作単位が異なる可能性が高い。また、焼成具合でいえば、自然釉が熔着する個体は坏H身1065、坏G蓋955・980、高坏1110、平瓶1119等に限られ、5・10号窯と同様に外面に火だすき痕や黒化、降灰が認められる程度の焼成痕が残る。

器種構成　坏G、新器種の埴G、高坏、平瓶・提瓶・横瓶等の瓶類、甕に加え、少量の坏H、鉢、盤類、鉄鉢等の鉢類、壺類や、平瓦様製品(1269・70・72)・土馬(1280～85)の破片の一部、焼き台(1096・97)が出土した。量比は、口縁部計測法でみれば、坏Gが約62%の比率を占め、新器種の埴Gが約27%、甕が約5%、高坏が約2%と続く。食膳具の占める比率が全体の91%と極めて高率である中、坏Hと考えられる個体の比率は約0.3%にとどまる。また、破片数計測法でみれば、甕が約56%、坏Gが約21%、瓶類が約11%、埴Gが約7%の比率を示し、口縁部片の出土が少ない瓶類や、破損した焼成品や焼き台(置き台)転用が多い甕胴部片が比率を高める。

坏H　窯体中央付近の床面から1065(第18図取り上げ№43)、1066(同№34)が出土した。身1065は口径約11.5cm、器高3.5cmを測り、口縁部は直立気味に長くのびる。底部外面は、回転ヘラ切り後に比較的丁寧なナデ調整を施し、薄く自然釉が熔着する。身1066は口径約13cmを測り、口縁部は内傾しながら比較的長くのびる。いずれも焼成良好で、焼き台(置き台)の転用痕跡はない。

坏G　蓋954～982、身983～1033・1035～1064を図化した。基本的に1法量で、身1062のみ口径12.0cmを測る(第26表)。また、蓋982・身983は、焼成時のセット関係(蓋は倒位)が唯一確認できた出土品である。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向となる。蓋は、天井部～肩部外面に比較的丁寧な回転ケズリ調整を施して丸みをもった器形を基本とし、a～ c 群の中には各回転ケズリの単位がわかる角張ったケズリ調整を施す個体も存在する(954・962・976・966・971・982)。鈕は背が高く、口縁端部に近い内面返しは断面三角形状を呈する。法量は口径9.5～10.4cm、器高2.3～3.4cmに分布する。a群に属する957は、焼成前に細いヘラ状工具で「个」様の文様を連続して刻む。

身は、体部が直立する個体は1027等が確認できる程度で、体部が外傾しながら立ち上がる器形が大部分を占める。細部の器形では、985・1004・1028等の器形を主体として、底部が突出気味の身の深い器形(992・1036・1039等)や、扁平な器形(1031・1046・1051・1058等)も存在する。また、a～d群の中に、底部内面に圏線様の1～3条の細い沈線(成形時の目安としての爪先痕か、図版第54・55)が残る一群(983・985・986等23個体)が存在するが、この個体群と出土位置・焼成状況・器形との間に強い相関関係をみいだせない。基本的な成形は、外面が体部下半～底部周縁部に斜め方向にヘラ状工具を差し込んで回転ヘラ切りの後、底部に水平方向の幅広の回転ヘラ切りを行うため、体下部外面が明瞭に屈曲する。底部外面は回転ヘラ切り後、周縁部に粗いナデ調整を加える程度で、ヘラ切りで残った中心部の粘土をそのままにする個体が多い。特に1019は、粗雑な回転ヘラ切り痕をそのまま残す。内面は、体部と底部の境にやや強い回転ナデ調整を加える他、中央に軽く1方向のナデ調整を施す。法量は口径8.0～10.6cm、器高2.7～3.8cmに分布し、口径は9cm前半台、器高は3.5cm前後に中心をもつ。

1062はb群に属し、口径12.0cm、器高3.9cmを測り、明らかに法量帯が異なる。底部内面に圏線様の沈線痕が、底部外面にクシ状工具痕がそれぞれ残る他、外面全体が黒化することから有蓋となる。また、e群に属する1034は、底部内面中央に細い粘土紐を螺旋状に巻いた痕跡を残し(図版第55)、肉厚な台状を呈する底部切り離しに回転ヘラ切りを用いない。

埦G a～e群の全てで確認できる新器種で、1067～95を図化した。器形は、比較的小さい底部から体部が丸みをもって外傾しながら立ち上がり、中程で屈曲、直立または内湾気味の口縁部に至り、口縁端部が小さく外反する。底部の切り離し、ロクロの回転方向、基本的な成形・調整方法は、坏G身と同様であるが、体部下半にヘラ切りの目安とする回状にくぼんだ強い回転ナデ痕が顕著に残り、斜め方向で行う回転ヘラ切りの切り幅は比較的狭い個体が多い。器形とともに成形段階から底部切り離しの施工範囲を狭くする工夫と考えられる。また、1074・1087の口縁部外面に、埦G同士の重ね焼き痕が残ることから、無蓋器種となる。法量は口径9.4～11.0cm、器高3.3～4.4cmに分布(第26表)、比較的斉一性が高い印象を受ける。

高坏 高坏C(1098～1103)、高坏E(1104～08)、高坏D(1109・10)が出土した。高坏Cは脚端径7～9cmを測り、1099を倒位、1100を正位で焼成する。坏部が埦形を呈する高坏Eは、口径から2法量が確認できる。1104が口径14.4cm、器高11.6cmを、1105～07が口径12cm前後を測る。高坏Dの1109・10は前庭部から出土した。1109は高坏Eに準じた坏部をもち、坏部外面の稜を2段の沈線で簡略に表現する他、脚部に3方透かしを穿ったヘラ痕跡が認められる。1110は坏部の2段の稜を鋭くつくり、脚部を内面まで貫通する2方透かしと沈線で加飾する。1109を倒位で、1110を正位無蓋で焼成する。

鋺 筒形の身1113～15の他、図化した傾きに不安を残す1112も同類と考えられる。1113・14は口径約12.5cmを測り、体部上半を沈線で加飾する。薄手の脚1115は外面に稜をつくる。1113以外はc群である。

盤類 5・10号窯灰原出土品(第91図890)に類似した口縁部片2点が出土した(未実測)。

鉢類 鉄鉢1111と、叩き技法を用いる鉢B類1127が出土した。薄手の1111は口径14.3cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。1127は内面をナデ調整で仕上げる。

壷類 口径6.8cmを測る小型壷1116の他、短頸壷口縁部小片が出土したにとどまる。

瓶類 平瓶1119～22、提瓶1124、横瓶1125・26が出土、1119以外はc・e群に属する。b群に属する平瓶1119は、胴部外面上半にカキメ調整、底部外面に粗い回転ケズリ調整を施し、正位で堅緻に焼成される。1120～22はしっかりと屈曲する肩部を1条の沈線で加飾するのに対して、1123はゆるやかな肩部に仕上げる。また、1120にボタン状把手剥離痕が残り、1123には偏平なボタン状把手を付す。球胴形を呈する提瓶1124は、胴部の1側面を径約9cmの大振りな円盤状粘土で閉塞する。肉厚の横瓶1125・

第 24 表　2 号窯実測遺物焼成状況分類一覧表

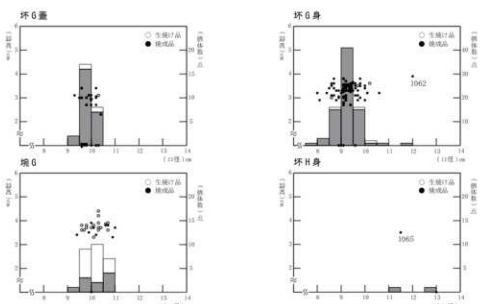
区 分	焼成状況の特徴	窯体・焚口出土	前庭部出土
a 群	焼成堅緻で、自然釉の溶着が著しい（焼き台転用）。	954, 958, 969, 970, 984, 1064, 1346, 1347, 1349, 1352, 1087, 〔957, 1025〕	1127, 〔960〕 前庭部溝：1096
b 群	焼成は良好で、主に淡灰・灰・暗灰色を呈する。自然釉が溶着する個体もある。	959, 961, 962, 963, 965～967, 971, 987～989, 991, 992, 994～996, 998, 1000·01, 1007, 1009, 1012, 1014～16, 1020～24, 1027, 1029, 1032·33, 1065·66, 1068·69, 1073, 1089, 1103～06, 1113, 1119, 1128, 1130·31, 1350, 1353	955, 956, 973～978, 980～983, 1002, 1036～63, 1098～1102, 1107, 1109·10, 1116, 1118, 1348, 1351
c 群	焼成は良好で、還元が弱く、主に淡黄橙・茶灰・茶褐色を呈する。自然釉の溶着個体はない。	964, 968, 985, 986, 990, 993, 997, 999, 1003～06, 1008, 1010·11, 1013, 1018·19, 1026, 1028, 1030·31, 1074, 1076, 1091, 1093·94, 1097, 1111, 1129, 1134·35	—
d 群	生焼または生焼けに近い焼成。主に淡黄灰・灰白・淡灰色を呈する。	972, 1017, 1067, 1072, 1078·79, 1083·84, 1086, 1092	979, 1035, 1070, 1080, 1095
e 群	生焼または生焼けに近い焼成。酸化焼成にとどまり、主に淡黄橙・茶橙・明橙色を呈する。	1034, 1071, 1075, 1077, 1081·82, 1085, 1088, 1090, 1108, 1112, 1114·15, 1117, 1120～26, 1132·33, 1136·1137	—

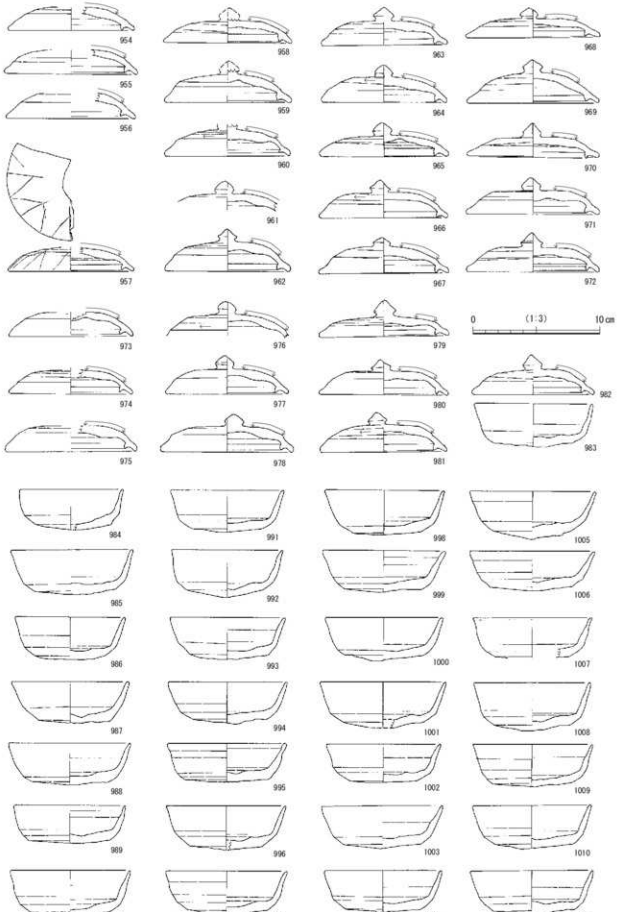
第 25 表　2 号窯出土遺物計測表

	計	坏H		坏G		鉢G 身	埦G	高坏	盤類	蓋類	壺類	甕類						
		蓋	身	蓋	身								大甕	中甕	小甕	その他一不明		その他一不明
口縁部計測法（口縁値）	3,850	0	10	722	1,942	28	832	76	1	41	14	15	0	72	70	1		28
口縁部計測法（補正口縁値）	3,128		10		1,942	28	832	76	1	41	14	15	0	72	70	1		28
比率（%）	100%		0.3%		62.1%	0.9%	26.6%	2%	0.0%	1.3%	0.4%	0.5%	0%	2.3%	2%	0.0%		0.9%
破片数計測法（点）	2,811	0	4	103	557	19	179	28	2	25	2	295	50	178	121	1,171		78
破片数計測法（補正点）	2,708		4		557	19	179	28	2	25	2	295	50	178	121	1,171		78
比率（%）	100%		0.1%		20.6%	0.7%	6.6%	1.0%	0.1%	0.9%	0.1%	10.9%	2%	6.6%	4.5%	43.2%		2.9%

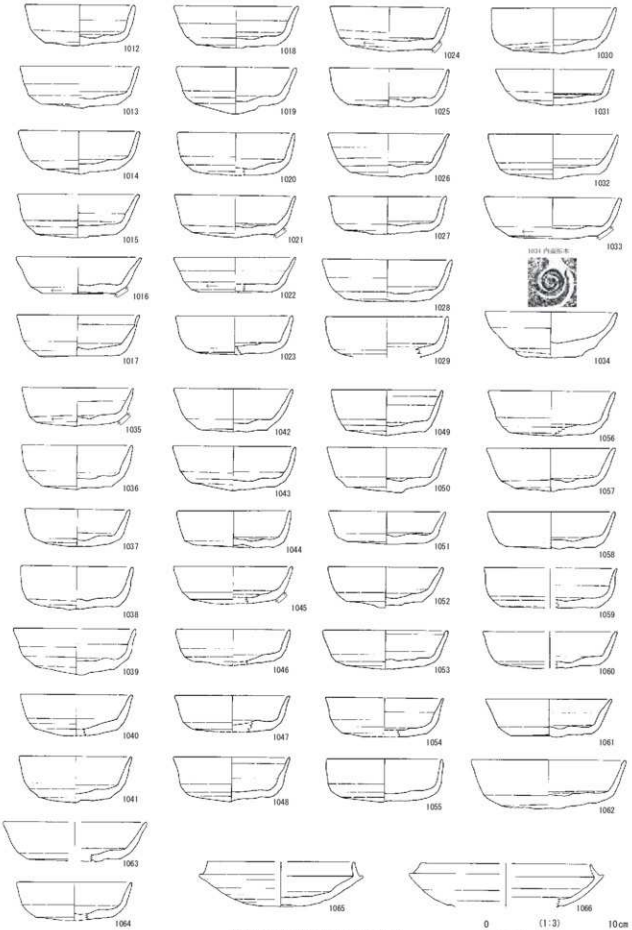
※口縁部計測法の口縁値は〇/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 26 表　2 号窯実測坏 G 等法量分布表

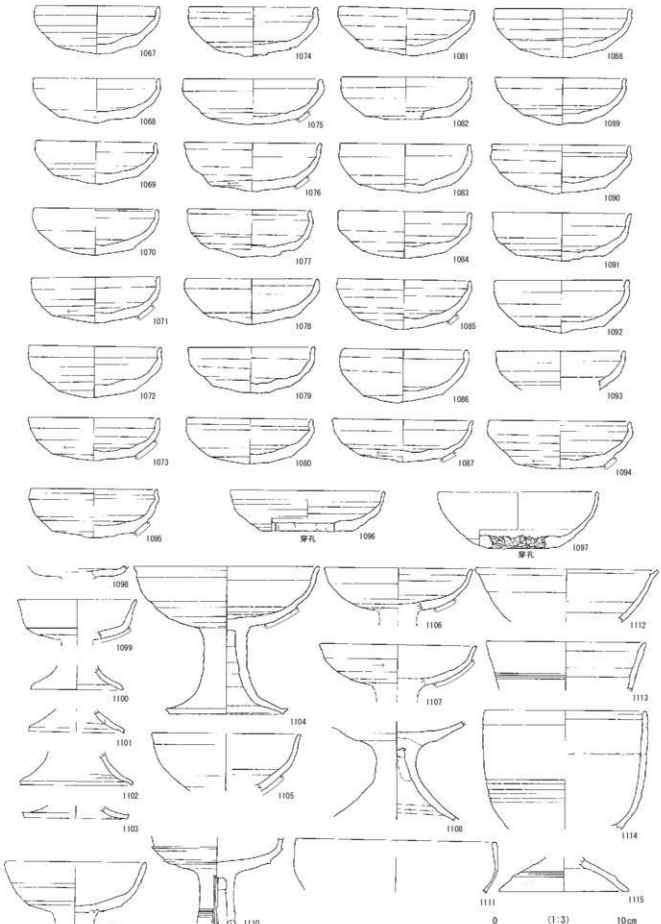




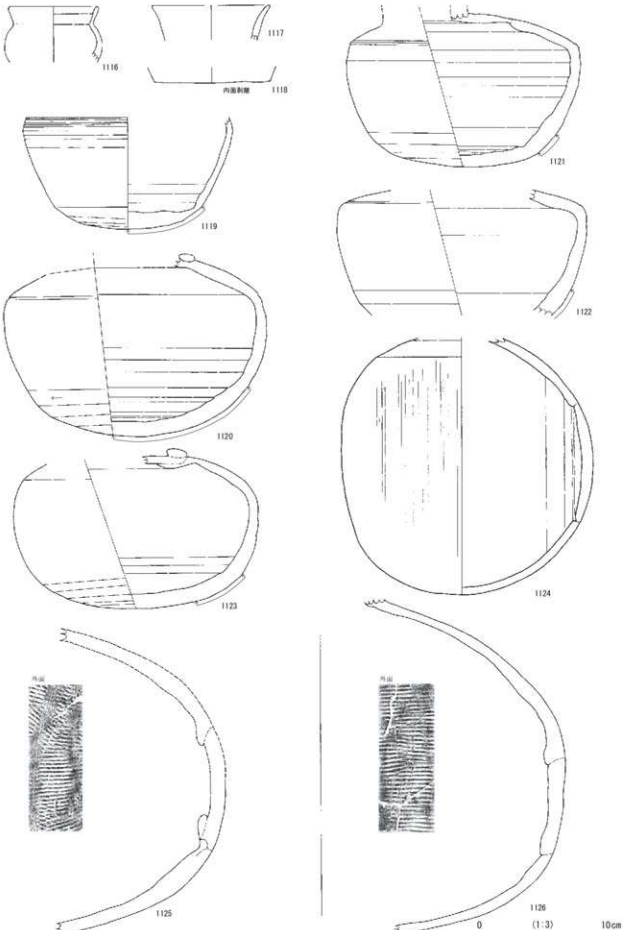
第 95 図　2 号窯出土遺物 1 (S=1/3)



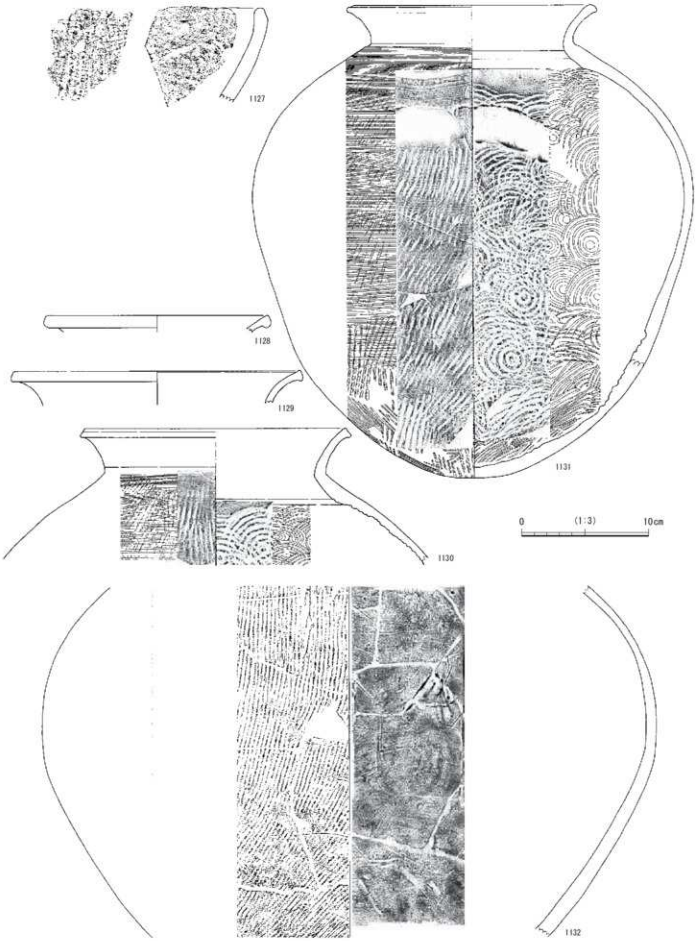
第 96 図　2 号窯出土遺物 2 (S=1/3)



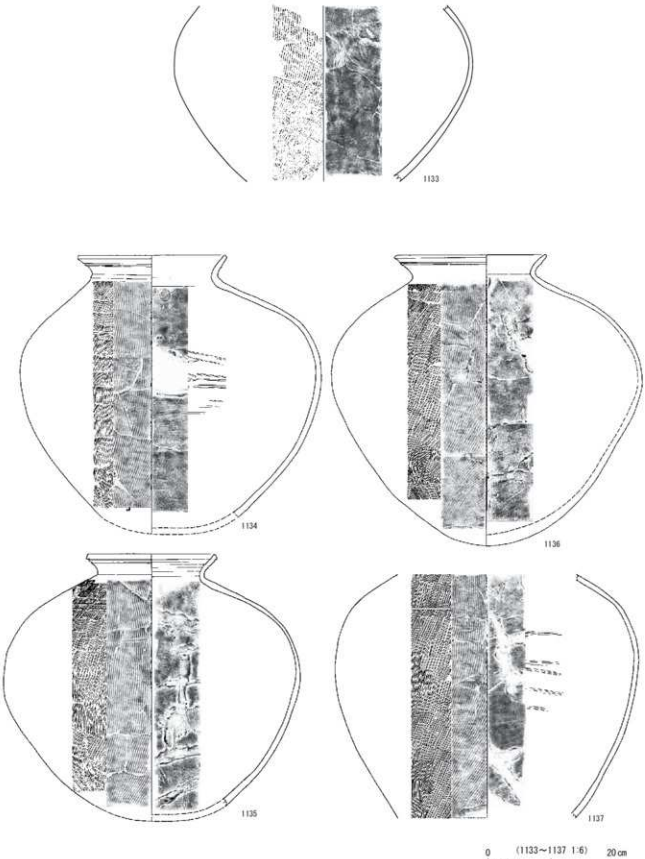
第97図　2号窯出土遺物3（S=1/3）



第 98 図　2 号窯出土遺物 4 (S=1/3)



第99図　2号窯出土遺物5（S=1/3）



第100図　2号窯出土遺物6（S=1/6）

1126は、胴部内面を甕1132～37と同様にナデ調整で仕上げる。

甕　1128～37を図化、1128・1130・1131がｂ群、1129・1132～37がｃ・ｅ群に属する。口径は17～23cm台に分布し、全形のわかる1131が口径18.7cm、器高37.0cm、1136が口径23.5cm、器高45.2cmを測る。1130・31が口縁端部を外側に肥厚させるのに対して、1134～36は口縁部外面に低い突帯を巡らす。また、ｃ・ｅ群に属する1132～37は、胴部内面全体に粗いナデ調整を施す点で共通する。

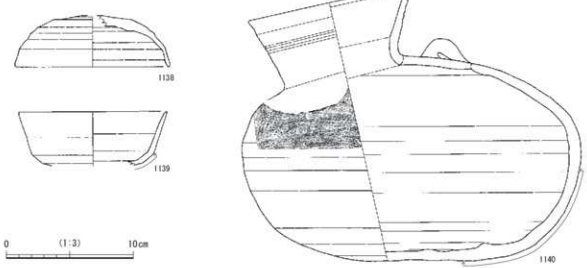
焼き台　専用焼き台（置き台）として、焼成前に底部穿孔を行った1096・97が出土した。前庭部溝出土の1096は口径12.0cm、器高3.0cmを測り、埦Gの底部をヘラ状工具で丸く穿孔する。焼成具合から正位で使用したと考えられる。1097は口径12.4cm、器高4.4cmを測り、基本器形は埦Gである。底部の穿孔は上方から工具先端で突き刺しながら粗く行い、底部外面が剥離する。顕著な焼成痕はない。

土馬等　窯体内・焚口から焼き台（置き台）に転用した平瓦様製品1269・70・72の破片の一部や、土馬1280～85及び小破片38点が出土した。第15項で説明する。

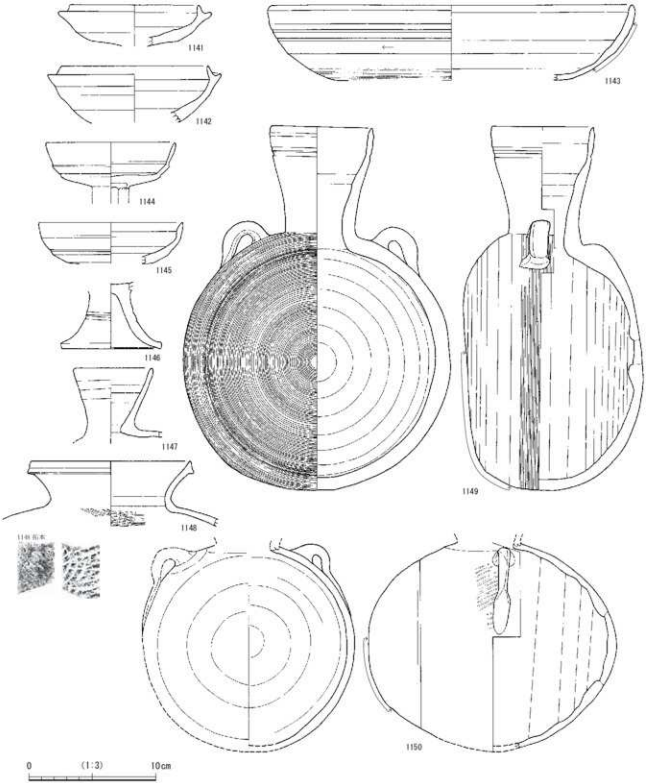
14．その他の遺構　（第85・101・102・114図、第49・50表）

9号窯流入土　9号窯は、築造途次で放棄された窯である。窯体掘削部分に流れ込んだ土砂より坏H、鉢G、平瓶、甕等の須恵器片約40点が出土、うち第101図1138～40、第114図1321～26を図化した。焼き歪みをもつ坏H蓋1138は口径12.0cm、器高4.0cmを測り、肩部に斜め方向の回転ヘラ切り痕をそのまま残す。鉢G身1139は口径11.6cmを測り、体部は直線的に立ち上がる。大型の平瓶1140は復元口径13.0cm、復元器高21.7cmを測り、底部は1枚の粘土板を指ナデで成形する。底部周縁～胴部中程外面は、平行叩きの後に丁寧な回転ケズリ調整を施す。また、胴部上端を円盤状粘土で閉塞し、小振りな環状把手をつける。

竪穴状遺構　7-1・2号窯と11号窯の間に位置し、出土遺物から7-2号窯に関連した施設と考えられる。覆土から坏類、高坏、瓶類、甕等、約100点の須恵器片が出土しており、うち第85図765、第102図1141～50を図化した。第85図765甕小片で、外面はカキメ調整の後に波状文を施す。坏H身1141は口径10.0cmと口径の縮小化が進む。1142は器肉が厚く、深身の器形を呈する。有台・薄手の大型盤1143は口径28.4cmを測り、体部は内湾する。外面に粗いケズリ調整を施した後、底部にハケ調整、体部に沈



第101図　9号窯流込土出土遺物（S=1/3）



第 102 図　竪穴状遺構出土遺物（S=1/3）

線を加える。高坏Dの1144は口径10.1cmを測り、段状を呈する2段の稜で加飾する。1145は埦G、生焼けの1146は高坏Cである。平瓶1147は閉塞円盤が残り、焼き台(置き台)に転用したため破断面に自然釉が熔着する。焼成堅緻な横瓶1148の口縁部は、下端が断面三角形状に肥厚する。環状の把手を付す提瓶1149は口径8.0cm、器高28.6cmを測り、焼き歪みや器面の剥離が認められる。生焼けの提瓶1150の胴部は俵形を呈し、接着面を長くとる優美な環状把手を付す。胴部は両面閉塞と考えられ、片側の閉塞円盤内面のみに粗いナデ調整を加える。他に7-1号窯出土の坏H蓋510、7-1・2号窯灰原出土の横瓶599、7-2号窯出土の横瓶742、8号窯出土の甕765、平瓦様製品1271、円面硯1277と接合する破片が出土している。

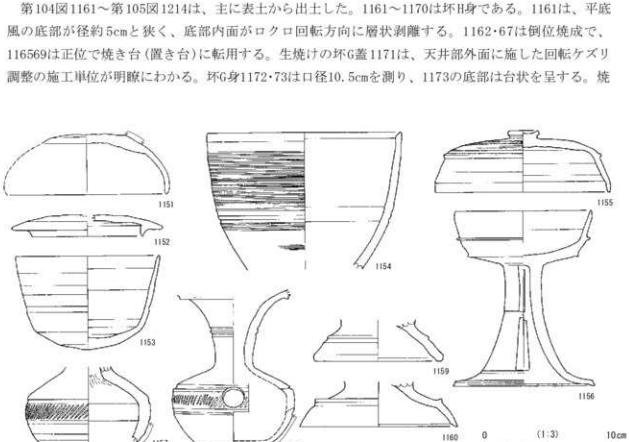
15. 包含層、陶棺、円面硯、土馬等

第2・3次調査包含層等（第103～108図、第50～52表）

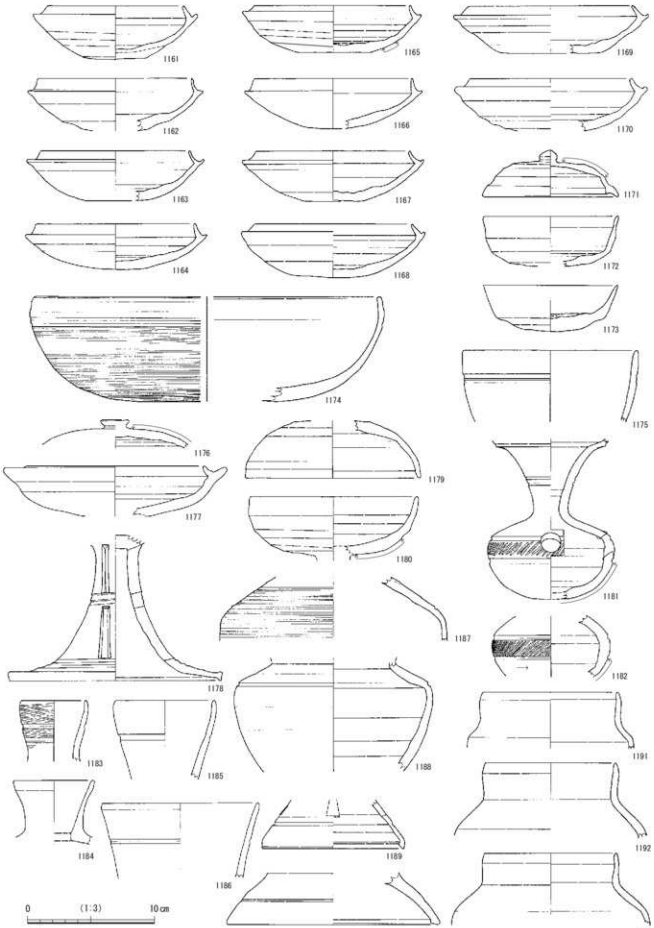
第2・3次調査で試掘トレンチ、包含層等から整理箱で約29箱の遺物が出土した。

第103図1151～60は、1～3号トレンチから出土した。坏H蓋1151は、平坦な天井部外面にクシ状工具痕が残る。鋺G蓋1152は口径11.9cmを測り、外面全体に熔着した自然釉のため調整は不明である。鋺類身1153は丸底で、底部外面に丁寧なナデ調整を施す。口径11.2cm、器高7.4cmを測る。図上復元した1154は口径15.1cmを測り、焼成は良好である。偏平な鈕を付けた高坏A蓋1155は、口縁端部が直立する。高坏Bの1156は口径10.7cm、器高13.7cmを測り、坏部外面の2段の稜を鋭く仕上げる。鼎1157は、胴部中程を丁寧な沈線と斜行刺突文で加飾する。鼎1158の外面には、透明感のある淡灰オリーブ色の厚い自然釉と焼土が熔着する。1159・60は筒型の鋺の脚部の可能性をもつ。

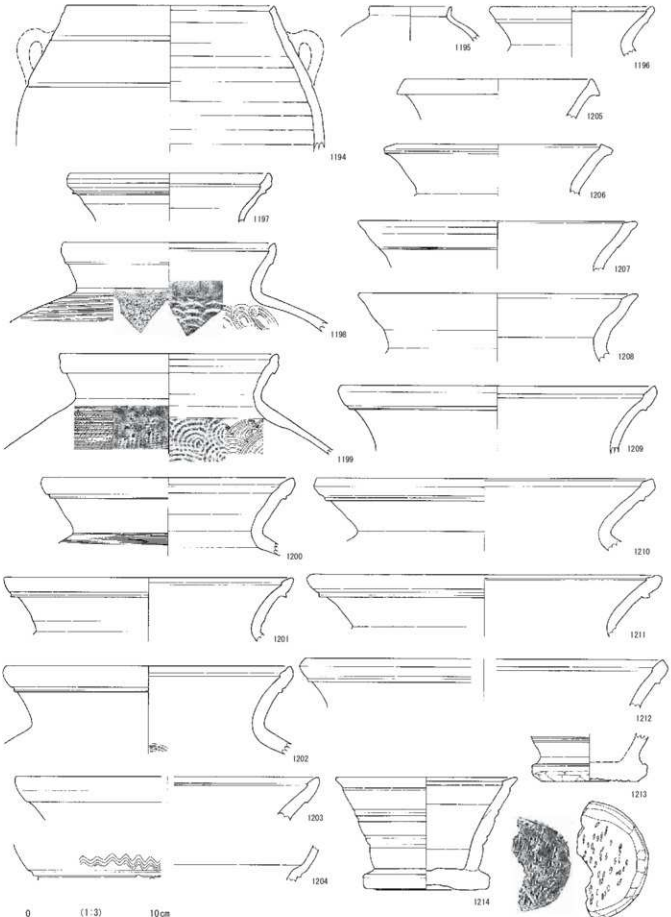
第104図1161～第105図1214は、主に表土から出土した。1161～1170は坏H身である。1161は、平底風の底部が径約5cmと狭く、底部内面がロクロ回転方向に層状剥離する。1162・67は倒位焼成で、116569は正位で焼き台(置き台)に転用する。生焼けの坏G蓋1171は、天井部外面に施した回転ケズリ調整の施工単位が明瞭にわかる。坏G身1172・73は口径10.5cmを測り、1173の底部は台状を呈する。焼



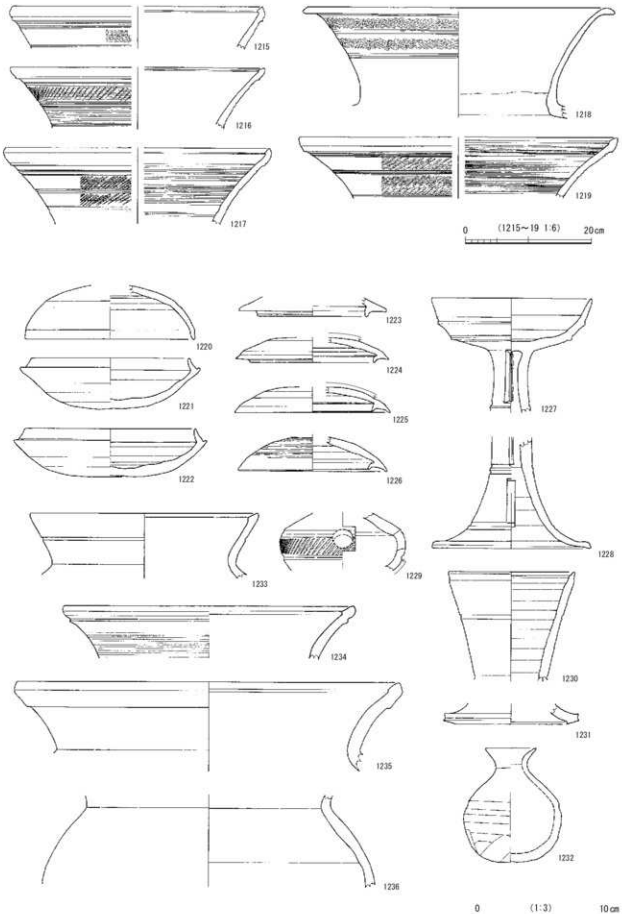
第103図　1～3号トレンチ出土遺物（S=1/3）



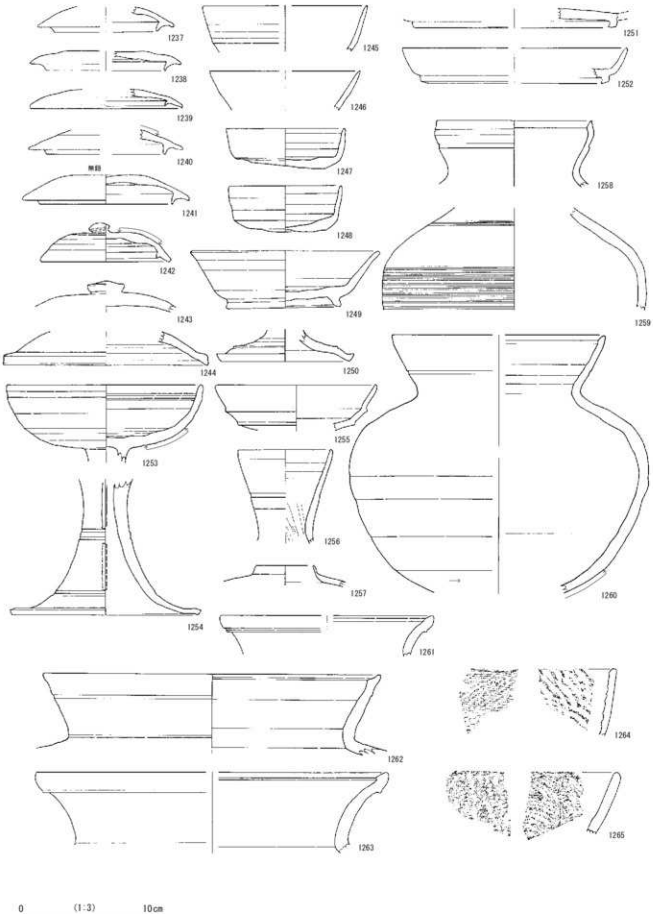
第104図　6・7号窯付近出土遺物1（S=1/3）



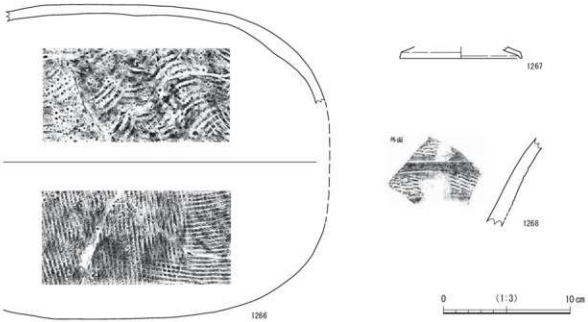
第105図　6・7号窯付近出土遺物2（S=1/3）



第106図　6・7号窯付近出土遺物3（S=1/3、1/6）



第107図　表土・撹乱土出土遺物Ⅰ（S=1/3）



第108図　表土・撹乱土出土遺物2（S=1/3）

き歪んだ大型盤1174は口径約27cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がる。底部内面全体にナデ調整を、外面にカキメ調整と沈線を、それぞれ施す。筒形の鉢の身と考えられる1175は口径13.6cmを測り、内外面とも降灰が著しい。1176～78は高坏Aである。蓋1176の天井部内面には同心円叩き痕がわずかに残る。灰色を呈する身1177の口縁部の特徴は、10号窯出土品（第90図845）と共通する。また、脚部との接合部に同心円叩き痕が残る。1179は坏H蓋、1180は高坏E坏部である。鼎1181・82の斜行刺突文は、やや粗い印象を受ける。1183・84は平瓶である。1183は口径5.0cmを測り、外面をカキメ調整と沈線で加飾する。1184は焼き台（置き台）に転用したため、外面に他個体片が熔着する。口縁端部が内湾気味の1185は、自然釉の熔着が目立つ。1186は、内面も降灰するため、瓶と考えた。瓶1187・88は肩部が張る。1189・90は長頸瓶の脚であり、1189は317と同一個体の可能性が高い。1190は未図化だが台形透かしを穿った痕跡が残る。小型壷1191～93は口径約10cmを測り、直立する口縁部は端部でやや内傾する。鉢G類の1194は、肩部に環状把手の剥離痕が残る。小型壷1195は口径6.4cmを測り、有蓋の可能性をもつ。1196は瓶類、1197は壷類と考えられ、1197は口縁端部が内外に肥厚し、下端に突帯をつくる。1198～1212は甕口縁部片である。口縁部形態は、肥厚するもの（1198・99）、肥厚した口縁下部に突帯をつくるもの（1200・01・10等）や、口縁端部が断面三角形を呈するもの（1205）、口縁端部を横方向にのばすもの（1207・08）が確認できる。1214・15は厚底の鉢C類である。1214は口径14.2cm、器高8.8cmを測り、外面のみに自然釉が熔着する。内面が剥離する1213は、7-1・2号窯灰原出土品（第80図612）と同様に、底部外面に刺突と周縁部のケズリが認められる。大型甕1215～1219は口径39cm以上を測り、1218は口縁端部が横方向に長くのびる。また、1215・18が沈線と波状文で、1216・17・19がカキメ調整と沈線、斜行刺突文で、それぞれ加飾する。

第106図1220～32は撹乱層から出土した。1220は坏H蓋、1221・22は坏H身で、1222は焼き割れが目立つ。鉢G蓋1223～26は口径12cm前後を測り、1226は天井部外面にカキメ調整を施す。1227・28は脚部に2方2段の透かしをもつ高坏Bである。焼きのあまい1227は口径12.5cmを測り、稜頂部は鋭さを欠く。1228は倒位で焼成される。鼎1229は、正位で焼成したため肩部の降灰が著しい。提瓶と考えられる1230は口径9.8cmを測り、口縁端部は先細る。ほぼ完形の小型壷1232は口径3.9cm、器高9.0cmを測る。外反する口縁部は先細り、底部外面に手持ちケズリ調整を施す。1234・35は甕、1236は壷である。

第107図1249・55～58・60～65、第108図1268は表土等から出土した。1237～41は鉢G蓋である。1239は口縁端部を小さく下方に折り曲げ、自然釉が厚く熔着する1241は無鈕である。坏G蓋1242の外面には、径約9cmの重ね焼き痕が残る。1243・44は8世紀後半代の有台坏蓋で、1243は天井部内面が使用に伴い平滑となる。1245・46は奈良時代の有台坏で、1246は小片のため傾きに不安を残す。1247・48は、箱形を呈する坏G身である。1249は奈良時代前葉の有台坏で、口径14.5cm、器高4.5cmを測る。1251・52は奈良時代後半の有台盤で、台部を内屈気味につける。高坏Eの1253は口径15.3cmを測り、外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。1254・55は高坏Bである。1254は、2方2段の透かしを穿ち、脚端部の面取りは鋭い。1255は、自然釉の垂れ具合から横位置に近い置き方で焼成した可能性が高い。長頸瓶1256の内面には、成形時の絞り痕が明瞭に残る。無蓋の小型壺1257は口径4.6cmを測る。1258・60は壺Aで、口縁端部に内傾した平坦面をつくる。甕1262は口径26.5cmを、1263は口径約27cmを測る。1264・65は鉢C類小片で、1265は生焼けのため磨滅する。なお、未実測だが、石鏃、緑色凝灰岩片（図版第59）、鉄鉢口縁部片1点が出土している。

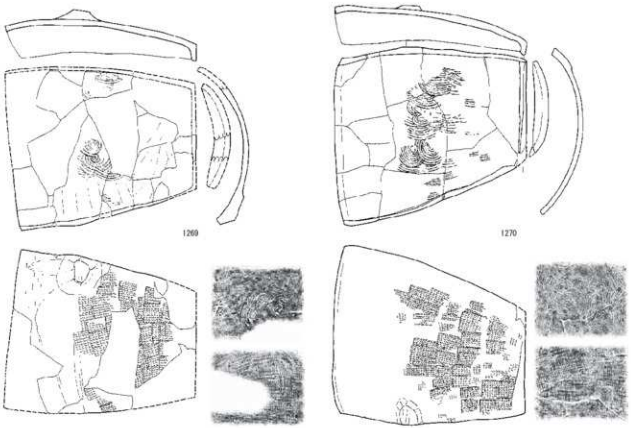
平瓦様製品　第109図1269～1272は、用途が不明な平瓦様の焼成不良品である。法量は、長辺29～30cm、短辺21～25cmを測り、比較的ゆるやかな規制のもと製作されたようだ。胎土・調整が共通することから、1個体の把手付大型鉢を鋭利なヘラ状工具で4分割したものと考えられる。元となった鉢は、体部下半を内面同心円・外面格子状の叩きで、上半を横方向の板状工具を用いた粗いナデにより成形する。分割面は、大部分が切断痕をそのまま残し、一部にヘラ状工具による粗い面取りを加える。また、分割時に、把手は接合面から切り落とされ、底部は完成品の曲面にあわせて不要部分を切断する。

接合した各破片は点在しており、1269が2号窯窯体内・前庭部（焼き台（置き台）転用含む）・同灰原、7-2号窯床面・前庭部、11号窯煙道部流込土等から、1270が2号窯窯体内・前庭部（全て焼き台（置き台）転用）、7-2号窯床面から、生焼けの1271が11号窯流込土、竪穴状遺構から、1272が2号窯床面・前庭部（焼き台（置き台）転用含む）等から、それぞれ出土した。これらから、4点とも7-2号窯で焼成・破損し、1271が11号窯等に流れ込み、残る破片の半数程度が2号窯に持ち込まれて焼き台（置き台）に転用した可能性が高い。また、同製品の状況から、11号窯→7-2号窯→2号窯の操業順序が復元可能である。

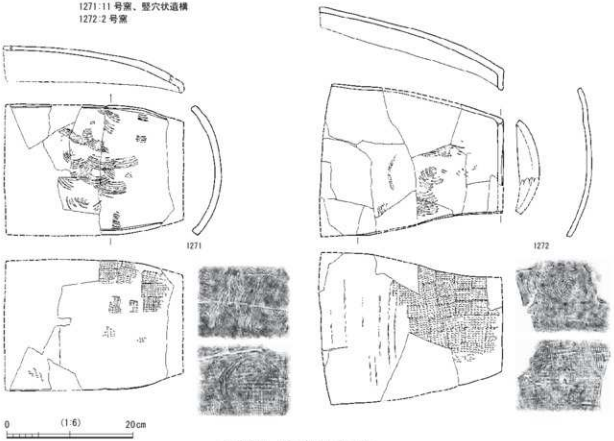
陶棺　須恵質の陶棺身1273については、第110・111図1273～1275を図化した他、小片約15点が出土した（図版第60）。図化した破片は、大きく2破片群に分かれ、両破片群に接点がないため、図上でおおよその位置関係を復元してある。

色調は、暗灰～灰色を基調とし、生焼けに近い脚部を含む底部付近は淡黄灰色を呈する。外面の降灰・黒化の状況から、別作りの蓋を被せて焼成したと考えられる。形態は、叩き技法を用いることもあり、曲面で構成されており、平面形態が隅丸・胴張りの亀甲形を、断面形態が底部と側部の境が丸く、上縁（口縁部）が内傾気味の略半円形をそれぞれ呈する。また、外面には突帯等の装飾文様が認められない。残存法量は、長さ80cm以上、幅41cm（復元幅約82cm）、高さ約43cm、器壁の厚さ1.5cm前後と比較的小型であり、以下で述べる理由から、一体作りの陶棺と考えられる。

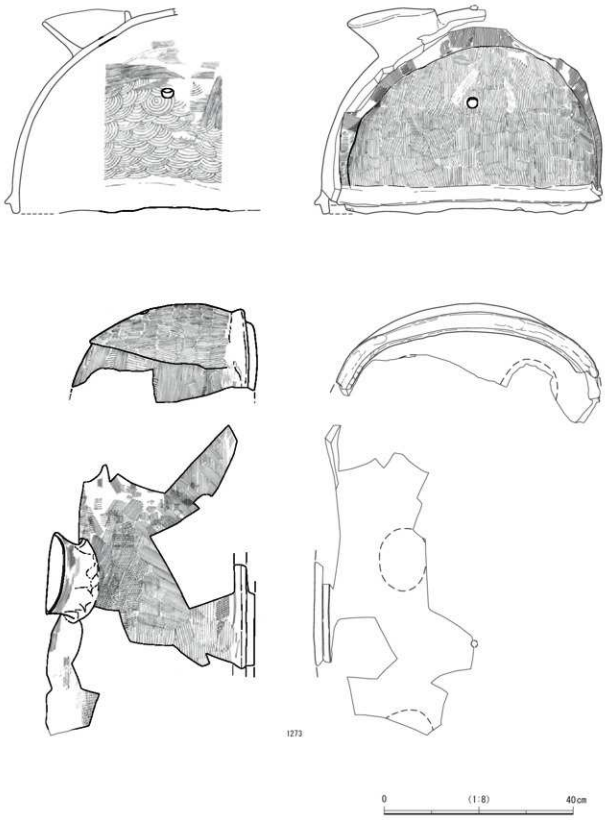
身の成形は、須恵器技法を用いて別個に作った、長側面・底部の部品（以下、部品1）と、短側面の部品（小口面側。同、部品2）を接合しており、接合箇所は2つの部品の曲面が不整合であるため、外面は段状を呈する。部品1の成形は、短側面と接合する側（第110図上側）を下として、粘土帯（表面観察で幅約10cm）を叩き技法を用いて円筒状に積み上げて成形し、外面に粗い板状工具を用いた粗いナデを加える工程が復元できる。また、部品2は、倒位で成形した大型甕様の個体から必要部分を切り取ったもので、成形に際して叩き締めを丁寧に施す。部品1の内面に残る粗く密なハケ調整の範囲が、部品2や脚部との接合箇所付近に集中する状況から、他部品の接合の際にハケ調整を多用したと考えら



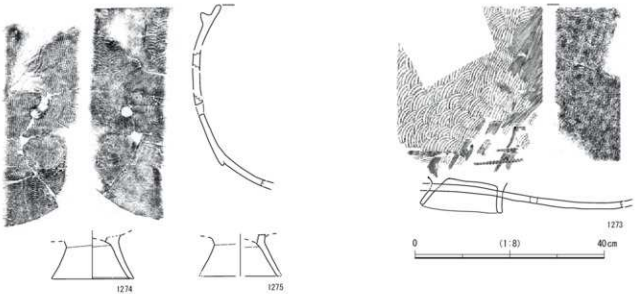
1269:2号窯、7-2号窯、11号窯、6-7号窯
1270:2号窯、7-2号窯
1271:11号窯、竪穴状遺構
1272:2号窯



第109図　平瓦様製品（S=1/6）



第110図　陶棺1 (S=1/8)



第111図　陶棺2（S=1/8）

れ、部品1中央寄り（第110図下側）の密なハケ調整も、他部品との接合痕を示す可能性が高い。この場合、長側面・底部の部品は、1つの円筒形を積み上げた後、縦方向に2分割して接合し、その後、甕として製作した両短側面（小口面）の部品を接合したと考えられる。都合4つの部品を接合して身本体を作った後、蓋受け部を上面が水平となるように粘土紐を貼り付け、平坦な上縁（口縁）部とともに粗いナデ調整（一部ヘラ状工具によるナデ調整）を施す。また、部品1底部中央付近と、部品2中心線上に各1ヶ所の円孔を穿ち、後者は外側から穿たれた径約2.5cmの円孔となる。陶棺身の破片は、7-1・2号窯灰原の他、7-1号窯焼成室床面、7-2号窯窯体内、5・10号窯灰原、6・7号窯表土、11号窯窯体流込土、撹乱層から出土しており、うち7-2号窯窯体内出土の1破片、7-1・2号窯灰原出土の1破片、5・10号窯灰原出土の4破片、11号窯窯体流込土出土の1破片が焼き台（置き台）に転用される。

また、身本体の成形後、若干の粘土で補強しながら、身本体の曲面にあわせながら脚部を貼り付ける。部品1の底部外面には脚1基がほぼ残存、2ヶ所に脚部貼り付け痕が、部品2の底部外面2ヶ所には脚部貼り付け痕が、それぞれ残る。復元できる各脚の間隔は、長軸方向で約30cm、短軸方向で約22cmを測り、脚の配置は4行2列の可能性が高い。部品1に残存する脚部片は、1274・75とともに生焼けである。脚部は、脚端部に向けて直線的に広がり、高さ8～9cm、裾端部径約17cmを測る。1273・75には、接地面外縁をヘラ状工具で丁寧に整形した痕跡が残る。おそらく、各脚部を倒位でロクロ成形し、外面にカキメ調整を施したと考えられる。脚部片の出土地点は、1274が7-1・2号窯灰原、6・7号窯表土、11号窯窯体内から、1275が5・10号窯灰原から出土している。身部破片の出土状況を加味すれば、11号窯または7-1号窯で焼成した蓋然性が高い。

円面硯　第94図951、第112図1276～78の5点が出土した。5・10号窯灰原出土の圏足円面硯951は、焼成堅緻で脚径12.5cmを測る。脚端部を直線的に面取りし、外面を2条の浅い沈線状の凹みと波状文で加飾後、下辺幅約5.5cmの台形透かしを4方に穿つ。倒位で焼成しており、内面に降灰が認められる。

1276は、6号窯焼成室床面、7-2号窯窪み、7-1・2号窯灰原、11号窯流込土から破片が出土し、焼き台（置き台）への転用は認められない。同胎土で法量の異なる2個体の円面硯を正位に重ね焼きしており、外面には厚く自然釉が熔着する他、焼き割れが顕著である。下方の硯（1276-1）は、硯面径15.6cm、脚端径17.8cm、高さ4.9cmに復元でき、上方の硯（1276-2）とほぼ同法量の硯面を逆位で端正な脚に貼り付ける。本来の硯面（出土品の下面）は、陸・内堤・海・縁の各部をしっかりと表現する。硯面（本来の硯面

裏面)は、径約5.5cmの円盤状の粘土板に幅約2cmの粘土紐を三重に巻き付けた痕跡をそのまま残し、円面硯の製作技法を考える上で好資料となる。縁部は、最も外側の粘土紐を断面方形に丁寧に整形し、一回り大きく1条の沈線で加飾した脚部を外展して付ける。焼き歪みの大きい上方の硯(1276-2)は、硯面径11.7cm、脚端径14.0cm、高さ3.6cmに復元でき、1276-1の硯面を保護するために重ね焼きしたものと考えられる。ナデ調整が施された硯面裏側には、硯面側からの刺突3ヶ所が認められ、脚端部は外側に大きく折れ曲がる。焼成・胎土は1277と近似する。1277は、7-2号窯窯体内・前庭部、7-1・2号窯灰原、竪穴状遺構から破片が出土、7-2号窯で焼成した製品と考えられる。正位で焼成しており、焼き歪むとともに外面には自然釉が厚く熔着する。硯面径14.4cm、脚端径15.3cm、高さ5.7cmに復元でき、縁部は断面三角形状を呈する。また、直立気味の脚外面2ヶ所を2条1単位の沈線で加飾、肥厚した端部には焼土片・焼き台片が熔着する。

圏足円面硯1278は、6・7号窯周辺から出土した。脚端径25.0cmを測り、外面を1条の突帯で加飾した後に、下辺が低い台状を、上方が円形を呈する透かしを穿つ。

土馬　焼成良好な陶馬片は細片を含めて53点が出土、うち第112図の13点を図化した。いずれも飾馬と考えられ、調整・胎土・焼成等から4つのグループに分けられる。

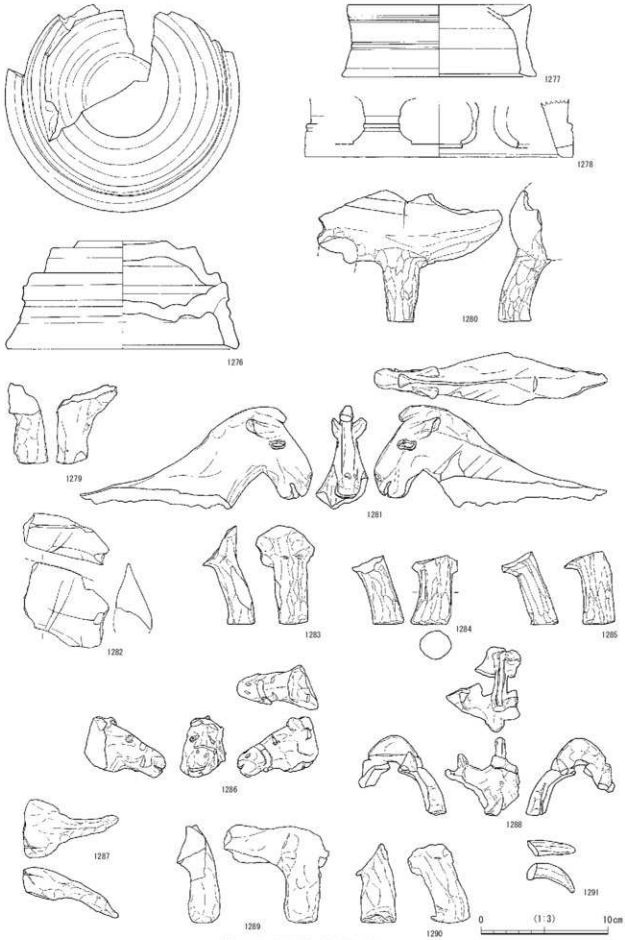
1279・88・89・90は、粘土紐で馬具を表現するグループである。灰白～淡灰色を呈し、胎土に細砂と少量の大型礫が混ざる点で共通する。1288は粘土紐で鞍部をつくり、中実の左後脚1289は鞍部または尻繋を表現した粘土紐が欠落する。また1279・89・90の脚は粗いナデ調整で仕上げ、接地面は丸味をもつ。1279が11号窯流込土、1288が6・7号窯周辺、1289が7-1号窯焼成部流込土、1290が7-1・2号窯灰原、未実測の小破片1点が7-2号窯から、それぞれ出土した。2つ目のグループには、7-1号窯焼成部流込土から出土した1286が属する。胎土中に粗砂と多くの礫が混ざり、左面に自然釉が薄く熔着する。粘土紐で耳・立髪・鏡板を、また刺突により目・鼻・口を表現する。

細い線刻で馬具を表現する1280～85(・91)のグループは、1280～85及び小破片38点が2号窯前庭部・窯体内から、1291が5号窯床面から、それぞれ出土した。実測遺物は、中空と考えられる胴部を指ナデ調整後に線刻する点、脚や尾部をヘラ状工具で丁寧に面取りする点、脚接地面を丁寧に平坦に仕上げる点、粘質で粗砂と少量の礫が混ざる胎土を用いる点で共通する。1280は細い線刻で鞍部を、1281は粘土で耳・立髪、ヘラ状工具により目・鼻・口、左側のみ細い線刻(4条残存)で手綱または体毛を、1282は粘土で立髪、細い線刻で手綱または鞍部を、それぞれ表現する。1287のグループは胎土中に粗砂・礫が多く混ざり、垂れ下がる尾部を指ナデで粗く仕上げる。左上半に細い線刻2条が残り、片面のみ馬具を表現した可能性をもつ。1286・89と同様に7-1号窯焼成部流込土から出土した。

胴部落とし残欠　図版第62に示した21点が出土、うち叩き痕を残す個体は10点を数える。瓶類や甕の胴部と口縁部を接合する際に、胴部の不用な粘土を鋭利なヘラ状工具で切り落とした残欠で、切り取りの見込み線が残るものもある。いずれも不整形な弧状を呈し、長さ4～10cmを測り、規則性に乏しい。切り落とし後、そのまま瓶類・甕本体とともに焼成されたと考えられ、他個体との熔着痕を残す個体はない。出土地点は、1・2・5・11号窯窯体内から各1点、10号窯窯体内から3点、4号窯灰原から1点、6・7号窯灰原から8点、8号窯前庭部から1点、包含層等から3点となり、散見する印象が強い。

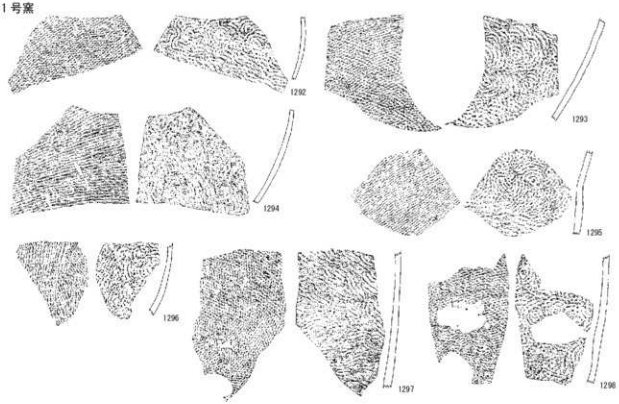
16. 小結　(第116～123図、第27・28表)

遺構・遺物の状況等　第1～3次調査で確認した須恵器窯は、操業を行った窯10基、築造中途以前に放棄された窯2基(3号窯、9号窯)の計12基を数える。操業した窯については、1度の操業で放棄された窯から11号窯のように何度も床面の補修を行いつつ操業を続けた窯が存在する他、灰原から最終操業段階以前

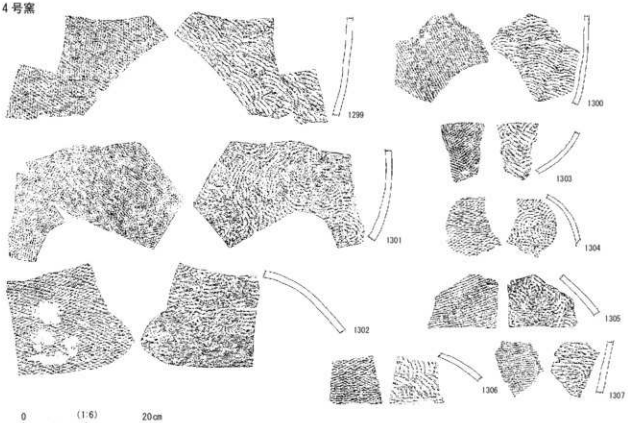


第 112 図　円面硯・土馬（S=1/3）

1号窯



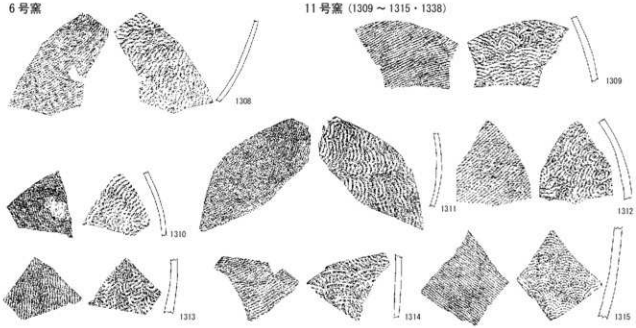
4号窯



第113図　甕類1（S=1/6）

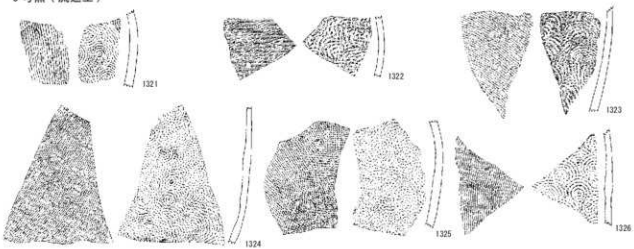
6号窯

11号窯（1309～1315・1338）

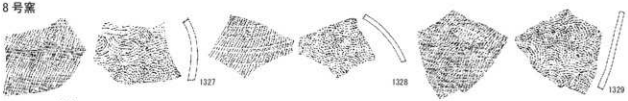


7-1号窯

9号窯（流込土）



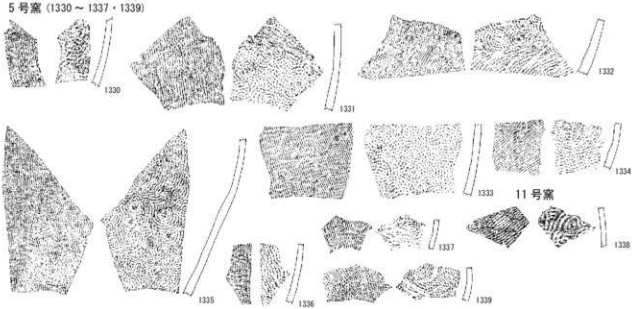
8号窯



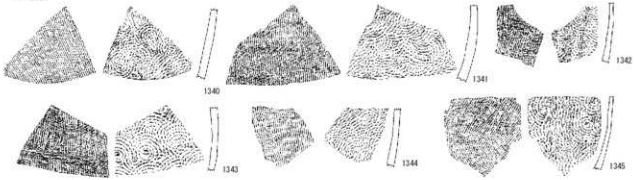
0 (1:6) 20cm

第114図 甕類2（S=1/6）

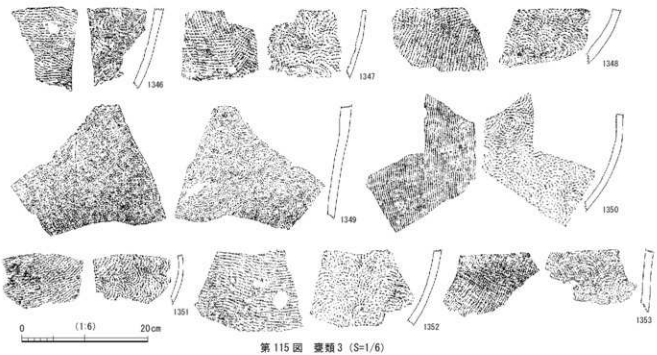
5号窯（1330～1337・1339）



10号窯



2号窯



第115図　甕類3（S=1/6）

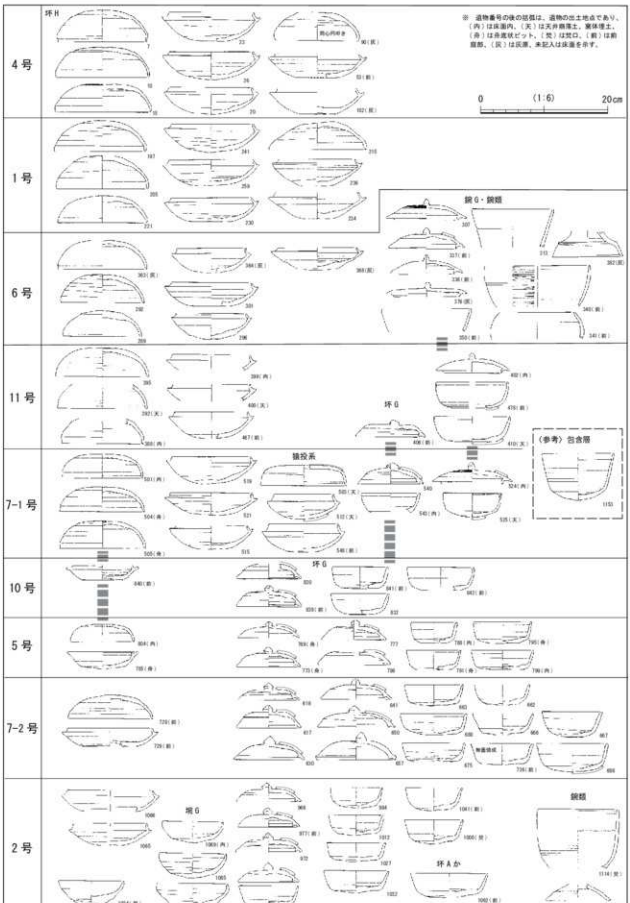
の多量の焼成失敗品が出土した窯もある。本来なら、各窯の操業段階を十分踏まえた変遷を示すべきであるが、窯を単位とした坏・埦類、高坏に主眼を置いて、変遷の様相を整理したい。

まず、第1節で述べた窯体・付属施設の切り合い関係から、6号窯から11号窯に、7-1号窯から7-2号窯に、7-1号窯から8号窯に、10号窯から5号窯に、それぞれ前後関係をもって操業が行われたことがわかる。また、出土遺物の接合関係から、4号窯から1号窯(第56図42横瓶)、11号窯から7-2号窯・2号窯(第109図平瓦様製品)という操業順序が復元できる。さらに、窯体の規模・プラン(第122図)から、①全長13m以上を測り、焼成部中央付近に最大幅をもつ大型・胴張りの窯で、窯尻に作業用と考えられる小規模な溝が付くタイプ(1・4号窯)、②全長約11.7mを測る寸胴形のタイプ(6号窯)、③全長10m前後を測る胴張り気味の窯で、窯尻に大がかりな溝が付くタイプ(7-1号窯・8号窯・11号窯)、④全長8m前後を測り、奥壁が直立して煙突状を呈する小型のタイプ(2号窯、5号窯、7-2号窯、10号窯)に大別でき、未焼成の3号窯は①のタイプに、9号窯は④のタイプに属する。これらに、出土遺物の様相を加えて、4号窯→1号窯→6号窯→11号窯→7-1号窯→8号窯→10号窯→5号窯→7-2号窯→2号窯という変遷過程案を考えた(第116～121図)。以下では、a期(1号窯、4号窯)、b期(6号窯)、c期(11号窯、7-1号窯)、d期(10号窯、5号窯)、e期(7-2号窯、2号窯)の5小期に分けて説明を行なう[10]。

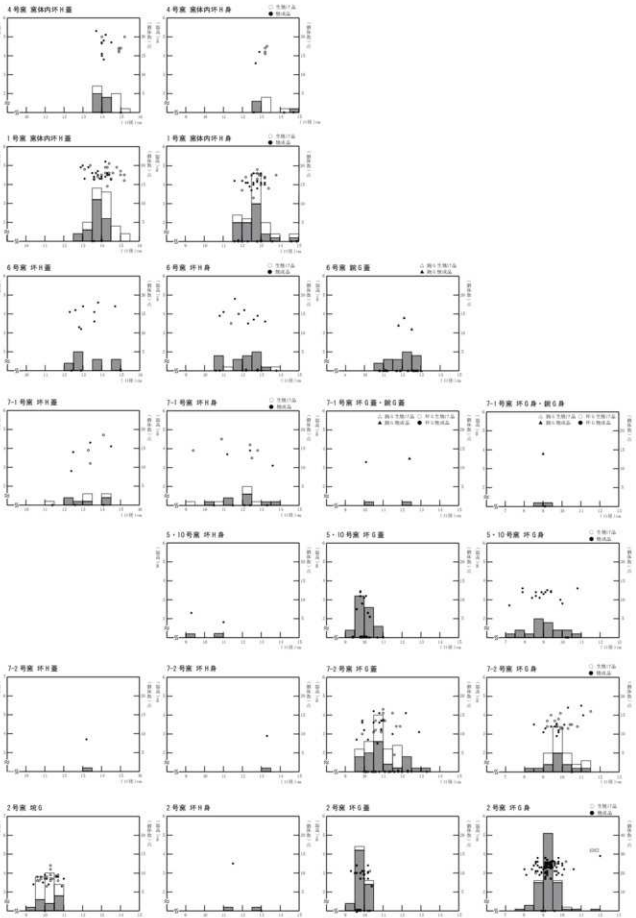
坏・埦類　坏H、金属器写しの鉢G(及び鉢類)、鉢Gに祖形をもつ坏G、無蓋の埦Gを対象とする。坏H、坏G、埦Gの成形・調整は、底部(蓋は天井部)の切り離し面を小さくするため、体下部にヘラ状工具を差し込んで斜め方向の回転ヘラ切りを行って、余分な粘土を削りとり、その後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを施す、2工程の回転ヘラ切りが認められ、原則、坏G蓋以外は仕上げの回転ケズリ調整を行わない。

a期は、1法量の坏Hで構成される。底部(蓋は天井部)は、前述の2工程の回転ヘラ切りにより比較的狭く、丸みをもつ器形を主体に、体部(蓋は肩部)が直線的にのびる器形(第116図53・90等)が客体的に存在する。底部(蓋は天井部)外面の調整は、4号窯が周縁部に粗いナデ調整を施す程度であるのに対して、1号窯は中心部を含めた範囲に粗いナデ調整を施す。また、両窯とも底部外面にクシ状工具痕が残る個体が定量認められる。蓋は、4号窯は口縁基部で明瞭に屈曲する形態が主体で、中には口縁端部が小さく外反する個体もあるのに対して、1号窯では口縁端部が外反する個体は生焼け品を中心に明らかに減少傾向を示す。また、1号窯出土遺物(90)の天井部内面には、高坏A類と共通する同心円叩き痕が残る。身は、内傾する口縁部が反り立ち、受け基部下方に回転ナデ調整を加えるため、受け端部が小さく上方に折り曲がる形態が主体である。焼成良好品の法量[11]は、蓋は4号窯が口径13.6～14.6cm・器高3.7～5.3cm、1号窯が口径12.9～14.5cm・器高4.3～5.2cmに、また身は4号窯が口径12.2～13.0cm・器高3.6～4.2cm、1号窯が口径11.6～13.6cm・器高3.6～4.2cmに分布(第27表)、1号窯の口径が1cm程度小さい法量帯までを含む。

b期は、1法量の坏Hと、金属器写しの鉢G・鉢類で構成され、埦Gは未確認である。鉢G・鉢類は、口縁部計測法で約20%の比率(坏Hは同約47%)を示し、器種として確実に定着する。坏Hの成形・調整は、a期と基本的に同様であるが、2工程の回転ヘラ切り後、体下部～底部周縁部(蓋は肩部)にやや丁寧なナデ調整を加え、さらに底部(蓋は天井部)にクシ状工具を用いた仕上げナデを多用する。蓋は、a期で主体をなした口縁基部が明瞭に屈曲する個体は限られ、前述のナデ調整を加えることで、より丸みをもった器形を呈する。身は、蓋と連動した器形となり、口縁部が短く内傾し、受け部が体下部から連続する傾きを保持する形態が増える傾向を示す。法量は、蓋が口径12.3～13.8cm・14.7cm、器高3.1～4.6cmに、身が口径10.6～13.2cm、器高3.5～4.2cm・4.8cmに分布する。身で口径10cm後半台を測る個体が現れるように、a期よりも中心的な口径分布域が明らかに縮小する(第27表)。鉢Gは、第4項で



第 116 図　坏・埦類変遷図 (S=1/6)



第27表　主要窯法量分布表

述べたとおり、身の深い金属器写しの鋺類を含めた蓋と身のセット関係に不明な部分を残す。定型的な器形を呈する蓋は、天井部外面に丁寧な回転ケズリ調整またはカキメ調整を施し、やや崩れた乳頭形または擬宝珠形の小振りな鈕を付す。法量は、口径10.8～13.0cm、返し径7.5～10.0cm、器高2.3～3.8cmを測る。

c期は、出土遺物が少ないものの、坏Hを主体に少量の鋺Gと坏Gで構成される段階である。また、7-1号窯で東海地方猿投系の器形・調整の特徴をもつ坏Hが数個体確認でき、主流の器形とならないものの直接的な技術移入をうかがうことができる。猿投系以外の坏Hの成形・調整は、b期と同様であり、7-1号窯でみる法量も、やや扁平とはなるがb期と同法量帯に分布する。鋺Gの様相もb期と同様と考えられる。身は、底部外面に丁寧な回転ケズリ調整を加え、数法量が確認できる。新たに出現する坏Gは、11号窯は前庭部出土品(406)等に限られ、7-1号窯でも坏Hに比して、かなり低い量比であった可能性が高い。

d期の坏・埦類は、斉一性の高い坏Gを主体とした構成に大きく転換し、法量を含めて坏Gを模した少量の坏Hが残存、鋺Gは未確認となる。坏Gの量比は、参考値とはなるが5号窯(灰原除く)の口縁部計測法で約87%と極めて高い比率を示す。坏Gの蓋は、天井部～屑部外面の広い範囲に比較的丁寧な回転ケズリ調整を施すことで、丸みをもった器形に仕上げ、背の高い鈕を付す。身は、外面が2工程の回転ヘラ切りに伴い体下部で明瞭に屈曲する。また、内面の体部と底部との境に強い回転ナデ調整を加えることで、体部が直立した箱形器形をつくりだす。底部外面は粗いナデ調整を加える程度で、中心部等に回転ヘラ切り痕をほぼ残す。5号窯の法量で、蓋が口径9.4～10cm強・11cm弱、器高2.5～3.5cmに、身が口径7.2～9.9cm・10.8cm、器高2.7～3.6cmにそれぞれ分布し、基本的に1法量と考えられる。客体に転じた坏Hは、坏Gの蓋身を逆転したような器形を呈し、蓋天井部～屑部の屈曲や、身底部外面がナデ調整にとどまること等から、坏G身と区別可能である。法量帯は、坏Gと重複し、c期に比して大きく縮小する。有蓋焼成を原則としつつも、5号窯床面出土の坏G身で、身同士の重ね焼きが確認できる(図版第50)。

e期は、d期に引き続いて坏Gを主体とし、2号窯で新たに無蓋の埦Gが加わる。d期に残存した小型の坏Hは未確認となる。なお、7-2号窯前庭部出土の坏H(728・729等)、2号窯窯体床面出土の坏H(1065・66)といった、口径11cmを超える坏Hが器種組成に加わる可能性は、出土量の面からも低いと考えられる。坏Gの成形・調整は基本的にd期と同様であるが、7-2号窯で蓋の天井部外面に手持ちケズリやナデ調整を行う個体(618・629・639等)や、器形・胎土から別系譜と考えられる個体(657・686等)が少量確認できる。斉一性の高いd期とは異なり、製作単位の「個性」や「クセ」が顕在化した印象を受ける。身は、d期に比して内面の体部と底部との境に施す回転ナデ調整が弱くなり、2号窯では箱形・扁平な器形より体部が外傾した器形が主体となる。焼成良好品の蓋の法量は、7-2号窯が口径9.1～11.5cm・12cm台、器高2.9～4.2cmに、2号窯が口径9.5～10.4cm、器高2.3～3.4cmに、身の法量は7-2号窯が口径8.5～10.5cm・11cm台、器高3.3～4.2cmに、2号窯が口径8.0～10.6cm、器高2.7～3.7cmに、それぞれ分布する。窯毎に現れ方に差をもつが、口径分布の中心域はd期より大きくなる。また、7-2号窯出土の736(正位・無蓋焼成)や、2号窯出土の1062(有蓋、口径12.0cm) は、後につながる別器種(坏A)の可能性をもつ。2号窯で加わる無蓋の埦Gは、口縁部計測法で約27%の量比を示す(坏Gは約62%)。器形は、丸みをもって外傾する体部が中程で屈曲、直立または内湾気味の口縁部に至り、口縁端部が小さく外反する。成形・調整は坏Gと同様であり、口径9.4～11.0cm、器高3.3～4.4cmを測る。なお、有台器種となる金属器写しの坏Bは確認できない。

高坏　器形からA～E類に分け、A類が有蓋長脚・3方2段透かし、B類が無蓋長脚・2段透かし、C類が無

蓋低脚・無透かし、D類がB類の縮小化した器形、E類が無蓋埴形長脚・無透かしとなる(第117図)。伝統的な器形であるA類がd期まで、D類がe期(B類はc期)まで存続し、d期に定着するC・E類と併存する。この伝統的な器形をもつA・D(・B)類の残存状況は、古墳への供献等の非日常的需要を如実に反映したものと考えられる。

a期は、A類・B類で構成され、4号窯の口縁部計測法で約2対1の量比を示す。また、A類が蓋を被せたセットを倒位で焼成するのに対して、B類は正位での焼成と、両類はc期まで厳格に焼き方を区分ける。A類は、蓋天井部または身坏部内面に同心円叩き痕を残す個体が多い。蓋は、扁平な鈕が付く器形を基本に、1号窯で無鈕の個体(268)が出土した。肩部の稜表現は4号窯より1号窯が丁寧で、法量は口径15～16cm・器高5cm台を測る。身は、内傾する口縁部をもつ坏部を丸く仕上げ、口径13～15cm台、器高18cm前後、脚端径14～18cm台を測る。脚部の装飾は、沈線と幅の狭い3方2段透かしを施し、4号窯では上段の透かしが内面に貫通していないもので占められる。B類は、外傾する坏部外面に2段の鋭い稜を表現し、脚部の装飾は4号窯が3方透かし、1号窯が2方透かしと、b期以降につながる区分けが始まる。法量は、4号窯が口径13cm弱～15cm台、脚端径11～12cm台に、1号窯が口径13cm強、脚端径11～12cm台を測る。なお、灰原出土の高坏C類(125)は、胎土等から他窯焼成品と考える。

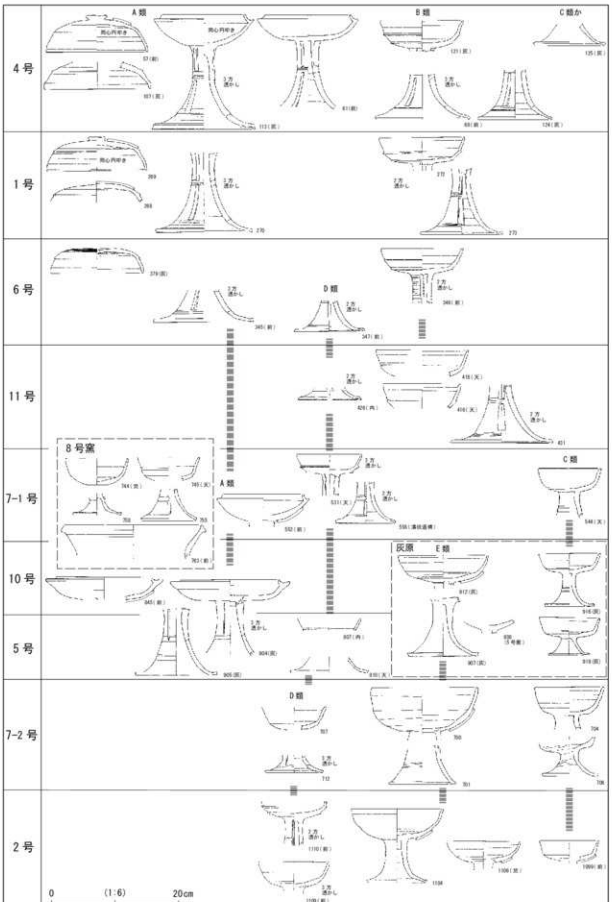
b期は、A類、B類に加え、B類が縮小化した器形をもつD類が出現する。脚部の装飾は1号窯の様相を継承し、A類が3方2段透かし、B類・D類が2方2段透かしである。A類の蓋(379)は灰原出土であり、無鈕でカキメ調整を施す。脚部(345)は脚端径15.6cmを測る。B類(346)は口径12.8cmを測り、脚部にカキメ調整を施す。D類(347)は脚端径11.0cmを測り、沈線と透かしでしっかりと加飾する。

c期は、11号窯がb期と同様のB類・D類(及びA類)の組成が想定できるのに対して、7-1号窯ではA類・C類・D類の組成に変わる。11号窯のB類坏部は口径12・14cm台を測る。坏部の稜表現は簡素化し、条数も1条にとどまる。B類(431)が脚端径16.2cm、D類(426)が同13.3cmを測り、ともに倒位で焼成する。7-1号窯のA類(552)は口径12.6cmを測り、坏部外面に回転ケズリ調整を施す。D類は、b期にみられた坏部の稜表現や脚部の装飾を堅持するものの、531が3方透かし、558が2方透かしと、透かし数の厳格性は低下する。531が口径10.3cm、558が脚端径9.2cmを測る。C類は埴形に近く、脚部を沈線で飾る。

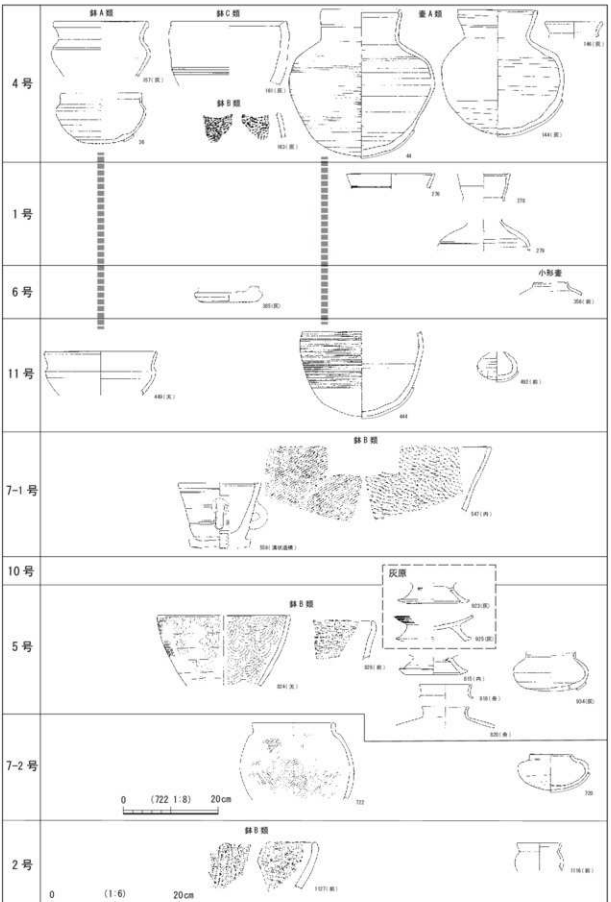
d期は、A類・D類に加え、C類が定着、新たにE類が加わる。有蓋のA類は、坏部の口径が15cm台に拡大し、脚の3方透かしを上段のみに線刻様に施す等、別類ともいえる器形に変わる。また、A類坏部のみの器種も確認できる(第121図523)。D類は、5号窯から小片が出土したにとどまる。C類は器種として定着、箱形を呈する坏部下端と脚部を沈線で加飾する。新たに出現したE類は、内湾しながら外傾する体部下半に回転ケズリ調整を施し、長い脚を付ける。口径は13～14cm台、脚高約8cm、脚端径約11cmを測る。

e期は、C～E類が確認でき、A類は欠落する。D類は、坏部がE類に近い器形を呈し、坏部の2条の稜を沈線で表現すること(第117図1109)や、脚部の透かしを線刻様の1段とすること(1110)等、装飾の簡略化が進む。また、脚部の透かし数は、1110が2方、712・1109が3方と、c期の様相を継続する。C・E類は確実に定着、E類は大型埴とした700を含めると、口径約12・14・16cm台の3法量が確認できる。

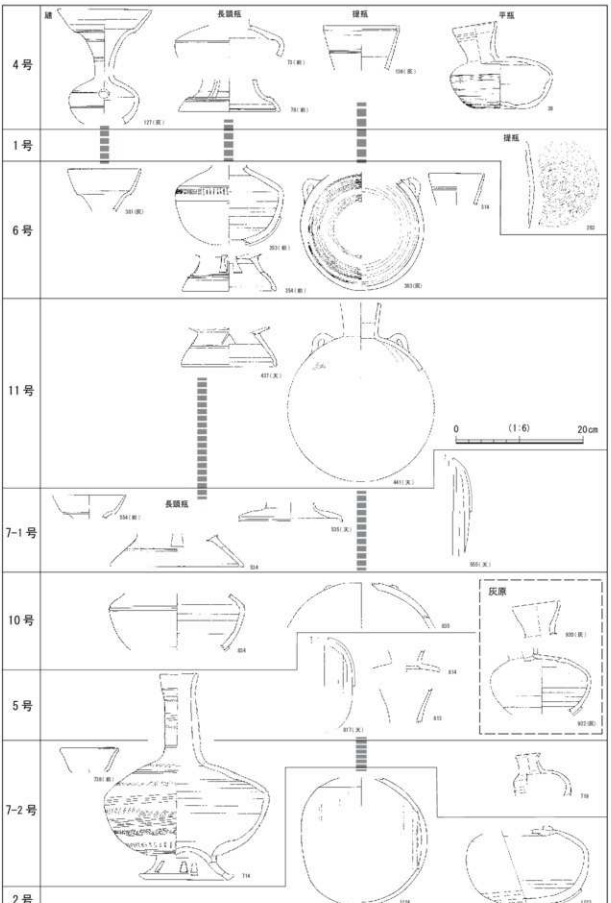
焼成方法等　自然石や窯壁片、坏H、瓶・甕胴部片転用の焼き台(置き台)利用がみられる中、d期の5・10号窯灰原から第121図877、e期の2号窯から同図1096・97といった、坏・埴類の底部を穿孔した専用焼き台が出土するが、量産した状況にはない。また、焼成品の焼きあがりは、a～c期が淡灰オリーブ～緑灰色の自然釉が顕著に溶着し、灰白～淡灰色または灰～暗灰色に発色した個体が多い。e期以降は、器面に火だすき痕や黒化が残る程度のくすぶった淡灰～灰色に発色する焼成品に転ずる。窯体の小型化(第122図)で端的に表れる、焼成方法の大きな転換が想定できる。製作単位については、7-2



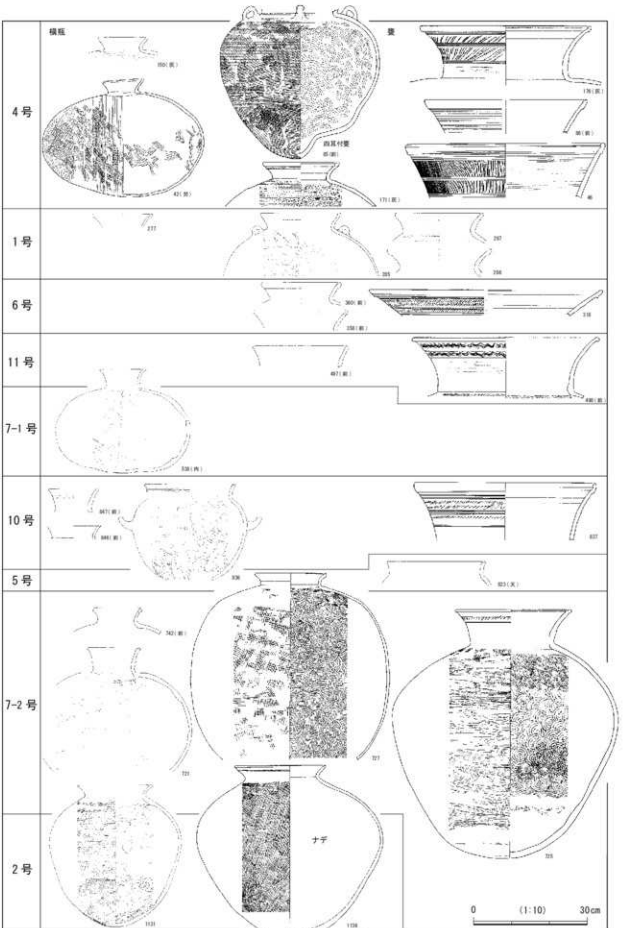
第 117 図　高坏変遷図 (S=1/6)



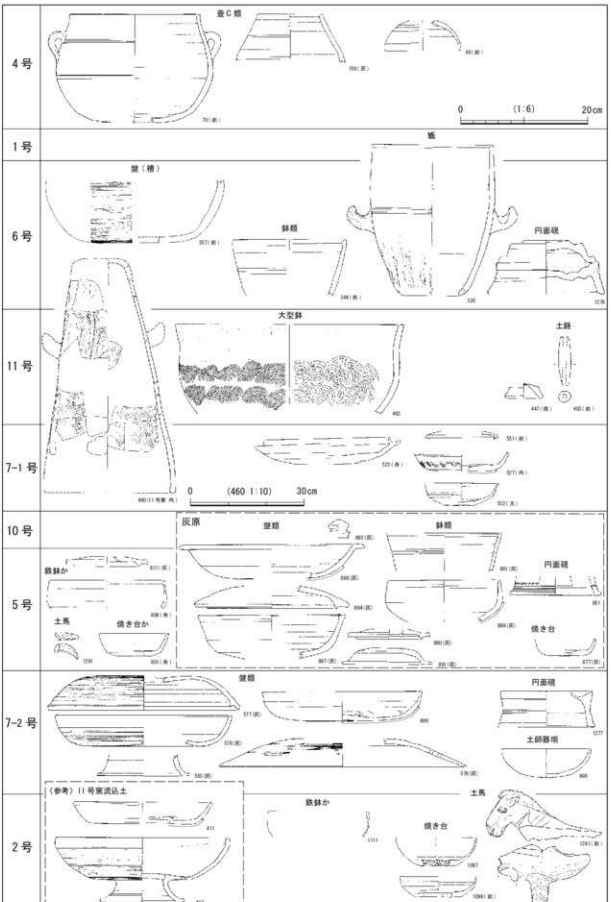
第118図　鉢・壺類変遷図 (S=1/6・1/8)



第119図　瓶類変遷図 (S=1/6)



第 120 図　横瓶・甕変遷図 (S=1/10)



第121図　盤類他変遷図（S=1/6・1/10）

号窯、2号窯の窯体内焼成品に、貯蔵具を中心に橙色に発色する焼成品群があり、器形等からも複数の製作単位が確認できる(後述)。

小結　田嶋明人氏をはじめとする北野博司・木立雅朗・望月精司各氏が、窯跡群、窯構造や土師器を含めた食器組成を基に示された北陸地方の須恵器生産の研究成果[6]との対比の中で、a～d期の位置付けを考えたい。田嶋氏による土器編年(以下、田嶋氏編年)によれば、古代Ⅰ期の須恵器は器種組成に金属器写しや、平瓶等の新器種の出現を指標とし、坏G出現の前後でⅠ$_1$期・Ⅰ$_2$期に、さらにⅠ$_3$期を精製品である鋺G・鋺類出現の前後で古相、新相に細別する。古代Ⅱ期の始まりは、坏A・B、埦Gの出現を指標の柱とし、坏A・坏Bの定着以前をⅡ$_1$期、数法量よりなる坏A・坏Bの定着以後をⅡ$_2$期、坏Aの無蓋化・坏Bの内面返しの消失を指標にⅡ$_3$期を設定する[7]。

a期(4・1号窯)は、坏Hを中心とした斉一性の高い器形をもつ高坏A類・B類、鉢A類・C類、壺A類、瓶類(鏡、長頸瓶、提瓶、横瓶)、甕に、新たに少量の平瓶や四耳付甕、金属器写しの壺Gが加わる組成で、鋺G・鋺類は未確認である。坏Hは、底部(蓋は天井部)を2工程の回転ヘラ切りで切り幅を狭くし、底部外面(蓋は天井部)調整が粗いナデ(一部クシ状工具によるナデ)にとどまる点に特徴をもち、回転ヘラ切り後に回転ケズリ調整を行う個体や、蓋口縁端部に平坦面をもつ個体は確認できない。また、貯蔵具では鉢A類や壺A類、提瓶を定量焼成する一方、壺Gは窯体内から出土しておらず、一過的な少量焼成との印象が強い。口径40cm以上の大型の甕は、長くのびる口縁部外面を刺突文、ハケ、カキメ、沈線等の多様な技法で加飾する。4・1号窯の坏H類の様相は、坏Hに回転ケズリ調整を施す小松市二ッ梨10-A号窯より後出し、加賀市分校3号窯第2次焼成品(第121図、第28表)と類似、田嶋氏編年Ⅰ$_3$期古相に位置付けられる。

b期(6号窯)は、坏H、高坏A類・B類、鉢C類、瓶類(鏡、長頸瓶、提瓶、横瓶)、甕に、新たに金属器写しの鋺G及び身の深い鋺類、高坏B類が縮小化した高坏D類が加わる組成となり、第121図の大型盤、有溝把手をもつ甑、鉢類、円面硯が少量確認できる。坏Hを主体に、定型的な器形をもつ鋺Gが確実に組成に加わる一方、伝統的な器種である高坏A類、鉢A類、壺A類は量比を減じるようだ。坏Hは、2工程の回転ヘラ切り後にやや丁寧な回転ナデ(及びクシ状工具による仕上げナデ)を多用することで、a期より丸い器形を呈する。法量は、身の口径で10cm後半代を測る個体が確認できる等、a期よりも中心的な口径分布域が明らかに縮小する。また、高坏B類・D類は、c期につながる2方透かしの装飾を維持する。b期の様相は、田嶋氏編年Ⅰ$_3$期新相に位置付けられ、小松市戸津六字ヶ丘2号窯(第121図、第28表)と類似する。戸津六字ヶ丘2号窯との比較でいえば、6号窯の坏Hの口縁部の法量帯が、より縮小化した状況を示す他、鋺Gの鈕形態が異なり、興味深い。なお、第122図のとおり、窯体の規模・プランは大きな転換をみせる。

c期(11・7-1号窯)は、坏Gの出現や窯体規模・プランを重視した小期設定であり、器種組成は過渡的な様相を示す。両窯で坏H、坏G、鋺G、高坏(A・D)類、長頸瓶、提瓶、横瓶、甕が出土する他、古相に位置付けた11号窯で高坏B類、鉢A類、壺A類、叩き成形した大型の鉢・用途不明品(第121図)が、また、新相に位置付けた7-1号窯で猿投系の器形をもつ坏H、高坏C類(A類は変形か)、波状文を施した埦(527)が、それぞれ確認できる。本小期内に、畿内との関係をみいだせる陶棺(第110・111図)も、いずれかの窯で焼成する。主体をなす坏Hは、やや扁平となるものの、法量帯はb期と重複し、明確な口径の縮小化をみいだせない。鋺Gの様相もb期と同様であり、数法量が存在する。新たに出現する坏Gは、11号窯は窯体内から出土しておらず、7-1号窯でも坏Hに比して、かなり低い量比であった可能性が高い。なお、7-1号窯に後続すると考えられる8号窯で、小・中型甕に、口縁端部を断面三角形状に仕上げる形態が出現する。

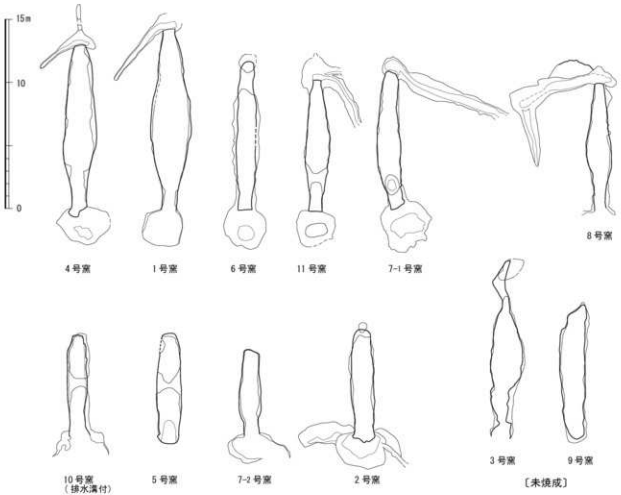
本小期の特徴を整理すれば、①b期の坏H、鉢Gの様相が継続すること、②少量の坏G生産の開始、③7-1号窯で伝統的器種(高坏B類、鉢A類、壷A類)の払拭、④大型品生産や猿投系坏Hにみられる一過的・多元的な他地域からの技術移入となる。ここでは、窯体規模・プラン及び坏Gの出土を重視し、田嶋氏編年I_2期の最古相に位置付けるが、新しい焼成技術(窯構造)と器種の移入が波状的で時間差をもつとの理解も可能であり、その場合は、11号窯はb期(田嶋氏編年I_3期)に属することとなる。資料の増加を待ちたい。

d期(10・5号窯)は、灰原資料を加味すれば器種組成上の大きな画期となり、窯体構造も一変する。器種組成は、坏Hから坏Gに主体が完全に移行、急激に矮小化した坏H、高坏A類・C～E類、瓶類(長頸瓶、提瓶、平瓶、横瓶)、甕の他、第118・121図で示した金属器写しの鉄鉢や大型の各種盤類・鉢・壷類を多種少量生産する。一方、鉢Gが完全に欠落し、矮小化した坏Hは坏Gの1割以下にまで量比を減じる。坏Hの器形は、坏G蓋身を反転したものに転換、法量帯も坏Gと重複する。坏Gは、斉一性をもつ箱形の器形が主体をなし、基本的に1法量と考えられる。5号窯で、蓋が口径9.4～11cm弱、器高2.5～3.5cmに、身が口径7.2～10.8cm、器高2.7～3.6cmに分布する。高坏は、A類の器形が変容、C類が定着するとともに、新たに埦形の坏部を特徴とするE類が加わる。大型の甕は、主に長くのびる口縁部外面を主に波状文・沈線で加飾し、斜行刺突文と沈線を組み合わせた加飾は減少するようだ。また、専用焼き台が少量確認できる。d期の坏Gを中心とした器種組成は、田嶋氏編年I_3期に位置付けられる。

e期(7-2・2号窯)は、組成から坏Hが欠落、d期から続き坏Gを主体とし、2号窯で新たに無蓋の埦Gが客体的に加わる。他の器種では、高坏C～E類、瓶類(瓶、提瓶、平瓶、横瓶)、甕が確認できる他、7-2号窯で叩き成形の短頸壷(722)、大型長頸瓶(714)、d期と異なる器形の大型盤類(第121図)、平瓦様製品(第109図)が、また、2号窯で鉄鉢、専用焼き台、土馬(第121図)が、それぞれ出土した。坏Gは、箱形の器形が減り、体部が外傾して身の深い器形が増加する。焼成良好品の法量は、口径9～10cm台、器高2cm台後半～4cm前後に分布、窯毎に現れ方に差を示すが、口径分布の中心域はd期より大きくなる。坏Gとした個体の中には、無蓋・正位で焼成の身(736)や、口径12cm台の身(1062)が確認でき、坏Aが出現している可能性をもつ。無蓋の埦Gは、口縁部計測法で約27%の量比を示し、成形・調整は坏Gと同様である。e期は、金属器写しの坏Bを欠落し、田嶋氏編年II_1期(古相か)に位置付けられる。また、e期に後続する窯(同II_2期)には、小松市戸津六字ヶ丘4号窯、辰口町湯屋B-1号窯があり、法量分化した坏A、坏Bが定着する。

また、e期の特徴として、窯体内床面に残された遺物に、酸化焼成にとどまり橙色に発色する焼成品群の存在があげられる。7-2号窯では坏G蓋(654～658等)、底部外面に回転ケズリ調整を加える坏G身(681・686等)、高坏C・E群(700～705、708～711)、短頸壷、大型長頸瓶、球胴の横瓶(721)が、また、2号窯では鉢類(1114・15)、平瓶(1119～22)、提瓶(1124)、横瓶(1125・26)、甕(1132～37)が確認できる。いずれも特定器種に限られ、灰色の色調をもつ焼成品群とは器形の細部や調整方法が異なる。特に2号窯の甕は、灰色の色調を呈し胴部叩き成形痕を残す一群(1130・31)に対して、橙色に発色する一群(1132～37)は胴部内面の同心円痕をナデ消しており、猿投系の強い影響がうかがわれる。e期の坏Hにみられた猿投系の影響が一過的であるのに対して、継続性の強い関与を示唆するものである。さらにいえば、7-2号窯には坏G蓋の天井部外面に手持ちケズリやナデ調整を行う個体(618・629・639等)があり、斉一性をもつd期に比して製作単位の「個性」が顕在化した印象を強く受け、d期の生産体制が再編された可能性をもつ。

最後に、那谷金比羅山窯跡群が操業を行った時期は、古墳時代後期からの器種の残存と、金属器指向の新器種の受容が、器種交替と地域差を伴いながら並行的に進む時期であり、本窯跡群の様相は畿内



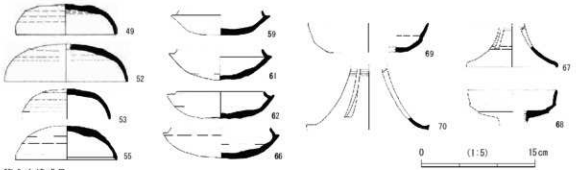
第 122 図　窯体規模・プラン模式図 (S=1/300)

の動きとスムーズに連動した窯跡群と評価されることが多い。その様子は、a期（壷G）、b期（鋺類）、d期（陶棺等の大型製品、盤・鉢・壷類）、e期（盤類）といった金属器写しの器種や大型製品を、波状的・一過的に移入することに端的に現れ、またc期・d期には東海地方猿投系窯からの技術移入もみられる。

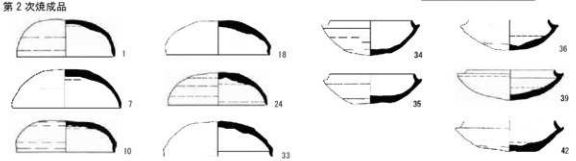
一方、坏・埦類は、c期まで坏Hが組成の主体を占め、口径の縮小化に関しても比較的鈍い動きを示す。また、古墳時代後期以降の壷A類が早い段階で衰退するのに対し、高坏A類・B類（・D類）や脚付長頸瓶、提瓶といった特定器種は比較的長く生産され、在地の需要に根差した動きをみせるる。器種構成（及び窯構造）が大きく転換する画期は、d期（田嶋氏編年I_1期）にみいだせ、坏・埦類はd・e期が連続性の強い展開をみせる。これらの動きを同時期に近隣で操業した他窯跡との相互関係の中でどう位置付けるかが、本窯跡群の評価にとって大きな課題といえる。また、10基の窯の操業に比して、少ない遺物出土量（整理箱で約90箱）も気になるところであり、c期からd期への移行にも係り、中核的な須恵器生産窯単位として、常に連続的な生産を行っていたか、それを担保する基盤を維持しえたどうかも検討の一つと考える。さらに、灰原資料を含めた各窯の操業段階を踏まえた詳細な整理や甕叩き原体の検討、c期の設定の是非等、十分整理・検討できなかった課題も多く残っている。今後とも、検討・修正を加え続ける必要性を強調して、小結としたい。

分校３号窯

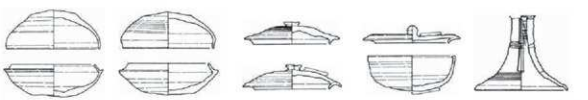
第１次焼成品



第２次焼成品



戸津六字ヶ丘２号窯



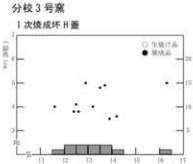
引用・参考文献１・９より転載。一部加筆。

第 123 図　分校３号窯跡等出土遺物実測図（S=1/5）

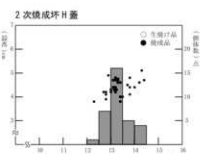
第 28 表　分校３号窯跡等出土坏Ｈ法量分布表

分校３号窯　　戸津六字ヶ丘２号窯

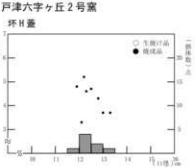
１次焼成坏Ｈ蓋



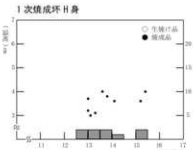
２次焼成坏Ｈ蓋



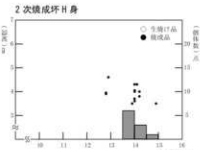
坏Ｈ蓋



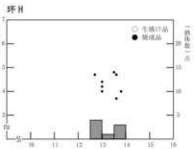
１次焼成坏Ｈ身



２次焼成坏Ｈ身



坏Ｈ



註

(1)　両計測とも、窯体内への流込土等2次堆積土を除外して行うべきだが、峻別が困難な破片が多く、調査・整理担当者の区分けに従い、各窯全体の遺物を対象に計測を実施した。口縁部計測法は、全周を36等分して残存率を集計したものであり、36/36で1個体分となる。また、破片数計測法では、接合前の破片数を集計した。さらに、有蓋器種については、両計測法とも蓋・身のうち数の多いほうを選択して、その比率を示す他、甕は口径20cm未満を小型、20cm～40cm未満を中型、40cm以上を大型甕とした。

(2)　クシ状工具痕は、器面成形・調整としての板状工具を用いるナデ痕跡と、成形品をムシロ等の上に据え置いた際の痕跡(いわゆる敷物圧痕)の両者があり、ここでは主に前者を指して観察・説明を行なった。

(3)　鉢類の蓋とした個体には、長頸瓶の蓋を含む可能性をもち、扁平な376が候補となりうる。蓋と身の関係が十分整理できないものの、以下では鉢A及び鉢類蓋を「鉢G蓋」と総称する。

(4)　11号窯出土品は、6号窯に近い様相が多いものの、ここでは窯体の規模・プランを重視してc期に位置付ける。

(5)　4号窯、1号窯の坏H蓋の口径は、焼成品と生焼け品の間で約1cmの法量差を示す。

(6)　引用・参考文献7による。

(7)　田嶋氏編年の古代I$_1$期は、西弘海氏編年の飛鳥Ⅰ(田辺昭三氏編年TK209型式後半～TK217型式前葉頃)、I$_2$期が同飛鳥Ⅱ(同TK217型式中葉頃)、II$_1$期が同飛鳥Ⅲ(同後葉頃)、II$_2$期同が飛鳥Ⅳ(TK46型式)に、それぞれ並行する。また、西弘海氏編年は引用・参考文献5、田辺昭三氏編年は同3による。

引用・参考文献

1　野尻興之佐他　1978 『郷土』石川県立大聖寺高等学校郷土研究部

2　奈良国立文化財研究所　1981 『平城宮発掘調査報告書X』

3　田辺昭三　1981 『須恵器大成』角川書店

4　石井則孝　1985 『陶硯』考古学ライブラリー42　ニュー・サイエンス社

5　酒　弘海　1987 『土器様式の成立とその背景』真陽社

6　宮下幸夫他　1987 『戸津六字ヶ丘古窯跡発掘調査概要報告書』小松市教育委員会

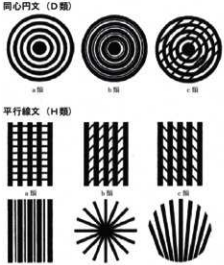
7　北陸古代土器研究会・石川考古学研究会　1988 『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』

窯跡出土遺物観察表凡例

・遺物の出土位置は、大きく窯体内、前庭部、灰原に分かれる。例えば、窯体内と灰原で出土した破片が接合する場合に、その個体の最終的な帰属地点の判断は、調査担当者の判断に依って区分し、出土遺構名の欄に記載した。また、整理番号は、実測作業段階で土器・実測図に記入した番号である。
・法量のうち、焼き歪みが大きく法量を復元したものは〔　〕、残存法量を(　)で表示した。
・遺存度は、口縁部計測法により、口縁部を36分割し、○/36で示し、36/36が完形となる。また、参考値として脚・台部のみが遺存した場合は、例えば「脚6/36」「台12/36」と記載した。
・焼成の項は、略号で表示した。出土遺物品は、焼成具合の観点から温度上昇が不十分で極度に焼きの弱い「生焼け品」と十分な焼成が行われ堅緻に焼き締まった「焼成品」に、また還元具合の観点から器面の還元が弱い「酸化焼成品」と十分に還元がなされた「還元焼成品」に、さらに破損等により焼き台(置き台)への転用に分かれる。そのため、以下のとおりに分類し、略号を記載した。

　生・還: 還元が十分で白～灰白色、淡灰色、淡灰オリーブ色を呈する生焼け品
　生・酸: 還元が不十分で、橙色～褐色を呈する生焼け品。
　焼・還: 十分な還元焼成で堅緻に焼き締まり、灰色や灰白色を基調とする焼成品。自然釉や降灰が熔着する場合が多い。
　焼・酸: 不十分な還元焼成で堅緻に焼き締まり、褐色を基調とする焼成品。
　転　: 焼き台(置き台)に転用したもの。

・焼成時の置き方については、器面の黒化や降灰・自然釉の熔着具合等の重ね焼き痕から判断し、使用段階時の置き方に対して「正位焼成」、逆さまとなる「倒位焼成」、横に倒した「横位焼成」に分け、備考欄に記載した。
・壺・瓶類、甕類の成形・整形に用いる叩き技法は、内面「当て具」、外面「叩き具」で構成され、下表の分類により備考欄に記載した。



平行線文と同心縁文の分類模式図
（原図：望月精司氏作成）

第 30 表　窯跡出土遺物観察表 1

（単：［ ］は復元値、（ ）は現存法量を示す）

図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
55	1	1号窯跡体	焼成部(6.12~20~10、堅穴No.1)	瓶(須恵)	13.7	—	5.3	11/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	堅一堅	若干残き込みあり	86278
55	2	1号窯跡体	煙道部下層No.6、堅穴No.10	瓶(須恵)	[14.0]	—	4.2	5/36	細砂多、礫少	灰	灰	軟	接合した破片の一部に焼土付着	86460
55	3	1号窯跡体	焼成部No.12~14(-10~18、堅穴No.1)	瓶(須恵)	13.6	—	4.7	6/36	粗砂多	灰	灰	堅一堅	若干残き込みあり	86374
55	4	1号窯跡体	堅穴No.1(-1.1)、灰原排土	瓶(須恵)	13.6	—	4.7	10/36	細砂多、礫少	灰	灰	堅一堅	残き込みあり	86423
55	5	1号窯跡体	焼成部No.17、堅穴	瓶(須恵)	14.0	—	14.0	12/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	堅一堅	生焼け	86417
55	6	1号窯跡体	堅穴No.8、焼成部No.18	瓶(須恵)	14.0	—	4.6	11/36	細砂多	灰	灰	堅一堅	残き込みあり	86279
55	7	1号窯跡体	焼成部No.22	瓶(須恵)	14.0	—	5.0	27/36	細砂、礫	灰白	灰白	堅一堅	生焼け、残き込みあり	86287
55	8	1号窯跡体	焼成部No.12~16、堅穴、灰原	瓶(須恵)	14.1	—	4.6	11/36	細砂多、礫少	灰	灰	堅一堅	若干残き込みあり	86293
55	9	1号窯跡体	焼成部	瓶(須恵)	14.9	—	4.4	6/36	細砂多、礫少	褐灰	橙	堅一軟	歪む捩り細化痕跡	86420
55	10	1号窯跡体	焼成部No.22	瓶(須恵)	14.2	—	5.1	2/36	細砂多、礫少	灰	灰	堅一堅	内面焼土付着	86291
55	11	1号窯跡体	焼成部No.18	瓶(須恵)	14.3	—	4.7	6/36	細砂、雲母	灰白	灰	堅一堅	口縁部若干残き込み、外面隆灰	86291
55	12	1号窯跡体	堅穴No.1(-1.1)、煙道部上層	瓶(須恵)	[14.1]	—	3.8	22/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	堅一堅	残き込み著しい、天井部外面ナシ状工具痕	86295
55	13	1号窯跡体	堅穴No.11、焼成部No.15	瓶(須恵)	約13.2	—	5.0	6/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	堅一堅	生焼け	86280
55	14	1号窯跡体	焼成部No.20	瓶(須恵)	15.0	—	14.0	11/36	細砂多、粗砂	灰白、橙	灰白、橙	堅一堅	歪み一部に捩化	86290
55	15	1号窯跡体	焼成部No.14~16~18、焼成部東下層、堅穴	瓶(須恵)	14.9	—	4.5	27/36	粗砂多、礫	灰白	灰白	堅一堅		86296
55	16	1号窯跡体	焼成部No.22	瓶(須恵)	14.9	—	4.2	15/36	細砂多、粗砂	明、黒褐色、灰白	橙、黒褐色、灰白	堅一軟	残き込みあり、若しくは捩跡なる	86427
55	17	1号窯跡体	焼成部No.22	瓶(須恵)	15.0	—	4.4	7/36	細砂多、礫少	灰白	灰一黒褐	堅一堅	残き込み、残き割れあり	86418
55	18	1号窯跡体	焼成部No.19	瓶(須恵)	[約16]	—	3.8	10/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	堅一堅	残き込み、口縁に不完備す	86299
55	19	1号窯跡体	焼成部No.19	甕	13.2	—	4.1	17/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	堅一堅		86301
55	20	1号窯跡体	焼成部No.13~17、堅穴No.10	甕	12.9	—	4.2	36/36	粗砂、礫少	灰白、灰	灰白、灰	堅一堅	残き込み、残き割れあり	86306
55	21	1号窯跡体	堅穴No.10、焼成部No.15~18	甕	12.7	—	3.6	35/36	粗砂、礫少	灰白、淡灰	灰白、淡灰	堅一堅	残き込み、残き割れあり	86305
55	22	1号窯跡体	焼成部No.22	甕	13.2	—	4.2	23/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	堅一堅	生焼け	86308
55	23	1号窯跡体	焼成部No.19~20~2、堅穴	甕	13.3	—	4.5	30/36	粗砂、礫少	灰白、褐灰	灰白、褐灰	堅一堅	生焼け	86307
55	24	1号窯跡体	堅穴No.7	甕	12.6	—	12.6	7/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	堅一堅	外面焦化	86542
55	25	1号窯跡体	焼成部No.23	甕	14.2	—	13.0	21/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	堅一堅	残き込みあり	86502
55	26	1号窯跡体	焼成部No.14~18、堅穴	甕	13.2	—	4.4	21/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	堅一堅	若干残き込みあり	86503
55	27	1号窯跡体	焼成部No.23、灰原	甕	14.7	—	12.3	9/36	粗砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	堅一堅	胴位焦成、内面隆灰あり	86540
55	28	1号窯跡体	煙突No.1、煙道部上層、灰原D-101区、D-106.-1~106.、F-106.1.-F-101.1.、焼成部東下層No.1、堅穴No.10	瓶(須恵A)	15.6	—	14.3	12/36	細砂多、礫少	灰白	灰	堅一堅	天井部外面回転ケズリ、内面同心円タタキ	86293
55	29	1号窯跡体	焼成部No.1、煙道部-煙突間色土層、堅穴No.1	瓶(須恵A)	—	16.9	19.1	微5/36	粗砂多、礫少	灰オリーブ	灰白	堅一堅	3方切断歪み、胴位焦成、内面立方体編裏、焼き割れ	86343
55	30	1号窯跡体	堅穴No.7、灰原C-99%D-3、D-99~D-101.1	瓶(須恵A)	—	17.6	17.25	微6/36	粗砂多、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	堅一堅	3方切断歪み、胴位焦成、隆灰・自然釉顕著	86340
55	31	1号窯跡体	焼成部東下層煙突-色土層、堅穴No.8、灰原D101.-E-101.1.、排水1	瓶(須恵A)	—	16.4	17.6	微5/36	粗砂多、礫少	褐灰	灰	堅一堅	胴位焦成、内面隆灰顕著	86324
55	32	1号窯跡体	焼成部No.1	瓶(須恵A)	—	17.8	17.9	微11/36	粗砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	堅一堅	3方切断歪み、胴位焦成、内面隆灰・自然釉、焼き割れ顕著	86353
55	33	1号窯跡体	焼成部No.2	瓶(須恵A)	15.8	—	15.4	5/36	粗砂多、礫少	褐灰オリーブ	灰白	堅一堅	正位焦成、内面隆灰・自然釉顕著	86462
56	34	1号窯跡体	焼成部No.15~17	鉢	18.4	—	13.9	11/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	堅一堅	焼成ぞやみ著し、焼き割れ顕著	86427
56	35	1号窯跡体	堅穴、焼成部No.23	鉢	13.0	—	約9	10/36	粗砂多、礫多	灰	灰	堅一堅	焼き割れ・焼き歪み、有蓋(または胴位)焼成?	86233
56	36	1号窯跡体	焼成部No.19~20~2、焼成部上層(煙突横色土)、堅穴No.8	鉢	12.6	—	8.6	31/36	細砂、礫多	褐灰	灰	堅一堅		86231
56	37	1号窯跡体	堅穴No.11	鉢	—	6.4	17.0	—	細砂多、粗砂	灰	灰	堅一堅	胴部歪み、外面側面立つ	86235
56	38	1号窯跡体	焼成部煙突No.1	平瓶	6.9	7.3	15.7	36/36	細砂、礫少	灰白	灰白	堅一堅	内面底面に段々凸あり、上部に別製円筒、外面下半へ底部にカキメ調整、口縁部武蔵工夫加飾	86256
56	39	1号窯跡体	煙道	横瓶A	14.4	—	12.7	9/36	細砂、礫多	褐灰	褐灰	堅一堅		86356
56	40	1号窯跡体	焼成部No.23	横瓶	13.3	—	31.0	22/36	粗砂多、礫多	灰	灰、灰オリーブ	堅一堅	若干残き込みあり	86270
56	41	1号窯跡体	堅穴No.2~10、灰原D-99%D101.、堅穴No.8	横瓶	10.6	—	29.0	5/36	粗砂多、礫少	褐灰オリーブ	褐灰	軟一堅、軟	内面ロ縁ヨコ、外面ロ縁、胴位焦成(一部面に焼き付(置き台)痕)ナシ調整、焼き割れ顕著、胴部ボロナシ(ロ字型焼き台(置き台)に転用	86401~86472
56	42	1号窯跡体	煙道部下層No.2~5、煙道部、堅穴No.1	横瓶	10.4	—	36.8	6/36	粗砂多、礫少	灰、灰白	灰、灰白	堅一堅	胴位焦成、大底ヘラ生焼け	86751
56	43	1号窯跡体	煙道部上層、灰原東端(D101.~D106.1.-D5%、A-90、D106.1~D99.-D5%)、焼成部上層No.1	壺A	13.9	—	21.8	5/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	堅一堅	正位焦成	85249
56	44	1号窯跡体	堅穴No.8、煙道No.8、煙道部下層No.1~5、煙道部西(煙突横色土層)、焼成部上層、灰原D101.~D105.~D5%、C-99%D22	壺A	13.4	—	23.1	19/36	粗砂多、礫少	灰、淡灰	灰、淡灰	堅一堅	体部外面ヨキ目、内面撫ケズ	85200
56	45	1号窯跡体	煙道	壺	12.6	—	12.9	4/36	粗砂多、礫少	褐灰	褐灰	軟一堅	底部、胴打円点文で加飾、頸まで不完備す	86421
57	46	1号窯跡体	焼成部No.10~19~20~2	壺	16.6	—	[14.3]	9/36	粗砂多、礫多	灰	淡灰黄	堅一堅	底部、ハケ空胴、内面口縁部、焼き割れ	86462
57	47	1号窯跡体	焼成部No.20~2	壺	17.0	—	12.6	30/36	粗砂多、礫少	灰	灰、褐灰	堅一堅	内面ロ縁、外面体部、外面全面等、底部、連続刻文で加飾	85287
57	48	1号窯跡体	煙道部東下層色土層、堅穴No.1	壺(甘製)	約11.6	—	14.0	5/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	堅一堅	外面底部ヨキ目で加飾	86479
57	49	1号窯跡体	煙道部上層	壺(甘製)	13.8	—	5.7	5/36	細砂、粗砂多	灰白	灰白	堅一堅	若干残き込みあり	86377
57	50	1号窯跡体	煙道部下層No.4、煙突横色土層	甕A	[11.5]	—	[4.9]	1/36	粗砂、礫少	灰白	灰	堅一堅	残き込みあり	86343
57	51	1号窯跡体	煙道部、煙突横色土層、灰原D99%D-3	甕A	12.2	—	4.1	7/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	堅一堅	整形時に受け・足ちとがり あり	86265
57	52	1号窯跡体	No.4、煙突横色土層	甕A	12.4	—	4.2	17/36	粗砂多、礫少	灰	灰	堅一堅		86309
57	53	1号窯跡体	煙道部上層	甕A	13.0	—	3.7	16/36	細砂、粗砂多	灰	灰	堅一堅		86510
57	54	1号窯跡体	煙道部上層、煙突横色土層	甕A	約14	—	13.1	5/36	細砂多、礫多	灰白	灰白	堅一堅	外面隆灰、小刻撫多い	86541

第31表　窯跡出土遺物観察表2

（単：［ ］は復元法量、（ ）は推定法量を示す）

掲図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
57	55	4号窯跡前面	前面部上層、黒色土層上層、前面部及び最奥部色土層、灰原(9-99Nu.1)、黒ペ層上面	蓋(高坏A)	16.8	—	14.3)	6/36	細砂多、礫微	灰白	淡灰、灰	生・良	天井部外面回転ケズリ、内面天井ノ内ナデ、正位焼成、径約15cm の粘土塊付着	46285
57	56	4号窯跡前面	前面部及び最奥部色土層上層、灰原上層(9-100Z)	蓋(高坏A)	12.15.8	—	14.5)	5/36	細砂多、礫微	灰白	灰白、灰	生・良	天井部外面回転ケズリ、正位焼成、径約15cm の粘土塊付着	46287
57	57	4号窯跡前面	前面部及び黒色土層上層、灰原(9-100Ba.2)	蓋(高坏A)	15.9	13.[illegible] 4	5.6	17/36	細砂多、礫微	灰白	灰白、灰	焼・良	天井部外面回転ケズリ、内面天井ノ内ナデ、正位焼成、径約15cm の粘土塊付着	46286
57	58	4号窯跡前面	前面部上層(9-101Ba、101Bb.2、101Bb.3、4-90、5-90Z、(101C-1)101L1B)	蓋(高坏A)	16.8	—	14.3)	—	粗砂多、礫微	灰白	灰白、灰	焼・良	天井部外面回転ケズリ、内面天井ノ内ナデ、正位焼成、径約15cm の粘土塊付着	46284
57	59	4号窯跡前面	前面部下層Na.1	蓋(高坏A)	—	13.[illegible] 1 6	(2.9)	—	粗砂多、礫多	淡灰黄	灰	焼・良	横位焼成、内面古墳時代・焼き膨れあり	46257
57	60	4号窯跡前面	前面部下層Na.1、前面部上層	高坏A	15.5	—	14.6)	20/36	粗砂多、礫少	灰白	灰褐	焼・良	横位焼成、内面古墳時代・焼き膨れあり	46252
57	61	4号窯跡前面	前面部下層Na.2、灰原上層(C-99Z)、灰ペ層Na.1	高坏A	15.4	—	(14.7)	12/36	粗砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・良	3方透かし、横位焼成、内面焼成・古墳時代	46254
57	62	4号窯跡前面	前面部最奥部色土層上層、灰原(C-102Z)、灰原Na.1、8-75Ba2	高坏A	16.1	—	(15.6)	微 36/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼・良	3方透かし、横位焼成、内面古墳時代・焼き膨れあり	46257
57	63	4号窯跡前面	前面部最奥部色土層、灰原(C-99Na.2)	高坏A	—	約15	(15.1)	微 19/36	粗砂多、礫少	灰褐	灰	焼・良	3方透かし、横位焼成、内面古墳時代・焼き膨れあり	46424
57	64	4号窯跡前面	前面部下層Na.2、灰原(D-100Ba.1)-14	高坏A	—	16.6	(17.6)	微 13/36	粗砂多、礫少	灰褐	灰	焼・良	3方透かし、横位焼成、内面古墳時・焼き膨れ多有顕著	46294
57	65	4号窯跡前面	前面部下層Na.2、前面部Na.2、灰原(8-98)	高坏A	—	16.0	16.5)	微 2/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・良	横位焼成、内面に径約15cmの粘土塊付着、焼き膨れ多あり	46348
57	66	4号窯跡前面	前面部上層	高坏B	約14.8	—	(5.6)	5/36	粗砂多	灰	黒灰	転	横位焼成、内面古墳時代焼き膨れ	46288
57	67	4号窯跡前面	前面部下層Na.2、灰原(C-99Na.3)	高坏B	12.4	—	(7.3)	微 12/36	粗砂多、礫微	淡灰オリーブ	淡オリーブ	焼・良	3方透かし、正位焼成、内面古墳時代・古墳時代	46355
57	68	4号窯跡前面	前面部上層	高坏B	14.6	—	(7.1)	微 13/36	粗砂多、礫微	淡灰オリーブ	灰白	焼・良	3方透かし、横位焼成、内面古墳時代	46353
58	69	4号窯跡前面	前面部Na.2-2、灰原(D-104L.1-99Ba.1)、(99Ba.1)(99Ba.1)	蓋	11.8	—	15.6)	5/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・良		46244
58	70	4号窯跡前面	前面部下層Na.2、灰原(D-99Ba.1、C99Ba.2、C99-1)～C98-L、100L1～C98-L1Na.1)、8-92L、101B1Na.6)	蓋(C)	(26.4)	—	(17.1)	6/36	粗砂多、礫	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・良	沈線・カキメ7条加飾、正位焼成、焼き金ふり・剥ぎ・自然釉彩前期窯	43274
58	71	4号窯跡前面	前面部Na.2-2	鉢	—	—	15.3)	—	粗砂多、礫少	灰オリーブ	淡灰	焼・良	内面古墳時・前期転倒前期窯	46406
58	72	4号窯跡前面	前面部・最奥部色土層	甑型	8.4	—	16.6)	7/36	粗砂、礫少	淡灰オリーブ	灰白	焼・良	正位焼成、内面の指圧・古墳時代	46361
58	73	4号窯跡前面	前面部上層、灰原(C-99Na.2)-21)、上層(D-99Z)	広甑無ハ	—	—	(5.6)	—	細砂多、礫少	灰白	紫灰	焼・良	正位焼成、外面古墳時代前期、焼き膨れあり	46512
58	74	4号窯跡前面	前面部・最奥部色土層、灰原上層(8-99Z)	甑型	26.7	13/36	16.8)	5/36	細砂、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・良	正位焼成、内外面古墳時代前期	46363
58	75	4号窯跡前面	前面部Na.1	鍋A	13.8	—	15.4)	5/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・良	被熱前に古墳時代	46355
58	76	4号窯跡前面	前面部上層、灰原(D-99Na.4、L1-99Z)	鍋A	14.2	—	(15.2)	11/36	細砂、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・良	内外面古墳時代前期、他個体片類似、焼き金ふり	46362
58	77	4号窯跡前面	前面部下層Na.1、灰原(D-100L.-100L2B7)	広甑無	—	13.6	15.3)	微 4/36	粗砂多、礫少	灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・良	3方透かし、外面に古墳時代前期、正位焼成、焼き金ふり	46351
58	78	4号窯跡前面	前面部上層	広甑無	—	15.8	15.1)	11/36	粗砂多	灰白	淡オリーブ	焼・良	3方透かし、外面に古墳時代前期、正位焼成、焼き金ふり	46351
58	79	4号窯跡前面	前面部最奥部色土層上層、灰原Na.1、灰原(C-79Na.2)	鉢A	—	—	(19.4)	4/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰オリーブ	焼・良	外面古墳前期窯、10と同一個体	46796・46396
58	80	4号窯跡前面	前面部及び最奥部色土層、灰原・黒色土(Na.2)	鉢A	11.8	—	約23	6/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・良	内面ハケ整、外面ヘラ整、横位焼成、焼き膨れ・古墳時代	46815・46396
58	81	4号窯跡前面	前面部最奥部色土層、灰原(C-99Na.3)、灰原上層(8-98Z)	鉢A	—	—	(30.4)	—	粗砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・良	横位焼成、成形後生の古墳時代、内面ハケ整は、外面古墳	46872
58	82	4号窯跡前面	前面部黒色土上層	壺	約21	—	14.6)	7/36	細砂、礫多	淡灰黄	灰	焼・良	内面指頭痕あり	46419
58	83	4号窯跡前面	前面部最奥部色土上層	壺	約26	—	(3.7)	5/36	粗砂多、礫多	黄灰	灰	焼・良		46420
58	84	4号窯跡前面	前面部黒色土上層、灰原(8-98)	壺	約27	—	(10.7)	3/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	褐灰	焼・良	沈線・乱れた波状文で加飾	46422
58	85	4号窯跡前面	前面部最奥部色土層、灰原(D99Na.2)	壺	—	—	(30.7)	—	粗砂多、礫	オリーブ灰	淡灰	焼・良	正ヶ・内、内面ハケ整、外面ハケ整、正位焼成・口ヶ・内面に焼き分け置き台片（第2段目）、内外面古墳時・高灰、焼き膨れ顕著	46813
58	86	4号窯跡前面	8a-2-6、前面部上層、下層Na.1	壺	41.8	—	16.6)	6/36	粗砂多、礫多	オリーブ灰	暗灰、灰	転	沈線文・カキメ7加飾、焼き金転倒	46433
58	87	4号窯跡前面	前面部上層	壺	46.2	—	(7.1)	6/36	粗砂多、礫	灰	灰	転	高・底状文・沈線で加飾、横断面に隆起、焼き金ふり転倒、屈立に文字文	46447
58	88	4号窯跡前面	灰原(D-100Ba.6)、8-98Z)	蓋(形)	15.8	—	14.1)	8/36	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・良	外面焼成	46452
59	89	4号窯跡前面	灰原Na.2	蓋(形)	約12.6	—	14.6)	7/36	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・良	正ヶ焼き金ふりあり	46421
59	90	4号窯跡前面	灰原上層(D-99Z)	蓋(形)	12.8	—	4.5	5/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・良	天井部内面回ノ内ナデ	46394
59	91	4号窯跡前面	灰原(D-100Ba.6)	蓋(形)	約11	—	15.6)	10/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・良	外面古墳時代前期、ケズリ焼き金ふりあり	46258
59	92	4号窯跡前面	灰原(D99～D100L.3)、100～200L.1-100L)	蓋(形)	13.6	—	4.5	6/36	細砂、礫少	灰白	灰褐	焼・良	内面ヨコノ内ナデ、正位焼成、外面古墳時代前期窯	46385
59	93	4号窯跡前面	灰原(Na.2)、9-99～9-100L.8-100L.+B101L1B)	蓋(形)	14.2	—	4.1	4/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡褐	焼・良	外面古墳時代前期、ケズリ焼き金ふりあり	46259
59	94	4号窯跡前面	灰原(C-101～D-101Ba2B)	蓋(形)	14.8	—	(3.7)	6/36	粗砂	灰白	灰白	焼・良	正ヶ焼き金ふりあり	46251
59	95	4号窯跡前面	灰原(D-100L.0～D-101L1B.7))	蓋(形)	14.0	—	3.6	15/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・良	外面焼色	46389
59	96	4号窯跡前面	灰原上層(D-101Z)	蓋(形)	13.6	—	3.8	2/36	粗砂多、礫	灰白	灰	焼・良	砂礫多い	46240
59	97	4号窯跡前面	灰原下層(D-99Z)	蓋(形)	13.6	—	3.8	6/36	細砂多、礫少	淡灰	黒灰	焼・良	正ヶ焼き金ふりあり	46430
59	98	4号窯跡前面	灰原(D-99Z8a.6-9)	坏B	12.6	5.6	3.6	10/36	細砂、礫少	灰白	灰白	焼・良		46284
59	99	4号窯跡前面	灰原(D-99Z)	坏B	12.2	—	(3.7)	16/36	細砂多、粗砂	灰白	灰	焼・良	外面焼色	46263
59	100	4号窯跡前面	灰原(C-99Ba.2?)	坏B	12.2	—	(3.4)	13/36	細砂多、粗砂	灰白	灰白	焼・良		46262
59	101	4号窯跡前面	灰原(C-99Ba.2B-2)、Na.1)	坏B	13.8	—	(4.0)	18/36	細砂、礫多	灰白	淡オリーブ	焼・良	内面ヨノ内ナデ、横位焼成、外面古墳時代前期窯	46422
59	102	4号窯跡前面	灰原(D-102、D-99Z)	坏B	12.4	5.6	4.0	11/36	細砂、礫多	灰白	緑灰	焼・良	高台部3方切り、外面古墳時代前期窯	46261
59	103	4号窯跡前面	灰原上層(D-100Ba.2?)、灰原Na.1	坏B	12.8	—	4.6	20/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	焼・良		46368
59	104	4号窯跡前面	灰原(D-100L.0～D-99L1B.7))	坏B	12.6	6.2	3.5	8/36	粗砂多、礫少	灰褐	灰	焼・良	焼き膨れ、焼き金ふりあり、底部外面刺傷	46267
59	105	4号窯跡前面	灰原下層(D-99Z)	蓋(高坏A)	—	13.[illegible] 1 6	(1.6)	—	粗砂多、礫少	灰白	灰白	焼・良		46239
60	106	4号窯跡前面	灰原(Na.1-2、灰原(D-100L.1～D-101L1B7)、Na.2?)、上層(C-99Z)、8-96Na.3)	蓋(高坏A)	16.8	—	15.1)	16/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	焼・良	焼き膨れ顕著、天井部外面に径約11cmの粘土塊付着	46396
60	107	4号窯跡前面	灰原(C-99Na.6)	蓋(高坏A)	16.8	—	14.3)	12/36	粗砂	灰白	灰、灰白	焼・良	焼き膨れ顕著、天井部外面に径約11cm弱の粘土塊付着	46395

第 32 表　窯跡出土遺物観察表 3

※［ ］は復元法量、（ ）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
60	108	4号窯灰原	灰原(D-99№40)	高杯A	15.0	—	(4.2)	10/36	粗砂多、礫微	灰白	灰黄	良・還	内面同心円タタキ、輪積成形、外面降灰	98260
60	109	4号窯灰原	灰原上層(D-99区)、窯上(7№1	高杯A	14.0	—	(4.1)	9/36	粗砂多、礫少	灰白	灰黄	良・還	内面同心円タタキ、輪積成形、外面降灰	98266
60	110	4号窯灰原	灰原(C-98L~C-98L、C-99№27、C-99区)	高杯A	14.8	—	(4.7)	34/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰オリーブ	良・還	内面同心円タタキ、輪積成形、焼き割れ、外面自然釉降着顕著	98262
60	111	4号窯灰原	焼成部及び灰原暗色土層、灰原(D-100L~D-101LSE内)、灰原上層(C-98区)	高杯A	13.8	—	(4.1)	15/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰緑	良・還	内面同心円タタキ、輪積成形、外面降灰	98504
60	112	4号窯灰原	灰原(D-99~D-98L、D-99№22)	高杯A	—	15.0	(12.4)	33/36	粗砂多、礫少	灰	緑灰	良・還	輪積成形、焼き歪み顕著	98298
60	113	4号窯灰原	B-0区、灰原(C-99№20)、灰原上層(B-99区№1、B-99№12)	高杯B	13.0	14.2	16.0	6/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	良・還	3方2段透かし、内面同心円タタキ、輪積成形、焼き歪みあり	98430
60	114	4号窯灰原	灰原(C-99№28)	高杯A	—	16.2	(15.3)	脚 12/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	良・還	3方2段透かし、輪積成形、焼き歪みあり	98279
60	115	4号窯灰原	灰原(C-99№28・26・27、D-99~D-98L)	高杯A	—	16.9	(13.2)	脚 8/36	粗砂多、礫少	灰緑	灰	良・還	3方2段透かし、輪積成形、焼き歪みあり	98271
60	116	4号窯灰原	灰原(D-98~E-98LSE内、D-100L~D-99LSE内、D-99№34、A-100区撹乱)	高杯A	—	15.7	(13.4)	脚 6/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	灰	良・還	3方3段透かし、輪積成形、内面降灰・自然釉降着	98273
60	117	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	高杯A	—	17.3	(13.0)	脚 5/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	良・還	3方3段透かし、輪積成形、焼き歪みあり	98383
60	118	4号窯灰原	灰原上層(C-99区、D-99№5,23)	高杯A	—	15.5	(9.9)	4/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	良・還	3方3段透かし、輪積成形、焼き歪みあり、脚内面に径約9mmの重ね焼き痕	98398
60	119	4号窯灰原	灰原(C-99№28・29)	高杯A	—	17.7	(8.1)	脚 15/36	粗砂多、礫少	灰	緑灰	良・還	輪積成形、内面自然釉・窯壁粒降着	98292
60	120	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱、B-100№49)	高杯B	約13	—	(3.4)	—	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	良・還	輪積成形、外面自然釉降着、焼き歪み顕著	98367
60	121	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱、A-100区撹乱)	高杯B	12.9	—	(5.0)	6/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	良・還	正位焼成、内面自然釉降着顕著	98369
60	122	4号窯灰原	灰原№11、灰原上層(B-98)	高杯B	12.9	—	(5.9)	16/36	粗砂多、礫少	灰オリーブ	灰	良・還	正位焼成、内面自然釉降着顕著、焼き割れ	98254
60	123	4号窯灰原	灰原(D-99№33)	高杯A	—	11.8	(6.3)	脚 34/36	粗砂多、礫	灰	緑灰	良・還	正位焼成、外面自然釉・窯壁粒降着顕著	98300
60	124	4号窯灰原	灰原(D-99№1)	高杯B	—	11.5	(7.9)	脚 5/36	粗砂多、礫	灰	灰オリーブ	良・還	正位焼成	98275
60	125	4号窯灰原	灰原上層(D-99区、D-100№23、D-99~E-99SE、D-100L~D-99LSE、№11)	高杯C	—	10.8	(3.5)	脚 13/36	粗砂多	淡灰	灰	良・還	若干焼き歪みあり、正位焼成	98253
61	126	4号窯灰原	灰原(D-99№30)	蓋		—	(4.2)	6/36	細砂、礫少	灰	灰黄	良・還	焼き歪みあり、正位焼成、内面降灰あり	98481
61	127	4号窯灰原	灰原(C-99№21・27、C-98~C-98L、D-99~D98L、B-98上層)	蓋		—	(16.0)	5/36	細砂多、粗砂	灰	灰緑	良・還	焼き歪みあり、正位焼成、降灰・自然釉顕著	65535
61	128	4号窯灰原	灰原(C-99№30)	蓋		—	(7.8)	4/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	良・還	焼き歪み顕著、正位焼成、内面自然釉降着	98483
61	129	2-1-2号窯灰原	3-F暗色土	瓶類	9.4	—	(4.7)	8/36	細砂、礫少	灰白	灰	良・還	輪積成形、外面黒化	98539
61	130	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱)	瓶類	8.8	—	(6.0)	10/36	細砂、礫少	灰黄	淡灰	良・還	内面に自然釉・降灰あり	98336
61	131	4号窯灰原	灰原(C-100L~D-100LSE)	瓶類	8.5	—	(4.9)	8/36	粗砂多	淡灰オリーブ	灰オリーブ	良・還	外面自然釉顕著	98360
61	132	4号窯灰原	灰原	提瓶か	6.8	—	(7.3)	5/36	粗砂多	灰白	淡灰オリーブ	良・還	外面の自然釉顕著	98366
61	133	4号窯灰原	灰原(C-99№27)	長頸瓶か	—	—	(7.7)	—	細砂多、礫少	灰	灰	良・還	内・外面自然釉降着、正位焼成	98502
61	134	4号窯灰原	灰原(C-99№19)	壺A	10.6	—	(4.9)	3/36	細砂多、粗砂	灰オリーブ	灰オリーブ	良・還	内・外面自然釉降着、正位焼成	98484
61	135	4号窯灰原	灰原(B-0区)	瓶類	9.1	—	(5.6)	6/36	粗砂多	淡灰	灰オリーブ	良・還	外面のみ自然釉降着、有蓋か	98485
61	136	4号窯灰原	灰原(A-99区)撹乱、灰原(D-99~D-98L)	提瓶か	11.8	—	(7.0)	16/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	灰	良・還	沈線2条、横位焼成、内外面降灰・自然釉降着	98259
61	137	4号窯灰原	灰原表層(B-0区)	瓶類	約13.0	—	(4.6)	3/36	粗砂多	灰	灰オリーブ	良・還	外面自然釉降着顕著	98400
61	138	4号窯灰原	灰原(C-99№30)	壺A	11.4	—	(7.0)	9/36	粗砂少、礫微	淡灰	灰	良・還	正位焼成、降灰あり、若干焼き歪み	98365
61	139	4号窯灰原	灰原表層(B-0区)	壺A	約11	—	(5.6)	4/36	細砂多、礫少	灰	灰	良・還		98397
61	140	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)、灰原(C-99№18)	壺A	[14.8]	—	(5.4)	5/36	細砂多、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	良・還	正位焼成、内外面自然釉降着、沈線1条	98364
61	141	4号窯灰原	灰原(№11)	壺A	—	—	(12.7)	5/36	細砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	良・還	正位焼成、外面自然釉降着顕著	98489
61	142	4号窯灰原	北側上段覆土、土坑内№8、灰原(D-99~E-99SE)	壺A	—	—	(17.6)	—	細砂、礫多	灰白	灰白	生・還	生焼け	98479
61	143	4号窯灰原	灰原表土	壺A	—	—	(7.7)	—	細砂	灰白	淡灰オリーブ	良・還	沈線1条、焼き割れあり	98501
61	144	4号窯灰原	灰原表土、灰原(D-99№31、D-98~D-97L)	壺A	12.4	—	19.4	10/36	粗砂多、礫	灰	灰	良・還	焼成やや甘い、口縁部外面沈線1条	65240
61	145	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	長頸瓶	—	13.9	(3.2)	脚 3/36	細砂多、礫少	灰白	灰	良・還	方形透かし(数不明)、外面降灰	98357
61	146	4号窯灰原	灰原(B-99~C-98L)	小型壺	8.8	—	(2.6)	3/36	粗砂、礫	灰緑	灰緑	軟	頸胴部に自然釉降着、焼き歪み顕著	98591
62	147	4号窯灰原	灰原表土	横瓶	7.2	—	(3.0)	4/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	淡灰オリーブ	良・還	内外面自然釉顕著	98488
62	148	4号窯灰原	灰原2層(B-49区)	横瓶	13.0	—	(4.8)	—	細砂	灰白	灰白	良・還		98593
62	149	4号窯灰原	灰原№11	横瓶	10.0	—	(3.6)	4/36	細砂多、礫少	淡灰	灰オリーブ	良・還	79と同一個体、内外面自然釉顕著	98399+98796
62	150	4号窯灰原	灰原表層(B-0区)	横瓶	14.7	—	25.6	—	粗砂多、礫多	灰	灰	良・還	内面Dr類、外面Bb類、横位焼成、口縁部焼き割れ、153と接合	98367
62	151	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	横瓶	12.0	—	(7.0)	18/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	緑灰	良・還	横位焼成、内外面自然釉顕著、焼き割れ	98441
62	152	4号窯灰原	灰原№11	横瓶	16.2	—	(2.6)	5/36	細砂多、礫微	青灰	灰	良・還		98487
62	153	4号窯灰原	灰原表土	横瓶	14.7	—	25.0	20/36	粗砂多、礫多	灰	灰	良・還	内面Dr類、外面Bb類、横位焼成、口縁部焼き割れ、150と接合	98614
62	154	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱)、B-0区表土	鉢	10.6	—	(6.1)	7/36	細砂多、礫少	灰黄	灰	良・還	無蓋焼成、内面降灰あり	98245
62	155	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	鉢	12.1	—	(6.6)	5/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	良・還	口縁部焼き歪みあり	98237
62	156	4号窯灰原	灰原(C-99№26・30)	鉢	14.0	—	(5.0)	25/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	良・還	口縁部焼き歪みあり	98229
62	157	4号窯灰原	灰原(D-100№33、D-99~D-98L、C-99№20)	鉢	14.5	—	(6.6)	17/36	粗砂多	灰	灰	良・還	無蓋、正位焼成、内外面自然釉降着	65367
62	158	4号窯灰原	灰原(B-99~C-98L)	壺G	10.1	—	(7.7)	3/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	良・還	正位焼成、内外面降灰・自然釉降着	98382
62	159	4号窯灰原	D101№4、灰原表土(B-0区)、灰原上層(B-99区)、灰原(C-98L~C-98L、C-99№29)	壺G	[14.8]	—	[16.4]	5/36	粗砂、礫少	オリーブ灰	オリーブ灰	軟	沈線・カキメで加飾、内外面焼き歪み・自然釉降着(頸胴部含む)	98707
62	160	4号窯灰原	灰原撹乱(A-100区)	壺G	—	—	(5.3)	—	粗砂、礫少	灰	灰	良・還		98511
62	161	4号窯灰原	灰原(C-99№27)	鉢C(厚底)	18.0	—	(16.0)	14/36	粗砂多	灰白	淡灰オリーブ	良・還	輪積成形、外面自然釉顕著、焼き割れ目立つ	98358
62	162	4号窯灰原	灰原表土	鉢C(厚底)	—	—	(7.5)	6/36	粗砂多	緑オリーブ	灰	良・還	把手、横位焼成	98282
62	163	4号窯灰原	灰原(3684)	横瓶か	—	—	(4.0)	—	粗砂多	淡灰黄	灰	生・還	生焼け、円形に穿孔か、内面Dr類、外面Bb類・カキメ調整	98796
63	164	4号窯灰原	灰原(C-100L~D-100LSE)	甕	26.4	—	(6.8)	4/36	粗砂多	淡灰	灰	軟	頸胴部外面に焼き歪み見られる	98385

第 33 表　窯跡出土遺物観察表 4

中：［　］は復元法量、（　）は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	成形	調整	胎土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
63	163	4号窯周囲	周囲(A-9)0	壺	－	－	(5.5)	－	櫛目	灰	灰	灰	他-普	内外面陽炎、自然釉あり	46598
63	166	4号窯周囲	周囲(D-10)0・(D-9)0L(B-9)	壺	21.5	－	(4.3)	6/36	櫛目・多	灰緻	灰緑	灰緑	他-普	内外面陽炎・灰釉、自然釉厚き ホ	46594
63	167	4号窯周囲	周囲表土	壺	26.7	－	(4.0)	6/36	櫛目・斜格	灰オリーブ	灰	灰	他-普	内面陽炎・自然釉	46404
63	168	4号窯周囲	周囲(N)L1	壺	19.6	－	(5.3)	4/36	櫛目・斜多	灰黄	灰黄	褐ホ	他-普	漬え跡ヘ、縦無目に強度上粘質痕	46429
63	169	4号窯周囲	周囲(D-9)0・(C-9)0B	壺	20.3	－	(11.7)	12/36	櫛目・斜多	灰	淡灰	灰	他-普	内面ｳﾛﾛ、外面ﾛｸﾛ ﾅﾃﾞ、口縁部に粘土製止あり、内面陽炎ホ	46594
63	170	4号窯周囲	周囲表土	壺	27.27	－	(3.7)	2/36	櫛目・斜多	灰オリーブ	灰	灰	他-普	正位地成、内面自然釉厚き 新鮮	46399
63	171	4号窯周囲	周囲上層、C-9(0)L(D-2)-27、A-9(0)E見通し、B-9(0)L、B-9	壺	19.8	－	(20.2)	6/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰オリーブ	緑灰	灰	他-普	内面ｳﾛﾛ、外面ﾛｸﾛ、正位地成、自然釉厚き、焼き歪み・焼き割れあり	46618
63	172	4号窯周囲	周囲(B-9)0L、周囲(B-9)0L(B-20)-35、C-9(0)	壺	22.4	－	(34.0)	14/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰	灰白	灰	他-普	内面ｳﾛﾛ、外面ﾛｸﾛ、正位地成、自然釉厚き、焼き歪みあり	46715-46969
63	173	4号窯周囲	周囲(B-9)0・(A-9)0(B)L、土層(B-9)0L	壺	22.8	－	(12.3)	12/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰	灰	灰	他-普	正位地成、外面平行タタキ痕ホ	46589
63	174	4号窯周囲	周囲上層(B-10)0L	壺	20.44	－	(4.5)	6/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰	灰	他-普	中々見れた連続刺突文、17は同一個体	46597
63	175	4号窯周囲	周囲表土(C-9)0L	壺	20.44	－	(16.1)	3/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰	灰	他-普	中々見れた連続刺突文、17は同一個体	46584
63	176	4号窯周囲	周囲(N)L1	壺	44.8	－	(15.0)	4/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰	暗灰	褐	他-普	焼き歪み有、17と同一個体	46585
63	177	4号窯焼成部	焼成部(N)25	蓋(坏身)	15.4	－	4.1	1/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	灰白	灰	他-普	生焼け	46289
63	178	4号窯北土坑	北側土坑埋土	坏身	20.13	－	(5.1)	5/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰	灰	他-普	外面陽炎ホ	45456
63	179	4号窯北土坑	2-2北土坑No.3	土器類	16.8	－	(7.8)	5/36	櫛目・斜多	浅橙	茶橙	茶	他-普	胎コテ目成形、結構形	45928
64	180	1号窯周囲	焼成部周囲No.25	蓋(坏身)	(13.1)	－	4.6	10/36	櫛目・斜多、斜少	オリーブ灰	オリーブ灰	灰	他-普	生焼け、焼き歪み・焼き割れ顕著	46326
64	181	1号窯周囲	焼成部周囲No.42	蓋(坏身)	(12.9)	－	(4.0)	26/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰	灰	他-普	焼成中にさらに焼き割れ	46338
64	182	1号窯周囲	焼成部・焼成部(東面	蓋(坏身)	(13.1)	－	4.3	7/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	淡青灰	灰	他-普	焼き歪みあり、外面自然釉厚き	46372
64	183	1号窯周囲	焼成部(東面)No.51	蓋(坏身)	13.6	－	(4.0)	6/36	櫛目・斜多、斜少	灰	暗灰	褐	他-普	胎位で焼き分布用、内面自然釉厚き	46389
64	184	1号窯周囲	2號、東面	蓋(坏身)	14.6	－	4.6	22/36	櫛目・斜多、斜多	淡灰黄	淡灰黄	灰	他-普	生焼け、焼き歪み、自然釉厚き	46248
64	185	1号窯周囲	焼成部(東面)No.29	蓋(坏身)	15.4	－	5.0	14/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	灰白	灰	他-普	生焼け、焼き歪み、一部黒色	46332
64	186	1号窯周囲	焼成部(東面)No.30・31、焼成部(東)17付近(東面	蓋(坏身)	15.5	－	4.6	32/36	櫛目・斜多	灰	暗灰	灰	他-普	胎位焼成、自然釉厚き ホ、口縁部に粘土製止あり、焼き歪み顕著、焼き割れ	46221
64	187	1号窯周囲	焼成部(東面)No.40	蓋(坏身)	15.6	－	4.4	31/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰オリーブ	灰	灰	他-普	生焼け(正位)ヘ、外面陽炎ホ	46247
64	188	1号窯周囲	焼成部(東)17付近(東面	蓋(坏身)	(13.8)	－	5.0	35/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰	灰	他-普	焼き歪み顕著	46343
64	189	1号窯周囲	焼成部(東面)No.48	蓋(坏身)	15.7	－	4.6	19/36	櫛目・斜多、斜少	明オリーブ灰	オリーブ灰	褐	他-普	胎位で焼き分布用、内面自然釉厚き	46327
64	190	1号窯周囲	焼成部(東面)No.50	蓋(坏身)	15.3	－	4.9	36/36	櫛目・斜多	淡灰	灰	灰	他-普	天井部焼き割れあり	45549
64	191	1号窯周囲	焼成部(東面)No.20	蓋(坏身)	(13.6)	－	(5.1)	26/36	櫛目・斜多、斜少	灰オリーブ	灰オリーブ	灰	他-普	天井部焼き割れ顕著	46252
64	192	1号窯周囲	焼成部(東面)No.34	蓋(坏身)	15.6	－	4.3	6/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	淡灰	灰	他-普	生焼け、天井部焼き割れ顕著	46249
64	193	1号窯周囲	焼成部(東面)No.32	蓋(坏身)	15.8	－	4.4	26/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	淡灰黄	灰	他-普	生焼け	46277
64	194	1号窯周囲	焼成部(東面)No.46	蓋(坏身)	15.8	－	4.7	36/36	櫛目・斜多、斜少	灰	暗灰	灰	他-普	外面陽炎(正位焼成)	46285
64	195	1号窯周囲	焼成部(東面)No.59	蓋(坏身)	16.0	－	4.5	34/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰	灰	灰	他-普	焼き歪みあり、外面陽炎(正位焼成)	45554
64	196	1号窯周囲	2號、東面	蓋(坏身)	14.8	－	4.5	16/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰	灰	他-普	口縁直焼ヨ焼き痕(外面陽炎)	46339
64	197	1号窯周囲	焼成部(東面)No.60	蓋(坏身)	16.3	－	4.9	35/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	淡灰黄	灰	他-普	生焼け、口縁直焼き	45294
64	198	1号窯周囲	焼成部(東面)No.40・49	蓋(坏身)	15.8	－	4.5	36/36	櫛目・斜多	淡灰	淡灰	灰	他-普	口縁部歪み大、外面自然釉厚き、焼き割れ顕著、焼成で焼き分布用	46270
64	199	1号窯周囲	焼成部(東)17付近(東面	蓋(坏身)	16.2	－	4.4	18/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	灰	灰	他-普	外面自然釉厚き顕著	46346
64	200	1号窯周囲	焼成部(東面)No.58	蓋(坏身)	16.2	－	4.9	5/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰オリーブ	灰、灰白	灰	他-普	生焼け	46372
64	201	1号窯周囲	焼成部(東面)No.60・66、焼成部(東)17付近(東面	蓋(坏身)	(16.8)	－	4.4	32/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰	淡灰オリーブ	灰	他-普	焼き歪み大、焼き割れ、外面自然釉顕著	46351
64	202	1号窯周囲	焼成部(東面)No.59	蓋(坏身)	16.2	－	4.6	31/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	淡灰黄	灰	他-普	生焼け	46228
64	203	1号窯周囲	焼成部(東面)No.49・59	蓋(坏身)	16.2	－	5.0	6/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	灰白	灰	他-普	生焼け、焼き歪みあり	46426
64	204	1号窯周囲	焼成部東面	蓋(坏身)	16.3	－	4.5	18/36	櫛目・斜多	オリーブ灰	オリーブ灰	灰	他-普	焼き割れあり	46342
64	205	1号窯周囲	焼成部(東面)No.20・35	蓋(坏身)	16.2	－	4.2	23/36	櫛目・斜多・少多	灰白	灰白	灰	他-普		46378
64	206	1号窯周囲	焼成部東面	蓋(坏身)	16.14	－	(4.0)	17/36	櫛目・斜多	灰	灰褐	灰	他-普	口縁部歪み大顕、胎位で焼き分布用(東面焼成に自然釉)	46347
64	207	1号窯周囲	焼成部(東面)No.30	蓋(坏身)	16.9	－	(5.7)	11/36	櫛目・斜多	灰	灰白	灰	他-普		46386
64	208	1号窯周囲	焼成部(東面)No.40	蓋(坏身)	16.9	－	(5.9)	11/36	櫛目・斜多	灰黄褐	灰	灰	他-普	外面自然釉厚き	46259
64	209	1号窯周囲	焼成部(東面)No.42	蓋(坏身)	16.5	－	4.6	6/36	櫛目・斜少	浅灰黄	淡灰黄	灰	他-普	生焼け、焼き歪みあり、天井部外面縦ナデ痕跡ホ	46250
64	210	1号窯周囲	焼成部(東面)No.23	蓋(坏身)	16.4	－	4.6	6/36	櫛目・斜多	淡灰オリーブ	淡灰	灰	他-普	焼き割れあり	46379
64	211	1号窯周囲	焼成部(東面)No.51	蓋(坏身)	16.5	－	4.6	26/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	暗灰、灰白	灰	他-普	焼き歪みあり、外面自然釉厚き	46423
64	212	1号窯周囲	焼成部(東面)No.1	蓋(坏身)	16.4	－	5.1	21/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	灰白	灰	他-普	生焼け	46358
64	213	1号窯周囲	焼成部東面	蓋(坏身)	16.5	－	4.6	16/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	淡黄灰	灰	他-普	生焼け	46328
64	214	1号窯周囲	焼成部東面	蓋(坏身)	16.5	－	4.2	15/36	櫛目・斜少、斜	灰	灰	灰	他-普		46371
64	215	1号窯周囲	焼成部(東面)No.27	蓋(坏身)	15.2	－	4.2	15/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰白	灰	他-普	生焼け、焼き割れ、一部黒色	46374
64	216	1号窯周囲	焼成部(東面)No.45	蓋(坏身)	15.8	－	4.5	17/36	櫛目・斜多、斜少	淡黄灰	淡黄灰	灰	他-普	生焼け	46228
64	217	1号窯周囲	焼成部、焼成部(東面	蓋(坏身)	16.8	－	4.9	12/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	灰	灰	他-普	生焼け、焼き割れあり	46375
64	218	1号窯周囲	焼成部(東面)No.49	蓋(坏身)	－	－	(5.7)	6/36	櫛目・斜多	灰白	灰白	灰	他-普	生焼け	46241
64	219	1号窯周囲	焼成部東面	蓋(坏身)	15.8	－	4.7	9/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	淡灰黄	灰	他-普	生焼け	46349
64	220	1号窯周囲	焼成部東面	蓋(坏身)	(15.2)	－	4.6	26/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	オリーブ灰	灰	他-普	生焼け、焼き割れ、歪に不安定ヘ	46344
64	221	1号窯周囲	焼成部(東面)No.50・51	蓋(坏身)	15.9	－	4.3	27/36	櫛目・斜多、斜少	灰	灰	灰	他-普	正位地成、裏33と同巻、自然釉・強度上顕著	46212
64	222	1号窯周囲	焼成部東面	坏身	13.5	－	(4.2)	12/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	灰	灰	他-普	正位地成、外面自然釉顕著	46315
64	223	1号窯周囲	焼成部(東面)No.10	坏身	13.8	－	(3.2)	6/36	櫛目・斜多	灰	灰褐	灰	他-普	正位地成、外面自然釉顕著、裏33と同巻	46313
64	224	1号窯周囲	焼成部(東)17付近(東面	坏身	12.8	－	4.6	15/36	櫛目・斜多、斜少	灰白	淡灰	灰	他-普	胎位焼成、裏同巻、外面自然釉、焼き割れ顕著	46216
64	225	1号窯周囲	焼成部(東面)No.51	坏身	13.0	－	(5.0)	6/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰	灰	灰	他-普	正位地成、外面自然釉厚き	46468
64	226	1号窯周囲	焼成部東面	坏身	12.8	－	(5.4)	7/36	櫛目・斜多、斜少	淡灰黄	淡灰黄	灰	他-普		46467
64	227	1号窯周囲	焼成部(東面)No.16・17	坏身	(11.8)	－	(4.7)	35/36	櫛目・転多、斜少	灰	灰	灰	他-普	正位地成、焼き割れ顕著、自然釉厚き	46216

第 34 表　窯跡出土遺物観察表 5

（中：［ ］は復元計測、（ ）は現存計測を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
61	228	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.3	—	4.5	5/36	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一焼	生焼け、焼き割り顕著	80306
61	229	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.4	—	3.9	24/36	精砂多、礫少	灰白	灰	焼一焼	焼き割り顕著、外面黒化	80308
61	230	1号窯第5床	焼成部床第5層/51-54	坏身	12.5	—	3.7	36/36	精砂、細砂多	灰白	灰	焼一焼	正位焼成、外面自然釉付着	80301
61	231	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.6	—	4.0	36/36	精砂多、礫少	灰白	灰	焼一焼	外面煤状あり	80307
61	232	1号窯第5床	焼成部床面	坏身	12.8	—	4.8	17/36	精砂多、礫少	灰白	灰	生一焼	2回焼き焼き、焼き割り顕著	80303
61	233	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.8	—	4.6	35/36	精砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生一焼	生焼け、口縁部黒色	80304
61	234	1号窯第5床	焼成部床面	坏身	12.8	4.4	4.2	9/36	精砂多、礫多	灰	灰	焼一焼	口縁部焼き金ち顕著	80319
61	235	1号窯第5床	燃焼部第5付近床面	坏身	13.0	—	(3.4)	9/36	精砂多、礫少	灰	淡灰	生一焼	窯内灰	80400
61	236	1号窯第5床	側面部、焼成部床面	坏身	12.0	—	4.2	34/36	精砂多、礫多	暗灰	灰	焼一焼	生焼け(一部)あり、正位焼成、焼き割れ	80206
61	237	1号窯第5床	燃焼部床面、燃焼部第5付近床面	坏身	11.6	4.0	4.2	11/36	精砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼一焼	正位一焼重焼成、内外面自然釉顕著	80318
61	238	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.2	4.9	4.4	5/36	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一焼	生焼け	80309
61	239	1号窯第5床	焼成部床第5層/52	坏身	12.2	—	4.1	5/36	精砂多、礫少	灰白、灰	灰	軟一軟	軟質焼に焼上げ者	80321
61	240	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.4	—	3.3	13/36	精砂多、礫少	灰白、黒	灰白、黒	生一焼	生焼け、焼成中に焼き割れ、端片黒色あり	80314
61	241	1号窯第5床	焼成部床第5層/49	坏身	12.4	—	4.5	36/36	精砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	焼一焼	2回と類似の焼成具合、口縁部黒色	80299/80298
61	242	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.6	—	4.5	14/36	精砂多、礫少	灰	灰	生一焼	生焼け	80307
61	243	1号窯第5床第5-11	焼成部床第5層	坏身	12.8	—	4.2	35/36	精砂多	淡灰	淡灰	焼一焼	焼位焼成、外面自然釉顕著	80317
61	244	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	13.0	—	4.0	12/36	精砂多、礫少	淡灰黄	淡灰	生一焼	生焼け、口縁部黒色	80302
61	245	1号窯第5床第5層/55、燃焼部第5付近床面	焼成部床第5層/55、燃焼部第5付近床面	坏身	11.8	—	(3.3)	21/36	精砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	軟一軟	内外面自然釉顕著、他窯体取者	80212
61	246	1号窯第5床	焼成部床第5層/49-49	坏身	12.0	—	3.7	5/36	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一焼	生焼け、口縁部黒色	80309
61	247	1号窯第5床	焼成部床第5層/49	坏身	12.2	—	4.1	29/36	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一焼	焼位焼成か、外面自然釉顕著、焼き金ち	80304
61	248	1号窯第5床	焼成部床第5層/47	坏身	12.3	—	(4.4)	18/36	精砂多、礫多	淡灰	灰	焼一焼ち	生焼け(一部)	80214
61	249	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	12.6	—	(4.2)	11/36	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一焼	2回と焼き、焼き割れ顕著	80304
61	250	1号窯第5床	焼成部床第5層/47	坏身	12.8	—	(3.9)	12/36	精砂多、礫少	灰白	灰	焼一焼	正位焼成、蓋口縁部顕著、外面自然釉顕著	80211
61	251	1号窯第5床	焼成部床第5層/49-49	坏身	12.8	—	4.1	28/36	精砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼一焼	正位焼成、外面自然釉	80201
61	252	1号窯第5床	焼成部床第5層/50-49	坏身	12.8	—	4.2	28/36	精砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生一焼	生焼け、焼き割れあり、テッ元工具痕	80202
61	253	1号窯第5床第5層	焼成部床第5層	坏身	13.2	—	4.4	19/36	精砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生一焼	生焼け	80210
61	254	1号窯第5床	焼成部床第5層/17	坏身	13.8	5.3	4.6	29/36	精砂、細砂多	灰	灰	生一焼	焼き割れ、焼成中ひび入る・切傷	80218
61	255	1号窯第5床	焼成部床第5層/19	坏身	12.8	—	3.8	24/36	精砂、細砂多	灰	灰	焼一焼	正位焼成、焼き割れ顕著	80202
61	256	1号窯第5床	焼成部床面	坏身	13.8	4.9	4.1	6/36	精砂多、礫	灰白	灰白	焼一焼	焼き割れあり	80309
61	257	1号窯第5床	焼成部床第5層/33	坏身	13.8	4.9	4.6	16/36	精砂、細砂多	淡灰黄	淡灰黄	生一焼	正位焼成、生焼け、焼き割れあり	80301
61	259	1号窯第5床	焼成部床第5層/35	坏身	(13.4)	—	(4.0)	24/36	精砂、細砂多	灰	灰	焼一焼	正位焼成、焼き金ち、焼き割れ顕著	80303
61	259	1号窯第5床	焼成部床第5層/45	坏身	13.2	—	4.1	36/36	精砂、細砂多	灰	灰	焼一焼	正位焼成、焼き金ち多い	80210
61	260	1号窯第5床	焼成部床第5層/48	坏身	13.4	—	3.8	36/36	精砂、細砂多	淡灰黄	灰	生一焼	生焼け、焼き割れ顕著	80217
61	261	1号窯第5床	2階床面	坏身	13.2	—	4.4	29/36	精砂、細砂多	淡灰黄	灰白、黒	生一焼	正位焼成、生焼け、口縁部黒色	80322
61	262	1号窯第5床	焼成部床第5層	坏身	(14.2)	—	(5.4)	7/36	精砂、細砂多	淡灰	灰	焼一焼	焼き金ち顕著	80323
61	263	1号窯第5床	5a以燃焼部第5付近床面	坏身	13.8	—	(3.3)	11/36	精砂多	淡灰	淡灰	焼一焼	正位焼成か、蓋口縁部顕著、外面自然釉	80321
61	264	1号窯第5床	焼成部床第5層、2階床面	坏身	13.2	—	4.0	23/36	精砂多、礫少	灰白	灰	焼一焼	正位焼成、外面自然釉、外底にテッ元工具痕	80320
61	265	1号窯第5床第5層	焼成部床第5層	坏身	13.6	—	(3.3)	7/36	精砂、細砂多	灰白	淡灰	焼一焼	外面自然釉顕著顕著	80307
61	266	1号窯第5床	焼成部床第5層/8-21-49	坏身	14.0	—	(4.1)	9/36	精砂、細砂多	淡灰	灰	焼一焼	外底仕上げ丁寧、外面一部自然釉顕著	80324
61	267	1号窯第5床第5層	焼成部床第5層/49	坏身	14.0	—	(3.0)	16/36	精砂、細砂多	灰白	灰白	生一焼	生焼け	80219
61	268	1号窯第5床第5層/8-21-49	蓋(表用)かく	—	—	—	(4.3)	—	精砂、礫	淡黄褐	赤褐	生一焼	生焼け	80378
61	269	1号窯第5床第5層/12	蓋(表用)(?	15.8	開3.5	5.4	24/36	精砂、細砂多	灰	暗灰	灰	焼一焼	天井部内面に焼ぶ、3cm?焼き割れ、内面に回転ヘラ削ナオキ痕、外面黒化	80343
61	270	1号窯第5床第5層/46	表用ふ	—	15.8	(12.5)	微 21/36	精砂多	灰褐	灰	焼一焼	2回焼き かく、焼位焼成、内面自然釉顕著	80216
61	271	1号窯第5床第5層/49	表用ふ	—	14.8	(12.4)	—	精砂多、礫少	灰褐	灰	焼一焼	3回焼き かく、焼位焼成、内面自然釉顕著	80214
61	272	1号窯第5床第5層/12	燃焼部第5付近床面/5a以	表用ふ	13.2	—	(4.3)	28/36	精砂多、礫少	淡褐灰	灰	焼一焼	正位焼成、2方焼かく	80208
61	273	1号窯第5床	燃焼部第5付近床面/5a	表用ふ	—	12.8	(10.4)	微 26/36	精砂多、礫少	オリーブ黒	灰	焼一焼	正位焼成焼成、内面回転、2方焼かく	80218
61	274	1号窯第5床	燃焼部床第5層、燃焼部第5付近床面/5a以	表用ふ	—	12.2	(7.3)	微 25/36	精砂多、礫少	オリーブ黒	灰	焼一焼	正位焼成、内面回転、2方焼かく	80215
61	275	1号窯第5床	焼成部床第5層	表用ふ	—	11.2	(6.4)	微 11/36	精砂、細砂多	灰	灰	焼一焼	正位焼成	80222
61	276	1号窯第5床第5層	蓋裏	表用ふ	—	(2.4)	7/36	精砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼一焼	天井部内面に焼ぶ、3cm?焼き割れ、内面自然釉顕著	80406
61	277	1号窯第5床第5層/51	蓋(裏)ふ	15.4	—	(3.4)	8/36	精砂多	灰	淡灰	焼一焼	正位焼成焼成、内外面自然釉顕著	80228
61	278	1号窯第5床第5層	蓋(裏)ふ	8.8	—	(4.4)	25/36	精砂多	灰	灰	焼一焼	正位焼成焼成、内外面自然釉顕著	80223
61	279	1号窯第5床	燃焼部、焼成部床第	蓋裏	—	—	(5.6)	—	精砂多	暗灰オリーブ	灰	焼一焼	焼成焼成工具	80225
61	280	1号窯第5床第5層	蓋裏	—	—	—	(4.0)	—	精砂多	灰白	灰白	焼一焼	内面調整、焼き割れあり	80763
61	281	1号窯第5床第5層、D-250表土	蓋裏	—	—	—	(10.7)	—	精砂多、礫少	黄褐	灰	焼一焼	外面回転ケズリ	80402
61	282	1号窯第5床第5層	蓋裏	—	—	—	(4.5)	—	精砂多、礫少	灰白	灰	焼一焼	外面回転ケズリ、指沈あり	80401
61	283	1号窯第5床第5層	蓋(裏)ふ	—	—	—	—	—	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一焼	外方向かい焼いカキメ調整	80762
61	284	1号窯第5床第5層	蓋(裏)ふ	—	—	—	(4.0)	—	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一焼	外方向かい焼いカキメ調整	80764
61	285	1号窯第5床第5層、民間表土調査	壺	31.2	—	(16.4)	9/36	精砂多	暗灰	淡灰	焼一焼	内面仕整か、外面水整、正位焼成焼成、自然釉顕著	80201
61	286	1号窯第5床第5層/25	壺	27.2	—	(7.4)	6/36	精砂多、大型礫少	淡灰	灰	焼一焼	焼き分(蓋き分)転用	80169
61	287	1号窯第5床第5層/27-20	壺	23.2	—	(8.6)	14/36	精砂多、礫少	灰白	灰白	焼一焼	内面仕整、外面水整、焼成あり	80374
61	288	1号窯第5床第5層/6	壺	21.6	—	(10.6)	5/36	礫多	暗赤褐	黒褐	焼一焼	焼き分(蓋き分)転用、壺肩部者	80366
61	289	4号窯焼成部床	蓋(坏)身	12.2	—	4.1	36/36	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一焼	天井部内面ナデ調整顕著、内面ケシ炭工具痕あり、正位焼成、外面黒化	80203
61	290	4号窯焼成部床、最終床天井部落ち	蓋(坏)身	12.8	—	3.3	12/36	精砂、細砂多	灰	灰	焼一焼(一部)	焼無過生の焼成あり	80212
61	291	4号窯焼成部床、最終床天井部落ち	蓋(坏)身	12.8	—	4.2	11/36	精砂、細砂多	淡灰黄	灰	焼一焼	焼位(一部)焼き分(蓋き分)転用、内面焼成・焼上げ丁寧、正位焼成、外面黒化	80213

第 35 表　窯跡出土遺物観察表 6

中：（）は復元径、（ ）は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	転土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
68	192	6号窯跡除	焼成室最終末、焚口埋土、側面防焦代上	皿(陶器)	13.0	—	4.4	26/36	胴部多、縁	灰	暗灰	転	外面陶灰・焼土焼着、焼き損(釉薬	03304
68	193	6号窯跡除	最終末天井部表土	皿(陶器)	15.0	—	13.4	6/36	胴部多、縁	灰	灰黄	焼・酸・転	外面陶灰・焼土焼着、内面ハケ目多紙、厚天井部ナデ痕有	00402
68	194	6号窯跡除	最終末天井部表土	皿(陶器)	15.0	—	14.0	7/36	焼部多、大型破片	灰	暗灰	焼・酸	外面陶灰・焼土	03211
68	195	6号窯跡除	焼成室最終末	坏B	約10	—	12.0	6/36	焼部多	淡灰	灰	転	底不在高、胴部で焼き切(置き目)に転用、北部に第三焼台	00401
68	196	6号窯跡除	焼成室最終末	坏B	11.0	—	4.1	6/36	焼部多、縁少	灰	灰	焼・酸	外面ヒタン状工具痕あり、外面陶灰あり	00222
68	197	6号窯跡除	焼成室最終末	坏B	11.0	—	4.6	26/36	焼部多、縁少	灰	灰	焼・酸	歪の最新片窯着、外面陶灰あり	03213
68	198	6号窯跡除	焼成室最終末	坏B	12.0	—	12.7	6/36	焼部多、縁少	淡灰	淡灰	転		00403
68	199	6号窯跡除	焼成室最終末、側面防焦代上	坏B	11.0	—	4.0	26/36	焼部多、縁少	灰	灰	転	底全在(置き目)に転用、焼き損あり	03305
68	200	6号窯跡除	焼成室床内	坏B	12.0	—	3.9	19/36	焼部多、縁少	淡灰	淡灰	焼・酸	外面白熊編・陶灰あり	03222
68	201	6号窯跡除	焼成室除	坏B	12.0	—	3.7	9/36	焼部多、縁少	灰	灰	焼・酸	正位焼成、外面に窯滓熱あり	03224
68	202	6号窯跡除	焚口埋土	坏B	約12	—	13.3	—	焼部多、縁少	淡灰黄	淡灰黄	生・酸	生焼け、窯滓編著	00654
68	203	6号窯跡除	焼成室最終末、側面防焦代上	皿(陶器)	11.1	約5.8	1.9	19/36	焼部多	灰	灰緑	焼・酸	正位焼成、外面白熊編著で調整不明	03204
68	204	6号窯跡除	焼成室最終末	皿(陶器)	約12	約5.0(推)10.1	1.0	—	焼部	灰	灰	焼・酸		00401
68	205	6号窯跡除	焼成室最終末、側面防焦代上	皿(陶器)	12.1	約5.9/4.8	3.8	22/36	焼部少	灰	緑灰	焼・酸	段間1.0cm、正位焼成、外面白熊編著で、施下に少々ナデ調整あり	03230
68	206	6号窯跡除	焼成室最終末	皿(陶器)	12.3	約5.8/6	12.3	5/36	焼部少	灰	緑灰	焼・酸	正位焼成、外面白熊編著で調整不明	03236
68	207	6号窯跡除	焼成室最終末	皿(陶器)	12.5	約5.9/6.9	3.2	28/36	焼部多	灰	緑灰	焼・酸	段間0.1cm、正位焼成、外面白熊編著、カキメ調整は段上から段底まで全て施す	03238
68	208	6号窯跡除	焼成室最終末	皿(陶器)	12.5	約5.9/7.2	12.23	18/36	焼部少	灰	黄灰	焼・酸	正位焼成、外面白熊編・窯壁土粘着編著、調整不明	03493
68	209	6号窯跡除	焚口埋土	皿(陶器)	12.7	約5.9/7.2	12.4	7/36	焼部少	灰	灰緑	焼・酸	正位焼成、外面白熊編・窯壁土粘着で調整不明	03215
68	210	6号窯跡除	焼成室最終末、側面防焦代上、6・7号窯煙道	皿(陶器)	12.8	約5.1/6.9	12.7	16/36	焼部少	灰	灰オリーブ	焼・酸	二軸コカキメ調整、正位焼成、外面白熊編・陶灰編著	03213
68	211	6号窯跡除	焚口埋土	鉢B1	13.0	—	13.0	4/36	焼部多	淡灰	淡灰	焼・酸	外面白熊編、縁まこが変色す	03326
68	212	6号窯跡除	焚口埋土、側面防焦代上	鉢B1	約15	—	16.0	5/36	焼部少	淡灰	灰	焼・酸	外面白熊編著、下半は他土器みたの古の図に不記あり、141と同一個体	03401
68	213	6号窯跡除	焼成室最終末	鉢B1	12.6	—	16.1	12/36	焼部、縁少	灰	暗灰	焼・酸	正位焼成、内面陶灰・外面酸化、胴部の可能性あり	03217
68	214	6号窯跡除	焼成室最終末、側面防焦代上	甕	8.4	—	15.1	16/36	胴部、縁少	淡灰オリーブ	灰	焼・酸	正位焼成、縦胴部全面白熊編著	03209
68	215	6号窯跡除	焼成室最終末	壺D	10.9	—	15.1	11/36	胴部、縁少	灰	灰	焼・酸	胴部の可能性あり	03218
68	216	6号窯跡除	焚口埋土、側面防焦代上	壺胴部D	—	—	11.8	15/40	胴(12/36)、縁少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・酸	4段化だが3カ所あり、胴上半部のみ、正位焼成、外面白熊編著	03403
68	217	6号窯跡除	焼成室最終末	鉢類	—	—	約13	12/36	胴(7/36)、縁少、焼部	灰	灰	焼・酸	唐ハ点(鉢?)用、内面陶灰あり	03409
68	218	6号窯跡除	焼成室最終末	壺	約30	—	16.0	1/36	焼部多、縁多	暗灰	暗灰	転	2条1単位の沈線、3列の斜行刺突文で加飾、焼き台(置き目)に転用、北部現況あり	03212
68	219	6号窯跡除	焼成室最終末	鉢C(須恵)	—	8.1	12.0	—	焼部多、縁多	灰	灰	焼・酸・転	外面ヘラケズリ後一軸コカキ調整、焼成室各の北部編著	03218
68	220	6号窯跡除	焼成室最終末	鉢	19.0	9.0	23.6	16/36	焼部多、縁少	灰	灰	焼・酸	四耳1ヶ所、内面ロクロナデ、外面下半ハケ上半ヨコナデ、松ヤニ状遺あり	03217
68	221	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	約11	—	14.0	7/36	焼部、縁少	淡灰	灰緑	焼・酸	正位焼成、外面白熊編著	00405
68	222	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	12.9	—	3.2	6/36	焼部多	淡灰	灰	焼・酸	正位焼成、外面白熊編著	03201
68	223	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	13.6	—	3.6	7/36	焼部多	灰	暗灰	焼・酸	天井部外面ヨコナデ調整後ナシ状工具痕あり、外面陶灰、黒化	03209
68	224	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	13.6	—	4.1	5/36	焼部多、縁少	灰	灰	焼・酸・転	天井部外面ヨコナデ調整後ナシ状工具痕あり、外面陶灰、焼き損あり	03224
68	225	6号窯跡除	焼成室、6・7号窯跡上	皿(陶器)	14.7	—	4.4	5/36	焼部多、縁少	灰白	淡灰	焼・酸	天井部外面ヨコナデ調整後ナシ状工具痕あり	03212
68	226	6号窯跡除	焼成室周辺部、焚口埋土、民家山ナ焼成室上	坏B	11.4	—	3.6	14/36	焼部、縁少	淡灰黄	灰	生・酸	外面に粘成第一ケ定位「×」、生焼け、焼き損あり	03218
68	227	6号窯跡除	焼成室周辺部	坏B	12.2	—	13.0	9/36	焼部多	淡灰	灰	焼・酸	外面陶灰	03215
68	228	6号窯跡除	焼成室周辺部	坏B	約13	—	12.0	6/36	焼部少	灰白	灰緑	焼・酸	外面白熊編著、側部焼止か	00200
68	229	6号窯跡除	焼成室周辺部	坏B	約12.6	—	15.0	5/36	焼部、縁少	淡灰黄	淡灰黄	焼・酸	外面白熊編著、側部焼止か	00102
68	230	6号窯跡除	焼成室周辺部、民家山ナ焼成上	坏B	12.8	—	12.7	13/36	焼部、縁少	淡灰	淡灰	焼・酸		03214
68	231	6号窯跡除	焼成室周辺部	坏B	約13	—	15.0	4/36	焼部、縁少	暗灰	暗灰	焼・酸		00106
68	232	6号窯跡除	焼成室周辺部	坏B	13.2	—	3.6	2/36	焼部、縁少	灰白	淡灰オリーブ	焼・酸	外面ナデ調整後、ナシ状工具痕、側部焼止か、外面白熊編・陶灰あり、焼き損あり	00199
68	233	6号窯跡除	焼成室周辺部	坏B	約13	—	13.2	5/36	焼部多、縁少	灰	灰緑	焼・酸	正位焼成、外面白熊編著、焼き損あり	00107
68	234	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	11.9	約5.8	11.9	3/36	焼部多、縁少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・酸	正位焼成、外面白熊編著、調整不明	03221
68	235	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	11.2	約5.7	12.3	13/36	焼部多、縁少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・酸	正位焼成、外面陶灰編著、調整不明	03226
68	236	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	11.1	約5.6	12.0	17/36	焼部、縁少	淡灰	灰緑	焼・酸	段間0.1cm、正位焼成、外面全体に窯壁土粘着編著、調整不明	03240
68	237	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	11.8	約5.8	3.4	11/36	焼部多、大型破片	淡灰	淡灰/暗	焼・酸	段間0.6cm、正位焼成、外面白熊編著	03303
68	238	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	11.8	約5.9	11.0	12/36	焼部多、縁少	灰	灰緑	焼・酸	正位焼成、外面全体に窯壁土粘着編著、調整不明	03217
68	239	6号窯跡除	焼成室周辺部	皿(陶器)	12.0	約5.0/6.0	11.0	14/36	焼部多、縁少	淡灰	灰緑	焼・酸	正位焼成、外面全体に窯壁土粘着編著、調整不明	03213
68	240	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢B1	約14	—	15.0	2/36	焼部少	灰	灰	焼・酸	外面カキメ調整後、沈線で加飾、直線の可能性あり	03501
68	241	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢B1	11.8	—	14.2	12/36	焼部	淡灰	淡灰	焼・酸	外面白熊編著、焼き損あり、下半は他土器みたの古の図に不記あり、212と同一個体	03404
68	242	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢B1	12.8	—	14.0	7/36	焼部多	淡灰黄	灰	生・酸	歪す、生焼け、外面黒化	03512
68	243	6号窯跡除	焼成室周辺部	不明	約14	—	12.7	5/36	焼部多、縁少	淡黄灰	淡灰	焼・酸	小片、焼き損あり、縁まこが変色	03507
68	244	6号窯跡除	焼成室周辺部、6・7号トンネル粘石煙機関上	鉢D	約17	—	16.9	7/36	焼部多、縁少	灰	灰オリーブ	転	外面白熊編の古の図に不記、張垂物付着	03506
68	245	6号窯跡除	焼成室周辺部	東側A	—	—	15.6	15/13	胴部、縁少	灰オリーブ	淡灰	焼・酸	3方透かし、側位焼止、外面白熊編著	03211
68	246	6号窯跡除	焼成室周辺部、民家山ナ焼成上	東側B	12.8	—	18.6	11/36	胴部、縁少	灰オリーブ	淡灰	焼・酸	3方透かし、正位焼成・外面白熊編著	03227
68	247	6号窯跡除	焼成室周辺部	東側B	11.8	—	14.0	18/36	胴部、縁少	灰	灰	焼・酸	3方透かし、正位焼成・外面白熊編著	03258
68	248	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢D	11.4	—	13.0	11/36	焼部多、縁少	灰	灰	焼・酸	側位焼止か、外面一部に白熊編著、胴部の可能性あり	03214
68	249	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢D1	約13	—	15.0	5/36	焼部少	灰オリーブ	淡灰	焼・酸	薄手、正位焼成、内面陶灰・白熊編著	00103
68	250	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢D1	約13	—	15.0	12/36	焼部少	灰白	灰白	焼・酸	薄手、正位焼成、白熊編・陶灰あり、焼き損編著	00104
68	251	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢D1	約14	—	14.2	15/36	焼部少	灰	灰	焼・酸	薄手、正位焼成、陶灰あり	00105
68	252	6号窯跡除	焼成室周辺部	鉢類	16.0	—	15.0	14/36	焼部、大型破片	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・酸	正位焼成、内面白熊編・陶灰編著	00117

第 36 表　窯跡出土遺物観察表 7

（中：〔 〕は復元径値、（ ）は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	釉・土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
69	353	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色土、黄灰色イ、ロ-19黒灰色土、ハ-6褐色、ト-1トレンチ配石遺構上	長頸瓶	—	—	(12.5)	—	灰釉、緻密	灰白	灰白	生一	生地ナ、端ケズ一つを焼き合に転用	49290
69	354	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色土、ト-19トレンチ配石遺構上	長頸瓶	—	14.6	(5.7)	胴上2/3	暗灰、緻密	灰	灰	焼一普	底ヲ回転ヘラ乱れ（糸切不明瞭）、正位焼成、外面自然釉顕著	49348
69	355	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色土	長頸瓶	—	15.8	(5.3)	胴1/3弱	暗灰、緻密	灰白、灰	灰オリーブ	焼一普	底ヲ回転ヘラ乱れ（糸切不明）、正位焼成、外面自然釉顕著	49246
70	356	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色土	小型壺	5.3	—	(2.2)	9/36	暗灰、緻密	灰白オリーブ	灰オリーブ	焼一普	正位焼成	49322
70	357	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色土、配石遺構周辺	鉢	—	—	(9.0)	—	暗灰、緻密	灰白	灰白	軟	胴部の可能性あり、磁鉄鉱含む自然釉顕著	49406
70	358	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色	甕	28.8	—	(6.0)	2/36	暗灰、緻密	灰	灰	焼一普	正位焼成、端部ケズ	49407
70	359	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色	甕	約19	—	(4.8)	7/36	暗灰、緻密	灰	灰	焼一普	正位焼成、端部ケズ、360と同一個体か	49229
70	360	6号須恵窯跡	樹根跡黒灰色	甕	約26	—	(6.1)	5/36	暗灰、緻密	灰	灰	焼一普	正位焼成、端部ケズ、359と同一個体か	49230
70	361	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	蓋(坏身)	12.4	—	(3.7)	17/36	暗灰、緻密	灰白	灰白	焼一普	胴位焼成、焼き並み多	49244
70	362	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	蓋(坏身)	12.9	—	(3.7)	6/36	暗灰、緻密	灰白	灰	焼一普	外面自然ヘラ	46494
70	363	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	蓋(坏身)	13.8	—	4.8	10/36	暗灰多、緻密	灰	灰オリーブ	軟	胴位で焼き分転用、口縁部焼土溶着	49247
70	364	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	10.9	—	3.9	5/36	暗灰多、緻密	灰白	灰オリーブ	焼一普	胴位焼成、外面自然釉顕著	46514
70	365	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	10.8	—	(4.6)	7/36	暗灰多、緻密	灰白	灰オリーブ	焼一普	外面自然釉顕著	46516
70	366	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	10.6	—	(2.5)	13/36	暗灰多、緻密	灰白	灰白	焼一普	正位焼成、外面自然釉顕著	49327
70	367	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土、6-7号窯	坏身	12.1	—	4.2	24/36	暗灰多、緻	灰	灰	焼一普	正位焼成、内外面自然釉顕著	49245
70	368	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	12.2	—	3.6	6/36	暗灰、緻密	灰白	灰	焼一普	外底にチシ状工具痕、焼き並みあり	46518
70	369	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	12.2	—	(3.1)	6/36	暗灰多、緻密	灰白	灰	焼一普	正位焼成、外面自然釉顕著	46517
70	370	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	12.8	—	(3.6)	7/36	暗灰、緻密	灰白	灰白、灰	焼一普	Gmarkの痕跡ある	46513
70	371	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	13.9	—	(4.0)	7/36	暗灰多、緻密	灰白	灰白、灰	焼一普	外面自然釉顕著	46508
70	372	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	坏身	13.8	—	(3.7)	6/36	暗灰、緻密	灰白	灰白	焼一普	生地ナ	46515
70	373	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土、6-7号窯	高坏A	13.7	—	(4.2)	36/36	暗灰多、緻密	灰白	灰	焼一普	有蓋、外底ヘラ切ケナ調整、浅かし、ケズ入れる工具痕有る、ケズ焼き並みあり、外面黒化	46548
70	374	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	蓋(坏身)	13.8	底1.10.8	(2.6)	5/36	暗灰、緻密	灰白	灰白	焼一普	生地ナ	49323
70	375	6号須恵窯	窯内8-イ、6-7号窯上	蓋(坏身)	11.7	底1.8.4	(2.1)	28/36	暗灰多、緻密	灰白	灰オリーブ	焼一普	外面自然釉顕著、焼き並みあり	46509
70	376	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	蓋(坏身)	12.1	底1.10.2	2.2	6/36	暗灰	灰	灰	焼一普	胴径6.5cm、外面自然釉顕著	46506
70	377	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	蓋(坏身)	10.8	底1.7.5	(2.4)	10/36	暗灰多、緻密	灰白	灰白	焼一普	内面焼土・焼成顕著、胴径焼成か	46514
70	378	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	蓋(坏身)	—	底径1.4	(1.9)	破片	暗灰、緻密	灰	灰オリーブ	焼一普	外面自然釉	46468
70	379	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土、5-6層灰色土	蓋(高坏小)	14.4	—	3.8	9/36	暗灰多、緻多	灰白	灰白	焼一普	無底、天井部外面ヘラ調整、正位焼成	49243
70	380	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土、6-7号窯	鉢	—	—	(3.3)	10/36	緻少	灰白	灰オリーブ	軟	薄手、内面ハケ目不明、焼き並み多、焼き分転用（第2段目）に転用	46178
70	381	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	鉢	—	—	(5.6)	10/36	暗灰、緻多	灰オリーブ	灰オリーブ	焼一普	内外面自然釉顕著、焼き並みあり	49231
70	382	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	鉢か	—	11.0	(4.1)	胴9/36	暗灰多、緻少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼一普	胴位焼成、内外面自然釉顕著、胴の可能性あり	46179
70	383	6号須恵窯	窯内8-イ-6イ-6ロ黒灰色土、6-7号窯	鉢蓋	—	—	4.5	—	暗灰、緻密	灰白	灰、灰黄褐	焼一普	正位焼成、自然釉顕著	49289
70	384	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	鉢蓋	—	—	(5.6)	—	暗灰、緻少	灰黄褐	灰白	焼一普	上側面ケズリ、外底全体ニ工具痕ケズリ調整、回転円盤ケズ5cm	49291
70	385	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	鉢(三足鉢)	—	8.4	(2.5)	—	暗灰、緻少	—	灰	焼一普	外面焼成ムラ、焼成平に調整	46521
70	386	6号須恵窯	窯内8-イ黒灰色土	鉢(三足鉢)	—	(16.6)	(1.2)	—	暗灰	赤黄灰	赤黄灰	焼一普	外底ケズリ調整、焼成平に調整	46519
70	387	11号須恵窯	焼成室天井崩落上	蓋(坏身)	約12	—	(3.6)	5/36	暗灰、緻密	灰白	灰白	焼一普	外面自然釉顕著	49136
70	388	11号須恵窯	焼成室床面崩落ブロック中	蓋(坏身)	12.8	—	(3.9)	6/36	暗灰多、粗砂	灰	灰	焼一普	焼き並みあり	49145
70	389	11号須恵窯	煙道床面	坏身	12.7	—	4.5	7/36	暗灰、緻多	灰白	灰白	焼一普	天井部外面ヘラ状工具痕、焼き並み・重ねあり	49136
70	390	11号須恵窯	最終床面天井崩落上	蓋(坏身)	13.6	—	(3.4)	10/36	暗灰、緻多	赤黄灰	赤黄灰	焼一普	生地ナ	46511
70	391	11号須恵窯	焼成室床面崩落ブロック中	蓋(坏身)	13.4	—	(3.8)	6/36	暗灰、緻少	灰白	灰	焼一普	外面焼成ムラ	49144
70	392	11号須恵窯	焼成室天井崩落上	蓋(坏身)	13.9	—	(3.8)	12/36	暗灰、緻少	灰白	灰白	焼一普	生地ナ	49151
70	393	11号須恵窯	焼成室床面崩落ブロック中	蓋(坏身)	13.9	—	3.8	13/36	暗灰多、緻少	赤黄灰、灰	赤黄灰、灰	焼一普	生地ナ	49146
70	394	11号須恵窯	最終床面天井崩落上	蓋(坏身)	約14	—	(4.2)	6/36	暗灰、緻少	灰白	灰白	焼一普	生地ナ	46415
70	395	11号須恵窯	焼成室天井崩落上	蓋(坏身)	14.5	—	4.8	6/36	暗灰多、粗砂	赤黄灰	灰白	焼一普	生地ナ	49153
70	396	11号須恵窯	煙道床面	坏身	約10.5+	—	(2.5)	7/36	暗灰多、緻少	灰白	灰白	焼一普	外面自然釉顕著	46518
70	397	11号須恵窯	焼成室天井崩落上	坏身	11.4	—	(3.5)	5/36	暗灰、緻少	赤黄灰	赤黄灰	焼一普		49147
70	398	11号須恵窯	煙道床面	坏身	12.8	—	(2.5)	7/36	暗灰、緻少	赤黄灰	赤黄灰	焼一普	生地ナ	46419
70	399	11号須恵窯	焼成室床内	坏身	約12	—	(2.4)	6/36	暗灰多、緻	暗灰褐	暗灰褐	焼一普	外面焼成ムラ	46409
70	400	11号須恵窯	焼成室天井崩落上	坏身	12.2	—	(2.1)	9/36	暗灰、緻少	灰白	灰白	焼一普	生地ナ	49148
70	401	11号須恵窯	煙道床面	坏身	12.8	7.5	3.3	5/36	暗灰多、緻少	灰白	灰	焼一普	外底にロ状痕有	49458
71	402	11号須恵窯	煙道内	蓋(坏身)	11.5	底1.9.1	3.2	16/36	暗灰多、緻少	赤黄灰	灰	焼一普	胴径6.5cm、正位焼成、外面焼成顕著で調整不明	46211
71	403	11号須恵窯	煙道床面上	蓋(坏身)	9.4	底1.7.6	(2.1)	10/36	暗灰多、緻少	灰白	灰白	焼一普	外面焼成顕著、焼き並みあり	46135
71	404	11号須恵窯	煙道裏面上	蓋(坏身)	10.4	底1.6.5	(1.5)	17/36	暗灰多、緻少	赤黄灰	灰	焼一普	天井部下胴部ヘ外面粗い切離ケズリ、正位焼成、低いつまみ付き	49471
71	405	11号須恵窯	煙道床面上	蓋(坏身)	10.2	底1.6.6	(2.7)	8/36	暗灰、緻少	赤黄灰オリーブ	赤黄灰	焼一普	焼き並み・焼あり	46134
71	406	11号須恵窯	4-7号窯上	蓋(坏身)	10.7	底1.9.1	3.7	18/36	暗灰多、緻少	赤黄灰	灰黄褐	焼一普	胴径5.5cm、天井部回転ケズリ、正位焼成、外面焼成ムラ	46132
71	407	11号須恵窯	煙道床面上	坏G	8.9	6.6	3.2	14/36	暗灰多、緻少	灰白	灰	焼一普	外底焼ぶ	46137
71	408	11号須恵窯	煙道裏面上	坏G	8.2	5.6	4.0	4/36	暗灰	灰白	灰白	焼一普	体部下端ロ一ラ起こしの回転ケズリ、外底に焼成時ヘラ足痕？	46500
71	409	11号須恵窯	煙道床面上	坏G	8.2	6.3	3.4	11/36	暗灰多、緻少	赤黄灰	赤黄灰	焼一普	焼き並みあり	46004
71	410	11号須恵窯	最終床面天井崩落上	鉢G	11.8	7.9	4.6	9/36	暗灰多、緻少	灰褐	灰	焼一普・軟	焼き並み、無蓋で重ね焼きか	46214
71	411	11号須恵窯	煙道床面上	壺	約21	—	3.4	6/36	暗灰多、緻少	灰	灰	焼一普	ネガ、焼き並み顕著	46461

第37表　窯跡出土遺物観察表8

（中：［　］は復元計測、（　）は現存計測を示す。

図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	粘土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
71	412	11号窯跡体	窯体床出土、焼成部床出土、物原北西出土、1号焚口付近～5号焚口、1号側色出土、6-7号窯上	椀	[27.6]	10.8	[16.2]	15/36	粗砂多、鉄粒	灰	灰	堅一普	踏上痕文、焼土並ル鉄塞	65259
71	413	11号窯跡体	窯体床出土	皿(茶碗状)	14.3	—	14.0	5/36	粗砂多、鉄粒	灰白	灰白	生一堅	天井部外面ケキノ調整、生焼け	66445
71	414	11号窯跡体	最終床面天井崩落上	皿形台	11.7	—	12.4	6/36	粗砂多、鉄少	淡灰	淡灰	堅一普	糸切痕	66589
71	415	11号窯跡体	側壁跡床面北西	皿形台	12.4	—	13.2	5/36	粗砂多、鉄少	灰	灰褐	軟一和	底部張、側面で焼き台本用、外面ロクロ調整痕有	65066
71	416	11号窯跡体	焼成室天井崩落上	皿形台	12.6	—	14.0	6/36	粗砂多、鉄多	灰白	灰	堅一普	正位焼塩焼成、内面指痕	65149
71	417	11号窯跡体	焼成室床面上	皿形台	13.9	—	15.2	1/36	粗砂多、鉄多	灰	灰	堅一普	糸切痕ハ	66362
71	419	11号窯跡体	窯体床出土	皿形台	15.4	—	14.0	11/36	粗砂多、鉄少	淡褐灰	淡褐灰	生一軟	糸切痕ハ、生焼け	65865
71	420	11号窯跡体	窯体床出土、焼成室天井崩落上	皿形台	15.2	—	14.0	6/36	粗砂多、鉄少	白灰	白灰	生一普	糸切痕ハ、生焼け	65152
71	421	11号窯跡体	窯体床出土、6-7号窯	皿形A	—	17.0	(8.7)	微1/36	粗砂、鉄少	灰褐	灰	堅一普	正位焼ハ、側壁焼成、内面指痕顕著	65102
71	422	11号窯跡体	焼成室床面内、4-6窯乱層	皿形A	—	14.5	16.1	微6/36	粗砂、鉄少	灰	灰	堅一普	正位焼ハ	65066
71	423	11号窯跡体	最終床面天井崩	皿形A3+	—	15.4	(3.7)	微5/36	細砂多、鉄少	淡灰	淡灰	堅一普	焼ハ、転不明	66416
71	424	11号窯跡体	最終床面天井崩落、窯体床出土、焼成室床面北	皿形B	—	15.8	16.3	微17/36	粗砂多、鉄少	淡褐灰	淡褐灰	堅一普	正位焼ハ、生焼け	66361
71	425	11号窯跡体	窯体床出土、最終床面天井崩落上	皿形A3+	—	15.7	16.2	微20/36	粗砂多、鉄少	淡褐灰	淡褐灰	堅一普	焼ハ、転不明、生焼け	65080
71	426	11号窯跡体	焼成室床面内	皿形B	—	和12	15.6	微1/36	粗砂多、鉄少	褐灰	褐灰	堅一普	正位焼ハ、ホ	66363
71	427	11号窯跡体	最終床面天井崩落上	皿形B	—	13.3	(7.5)	微20/36	粗砂多、鉄少	淡灰褐	灰	堅一普	正位焼ハ、浅い底焼ハ、側壁焼成	65101
71	428	11号窯跡体	焼成室天井崩落上、4-6窯乱層	皿形B3+	—	14.6	14.5	微11/36	粗砂多、鉄少	淡灰褐	灰	堅一普	浅い底焼ハ、焼土並ル目立つ、側壁焼成	65153
71	429	11号窯跡体	焼成室壁上で、窯体最終床面天井崩落上	皿形B	—	14.6	(7.7)	微11/36	粗砂多、鉄少	灰白	灰白	堅一普	正位焼ハ	66386
71	430	11号窯跡体	4-6窯点、焼成室床面北西出土	皿形B3+	—	—	(10.9)	—	細砂、鉄少	淡灰オリーブ	灰	堅一普	正位焼ハ、内外面指痕顕著	66400
71	431	11号窯跡体	焼成室最終床面、7号窯床直上(9-5～6間、3-6間間色上)	皿形B	—	16.2	16.2	微5/36	粗砂多、鉄少	灰オリーブ	灰	堅一普	正位焼ハ、側壁焼成、内面指痕ハ	65154
71	432	11号窯跡体	焼成室	壺	—	—	14.3	6/36	粗砂多	暗灰	灰褐	堅一普	側壁焼成、外面指痕ハ	66412
71	433	11号窯跡体	窯体床出土、4-7系色上	長頸瓶	8.2	—	(15.1)	1/36	細砂、鉄少	淡灰	淡灰オリーブ	堅一普	正位焼成、自然釉顕著	65245
71	434	11号窯跡体	窯体床出土	壺	15.4	—	16.0	6/36	細砂多、粗砂	淡灰褐	淡灰	堅一普	正位焼成、焼き並ル・割れあり	65103
71	435	11号窯跡体	煙道跡出土	甕	—	—	(9.7)	—	細砂、鉄少	淡灰	淡灰	堅一普	正位焼成、外面自然釉顕著、焼き並ルあり	65402
71	436	11号窯跡体	長頸瓶	長頸瓶	—	—	(7.0)	—	細砂、鉄少	灰白	灰白	堅一普	側面を切離、ヨキメ、側面ロクロ成で切離、ロクロ目・同一調整の可能性あり	65002
71	437	11号窯跡体	焼成室天井崩落上	長頸瓶A+	—	14.6	16.2	—	細砂多、鉄少	灰白	灰白	生一普	焼ハ、れは三角形、3ヶ所ホ	65445
71	438	11号窯跡体	煙道閉鎖ロ上	分炉陶器?	—	9.9	18.4	微25/36	粗砂多、鉄少	淡灰	淡灰	堅一普	底部強き製ボルト	65085
71	439	11号窯跡体	焼成室床面内	壺	16.4	—	(5.4)	1/36	細砂多	灰	淡褐灰	堅一普	側壁焼成、外面指痕ハ	66411
71	440	11号窯跡体	最終床面天井崩落上	壺型土?	和10	—	14.3	1/36	細砂多、鉄少	白灰	白灰	生一普	生焼け	66386
71	441	11号窯跡体	6-7号窯東上、7号窯東上(3-7間色)、11号窯焼成室天井崩落上、4-6窯乱層	鉢鉢	—	—	(28.6)	—	粗砂多、鉄少	灰白	灰	堅一普	把手がついてヨコ工事	66400
71	442	11号窯跡体	窯体床出土、4-7号窯東上	鉢	16.2	—	16.6	7/36	粗砂多	灰	灰	堅一普	正位焼成、自然釉顕著	65081
71	443	11号窯跡体	窯体床出土	壺	16.7	—	(16.4)	17/36	粗砂多、鉄多	灰	灰	生/堅一普	底部・胴部外面平行タタキ、正位焼成、焼き並ル・割れ顕著、底部生焼け	65230
71	444	11号窯跡体	焼成室天井崩落上、3-5間色上、11号窯焼成室最終床面、3-6間間色上	壺	—	—	(15.3)	—	細砂、鉄多	淡灰	灰	堅一普	正位焼成	66414
71	445	11号窯跡体	焼成室天井崩落上	壺	—	—	(4.9)	—	細砂、鉄少	灰白・暗灰	灰白・暗灰	生一堅	生焼け	66585
71	446	11号窯跡体	焼成室最終床面内側中央、側面北西出土	壺	—	—	(4.0)	—	細砂、鉄少	灰白	灰白	生一堅	生焼け	66584
71	447	11号窯跡体	焼成室最終床内	不明瓶	—	5.2	(2.4)	36/36	細砂、鉄少	灰	灰褐	堅一普	いびつな底形	65133
71	448	11号窯跡体	焼成室最終床内	壺	13.8	—	(2.5)	11/36	細砂多、粗砂	灰	灰	堅一普		66410
71	449	11号窯跡体	焼成室天井崩落上	鉢	17.0	—	16.9	5/36	粗砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	側面は丸くつくる	65066
71	450	11号窯跡体	窯体床出土、側面北西、焼成室北西、6-7号窯東上、3-5ヶ所間色上、11号窯北西上	鉢(須恵)	16.3	8.3	15.1	16/36	粗砂多、鉄多	灰白	灰オリーブ	堅一普	把手取不明、底部穿孔、側面焼成、焼き並ル・割れ顕著	65278
71	451	11号窯跡体	4-7系色上	壺	15.3	—	14.3	9/36	粗砂多	灰	灰	堅一普/和	内面の壁、外面側壁、底部見れる、側面で焼き台(重ネ焼)本用・焼土痕有	65131
71	452	11号窯跡体	焼成室床面内	壺	和10	—	(5.6)	5/36	細砂多、鉄少	淡灰褐	灰	堅一普	糸切痕ハ、釉掛ケ	66400
71	453	11号窯跡体	窯体床出土	壺	14.4	—	(7.6)	5/36	粗砂多、鉄	灰褐	灰褐	和	底平を側面で焼き台本用、全面自然釉顕著	65455
71	454	11号窯跡体	窯体床出土、6-7号窯東上、11号窯4-7系色上	壺	24.6	—	14.4	9/36	粗砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	全面焼灰	65104
71	455	11号窯跡体	窯体床出土	壺	26.0	—	(7.4)	5/36	粗砂多、鉄少	灰	淡灰オリーブ	堅一普	内面ロ縁、外面側、内外面ロクロ調整痕有	65003
71	456	11号窯跡体	焼成室最終床床面	壺	—	—	(4.0)	—	粗砂多、鉄少	灰	灰	和	内面ロ縁、外面側、硬質焼ロ調整ル	66411
71	457	11号窯跡体	焼成室最終床床面	壺	—	—	(7.1)	—	粗砂多、鉄少	灰白・暗灰	灰白・暗灰	堅一普	内面ロ縁、外面側	66411
71	458	11号窯跡体	煙道閉鎖ロ上、煙道閉鎖上	壺	17.0	—	(19.9)	19/36	細砂多、鉄	淡灰	淡灰	堅一普	内面ロ縁、外面側、底部ヨキ6本、焼き並ル・焼き割れあり、1234と同一個体	65280・65315
71	459	11号窯跡体	焼成室ロ上、煙道閉鎖ロ上	壺	36.4	—	(24.9)	31/36	粗砂多、鉄少	灰	灰	堅一普	内面ロ縁、外面側、底部丸底ヘラ調、焼成焼き並ル	65296
71	460	11号窯跡体	側壁跡、焼成室東側中、東端上、焼成室東側東、4-6間北、3-6間間色上、3-6間間色上、焼成室東側東、天井崩落上、5-6間間色上、4-6間北	高坏不明品	長25.6(17.7)[12.6]10.1	16.5	(12.1)	—	粗砂、鉄多	淡灰黄～暗灰	淡灰～暗灰	堅～普/和	把手1ヶ所、内面ロ縁ハ、外面側ヨキ ヨキ ロクロ目、ロクロ成で切離、焼成ハ、ヨコ、側壁焼成、二次被熱、体部ハ一部は焼き台(重ネ焼)に本用、焼土痕有	65217
71	461	11号窯跡体	焼成室	大型鉢	和34	—	(27.5)	36/36	粗砂多、鉄多	灰白	灰白	堅一普	生焼け、口縁部は時計回転方向のナデ一部ハ、体部内面指痕ハ顕ル、外面無痕	65251
71	463	11号窯跡体	焼成室、6-7号窯東端、7-8号窯南側ボイント3間上、7-8号窯南側間色上	大型鉢	和37	—	(32.5)	19/36	粗砂多、鉄多	灰白	灰白	生一堅	生焼け、口縁部は時計回転方向のナデ一部ハ、体部内面指痕ハ顕ル、口縁部端ボイント・側壁焼成、二次被熱、体部ハ一部は焼き台(重ネ焼)に本用・焼土痕有	66412
75	464	11号窯跡体	側壁跡西端北側	蓋(坏)?	13.3	—	4.4	6/36	粗砂多、鉄	淡灰	淡灰	堅一普	天井部外面ナシ ロクロ痕	65150
75	465	11号窯跡体	11号窯側壁跡西端北側、焼成室北西出土	蓋(坏)?	13.3	—	4.4	11/36	粗砂多、鉄	淡灰	灰	堅一普	天井部外面ナシ ロクロ痕	65137

第 38 表　窯跡出土遺物観察表 9

（中：［ ］は復元径、（ ）は現存法量を示す。

図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整痕	胎土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
75	466	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土、6-7黒色土	蓋(高杯A)	—	—	(2.6)	—	精砂多、礫少	紫灰	灰	焼一堅	無蓋、天井部外面の調整ケズリは丁寧、内面に同心円タタキ痕	36543
75	467	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土、6-7黒色土	坏B	11.6	—	4.2	10/20	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一堅	生焼け、外底にナシ状工具痕	35965
75	468	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	坏B	12.8	5.6	(3.3)	15/20	精砂多、礫少	淡黄灰	淡灰	生一堅	内面ケズリ調整顕著、生焼け、口縁部は歪曲顕著	35156
75	469	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	坏B	12.8	—	(3.2)	11/20	精砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	生焼け	35437
75	470	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	坏B	12.7	—	3.2	4/20	精砂多、礫	淡黄灰	暗灰	焼一堅	外面黒化、地金剥ぎ	35660
75	471	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	坏B	13.6	—	(3.1)	5/20	細砂、礫少	淡黄灰	灰褐	焼一堅	外面一部無釉且色無顕著、地金剥ぎ	35699
75	472	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	坏B	13.4	—	(2.3)	6/20	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一堅	生焼け、縦さに不定性ケ	35665
75	473	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	坏B	13.4	—	(2.4)	7/20	精砂多、礫少	灰	淡黄灰	焼一堅	生焼け、地金剥ぎ、地金ヨケ一たる	35664
75	474	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	坏B	14.7	—	3.9	11/20	精砂多、礫少	淡灰	淡灰黄	焼一堅	細かい地金剥ぎ顕著、正位焼成	35696
75	475	11号窯 溝跡群	廃棄跡	蓋(脚付)	12.2	底し 9.6	(2.7)	6/20	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一堅	外面ケキノ調整	35486
75	476	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	蓋(脚付)	12.8	底し 9.8	(2.6)	6/20	精砂多、礫	—	灰	軟	地金剥離、外面に黒く焼土ロ熱痕	35490
75	477	11号窯 溝跡群	廃棄跡トイ系色土	甕G	9.8	—	3.9	2/20	細砂、礫少	灰	灰	焼一堅	正位焼成顕著、外底は粗いケズリ調整、タン状工具痕	36444
75	478	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	鉢G	約11	約6	4.1	5/20	精砂多、礫	淡灰 オリーブ	淡灰	焼一堅	正位焼成顕著、	36544
75	479	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸A	13.1	—	(4.8)	8/20	精砂多、礫少	灰	灰	軟	頸部強、頸部で地金剥ぎ痕、焼成は.5cm小型土師器	35931
75	480	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸B	13.6	—	(3.2)	4/20	精砂多、礫少	灰	灰黄	焼一堅	正位焼成顕著、地金剥ぎ	36529
75	481	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸B	13.8	—	(3.1)	4/20	精砂多、礫少	灰	灰	焼一堅	地金剥ぎ	36530
75	482	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸B小	—	—	14.6	16/20	特 6/20	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰	焼一堅	正位焼しかし、胴位焼成、頸部面に自然釉顕著	36597
75	483	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸B小	—	—	(4.3)	—	細砂、礫少	灰	灰	焼一堅	正位焼しか	36604
75	484	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸B小	—	15.2	16.7	特 6/20	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼一堅	正位焼しか、正位焼成	36601
75	485	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸C	—	10.6	(3.6)	特 7/20	細砂、礫少	灰白	灰白	焼一堅	生焼けに近い	36602
75	486	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	長頸C	—	10.9	(1.7)	特 8/20	細砂、礫少	灰オリーブ	淡灰	焼一堅	胴位焼成、内面自然釉顕著	36603
75	487	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	壺	—	—	(4.1)	7/20	細砂多、礫少	オリーブ灰	淡灰	焼一堅	正位焼成、自然釉顕著	35484
75	488	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土、7-12黒褐粘質土層、1-2黒色土層、3-6黒褐色土	鉢	(15.5)	9.4	(8.7)	36/36	精砂多、礫少	灰白	淡灰 オリーブ	焼一堅	内底上目等の使痕顕著、地金ヨケ・剥ぎ顕著、焼成良	35476
75	489	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	甕	8.2	—	(5.8)	6/36	精砂多	淡灰	淡灰	焼一堅	正位焼成、内面自然釉顕著	35142
75	490	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	甕	約12	—	(2.8)	6/36	精砂少	淡灰 オリーブ	淡灰	焼一堅	正位焼成、自然釉顕著	36546
75	491	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	壺	約10	—	(2.8)	2/36	細砂	淡黄灰	淡黄灰	焼一堅	正位焼成、縦さに不定性ケ	36547
75	492	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	小型壺	—	—	(4.5)	—	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一堅	外底ヘラ切りケズリ、生焼け	35139
75	493	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	土錘	長7.7	径1.8	孔径0.6	36/36	精砂多	—	淡灰	焼一堅	一部欠損、残存重量25.1g	35140
75	494	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	壺	23.6	—	(4.9)	5/36	精砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	生焼け	35142
75	495	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	壺	約36	—	(2.9)	3/36	精砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	生焼け	36548
75	496	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	壺	約21	—	(4.1)	3/36	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一堅	外面一部に自然釉顕著	36549
75	497	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土	壺	23.3	—	(5.9)	16/36	精砂多、礫	灰	灰	生一堅	縦すが一部生焼け	35850
75	498	11号窯 溝跡群	廃棄跡黒灰色土、6-7黒褐土、7黒灰層(2-3)粘質色土、2-3黒灰色土、7-7黒褐色粘質層、7黒灰層(2-3)粘質色土、7-8、10黒土層最上層色土	壺	47.2	—	(16.1)	9/36	精砂多、礫	淡灰黄	淡灰黄	生一堅	生焼け、外面全ケキノ調整後に部分的ヨケ・ヨケ・剥ぎ痕	36430
76	499	トイ状遺構	焼成室東南外側土層中	蓋(坏B)	11.4	—	(2.3)	5/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生一堅	生焼け	36677
76	500	トイ状遺構	焼成室西辺土	蓋(坏B)	12.4	—	3.4	8/36	細砂、礫少	暗灰	暗灰	軟	天井部外面初分ケシ状工具痕、胴位で地金剥ぎ後生焼け転用	35196
76	501	トイ状遺構	焼成室東南外側土層	蓋(坏B)	12.5	—	3.4	10/36	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一堅	天井部外面ケシ状工具痕、内面自然釉顕著、胴位で地金剥ぎ後生焼け転用か	35192
76	502	トイ状遺構	焼成室東壁	蓋(坏B)	12.6	—	(3.3)	9/36	精砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼一堅	地金ヨケあり	35524
76	503	トイ状遺構	焼成室天井部落土	蓋(坏B)	13.4	—	3.2	12/36	精砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	内面ケズリ、天井部外面ケシ状工具痕、焼成良か	35191
76	504	トイ状遺構	焼成室ピット関土	蓋(坏B)	13.3	—	3.9	4/36	精砂多、礫少	灰白	灰白	生一堅	生焼け、断面顕著	35194
76	505	トイ状遺構	焼成室ピット関土	蓋(坏B)	13.6	—	4.2	28/36	精砂多、礫多	淡灰	灰	生一堅	外底にケシ状工具痕、正位焼成、外面陽炎	35190
76	506	トイ状遺構	焼成室南辺土	蓋(坏B)	13.8	—	4.6	8/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	生一堅	生焼け、天井部外面ケシ状工具痕	35184
76	507	トイ状遺構	焼成室ピット関土	蓋(坏B)	14.1	—	(2.4)	5/36	精砂多、礫少	灰白	灰	焼一堅	外底焼色、地金ヨケあり	36606
76	508	トイ状遺構	外成ピット関土	蓋(坏B)	[14.6]	—	3.4	2/36	精砂多、礫少	灰	灰	焼一堅	地金ヨケ・剥ぎ顕著、外面に点打ち痕	36673
76	509	トイ状遺構	東土層裏側色土	蓋(坏B)	14.1	—	4.7	13/36	精砂多	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	生焼け、天井部外面ケシ状工具痕	35185
76	510	トイ状遺構	東側東南部焼成室西辺色土、粘ケズ調整痕土	蓋(坏B)	14.3	—	4.1	10/36	精砂多、礫少	淡灰	灰	焼一堅/軟	地金ヨケ・ヨケ・剥ぎ痕、胴位で地金剥ぎ後生焼け転用	35196
76	511	トイ状遺構	焼成室東南外側土層中	蓋(坏B)	約15	—	(3.6)	15/36	精砂多、礫少	灰	灰	焼一堅	地金ヨケ顕著	35193
76	512	トイ状遺構	焼成室壁土	坏B	9.4	—	3.9	16/36	精砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	生焼け、外底に丸い粘ケズリ痕、高台ヨケ	35190
76	513	トイ状遺構	焼成室東南外側土層中	坏B	10.5	—	(1.3)	4/36	精砂多、礫少	暗灰	灰	軟	頸部高さの自然釉顕著、地金ヨケ(黒金ヨケ)有	36678
76	514	トイ状遺構	焼成室南辺土	坏B	10.7	—	(2.1)	5/36	精砂多	黒灰	黒灰	軟	頸部高さの自然釉顕著、地金ヨケ(黒金ヨケ)有	36681
76	515	トイ状遺構	焼成室東壁土、東側、南辺土	坏B	11.2	—	3.7	25/36	精砂多、礫少	暗灰	黒灰	焼一堅	地金ヨケ(黒金ヨケ)転用の可能性あり	35170
76	516	トイ状遺構	焼成室東壁	坏B	11.3	—	(2.8)	4/36	精砂多、礫少	淡灰	灰	軟	頸部高さの自然釉顕著、地金ヨケ(黒金ヨケ)有	36605
76	517	トイ状遺構	外成ピット関土、下4号窯最終床面検出面	坏B	11.4	—	3.9	17/36	精砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼一堅	外底にケシ状工具痕顕著、正位焼成、外面焼色	35189
76	518	トイ状遺構	焼成室東壁	坏B	12.4	—	(2.5)	5/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼一堅	外面焼色	36634
76	519	トイ状遺構	床面上直線的土層	坏B	12.6	—	4.2	16/36	精砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	生焼け、外底にケシ状工具痕	35174
76	520	トイ状遺構	床面上直線的土層	坏B	12.8	—	3.8	25/36	精砂多、礫多	淡灰	淡灰	生一堅	生焼け、外底にケシ状工具痕	35172
76	521	トイ状遺構	床面上直線的土層	坏B	12.8	—	3.8	12/36	精砂多、礫少	淡灰	淡灰	生一堅	生焼け、外底にケシ状工具痕	35173
76	522	トイ状遺構	焼成室壁土	坏B	13.6	—	3.1	2/36	精砂多、礫少	灰	灰	焼一堅	外面焼色大き	36683

第39表　窯跡出土遺物観察表10

中：［　］は復元径値、（　）は現存法量を示す。

図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
76	521	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	大型坏	18.5	－	4.5	25/36	砂粒多、雲多	淡灰黄	淡灰黄	良	底部内外面ヘラ調整を加える。外面に指釘はつかず指圧痕を残す。表面平滑性を有す。	05280
76	524	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	蓋?脚?	12.4	底し 9.6	3.6	12/36	砂粒多、雲少	灰	灰	堅	段部は内面ヘラ調整。端部は丸く、端部は薄く、端部は丸く調整。	05106
76	515	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	脚?	9.0	－	3.8	19/36	砂粒多、雲少	褐灰	淡灰	堅	正位置遺構成	05105
76	526	7～9世紀須恵	東端土師器出土層	脚?	－	－	6.3	12/36	砂粒多	灰白	灰白	堅	内外面にナデ状工具で調整文	05499
76	527	7～9世紀須恵	熱電補強窯内西ち断ち平	脚?	－	－	10.7	(5.1)	－	砂粒多	灰白	堅	内外面にナデ状工具で調整文。外面を回転ヘラ調整	06479
76	529	7～9世紀須恵	最終焼窯西南部色濃化層内	脚?	－	－	8.2	(5.9)	9/36	砂粒多	灰白	灰、黒白	内面にナデ状工具で調整文。外面を回転ヘラ調整	05109
76	529	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	高坏A	－	－	12.8	(12.6)	18/36	砂粒多、雲少	淡灰黄	灰	堅	脚は丸く、脚部強風。内面陽炎調整	05181
76	530	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	高坏C	－	－	11.9	(5.2)	18/36	砂粒多、雲少	淡黄橙	淡黄橙	堅	生地?	06094
76	531	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土、7～9世紀須恵ボビット埋土	高坏B	16.3	－	16.6	1/36	砂粒多、雲少	灰	灰	堅	脚の縁を丸くつくる。石灰無意味成。3方透かしの幅は狭い	05202
76	532	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	高坏D	11.5	－	3.4	16/36	砂粒多、雲少	淡灰	淡灰	堅	天井部内面ヘラ状工具痕。端部丸みあり。外面強成	05195
76	533	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	無蓋台部小	－	8.0	(1.7)	9/36	砂粒多、雲少	淡灰	淡灰	堅	底部平脚。外面強成	06076
76	534	7～9世紀須恵	東端	鉢	－	20.9	(5.2)	18/36	砂粒多、雲少	灰白	灰白	堅	生地?。透かし数不明	05192
76	535	7～9世紀須恵	熱電補強上層、7世紀須恵ボビット埋土	鉢	－	－	(3.1)	－	砂粒多、雲少	灰	灰	軟	側面に沈線。端部強方の地上部者	05361
76	536	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	蓋?坏部	－	－	(2.2)	－	砂粒多、雲多	淡灰	灰	堅	外面にナデ状工具痕	06075
76	537	7～9世紀須恵	東端土師器出土層	蓋?坏部	－	－	(2.6)	－	砂粒多、雲少	灰白	灰白	堅	天井部外面ヘラ状工具痕。内面ナデ調整	06631
77	538	7～9世紀須恵	熱電補強上層、熱電補強窯内南ち断ち平、熱電補強上層	鉢類	16.4	－	(27.9)	30/36	細砂多、雲少	淡灰	淡灰	堅	内面強整し。外面強整。胴部中央に沈線	05253
77	539	7～9世紀須恵	東端土師器出土層	鉢類	14.9	－	(5.7)	5/36	細砂多、雲少	淡灰黄	淡灰	堅	生地?	06090
77	540	7～9世紀須恵	東端土師器出土層	蓋?坏底	16.1	底し 8.1	3.3	15/36	砂粒多、雲多	淡灰黄	淡灰黄	堅	段部は 0.6cm。生地?。その他生法みなし	05171
77	541	7～9世紀須恵	熱電補強上層、7世紀須恵ボビット埋土	鉢	9.3	8.4	3.3	36/36	細砂多、雲少	灰	灰	軟～堅	縁端の一部は接ぎ足しを行い薄き台に転用	05188
77	542	7～9世紀須恵	熱電補強上層	鉢	16.1	－	3.8	17/36	砂粒多、雲少	灰	灰	堅	生法みなし	05187
77	543	7～9世紀須恵	最終焼窯東南部色濃化層内	鉢	9.1	－	(3.1)	12/36	細砂多、雲少	灰	灰	堅	生法みなし。外面強成	06630
77	544	7～9世紀須恵	熱電補強上、2～3ボビット埋土	高坏C	9.9	－	(7.7)	6/36	細砂多、雲少	灰	灰	堅	正位置遺構成。内面強整無調整	05203
77	545	7～9世紀須恵	東端	壺	26.2	－	(5.1)	5/36	細砂多、雲少	淡灰	灰	軟	乱れた調整文で加飾。生地?。頸部に沈線	06635
77	546	7～9世紀須恵	作成ボビット埋土	壺	約27	－	(4.4)	6/36	砂粒多、雲多	灰	灰	軟～堅軟	44cm 以下～胴体	05328
77	547	7～9世紀須恵	熱電補強窯内西ち断ち平	鉢?	－	－	(3.1)	5/36	砂粒多、雲少	明灰	明灰	堅	端部は丸く切断。127は等間隔の特殊品か	06733
77	548	7～9世紀須恵	熱電補強上層	坏B	16.9	－	4.5	5/36	細砂多、雲少	淡黄灰	淡灰黄	堅	外面のナデ調整は丁寧。生地?。器底未ヘラ	05173
77	549	7～9世紀須恵	熱電補強上層	坏B	12.1	－	(5.7)	10/36	砂粒多、雲少	灰	灰褐	堅	脚部強成。外面自然釉薬著	05176
77	550	7～9世紀須恵	熱電補強上層	坏B	13.3	－	12.9	5/36	砂粒多、雲少	淡灰	灰	堅	薄手	05177
77	551	7～9世紀須恵	熱電補強上層	蓋	11.4	－	(1.2)	2/36	砂粒多、雲少	淡灰	暗灰	堅	小片。外面強成	06610
77	552	7～9世紀須恵	熱電補強上層、7～9世紀須恵ボビット埋土	高坏A	12.6	－	(4.2)	16/36	砂粒多、雲多	淡灰	灰	堅	他多數あり	05606
77	553	7～9世紀須恵	熱電補強上層	鉢	－	－	(2.2)	－	細砂多、雲少	淡灰	灰褐	堅	外面自然釉薬著	06611
77	554	7～9世紀須恵	熱電補強上層	鉢	－	－	(3.3)	7/36	細砂多、雲少	灰白	黒灰	堅	脚部強成。外面自然釉薬著	05497
77	555	7～9世紀須恵	熱電補強上、最終焼窯色、7～9世紀須恵ボビット埋土	鉢類小	－	12.7	(4.1)	－	砂粒多、雲多	淡黄灰	淡灰黄	堅	生地?	06607
77	556	7～9世紀須恵	熱電補強上、7世紀須恵ボビット埋土	坏B	－	－	(1.4)	－	砂粒多、雲少	淡灰オリーブ	淡灰	堅	生地?。外面にナデ状工具痕	06606
77	557	7～9世紀須恵	熱電補強上層	蓋類小	－	12.2	(1.7)	18/36	砂粒多、雲少	淡灰	灰白	堅	小片。生地?。蓋、蓋類は縁部の可能性あり	06609
77	558	7～9世紀須恵	東端土師器	高坏D	－	9.2	4.6	18/36	砂粒多	灰	灰	堅	2方透かしあり。正位置成。外面強成あり	05197
77	559	7～9世紀須恵	東端土師器埋土、6～7世紀須恵上、七ボビット埋土	鉢(壺成)	15.9	9.1	16.3	10/36	細砂多、雲多	灰白	淡灰オリーブ	堅	底不明。外面ヘラ調整。2方に穿孔。内面ヘラ調整。2方に穿孔	05204
78	560	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土	蓋?坏部	12.2	－	(3.1)	5/36	細砂多、雲少	淡灰	灰褐	堅	正位置成。外面自然釉薬著。調整不明	06612
78	561	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土	蓋?坏部	約13	－	(2.6)	5/36	砂粒多、雲少	淡灰黄	灰	軟	他多分蓋多分に転用。強成蓋	06674
78	562	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土	蓋?坏部	12.5	－	3.8	19/36	砂粒多、雲多	淡灰	灰	堅～軟	整備。天井部外面ヘラ調整に近い。外面強化に力で方法あり	05100
78	563	7～9世紀須恵	第2高坏A1	蓋?高坏A1	13.4	－	4.5	11/36	砂粒多、雲少	淡灰	灰	堅	整備。天井部外面ヘラ調整に「W」状に加工ナデ調整。外面強化	06432
78	564	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土	蓋?高坏A1	13.7	－	4.9	5/36	砂粒多、雲多	黒灰	灰	軟～堅軟	整備。天井部外面ヘラ調整。2方に穿孔。内面ヘラ調整。2方に穿孔。端部強成。外面自然釉薬著	06453
78	565	7～9世紀須恵	第2ボビット、2～3ボビット埋土	坏B	11.9	－	3.7	15/36	細砂多、雲少	灰白	淡灰	堅	外面～底部強整著	06463
78	566	7～9世紀須恵	第2ボビット2C、上部盛土9、3ボビット埋土	坏B	12.9	－	2.9	15/36	細砂多、雲少	淡灰	灰	堅	他多分あり。外面強化	06464
78	567	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土、3ボビット埋土	坏B	12.9	－	3.6	15/36	細砂多、雲少	灰白	灰褐	堅	脚部強成。外面自然釉薬著	06465
78	568	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土	坏B	12.9	6.4	3.9	14/36	細砂多、雲少	淡灰黄	淡灰オリーブ	堅	外底未調整に近い。ケシ状工具痕有り。脚部強成。外面自然釉薬著	06461
78	569	7～9世紀須恵	第2ボビット、4～6ボビット埋土	坏B	12.9	－	(4.1)	15/36	細砂多、雲少	淡黄灰	淡灰黄	堅	他多分あり	06462
78	570	7～9世紀須恵	第2ボビット、7～9世紀須恵ボビット埋土	坏C	8.4	6.4	3.5	11/36	細砂多、雲少	淡灰	灰	堅	他多、他多法みあり	05128
78	571	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土	高坏C2	9.0	－	(4.0)	5/36	細砂多、雲少	淡黄灰	淡灰黄	堅	生地?。572と同一個体か	06426
78	572	7～9世紀須恵	第2ボビット	高坏C2	約10	－	(4.0)	7/36	砂粒多、雲多	淡黄灰	淡灰	堅	生地?。571と同一個体か	06455
78	573	7～9世紀須恵	第2ボビット、4～6ボビット埋土	蓋類小	約13	－	(4.9)	6/36	細砂多、雲少	淡灰オリーブ	灰褐	堅	正位置遺構成。外面自然釉薬著	06473
78	574	7～9世紀須恵	第2ボビット、特色2、3～5ボビット埋土	蓋(壺?)小	約16	底し約13	12.7	31/36	細砂多、雲少	灰褐	淡灰オリーブ	堅	他多分蓋多、同土蓋成。被熱蓋多の自然釉薬著	05554
78	575	7～9世紀須恵	第2ボビット	蓋(壺?)小	約16	底し約13	12.9	17/36	細砂多、雲少	淡灰オリーブ	淡灰	堅	他多分蓋多、同土蓋成。被熱蓋多の自然釉薬著	05545
78	576	7～9世紀須恵	3～5上部盛土9	蓋(壺)小	30.0	－	(4.2)	5/36	細砂多、雲少	淡黄灰	淡灰	堅	ヨキ調整。円4.1cf(現約6cm)。内面中央に同心円ヨキ。正位強成。一部重ね焼し	05339
78	577	7～9世紀須恵	3～5上部盛土9、特色2、3、5ボビット埋土、3～5ボビット埋土、3ボビット埋土	蓋(壺)	30.0	底し27.2	15.3	30/36	細砂多、雲少	灰	淡オリーブ	堅	外面ヨキ調整。内面ナデ調整。正位強成。他多蓋多・数点蓋多	05206
78	578	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土、3～5ボビット、3～5、3ボビット埋土2、4～7ボビット埋土	壺	27.6	－	4.9	21/36	細砂多、雲少	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	堅	他多蓋多・数点蓋多。被熱蓋多の自然釉薬著。113と同一個体か可能性あり	05300
78	579	7～9世紀須恵	第2ボビット埋土	壺小	－	－	(4.7)	－	細砂多、雲少	淡灰	淡灰オリーブ	堅	正位有蓋強成。外面自然釉薬著	05409

第 40 表　窯跡出土遺物観察表 11

（中：［ ］は復元径、（ ）は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	胎土	色調（内面）	色調（外面）	焼成	備考	整理番号
78	580	7～11分焼床跡	床面3-3西側色土，7号焼成跡南東部黒褐色土	椀A	－	14.4	13.0	11/36	精砂，雲母	淡灰	淡灰オーブン	堅一堅	正位焼成，外面全面ヘラケズリ，外面自然釉薬著	69468
78	581	7～11分焼床跡	床面3-D	椀A	－	15.9	13.6	4/36	精砂，雲母	淡灰	淡灰オーブン	堅一堅	正位焼成，外面全面ヘラケズリ，外面自然釉薬著	69467
78	582	7～11分焼床跡	床面4-D	高坏D	－	－	(12.5)	－	精砂，雲母	オリーブ灰	灰	堅一堅	3方透かし，正位焼成，内面自然釉薬著	69458
78	583	7～11分焼床跡	床面3-D焼成色土	高坏D	11.1	－	(13.7)	3/36	精砂，雲母	灰白	灰白	堅一堅	正位焼成，内面自然釉薬著	69457
78	584	7～11分焼床跡	床面4-B焼成色土，4-D焼色土	高坏D	12.3	－	(3.6)	3/36	精砂，雲母	灰	淡灰	軟	2方透かし，底片面に横位で焼き台(窯ヨ台)転用，全面自然釉薬著，焼き歪みあり	69459
78	585	7～11分焼床跡	床面D	高坏D	21.5	－	(3.6)	1/36	精砂，雲母，赤褐鉄	淡灰	淡灰	堅一堅	内面に十字調整，底面1条，生地打ち忘れ	69464
78	586	7～11分焼床跡	床面2-E，3-C粘質色土	高坏C	－	9.2	16.6	30/36	精砂，雲母，砂	灰	灰	堅一堅	底面1条	69326
78	587	7～11分焼床跡	床面C-486表面，床面D-9，3-E粘色土	壺	－	－	(6.9)	2/36	細砂，雲母，砂	灰白	灰	堅一堅	横位焼成，外面自然釉薬著，焼き歪みあり	69349
78	588	7～11分焼床跡	床面D-5西側色土，3-D土器溜まり，粘色土，3-E粘色土，4-D焼色土	鉢	－	－	(3.0)	－	精砂，雲母，砂	淡灰黄	淡灰黄	堅一堅	生地打，内行横沓文	69283
78	589	7～11分焼床跡	3-D土器溜まり，粘色土，3号焼成跡3-D，3-E粘色土，4-F焼色土	鉢蓋	9.4	－	(28.4)	－	砂粒	淡灰	灰	堅一堅	正位焼成，焼き歪みあり，横位置紐釉薬著，内面自然釉薬著	69284
78	590	7～11分焼床跡	床面3-F粘色土	壺	12.7	－	(4.6)	4/36	精砂，雲母，砂	灰	灰	堅一堅	内面自然釉薬著	69525
78	591	7～11分焼床跡	床面3-E	鉢蓋	－	－	(6.7)	－	精砂，雲母，砂	灰白	灰	堅一堅	鉢転ハ	69477
78	592	7～11分焼床跡	床面3-E粘色土	鉢蓋A	21.0	－	(3.5)	7/36	精砂，雲母	灰	灰	堅一堅	口縁部に横ヨハ焼き跡は連続，被熱部全外面自然釉薬	69473
78	593	7～11分焼床跡	床面3-F	鉢蓋A	21.4	－	(2.6)	7/36	精砂，雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	口縁部焼き歪み，正位焼成，全面自然釉薬	69472
78	594	7～11分焼床跡	3-D土器溜まり粘色土	蓋A	21.3	－	(5.4)	3/36	精砂，雲母	淡灰オーブン	淡灰	堅一堅	正位焼成焼成，外面自然釉薬著	69476
78	595	7～11分焼床跡	7号焼成跡3-F，4-F，4号焼成跡4-F粘色土，6-F焼色土，6-D焼成跡3-D粘色土，床面，6-F焼色土	蓋A	16.8	－	(23.7)	11/36	細砂，雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	外面カキメ調整，回転ケズリ，正位焼成	69326
78	596	7～11分焼床跡	3-D粘色土，床面，6-F焼色土	蓋A	－	6.7	(6.4)	－	細砂，雲母	灰白	淡灰	堅一堅	正位焼成，外面自然釉薬著	69579
78	597	7～11分焼床跡	床面3-F粘色土	蓋A	－	－	(7.7)	－	精砂，雲母，砂	灰	灰	堅一堅	外面カキメ調整後ヨ回転ケズリ調整，被熱痕，焼成，焼き歪み著，ヨコ転用	69574
78	598	7～11分焼床跡	床面3D焼成粘色土	鉢蓋A	－	－	(19.2)	－	精砂，雲母	淡灰	灰	堅一堅	外面カキメ調整	69282
78	599	7～11分焼床跡	床面2-E，3-D，4-E焼色土，粘色土，粘色土遺構内排水溝埋土	鉢蓋	14.2	－	(5.6)	36/36	精砂，雲母	淡灰	灰	堅一堅	外面カキメ調整，内面1条，外面油煙	69322
78	600	7～11分焼床跡	床面4-E焼成色土	鉢蓋A	21.5	－	(5.6)	7/36	精砂，雲母	淡灰オーブン	淡灰	堅一堅	内面ヘラ整，外面被熱，正位焼成，全面自然釉薬	69471
78	601	7～11分焼床跡	床面3-E，粘色土3-E	壺	16.2	－	(6.7)	16/36	精砂，雲母，礫多	灰	灰	堅一堅	内面ヘラ整，外面被熱，正位焼成	69321
78	602	7～11分焼床跡	床面3-F粘色土	壺	21.9	－	(5.6)	1/36	精砂，雲母	暗灰	灰	堅一堅	内面ヘラ整ヨ，外面横位カキメ調整，正位焼成，海況ハ	69474
78	603	7～11分焼床跡	床面3-F	壺	23.2	－	(8.6)	3/36	精砂，雲母，礫多	淡灰	暗灰	堅一堅	焼成第一ラ記号「ヲ」，内面ヘラ整，外面被熱，正位焼成	69576
78	604	7～11分焼床跡	床面2-E	壺	21.8	－	(9.0)	22/36	砂粒	灰白	灰白	堅一堅	内面ヘラ整，外面被熱，横位外面2段ヨコ撫でカキメ調整，生地打ち忘れ	69323
78	605	7～11分焼床跡	床面，土器溜まり粘色土	壺	23.5	－	(3.9)	1/36	精砂，雲母，礫多	淡灰オーブン	淡灰オーブン	堅一堅	内外面自然釉薬著，6個之字一組ヘラ	69555
78	606	7～11分焼床跡	7号焼，3-D土器溜まり粘色土床面，6-F焼色土	壺	28.8	－	(9.0)	7/36	精砂，雲母，礫多	淡灰オーブン	淡灰	堅一堅	見れた部位全を一筆ヤ押して成型ヨ外型敷，正位焼成，6個之字一組等ヘ	69577
78	607	7～11分焼床跡	床面3-E，3-F粘	壺	42.6	－	(16.6)	19/36	細砂，雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	内面ヘラ整，外面被熱，外面の流れ見える	69356
78	608	7～11分焼床跡	床面3-E粘色土	壺	45.8	－	(12.6)	17/36	精砂，雲母，礫多	灰	灰	堅一堅	外面6個ヌアキの後，カキメ調整，流れ・波状文で装飾	69314・69328
78	609	7～11分焼床跡	3-E，3-F粘，7号焼床跡3-F粘色土，7号焼床跡	壺	47.67	－	(17.3)	19/36	精砂，雲母，砂	淡灰オーブン	淡灰オーブン	堅一堅	内面ヘラ整，外面被熱，正位焼成，内外面自然釉薬著，焼き歪み著著，黒色焼成に近ス	69571
78	610	7～11分焼床跡	床面3-F粘色土	土師器甕	16.4	－	(9.2)	10/36	精砂多	淡橙	淡橙	良好	ボロクロ土師器，開土煮炊	69472
78	611	7～11分焼床跡	3-E土器溜まり粘色土	土師C(須成)	－	10.5	(2.7)	底 11/36	精砂，雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	外底周縁にケズリ調整，生地打，上部新釉	69469
78	612	7～11分焼床跡	床面4-D焼成色土	土師C(須成)	－	9.2	(4.7)	底 8/36	精砂，雲母	灰	灰	堅一堅	正位焼成，内面新釉	69343
78	613	7～11分焼床跡	床面4-E粘色土	土師C(須成)	－	8.7	(2.3)	底 5/36	細砂多	淡灰	淡灰	堅一堅	新釉焼成，外面自然釉薬著	69474
78	614	7～11分焼床跡	3-D土器溜まり粘色土	鉢・転型杯	長15.8	幅3.8	厚1.6	－	細砂，雲母	淡黄灰	淡黄灰	堅一堅	生地打	69468
78	615	7～11分焼床跡	床面3-F，4-F粘色土	鉢B	－	－	(6.4)	7/36	細砂，雲母	青灰	青灰	堅一堅	口縁部近くケズリ，底片面に横位で焼き台(窯ヨ台)転用	69732
81	616	7～9世紀第1体	第1体床面3-L	蓋(SK)	9.6	底 1.6	3.7	22/36	精砂，雲母	暗灰	淡灰オーブン	堅一堅	焼成1.6m，正位焼成，外面全面自然釉薬，焼き歪み著著	69676
81	617	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	9.9	底 1.8	3.6	6/36	精砂，雲母	灰	暗灰	堅一堅	焼成1.6m，正位焼成，外面黒色，焼き歪みあり	69681
81	618	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	9.9	底 1.6	3.7	8/36	精砂，雲母	暗灰	暗灰	堅一堅	焼成1.6m，天井部内面1手指ヘラケズリ調整，生煎二度焼き	69686
81	619	7～9世紀第1体	第1体床面3-L	蓋(SK)	9.9	底 1.6	3.6	7/36	精砂，雲母，砂	灰	灰	堅一堅	焼成1.6m，焼き歪み著	69675
81	620	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.8	底 1.8	12.5	17/36	精砂，雲母，砂	淡黄灰	淡黄灰	堅一堅	生煎打，燃焼痕著	69690
81	621	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.1	底 1.8	12.0	13/36	精砂，雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	生煎打	69688
81	622	7～9世紀第1体	第1体床面3-L	蓋(SK)	10.8	底 1.8	3.2	29/36	精砂，雲母，砂	灰	灰	堅一堅	焼成1.2m，底しは浮き，指の形残れる(回転ケズリ痕)，正位焼成	69546
81	623	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.2	底 1.8	3.7	18/36	精砂，雲母，礫多	淡灰オーブン	淡灰オーブン	堅一堅	焼成1.6m，低ドSmm?焼き焼き歪み，焼き歪み著著	69681
81	624	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.8	底 1.8	3.2	6/36	精砂，雲母	淡黄灰	淡黄灰	堅一堅	焼成1.7m，生煎打，燃焼痕著	69651
81	625	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.3	底 1.8	3.4	34/36	精砂，雲母	淡黄灰	灰白	堅一堅	焼成1.6m，生煎打，天井部内面1回転ケズリ調整粗い	69518
81	626	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.8	底 1.8	3.7	33/36	精砂，雲母	淡黄灰	淡黄灰	堅一堅	焼成1.6m，生煎打，焼き歪み著	69613
81	627	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.2	底 1.8	13.0	6/36	精砂，雲母，砂	淡黄灰	灰白	堅一堅	焼成1.6m，生煎打，外面燃焼著著，調整不明	69518
81	628	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.8	底 1.8	4.1	28/36	精砂，雲母，礫多	灰白	淡灰	堅一堅	焼成1.7m	69661
81	629	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.8	底 1.8	12.0	8/36	精砂，雲母	淡黄灰	淡黄灰	堅一堅	生煎打，天井部内面1度ヘラ切りケズリ	69659
81	630	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	11.1	底 1.8	3.7	6/36	精砂，雲母	淡黄灰	淡黄灰	堅一堅	焼成1.6m，生煎打，内面燃焼著著	69662
81	631	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.7	底 1.8	3.5	13/36	精砂，雲母	灰	灰緑	堅一堅	焼成1.6m，正位焼成，焼き歪み，外面燃焼著	69644
81	632	7～9世紀第1体	第1体床面3-L	蓋(SK)	10.9	底 1.8	3.1	36/36	精砂，雲母	淡灰黄	暗灰	堅一堅	焼成1.6m，天井部に1回ケズリ調整ヤ不調整，生煎打，外面に煤付著著	69613
81	633	7～9世紀第1体	第1体床面3-M	蓋(SK)	10.8	底 1.8	3.2	23/36	精砂，雲母，礫多	淡灰	淡灰	堅一堅	焼成1.6m，正位焼成，外面に焼き歪み著あり，焼き歪み	69663
81	634	7～9世紀第1体	第1体床面3-L	蓋(SK)	10.1	底 1.8	3.6	18/36	精砂，雲母	灰	灰	堅一堅	焼成1.6m，成形時に歪み	69659
81	635	7～9世紀第1体	第1体床面3-L(2-G)	蓋(SK)	10.1	底 1.8	4.2	22/36	精砂，雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	焼成1.6m，天井部内面1回ヘラケズリ調整，指紋ヤ付け痕，一方のカキメ調整粗い部分著	69673

第41表　窯跡出土遺物観察表12

中：（）は復元径高、（ ）は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	焼成度	胎・土	色調 (内面)	色調 (外面)	残存	備考	整理番号
61	626	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	10.8	4.6	12.7	6/36	粗砂多、雲多	灰	灰	完一	内面底に沈線	03301
61	627	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	10.8	4.6	3.4	25/36	粗砂多、雲多	灰	灰	完一	接地ミ3cm、外面一部焼化	03022
61	628	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	10.9	4.6	3.7	31/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	接地ミ3cm、天井部内面は回転ケズリ調整、接地平付け後、一方向のケズリ調整を加える	03074
61	629	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.7	23/36	粗砂多、雲多	灰	灰	完一	接地ミ4cm、接地やゝよりやゝ下がる、側壁強調か、焼き歪み顕著	03034
61	630	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.4	6/36	粗砂、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、焼き歪み、天地が、内面顕著	03022
61	631	７ｃ住居跡	住居床面、下層黒褐ローム	皿(須恵)	10.9	4.6	3.2	22/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	接地ミ4cm、天井部内面は回転ケズリ調整、焼き歪みあり	03047
61	632	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.7	25/36	粗砂多、雲少	灰黄白	灰白	完一	接地ミ4cm、生地は、焼き歪み顕著あり	03117
61	633	７ｃ住居跡	住居床面	皿(須恵)	11.0	4.6	4.2	19/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	接地ミ4cm、焼成は高は生地が、焼き歪みあり	03039
61	634	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.2	28/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	黒灰	完一	生地が、正位地は、外面に黒斑を顕あり	03072
61	635	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	1.9	15/36	粗砂多、雲少	灰黄白	灰黄白	完一	接地ミ4cm、生地が、焼き歪みあり	03119
61	636	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	4.1	14/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、焼き歪みが、生地が、顕著顕著	03049
61	637	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.6	18/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、焼成は不自ら、ケズリに近い、生地が、焼き歪みあり	03013
61	638	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.6	12/36	粗砂多、雲少	灰	淡灰黄	完一	天井部内面は回転ケズリ調整加える	03014
61	639	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.7	29/36	粗砂多、雲少	灰	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、天井部内面は回転ケズリ調整、焼き歪み顕著	03047
61	640	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.7	25/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、焼き歪みが、生地が、内面顕著	03022
61	641	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.2	22/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	接地ミ4cm、天井部内面は回転ケズリ調整、焼き歪みあり	03047
61	642	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.7	25/36	粗砂多、雲少	灰黄白	灰白	完一	接地ミ4cm、生地は、焼き歪み顕著あり	03117
61	643	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.7	19/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	接地ミ4cm、焼成は高は生地が、焼き歪みあり	03039
61	644	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.2	28/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	黒灰	完一	生地が、正位地は、外面に黒斑を顕あり	03072
61	645	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	1.9	15/36	粗砂多、雲少	灰黄白	灰黄白	完一	接地ミ4cm、生地が、焼き歪みあり	03119
61	646	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	4.1	14/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、焼き歪みが、生地が、顕著顕著	03049
61	647	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.6	18/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、焼成は不自ら、ケズリに近い、生地が、焼き歪みあり	03013
61	648	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.0	4.6	3.6	12/36	粗砂多、雲少	灰	淡灰黄	完一	天井部内面は回転ケズリ調整加える	03014
61	649	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.7	4.6	3.4	6/36	粗砂多、雲少	灰	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、生地が	03077
61	650	７ｃ住居跡	住居床面	皿(須恵)	11.9	4.6	3.4	26/36	粗砂多、雲多	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ4cm、生地が、天井部内面ケズリ調整顕著	03022
61	651	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	11.6	4.6	3.6	9/36	粗砂多、雲少	淡黄灰	淡黄灰	完一	生地が	03037
61	652	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	12.0	4.6	3.2	12/36	粗砂多、雲少	淡黄灰	淡黄灰	完一	生地が	00037
61	653	７ｃ住居跡	住居床面	皿(須恵)	12.3	4.6	3.2	6/36	粗砂多、雲少	淡灰	灰	完一	正位地は、外面にたたき痕あり	00036
61	654	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	12.3	4.6	3.6	29/36	粗砂多、雲少	灰黄	灰黄	完一	接地ミ3cm、天井部内面は回転ケズリ調整加える	03128
61	655	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	12.6	4.6	3.6	12/36	粗砂多、雲少	灰黄	灰黄	完一	天井部内面は回転ケズリ調整、一部は粗ナデ調整の痕、縁と他部第一方定ラ「ヽ」	03222
61	656	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	12.9	4.6	3.6	1/36	粗砂多、雲少	灰黄	灰黄	完一	接地ミ3cm、天井部内面は回転ケズリ調整の痕、縁と他部第一方定ラ「ヽ」	03221
61	657	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	12.3	4.6	3.2	31/36	粗砂多、雲少	灰黄	灰黄	完一	接地ミ3cm、天井部内面は回転ケズリ調整、一部は粗ナデ調整の痕、縁と他部第一方定ラ「ヽ」、口縁部歪顕著あり	03221
61	658	７ｃ住居跡	住居床面&山	皿(須恵)	13.3	4.6	3.1.6	14/36	粗砂多、雲少	灰黄	灰黄	完一	天井部内面は回転ケズリ調整の痕、縁と他部第一方定ラ「ヽ」	03122
61	659	７ｃ住居跡	住居床面東側東壁内	皿(須恵)	10.2	4.6	12.7	14/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰オリーブ	完一	接地ミ3cm、生地が	00029
61	660	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	—	—	12.3	—	粗砂、雲多	淡灰黄	淡灰黄	完一	接地ミ1cm、生地が	03036
61	661	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	—	—	11.9	—	粗砂、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	生地が	03033
61	662	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	8.8	5.3	5.6	14/36	粗砂、雲少	灰白	淡灰	完一	外面黒化	03109
61	663	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.1	6.0	5.3	9/36	粗砂多、雲少	灰	灰	転	接位で焼き分(置き台)に転用、外面に黒斑あり	03109
61	664	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.2	7.0	5.7	14/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	生地が、焼成顕著	03029
61	665	７ｃ住居跡	住居床面&山、集落東側	坏(須恵)	9.2	5.2	5.4	6/36	粗砂多、雲少	淡黄灰	淡黄灰	完一	生地が、焼成顕著	03066
61	666	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.4	6.3	5.4	22/36	粗砂多、雲少	灰	灰	完一	外面不自ら調整顕著、外面木炭痕に近い、正位在面地域、外面黒斑あり	03019
61	667	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.4	—	4.6	23/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰	完一	生地が、外面焼化、焼き歪みあり	03138
61	668	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.6	6.5	5.7	19/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	生地が、外面焼化、焼き歪みあり	03113
61	669	７ｃ住居跡	住居床面	坏(須恵)	9.7	6.4	5.4	15/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	生地が、一部焼成、焼成が第一方定に近い、焼き歪み顕著	03061
61	670	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.9	6.2	5.2	15/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	成形時に口縁端部大焼、生地が	03029
61	671	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.7	7.2	5.5	1/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	生地が、一部焼成	03017
61	672	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.8	7.0	5.6	—	粗砂多、雲少	灰白	灰白	完一		00224
61	673	７ｃ住居跡	住居床面	坏(須恵)小	9.8	6.6	4.1	14/36	粗砂多、雲少	淡黄白	淡灰白	完一	生地が、焼き歪みあり	03082
61	674	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.8	7.2	5.2	15/36	粗砂多、雲少	灰	灰	完一	正位在面地域、外面黒化あり、底面焼き歪みあり	03018
61	675	７ｃ住居跡	住居床面&山、下層黒褐ローム、住居覆土	坏(須恵)	9.7	7.9	5.9	11/36	粗砂多、雲少	灰白	灰	完一/転	正位在面地域、外面黒化あり、焼成は、焼成が一方定に近く焼き分(置き台)に転用	03021
61	676	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.8	6.2	5.1	17/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	正位地域、生地が、焼き歪み顕著、外面黒斑あり	03112
61	677	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	9.9	7.1	5.1	16/36	粗砂多、雲少	灰	灰緑	転	接位で焼き分(置き台)に転用、焼成顕著、外面黒斑顕著	03079
61	678	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	10.0	—	5.3	20/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	生地が、焼き歪みあり	03029
61	679	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	10.1	7.7	5.6	6/36	粗砂多、雲少	淡灰	灰	完一	焼き歪み顕著、外面黒化あり	03111
61	680	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	10.3	—	5.3	21/36	粗砂多、雲少	淡灰黄	淡灰黄	完一	生地が、底面焼成不ケズリ調整顕著、底面焼き歪みあり	03078
61	681	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	10.5	6.8	4.4	20/36	粗砂多、雲少	灰	灰	完一	焼成第一方定ラ「ヽ」、外面黒斑に回転ケズリ調整	03203
61	682	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	10.4	—	5.6	19/36	粗砂多、雲少	灰黄白	淡灰	完一	生地が、底面ホラケズリ調整加えるハ～ラ切り痕が顕著あり	03114
61	683	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	10.5	7.7	5.5	30/36	粗砂多、雲少	淡黄灰	淡黄灰	完一	生地が、外面回転ケズリ調整、内面ホラケズリ調整加えるハ～ラ切り痕が顕著あり	03113
61	684	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	10.8	7.5	5.4	21/36	粗砂多、雲少	淡黄灰	灰白	完一	生地が、焼成後に底部穿孔か	03129
61	685	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	約11	約6.5	5.1	19/36	粗砂多、雲少	灰	灰	転小	焼き歪み顕著、内外面焼成あり	03119
61	686	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	11.0	—	4.6	6/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	外面に回転ケズリ調整加える、内面ナデ調整	03102
61	687	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	11.1	—	4.6	6/36	粗砂多、雲少	淡黄灰	淡黄灰	完一	生地が	03016
61	688	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	11.2	8.0	5.6	13/36	粗砂多、雲少	灰緑	緑灰	転	焼無歪色の良焼取者、正位で焼き分(置き台)に転用	03107
61	689	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	11.5	8.6	4.2	21/36	粗砂多、雲少	淡黄灰	淡黄灰	完一	生地が、焼き歪みあり	03106
61	690	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)小	11.5	—	13.6	5/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	生地が、外面に回転ケズリ調整	00039
62	691	７ｃ住居跡	住居床面	坏(須恵)	約11	—	5.1	16/36	粗砂多、雲少	淡灰	淡灰	完一	生地が、焼き歪みあり	03063
62	692	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	—	—	7.6	(2.1)	—	粗砂多、雲多	淡黄	黒緑	焼成	00013
62	693	７ｃ住居跡	住居床面	坏	—	—	7.2	(1.8)	—	粗砂多、雲多	灰	灰	転	底不在面に正位で焼き分(置き台)に転用、焼無歪色顕著顕著	03213
62	694	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	—	—	7.4	(2.2)	—	粗砂、雲多	淡黄灰	淡黄灰	生地が	00028
62	695	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏	—	—	6.6	(2.7)	—	粗砂、雲少	灰	灰	外面焼土顕著	00003
62	696	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	—	—	7.6	(2.5)	—	粗砂、雲少	淡黄灰	淡黄灰	生地が、外面黒斑、焼成顕著	00004
62	697	７ｃ住居跡	住居床面&山	坏(須恵)	—	—	10.2	(3.1)	—	粗砂、雲少	灰黄白	淡灰	生地が、焼成顕著	00009

第42表　窯跡出土遺物観察表13

中：（ ）は復元法量、［ ］は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎・土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
82	698	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.11	埦	13.7	–	4.6	16/36	精砂、礫少	灰黄白	浅黄	生一焼	生地け、焼成あり、底部外面手持ちケズリ	65141
82	699	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25、11号窯上下水口、二段目ヨコ	椀	21.9	10.2	5.6	6/36	精砂、礫少	灰白	灰白	生一焼	内底注目凸状ナデ外面ケズリ調整、外底注目凹状ナデ調整	65077
82	700	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25	脚付鉢	16.4	–	(7.1)	7/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	内底にナデ調整、外面下半に粗い切取ケズリ調整加える、70と同一個体か	65306
82	701	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25	脚付鉢	–	10.4	(6.1)	–	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	底部2条、70と同一個体か	65293
82	702	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.47	高杯C	–	–	(2.7)	–	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	内外面とも二十ナデ調整	66048
82	703	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.49	高杯C	–	–	(2.7)	–	精砂多、礫少	淡橙	淡橙	酸一焼	内底全面ニナデ調整	66049
82	704	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.51	高杯C	16.7	–	(6.6)	21/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	内底全面ニナデ調整	65294
82	705	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.51	高杯C	–	–	(5.8)	–	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	内底ニナデ調整	65223
82	706	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.51	高杯C	–	8.5	(6.3)	10/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	内底全面ニナデ調整、底部2条	65300
82	707	7ッ寺窯跡等	窯体床面	高杯D か	9.8	–	(3.6)	6/36	精砂多、礫少	淡灰	淡灰	酸一焼	無蓋ZE目地成、内面横民カキ	65084
82	708	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.51	高杯C	–	8.1	(4.6)	36/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	底部2条	65124
82	709	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.53	高杯C	–	8.2	(3.1)	微/36	精砂、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	底部2条	65040
82	710	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.53	高杯D か	–	–	(5.7)	–	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	外側ヨコ、底部2条	66412
82	711	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.53	高杯C	–	–	(4.7)	–	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	底部2条	65302
82	712	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.53	高杯D	–	8.9	(2.6)	微/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生一焼	輪の跡いち方感じし、生地け	65123
82	713	7ッ寺窯跡等	焼成室壁上	高杯C	–	9.8	(1.1)	微/36	精砂、礫少	灰	淡灰	生一焼		66033
83	714	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.53・55	壺類胴	5.6	13.6	32.5	7/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	頸部分所々かしれ入り消ち、見れた沈線、頸部文、連続刺突文で加飾	65252
83	715	7ッ寺窯跡等	窯体床面	甕	11.6	–	(4.3)	5/36	精砂多、礫少	灰	灰	酸一焼	頸甕か	65321
83	716	7ッ寺窯跡等	窯体床面	壺類	17.3	–	(4.3)	4/36	礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一焼	生地け	65329
83	717	7ッ寺窯跡等	窯体床面	壺類	–	9.9	(3.1)	–	精砂多、礫少	灰黄白	灰白	生一焼	生地け、底部内面一定方向のナデ調整加える、外底ヨコ調整	66061
83	718	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.56	壺類	–	–	(4.1)	–	精砂多、礫少	灰黄白	灰黄白	生一焼	外底手持ちケズリ、生地け、横縦圧痕	66015
83	719	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25	平瓶	5.6	–	(6.5)	36/36	精砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一焼	頸部円筒状を、胴部に陽成線一7条引ヨコ、生地け、横縦圧痕	65287
83	720	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25・55	小型壺	8.8	–	5.6	21/36	精砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生一焼	外底手持ちケズリ、生地け、外底に横縦圧痕	65284
83	721	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.49他	鉢類	13.8	–	(22.5)	22/36	精砂、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	内面仕整ヨ、外面板ナデタテの後ヨコ ナデ状の工程なカキメ調整	65303
83	722	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25	壺	17.8	–	(16.1)	6/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	酸一焼	内面仕整、外面縦ナデタテ	65251
83	723	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25	壺	16.2	–	(13.3)	5/36	精砂多、礫少、赤色粒少	灰黄褐	灰黄褐	生一焼	生地け、723と同一個体か	66062
83	724	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.25	壺	–	–	(10.8)	–	精砂多、礫少、赤色粒少	灰黄褐	灰黄褐	生一焼	内面仕整ヨ、外面タテ調整、生地け、723と同一個体か	66061
84	725	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.47	甕	20.1	–	61.5	34/36	精砂多、礫多	灰褐	灰褐	生一焼	内面仕整ヨ、外面横民、底部一個体下半は下から上に成形、頸部一個体上半は上から下に成形、口縁部内端平行タテキ目タッチナデ、生焼け	65254
84	726	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.51	甕	–	–	(6.7)	–	精砂多、礫多	灰褐	灰褐	酸一焼	底れた跡状ヨカ	66041
84	727	7ッ寺窯跡等	窯体床面No.49	甕	16.1	9.0(底部直径)	(46.6)	6/36	精砂多、礫多	灰褐	灰褐	酸一焼	内面仕整、外面横民、格子状タタキ	65453
84	728	7ッ寺窯跡等	窯跡周囲表面	蓋(坏身)	13.2	–	3.7	6/36	精砂多、礫少	淡灰	淡灰黄	酸一焼	焼き歪みあり、外面横民カキ	65024
84	729	7ッ寺窯跡等	窯跡周囲表面No.32、No.47	蓋(坏身)	13.3	8.6	3.9	15/36	精砂多、礫少	淡灰	灰	酸一焼	外底ニカ状工具痕、焼き歪みあり、外面横民カキ	65025
84	730	7ッ寺窯跡等	窯跡周囲No.5	蓋(ハ)	–	13.6	(1.4)	微/36	細砂多、礫少	淡灰黄	淡灰オリーブ	酸一焼	底部2条、ZE目地成、外面自然釉付着	66041
84	731	7ッ寺窯跡等	窯跡周囲No.5	蓋(坏身)	11.4	–	(2.5)	9/36	精砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰	酸一焼	天井部外面は手持ちケズリ調整の後、頂部に粗い切取ケズリ調整を加える、焼き歪み顕著	66021
84	732	7ッ寺窯跡等	窯跡周囲No.5	蓋(坏身)	10.4	10.1、8.5	(2.2)	10/36	精砂、礫少	淡灰	淡灰	酸一焼		66017
84	733	7ッ寺窯跡等	窯跡周囲No.5	蓋(坏身)	11.1	10.1、8.4	(2.3)	6/36	細砂多、礫少	淡灰黄	淡灰	酸一焼	生地け、内面横縦圧痕	66020
84	734	7ッ寺窯跡等	窯跡周囲No.5	蓋(坏身)	11.3	10.1、9.8	(1.7)	–	細砂少	灰白	灰白	酸一焼	焼き歪みあり	66019
84	735	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲No.5、No.32の上部遺土や側出土	坏G	8.7	7.9	3.5	5/36	精砂、礫少	淡灰	灰	酸一焼	有蓋、焼き歪み顕著	65129
84	736	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲No.5	坏G	9.6	7.2	3.4	6/36	精砂多、礫少	緑オリーブ	淡灰	酸一焼	無蓋ZE目地成、内面自然釉顕著、焼き歪みあり	65129
84	737	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲No.5	坏G	9.6	6.8	3.1	15/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰オリーブ	酸一焼	無蓋ZE目地成、内面自然釉・焼き歪みあり、焼き歪みあり	66018
84	738	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲No.5	鉢	9.6	–	(3.8)	6/36	礫少	淡灰オリーブ	淡灰	酸一焼	鉢ヨ不定間隔で、内面自然釉付着	65259
84	739	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲No.5	鉢類	7.6	–	(4.2)	9/36	精砂、礫少	灰	灰	酸一焼		65219
84	740	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲No.5	鉢類	–	–	3.6	–	精砂多、礫多	灰白	淡オリーブ	酸一焼	内底中央に回ノ字ナデ後ナデ調整、外面自然釉付着	66016
84	741	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲No.5	鉢類	13.1	–	(4.3)	11/36	精砂多、礫多	灰	灰	酸一焼	内面横縦	65178
84	742	7ッ寺窯跡周囲	窯跡周囲表面、粗穴沢遺構埋土	鉢類	12.8	–	(6.9)	12/36	精砂、礫少	淡灰	淡オリーブ	酸一焼	内面仕整、外面横縦タテ＆ナメ調整、横位焼成、外面自然釉付着	65179
85	743	8号窯	焚口付近埋土上	蓋(坏身)	11.1	5.6	3.4	10/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰	酸一焼	天井全面地成、外底に丸ヂリ痕あり	65166
85	744	8号窯	焚口付近ライン下1	坏G	9.8	5.6	4.2	11/36	精砂多、礫少	灰白	灰白	酸一焼	生地け、二次熱跡	65163
85	745	8号窯	最終床面天井焼成土	高坏D	9.7	–	(3.7)	11/36	細砂多、礫少	灰	褐灰	酸一焼	1条の横、ZE無蓋地成、内面横民・外面無ナデ	65163
85	746	8号窯	最終床面No.25	高坏D	10.8	–	(3.5)	9/36	細砂多、礫少	褐灰	灰	酸一焼	1条の横、ZE無蓋地成、内面横民カキ	65161
85	747	8号窯	焚口前床面表面No.1 暗色土	高坏D	10.0	–	(3.3)	7/36	細砂多、礫少	灰	灰	酸一焼	1条の横、ZE無蓋地成、内外面強横撫蓋、焼き歪みあり	65167
85	748	8号窯	蓋上	高坏D	10.1	–	(3.4)	7/36	細砂多、礫少	淡灰	灰白	酸一焼	1条の横、ZE無蓋地成、内外面自然釉顕著	66172
85	749	8号窯	最終床面No.25	高坏D	11.8	–	(3.3)	7/36	細砂多、礫少	灰	灰	酸一焼		66035
85	750	8号窯	最終床面上	高坏D	11.9	–	(3.3)	10/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	酸一焼	1条の横、ZE無蓋地成、内面横民カキ	65319
85	751	8号窯	最終床面上	高坏D	12.4	7	(2.4)	5/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	酸一焼	地成あさい、焼き歪みあり	66021
85	752	8号窯	最終床面No.25 上	高坏D	10.0	10.0	(2.7)	5/36	細砂多、礫少	灰	褐灰	酸一焼	1条の横、ZE無蓋地成、内面自然釉顕著	66026
85	753	8号窯	最終床面No.25	坏G	10.0	8.2	(3.1)	6/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	酸一焼	1条の横、ZE無蓋地成、内外面自然釉顕著	66027
85	754	8号窯	最終床面天井焼成土	高坏D	–	8.4	(5.1)	微/36	細砂少	灰	淡灰	酸一焼	2段2方透かし、ZE目地成、外面自然釉付あり	66038
85	755	8号窯	最終床面表面土・暗色土	高坏D	–	8.3	(5.1)	23/36	細砂多、礫少	褐灰	淡灰	酸一焼	2段2方透かし、ZE目地成、外面地成あり	65168
85	756	8号窯	焚口埋土上	高坏D	–	8.2	(6.6)	微/36	細砂多、礫少	褐灰	淡灰	酸一焼	2段2方透かし、ZE目地成、外面地成あり	65162
85	757	8号窯	最終床面No.25	高坏D	–	10.6	(1.9)	16/36 微/36	細砂多、礫少	灰	灰	酸一焼		66040

第 43 表　窯跡出土遺物観察表 14

中：［ ］は復元径値、（ ）は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	胎・土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
63	158	6号窯	燃焼室床面上（ベルト断色土、無釉陶器は為焼出土）	高杯C	—	7.4	(3.0)	脚 11/20	細砂多	淡灰	灰	堅一普	有蓋、正位焼成・外面煤化	63169
63	159	6号窯	最終床面天井崩落土	高杯A-B	—	(8.2)	(1.0)	脚 5/36	細砂多、鉄多	淡灰	灰	堅一普	外面煤化	63325
63	160	6号窯	側面部分焼出土、灰被	甕類	9.4	—	(2.4)	口 9/36	細砂多、鉄粒	灰オリーブ	淡灰	堅一普	甕類の可能性有	63443
63	161	6号窯	不整形土坑	器(坏蓋)か	(14.5)	—	(2.2)	口 7/36	細砂多、鉄	暗灰	淡灰	堅一普	甕類の可能性有	63175
63	162	6号窯	灰原最上	壺	(20.0)	—	(5.3)	口 7/36	細砂多、鉄	灰	灰	堅一普		63174
63	163	6号窯	側面部分焼出土	壺	(21.5)	—	(5.3)	口 5/36	細砂多、鉄	灰	灰	堅一普		63164
63	164	6号窯	側面部分焼出土	壺	(22)	—	(4.2)	口 2/36	細砂多、鉄	灰	灰	堅一普		63429
63	165	6号窯	焼出部遺構埋土	壺	(23)	—	(3.9)	口 3/36	細砂多、鉄少	灰	淡黄	堅一普	小ボのため横まわり不安情報	63176
64・67	166	6号窯跡	6号窯焼出埋土、7号窯遺構立遺構埋土、11号窯焼出埋土	平瓶	7.1	—	16.6	口 36/36	細砂多、鉄少	淡灰	淡灰	堅一普	頸部閉塞、体部上面に刺書	—
63	167	5号窯跡体	燃焼室東面側ち敷中央、5号窯焼原敷面	蓋(坏G)	9.4	(12.1)	1.8	(2.2) 口 5/36	細砂、鉄少	灰	灰	堅一普		63007
63	168	5号窯跡体	燃焼室東面側ち敷中央、5号窯焼原敷面	蓋(坏G)	9.8	(12.1)	1.6	(2.0) 口 16/36	細砂、鉄少	淡黄灰	灰	堅一普	横位焼成、内面に輪状・線上指痕、外面に指痕(ほぼ)の重ね焼き痕(坏者は最高位置痕)	63008
63	169	5号窯跡体	在成式ピット、5・10号窯200、300敷焼原成色土層	蓋(坏G)	9.8	(12.1)	1.4	3.5 口 21/36	細砂、大型礫少	淡黄灰	淡黄灰	堅一普	横位1.2cm、内外面煤状斑点	63009
63	170	5号窯跡体	焼成室最終床面	蓋(坏G)	9.8	(12.1)	1.6	3.4 口 26/36	細砂多	暗灰	暗灰	堅一普	横位1.6cm、正位焼成、外面に輪状・線状指痕あるが、焼き足らず最高位置痕	63125
63	171	5号窯跡体	焼成室最終床面	蓋(坏G)	9.8	(12.1)	1.6	(1.9) 口 5/36	細砂多、鉄少	灰	灰	堅一普・軟か	内外面に輪状あり、焼き分(蓋き分)相異か	63142
63	172	5号窯跡体	在成式ピット	蓋(坏G)	9.9	(12.1) 8.2	(2.1)	1.7 口 36/36	細砂多	暗灰	暗灰	堅一普	天井部外面に回転ケズリ後に丁寧な回転ナデ調整、横位焼成、内面煤状斑点、外面に炭上の黒石焼き痕	63032
63	173	5号窯跡体	在成式ピット	蓋(坏G)	(10.8)	(12.1) 8.0	3.1	2.1 口 36/36	細砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	横位1.5cm、正位焼成、外面煤状斑点、焼き足らず	63060
63	174	5号窯跡体	在成式ピット	蓋(坏G)	9.8	(12.1) 7.8	3.2	6.36	細砂少	灰	暗灰	堅一普	横位1cm、正位焼成、外面煤状あり	63036
63	175	5号窯跡体	在成式ピット	蓋(坏G)	(10.1)	(12.1) 8.0	(2.4)	1.7 口 36/36	細砂少	灰	灰	堅一普	正位焼成、外面煤状あり	63006
63	176	5号窯跡体	焼成室最終床面	蓋(坏G)	9.8	(12.1) 8.0	3.4	1.9 口 36/36	細砂多、大型礫少	灰	灰	堅一普	横位1.1cm、正位焼成、外面煤状あり、焼き足らず蓋	63062
63	177	5号窯跡体	焼成室床面上、5号窯焼原敷面	蓋(坏G)	(10.1)	(12.1) 8.4	3.2	2.3 口 36/36	細砂多	淡灰	淡黄灰	堅一普	横位1.2cm、正位焼成、外面煤状あり、焼き足らず蓋	63066
63	178	5号窯跡体	燃焼室床面敷ち中央、30・50・60号窯焼原敷面上	蓋(坏G)	9.8	(12.1) 8.0	(2.1)	2.2 口 36/36	細砂多	淡灰	灰	堅一普・軟	正位焼成、外面煤化、底ボの一部に回転ヨコナデ(蓋き分)に相異	63061
63	179	5号窯跡体	在成式ピット、燃焼室床面敷ち敷中央、焼成室床面上	蓋(坏G)	(10.8)	(12.1) 8.4	(2.2)	2.0 口 36/36	細砂、鉄少	灰	灰	堅一普	正位焼成、外面煤状あり	63067
63	180	5号窯跡体	最終床面焼成部敷面上、灰被	蓋(坏G)	9.8	(12.1) 8.2	3.6	3.0 口 36/36	細砂多、鉄少	暗灰	暗灰/淡黄	堅一普	横位1.1cm、正位焼成、外面煤状斑点で焼き足らず蓋、焼き足らず相異蓋	63126
63	181	5号窯跡体	在成式ピット床面下・焼成室	蓋(坏G)	(10.1)	(12.1) 8.4	(2.0)	9.36	細砂多	灰	灰緑	堅一普	正位焼成、外面煤状・立性輪痕者で調整不明	63033
63	182	5号窯跡体	在成式ピット	蓋(坏G)	(10.1)	(12.1) 8.4	3.1	1.6 36	細砂、鉄少	灰	灰	堅一普・軟か	横位1.5cm、正位焼成、外面煤状・焼き足らず蓋、右ボ部者、焼き分(蓋き分)に相異か	63059
63	183	5号窯跡体	焼成室床面上、燃焼室敷ち敷中央	蓋(坏G)	(10.1)	(12.1) 8.4	(2.2)	1.7 36	細砂多	淡灰	灰	堅一普	正位焼成、外面煤状あり	63207
63	184	5号窯跡体	焼成室床面上	蓋(坏G)	(11.1)	(12.1) 8.0	(2.1)	1.6 36	細砂少	灰	淡灰	堅一普	正位焼成、外面煤状あり	63096
63	185	5号窯跡体	在成式ピット	坏(蓋)か	(11.8)	(12.1) 9.0	3.8	6.36	細砂少	淡灰白	灰	堅一普	外面に粗いヨコナデ調整、横位焼成、外面煤状・焼き足らず相異	63057
63	186	5号窯跡体	焼成室東面	蓋(坏G)	(11.8)	(12.1) 9.4	(2.1)	12.36	細砂多	灰オリーブ	暗灰	堅一普	外面煤状あり、焼き足らみあり	63204
63	187	5号窯跡体	焼成室東面敷ち敷中央	蓋(坏G)	(11.1)	(12.1) 8.9	(2.0)	5.36	細砂多、鉄少	灰	灰	堅一普	天井部外面ナデ調整	63093
63	188	5号窯跡体	燃焼室東面下	坏G	7.2	4.3	2.7	7.36	細砂、鉄少	灰	灰	堅一普	内底が凹凸状にくぼむ	63010
63	189	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	7.9	4.2	3.4	9.36	細砂、鉄少	灰	暗灰	堅一普	焼き足らみあり	63099
63	190	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	7.9	6.0	3.6	1.36	細砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	外面煤化、体部焼き足らみ	63053
63	191	5号窯跡体	燃焼室床面敷ち敷中央、5・10号窯焼原敷面(燃焼室)、10号窯焼原敷ち	坏G	8.1	5.3	3.1	9.36	細砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	正位焼成、外面煤状あり、外面に指圧ナデ痕者	63051
63	192	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	8.0	5.2	3.2	1.36	細砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	正位焼成、外面煤状あり、外面に焼上指痕、焼き足らみあり	63011
63	193	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	8.0	6.1	3.1	26.36	細砂、大型礫少	淡灰	灰	堅一普	内面は指圧を受ける、外面煤化、体部焼き足らみ	63052
63	194	5号窯跡体	燃焼室床面敷ち敷中央	坏G	8.0	6.4	3.4	12.36	細砂多	灰	黒灰	堅一普	外面煤化、焼き足らみ、小ボ一部を回行止立	63205
63	195	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	8.1	5.0	3.4	12.36	細砂、鉄少	灰	黒灰	堅一普	外面煤化・強炭化、焼き足らみ蓋者	63226
63	196	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	8.2	7.1	3.6	17.36	細砂多、鉄少	灰	黒灰	堅一普	外面煤化、体部焼き足らみ	63081
63	197	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	8.4	6.4	3.4	15.36	細砂多、鉄少	灰	灰	堅一普	外面煤状あり、焼き足らみ	63054
63	198	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	8.4	5.6	3.4	8.36	細砂多、大型礫少	暗灰	暗灰	堅一普・軟	蓋無者を含む焼成、焼き足らみあり	63012
63	199	5号窯跡体	燃焼室床面敷ち敷中央、灰被、10号窯灰原敷ち	坏G	8.9	7.1	3.6	11.36	細砂多	淡灰	黒灰	堅一普・軟	外面煤化、焼き足らみあり	63206
63	200	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	(9.1)	—	(2.5)	6.36	細砂多	淡灰	灰白	堅一普	外面煤状斑者	63069
63	201	5号窯跡体	在成式ピット	坏G	(10.8)	6.4	3.6	5.36	細砂、大型礫少	淡灰	淡灰	堅一普	焼成後に底部穿孔か焼き位か	63070
63	202	5号窯跡体	焼成室天井部落土	坏G	—	6.1	(3.0)	—	細砂多、鉄少	淡黄灰	淡橙	堅一普	外面に粗いヨコナデ調整、外面に墨痕か	63024
63	203	5号窯跡体	在成式ピット、焼成室最終床面上	坏G	—	5.9	(1.4)	—	細砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	外面煤化	63068
63	204	5号窯跡体	焼成室最終床面敷ち敷中央	坏	(8.8)	—	(2.7)	口 5/36	細砂多、鉄少	淡灰	灰	堅一普	外面煤化、焼成の可能性あり	63063
63	205	5号窯跡体	最終床面上	坏G	(9.1)	—	3.5	口 7/36	細砂少生	灰	黒灰	堅一普	外面煤化、焼き足らみ蓋者	63127
63	206	5号窯跡体	在成式ピット	皿A	(9.1)	—	(1.5)	2.36	細砂少生	灰	灰オリーブ	軟	焼き足らみか、横ナデ後、焼き分(蓋き分)に相異、薄焼上・立性輪痕者	63049
63	207	5号窯跡体	燃焼室床面敷ち敷中央	高杯G?	(10.8)	—	3.6	5.36	細砂多	灰白	灰白	生一普	体部外面に波線あり	63040
63	208	5号窯跡体	焼成室床面上	高杯G?	—	—	(2.2)	—	細砂少	灰白	淡黄灰	生一普	生焼け・蓋痕跡蓋	63000
63	209	5号窯跡体	在成式ピット	高杯C	—	—	(3.0)	—	細砂少	淡灰	淡灰	堅一普	波線あり	63041
63	210	5号窯跡体	焼成室天井部落土	高杯C?	—	11.8	(2.6)	脚 13/36	細砂多	暗灰	暗灰	堅一普		63022
63	211	5号窯跡体	焼成室床面上	蓋(壺蓋)か	(21.0)か	—	(1.4)	(2.0)	細砂、鉄少	灰	灰	堅一普	正位焼成、外面谷間編線者、切上部一部端、小ボの立の直立同に不安情報	63214
63	212	5号窯跡体	在成式ピット	甕G	8.8	—	(2.3)	口 14/36	細砂、鉄少	淡灰	淡灰	堅一普		63056
63	213	5号窯跡体	窯焼成面敷台	窯敷板	—	—	(5.4)	—	細砂、鉄少	淡黄灰	灰	生一普	生焼け	63039
63	214	5号窯跡体	窯焼成面敷台	甕	—	—	(5.5)	—	細砂多	淡黄灰	淡黄灰	生一普	生焼け	63038
63	215	5号窯跡体	燃焼室床面敷ち敷中央、5・10号窯、200、300敷焼原成色土層	甕類	—	8.9	(2.7)	脚 24/36	細砂少	灰	灰	堅一普	正位焼成、外面煤状あり、焼き足らみか	63066
63	216	5号窯跡体	在成式ピット	甕類	8.8	—	(2.9)	6.36	細砂多	淡灰	淡灰	堅一普		63061
63	217	5号窯跡体	最終床面焼成部上	甕類	—	—	(6.7)	—	細砂、大型礫少	淡灰黄	淡灰黄	堅一普	外面煤状斑者	63023

第 44 表　窯跡出土遺物観察表 15

中，（　）は復元法量，〔　〕は現存法量を示す。

図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度	胎土	色調（内面）	色調（外面）	焼成	備考	整理番号
88	818	19号須恵窯	発掘式ピット	小型壺	8.2	—	(2.3)	4/36	粗砂少	灰	灰	焼一堅		86402
88	819	19号須恵窯	発掘式ピット	小型壺	(8.5)	—	(3.9)	—	粗砂少	灰	灰	焼一堅		85541
88	820	19号須恵窯	発掘式ピット	小型壺	約7	—	(3.4)	—	粗砂少	灰白	灰白	焼一堅		86464
89	821	19号須恵窯	窯焚床面検出	壺	—	—	(8.6)	—	細砂，粗砂，礫	灰	灰	焼一堅		86488
89	822	19号須恵窯	窯焚床面基盤ち敷ロ中	壺	約18	—	(4.1)	3/36	粗砂，礫多	灰白	灰白	生一堅	生焼け	86865
89	823	19号須恵窯	最終床焚焚面	壺	25.6	—	(6.4)	6/36	粗砂，礫多	淡黄灰	淡黄	生一堅	内面調整ナデ不良，切離ヘラ調整，生焼け	85165
89	824	19号須恵窯	焚成面最終床焚床上，最終床焚焚面検出，灰面	鉢	約20	—	(11.2)	14/36	粗砂，礫少	黄灰	黄灰	焼一堅	内面ロ縁，外面体部，口縁端部ヨコナデ正上，外ロ下端に指痕有り，焼き歪み顕著	86757
89	825	19号須恵窯	発掘式ピット	鉢	—	—	(4.7)	—	細砂多，粗砂	淡灰黄	淡灰	生一堅	内面横ナデ，外面縦ハケ調整，外ロ下端に指痕有り，生焼け，内面黒煤	86729
89	826	19号須恵窯	焼成面黒焚面	蓋(須恵)	9.4	近し7.6	2.3	10/36	粗砂，礫少	暗灰	淡灰黄	焼一堅	正回転成，外面稜沈み	85855
89	827	19号須恵窯	焼成面黒焚面	蓋(須恵)	11.0	近し6.8	2.3	5/36	粗砂，礫少	灰	灰	焼一堅	正回転成，外面稜沈顕著，焼き歪み・割れあり	86647
89	828	19号須恵窯	焼成面黒焚面	鉢	—	—	(6.1)	—	粗砂多，礫多	灰	灰	焼一堅	内外面ナデ調整，外面沈線1条，焼き歪みあり，内面白黒鱗状痕	86750
90	829	19号須恵窯	床面上	蓋(須恵)	約10	近し8.0	(1.5)	11/36	粗砂，礫少	淡灰	淡灰	焼一堅	焼き歪み顕著	86860
90	830	19号須恵窯	焼土最終床	蓋(須恵)	10.3	近し8.1	(2.3)	15/36	粗砂，礫少	淡灰	灰	焼一堅	正回転成，外面稜沈，焼き歪み顕著	85869
90	831	19号須恵窯	床面上，5-10焼成前上	坏G	—	6.0	(1.5)	—	粗砂多，礫少	灰	灰	焼一堅		86457
90	832	19号須恵窯	焼土最終床，灰面，10-焼成前黒焚面(29-10間色砂層)，19-焼成面	坏G	9.0	4.6	3.3	17/36	粗砂多，礫少	灰白	灰	焼一堅	角張焼成，外面熱ボ，外底大ボケ歪み大	85885
90	833	19号須恵窯	最終焚ボ上	坏	—	—	—	17/36	粗砂多，礫少	暗灰	黒灰	軟	正回転焼き歪み顕著，焼き上げ熱編顕著	86703
90	834	19号須恵窯	床面上，5-10-焼成前36(黒色，5-10-焼成前，36)粗砂色上	高坏脚	—	—	(8.9)	—	粗砂，礫少	淡灰	淡灰	焼一堅	裾部に沈線2条，生焼け赤い	85306
90	835	19号須恵窯	焼成面焼土最終床	鉢脚	—	—	(5.4)	—	粗砂多，礫少	灰白	灰	軟	ボケ歪み，脚ボケ伝播に焼き歪み(置き台に転用，脚上に空ボケ)	86687
90	836	19号須恵窯	19号焼成未満(5.5)-15	壺	23.4	—	(25.2)	15/36	粗砂多，礫少	淡灰	灰	焼一堅	口縁部ヨコナデ，内面ヨコ方向ヘラ調整，外面タタキ目，内面ロ縁，外面体部(胴部色白)，上半はナデ消されて，焼き歪み顕著	85461
90	837	19号須恵窯	最終床焼土，19-焼成前表面，灰面29-9，29-2	壺	47.3	—	(14.0)	4/36	粗砂，大型礫多	灰	黒灰	焼一堅軟	口ボケ歪み，胴下半部ボケ大，波調文で加飾，正回転成，稜沈，焼き歪(置き台に転用)	86306
91	838	19号須恵窯	胴部表面29-5，19-焼成前表面上，5-10-焼成前表面	蓋(須恵)	10.2	近し8.3	3.3	15/36	粗砂多，礫少	灰	暗灰	焼一堅	焼き歪み，外面熱ボ	85970
91	839	19号須恵窯	胴部表面(29-9，暗褐色粘砂層)焼成面	蓋(須恵)	10.2	近し8.2	(2.9)	6/36	粗砂少	灰	灰黄	焼一堅	正回転成，外面稜沈顕著，胴部上端部歪	85954
91	840	19号須恵窯	胴部表面29-8(暗褐色粘砂層)	坏H	9.3	—	2.3	16/36	粗砂多，礫少	灰	灰	焼一堅	外底に焼成板ヘラ記号「//」，外底は未調整に近い，外面熱ボ	85272
91	841	19号須恵窯	胴部表面29-(5)	坏G	8.6	6.0	3.4	6/36	粗砂多，礫少	灰	灰	焼一堅		85914
91	842	19号須恵窯	胴部表面(5.2)	坏G	10.3	9.0	(3.4)	6/36	粗砂多，礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼一堅/未ヒケ	焼き歪みあり，内面ロ縁部・焼上端部重，焼き上げ(置き台)に転用か	86456
91	843	19号須恵窯	胴部表面(5.2)	坏G	—	5.8	(2.5)	—	粗砂多，大型礫少	淡灰	灰白	生一堅	外底生焼け	86655
91	844	19号須恵窯	胴部表面29-(ピット)粗砂色粘砂	坏G	10.0	6.3	3.8	12/36	粗砂，大型礫少	淡灰	灰	焼一堅	外底に焼成板ヘラ記号「×」か，外面熱ボ	85206
91	845	19号須恵窯	胴部表29-(5)，粗粒色粘砂，5-焼成前	高坏(A)	15.0	—	(3.6)	10/36	粗砂多，礫少	灰	暗灰	焼一堅	脚端，外面熱ボ，外底に八字記号線上に刻む，焼き歪み顕著	85421
91	846	19号須恵窯	胴部表，5-焼成前	鉢脚	14.0	—	(5.4)	7/36	粗砂多，礫少	淡灰	淡	焼一堅/未ヒケ	脚端に指痕・指頭圧痕有，焼き歪(置き台)に転用か	85993
91	847	19号須恵窯	胴部表	鉢脚	12.9	—	(6.2)	11/36	粗砂多，礫少	淡灰	淡灰	生一堅	生焼け	85994
91	848	19号須恵窯	胴部表面(5.2)	壺	26.4	—	(3.9)	2/36	粗砂多，礫少	灰	灰	焼一堅	イボのため横ナデ不定性す	86659
91	849	19号須恵窯	胴部表面(5.2)	壺	—	—	(4.9)	—	粗砂多，礫少	淡灰	淡灰	焼一堅	外面熱ボ，外面転煤	86656
91	850	5-10号須恵窯	須恵30-16ボ中分黒灰色上層	蓋(須恵)	9.3	近し7.6	3.2	21/36	粗砂多，礫少	淡灰	淡黄灰	焼一堅	外面に焼成板ヘラ記号「×」，焼成上1cm，正回転成，外面稜沈顕著	85378
91	851	5-10号須恵窯	須恵30-16ボ中分黒灰色上層，5-10-焼成前30-10粗黒灰色上層	蓋(須恵)	9.3	近し7.6	3.3	36/36	粗砂多，礫少	灰	灰	焼一堅	外面に焼成板ヘラ記号「×」，焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多	85379
91	852	5-10号須恵窯	須恵30	蓋(須恵)	9.8	近し7.6	3.6	16/36	粗砂多，礫少	暗灰	暗灰	焼一堅	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多	85380
91	853	5-10号須恵窯	29-8，29-2，須恵粗黒灰色上層	蓋(須恵)	9.9	近し7.8	1.6	—	粗砂多，礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼一堅		86700
91	854	5-10号須恵窯	須恵粗黒灰色層29-10粗黒色砂層	蓋(須恵)	9.6	近し8.0	3.1	15/36	粗砂多，礫少	淡灰	淡黄灰	焼一堅	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多	86698
91	855	5-10号須恵窯	須恵	蓋(須恵)	9.8	近し8.0	(2.0)	6/36	粗砂，粗砂少	淡灰	淡黄灰	焼一堅	薄手，正回転成，外面稜沈・焼成多い	86699
91	856	5-10号須恵窯	須恵，10-焼成前29-10粗色土	蓋(須恵)	約10	近し8.0	(2.0)	7/36	粗砂多，粗砂少	暗灰	黒灰	焼一堅/未ヒケ	内面横ハケ，焼き歪(置き台)に転用か，外面の可能性あり(天井部外面ナデ調整)	86701
91	857	5-10号須恵窯	須恵，10-焼成前29-10粗色土	蓋(須恵)	9.8	近し7.8	3.6	36/36	粗砂，粗砂少	暗灰	暗灰	焼一堅	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多	85363
91	858	5-10号須恵窯	須恵29-130	蓋(須恵)	9.8	近し7.8	2.9	6/36	粗砂多，礫少	灰	暗灰緑	焼一堅	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多	85374
91	859	5-10号須恵窯	須恵29-1，30-1粗，黒灰色土層	蓋(須恵)	9.9	近し8.8	3.4	16/36	粗砂多，礫少	灰	灰	焼一堅	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多	85386
91	860	5-10号須恵窯	須恵29-2粗粒色粘砂	蓋(須恵)	10.1	近し8.8	2.9	12/36	粗砂多，礫少	淡灰橙	灰橙	焼一堅	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多，生焼け(ボロい)	85375
91	861	5-10号須恵窯	須恵29-5，30-2黒灰色上層，粒	蓋(須恵)	10.0	近し8.1	2.5	6/36	粗砂多，礫少	灰	灰	焼一堅	焼成1.5cm	85376
91	862	5-10号須恵窯	須恵30-2	蓋(須恵)	10.1	近し8.8	3.2	36/36	粗砂多	淡黄灰	淡灰黄	焼一軟	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多，焼き歪み・割れあり	86215
91	863	5-10号須恵窯	須恵	蓋(須恵)	10.1	近し8.6	2.8	25/36	粗砂多，粗砂少	淡黄灰	灰橙	焼一軟	焼成1.5cm，正回転成，外面稜沈多，焼き歪みあり	85302
91	864	5-10号須恵窯	須恵30-3粗色土	蓋(須恵)	10.1	近し8.6	(2.7)	15/36	粗砂，大型礫少	灰	灰	焼一堅	焼き歪みあり	86697
91	865	5-10号須恵窯	須恵29-16黒灰色上層，5-10-焼成前30-2，29-2黒灰色上層	坏H	10.2	—	2.8	20/36	粗砂多，礫少	灰白	灰	焼一堅	外底4箇所に石ボケ，脚部欠損，外面熱ボ	85371
91	866	5-10号須恵窯	29-5，30-4粗黒灰色上層	坏G	8.9	5.7	3.3	18/36	粗砂多，礫少	灰	暗灰	焼一堅	外底熱ボ，ボケ焼き歪み	85428
91	867	5-10号須恵窯	須恵30-18粗黒灰色上層	坏G	9.0	6.2	3.4	6/36	粗砂多	灰オリーブ	灰	焼一堅	外面ロ元ボケ調整痕，ヘラ足弱，胴部薄い，外面熱ボ	85392
91	868	5-10号須恵窯	8-126，10-黒灰色29-2	坏G	9.0	6.2	3.7	25/36	粗砂多	灰	暗灰	焼一堅	外面熱ボ	85386
91	869	5-10号須恵窯	須恵29-5，30-4粗黒灰色上層	坏G	9.0	6.4	3.0	15/36	細砂少	淡灰	淡灰/灰	焼一堅	焼成前に外底横ハケ調整痕，ヘラ足弱，外面熱ボ，焼き歪みあり	85401
91	870	5-10号須恵窯	須恵	坏G	9.1	5.6	3.7	11/36	粗砂，礫少	灰	灰	焼一堅	外面熱ボ	85389
91	871	5-10号須恵窯	須恵	坏G	9.3	5.5	3.6	11/36	細砂多	灰	暗灰	焼一堅	外面熱ボ	85452
91	872	5-10号須恵窯	29-6，30-6粗黒色土	坏G	9.2	6.4	3.4	15/36	粗砂，大型礫少	灰橙	灰橙	焼一堅	外面熱ボ，底部焼き脚あり	85437
91	873	5-10号須恵窯	須恵29，30-6粗黒灰色上層，8-10表面，19黒表上	坏G	9.3	6.2	3.6	20/36	粗砂少	淡灰	淡灰オリーブ	焼一堅	正回転成，外面熱ボ・焼き歪顕著，口縁端部は直上の段差で矢印部ひかり	85387

第 45 表　窯跡出土遺物観察表 16

中：［　］は復元径値、（　）は現存法量を示す。

掲図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	胎・土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
91	674	5-10窯 床面	床面30-7粉色土	坏G	9.8	7.4	3.1	25/36	精砂多	灰	黒灰/灰	堅一普	正位焼成、外黒斑化、焼き金ふ顕著	65380
91	675	5-10窯 床面	5号窯床面、5-10号窯床面29-5、30-1粘黒灰色土層	坏G	9.1	7.6	3.4	23/36	精砂多	淡灰	灰	堅一普	外黒斑化、小さな焼き割れ目立つ	65705
91	676	5-10窯 床面	29-5粉色粘砂	坏G	9.7	6.1	3.9	17/36	細砂少	灰	灰	堅一普	外底ヨキ調整、外黒斑化・焼成あり	65384
91	677	5-10窯 床面	床面	坏G(焼き台)	—	5.6	2.6	-	精砂少	灰	灰	堅一普	焼成前に内側から幅く底部穿孔(焼き台)	65391
91	678	5-10窯 床面	床面30-6	坏G	10.8	6.4	3.6	6/36	精砂少	灰	灰	堅一普	外黒斑化・ヒビ割れ多	65423
91	679	5-10窯 床面	30-6、30-1粘、黒灰色土層	坏G	10.8	6.2	3.3	6/36	精砂、大型礫少	淡灰 オリーブ	灰	堅一普	外黒斑化・大ビビ多し	65412
91	680	5-10窯 床面	床面8-120	坏G	—	7.1	(1.7)	—	精砂少	淡灰 オリーブ	灰	堅一普	正位焼成、内面斑状顕著	65393
91	681	5-10窯 床面	床面黒灰色土29-3	坏G	9.9	5.8	2.9	18/36	精砂、大型礫多	淡灰	暗灰	堅一普	焼成前に一ケ記号「//」、正位焼成、外黒斑化、焼き金ふ顕著、外底に焼土痕者	66764
91	682	5-10窯 床面	5-10号窯床面30-3、1粘黒灰色土層1、10号窯床面30-4、29号粉黒灰色土層	坏G	10.0	6.3	3.6	26/36	精砂多	灰/淡灰褐	灰/淡灰褐	堅/普/脆	一部歪大部・	65411
91	683	5-10窯 床面	床面	坏G	9.9	6.6	3.8	26/36	精砂、大型礫少	淡灰	淡灰	堅一普	外底ヨキ調整に近い、砂ム製品	65426
91	684	5-10窯 床面	床面	坏G	10.2	7.7	3.4	18/36	精砂、大型礫少	灰	灰	堅一普	焼成前にケ字調整、一ケ記号「/」、外黒斑化	65490
91	685	5-10窯 床面	床面29、30-6粘黒灰色土	坏G	10.1	—	4.0	15/36	精砂、大型礫多	灰	灰	堅一普	外底周縁部斜一ケ記号「//」、外黒斑化、焼成前に「W」の記号が刻まれる。外底は「W」の記号ナデ調整、焼き金ふ多	65385
91	686	5-10窯 床面	床面	坏G	10.5	6.4	3.9	14/36	精砂、礫少	淡灰	灰	堅一普	外黒斑化、ヒビ割れ多、焼土痕有、砂ム製品	65433
91	687	5-10窯 床面	5-10号窯床面30-7粉色土	坏G	10.5	6.9	3.3	14/36	細砂、礫少	灰	黒灰	堅一普	外黒斑化、焼き金ふ・割れあり	65428
91	688	5-10窯 床面	床面	坏G	約10	約7	3.7	15/36	精砂少	灰	淡褐灰	堅一普	正位焼成、外黒斑状顕著、口縁端部は歪との部者で大部分ゆがみ	65439
91	689	5-10窯 床面	床面	坏B	12.2	8.6	4.0	9/36	精砂多	灰白	淡灰	堅一普	外黒斑化、ヒビ顕著	65381
91	690	5-10窯 床面	床面29-3粉色土、5-10号窯床面29-3黒黒灰色土層	蓋(無蓋)G-0	13.8 (底1.10.2)	(1.4)	4.0	6/36	精砂少	灰	暗灰	堅一普	外黒斑化、焼き割れあり	65389
91	691	5-10窯 床面	床面29-4外4分黒灰色土層	蓋(無蓋)G-0	14.1 (底1.10.8)	3.6	4.3	18/36	精砂、礫少	淡黒灰	灰/黒灰	堅一普	焼成前にケ字調整、歪約1.8cm/分の。外底は粗、内面斑状顕著、外面一部黒化	65402
91	692	5-10窯 床面	床面	蓋(無蓋)G-0	約20 (底1.9)	約6.6	(2.2)	4/36	精砂、礫少	淡灰	淡灰	堅一普	内面中央付近に円ヨキ内面、粗ハケ調整、外面は粗い回転ケズリ調整	65415
91	693	5-10窯 床面	床面29-1粘30-4黒灰色土層	蓋(無蓋)G-0	—	推定5.4	(2.9)	-	精砂、礫少	淡灰	淡灰	堅一普	外底ヨキ調整	65402
91	694	5-10窯 床面	床面	蓋(無蓋)G-0	24.8 (底1.20.2)	(3.6)	4.0	6/36	精砂、礫少	淡灰 オリーブ	淡灰 オリーブ	堅一普	内面巻込円ヨキ内面、粗ハケ調整、外面は粗い回転ケズリ調整	65412
91	695	5-10窯 床面	床面	蓋(大型蓋)G	約30 (底1.8)	(2.6)	5.0	6/36	精砂多、礫少	灰	灰	堅一普	外黒斑顕著、焼き割れ目立つ	65407
92	696	5-10窯 床面	床面、29-1北東隅黒土層、床面土層	蓋	16.0	—	4.7	14/36	細砂、礫少	灰白	灰	堅一普	側面焼成、焼き割れ目立つ	65373
92	697	5-10窯 床面	床面	蓋	15.1	—	(6.0)	4/36	精砂多、礫少	灰	灰	堅一普	外底ヨキ付ケ調整、外黒斑化、側面焼成か	65385
92	698	5-10窯 床面	10-9黒灰色土-1、5-10号窯床面黒灰色土層30-1、30-2	鉢(浅鉢)	27.0	—	(6.4)	14/36	精砂、大型礫少	黒灰	灰	堅一普	正位焼成、内面自然釉、底ケ小・長を焼台に置き台ロに転用	65399
92	699	5-10窯 床面	床面粘29、30-4黒灰色土層	鉢	27.4	—	16.5	6/36	細砂、礫少	淡灰	暗灰	堅一普	側面焼成、外黒斑状あり	65397
92	700	5-10窯 床面	床面8-120	鉢b	15.4	—	(7.4)	4/36	精砂少	灰	灰オリーブ	堅一普	泥質土、有量多三日側焼成、外黒斑状顕著	65423
92	701	5-10窯 床面	床面30-1北西半分黒灰色土層	鉢b	18.8	—	(6.0)	5/36	精砂多、礫少	灰	灰	堅一普	泥質土、側面まで三日焼成、焼き割れあり	65401
92	702	5-10窯 床面	29-5、30-1粘黒灰色土層	鉢b	—	9.3	(2.5)	—	精砂多、大型礫少	灰	灰	堅一普	器種不明、焼成前に縦一ケ所で縦方向線のハケ書き、内面に「//」のハケ書きを加えて、七箇ケ線を、外面は一度ハケ書き	65406
92	703	5-10窯 床面	29-5、30-1粘黒灰色土層	高坏A	12.2	—	(11.4)	6/36	精砂多、大型礫少	灰	灰	堅一普	有蓋、3方に縦長の細い透かし孔、外黒斑化	65434
92	704	5-10窯 床面	床面29-1黒灰色土層、30-5粉黒灰色土層、29-5粉黒灰色土層	高坏A1・蓋	15.4	—	(11.8)	4/36	精砂多、礫少	灰	暗灰	堅一普	有蓋、3方に縦長の細い透かし孔、側面上の縦長の長方孔と円ヨキを配置し、正位焼成、外黒斑化	65422
92	705	5-10窯 床面	床面30-1粘黒灰色土層、29、30-1粘黒灰色土層	高坏A1・蓋	—	12.7	(10.5)	特 14/36	精砂多、礫少	灰	灰/黒灰	堅一普	有蓋、3方に縦長の細い透かし孔、側面上の縦長の長方孔と円ヨキを配置し、正位焼成、外黒斑化	65404
92	706	5-10窯 床面	5号窯床面黒灰色土層、5-10号窯床面30-7粉色土	高坏E	—	12.2	(6.4)	12/36	精砂少	淡褐灰	淡灰	堅一普	泥質土、内面上方に段有、透かしの有無不明	65413
92	707	5-10窯 床面	床面29-6	高坏E	—	10.7	(9.3)	特 36/36	精砂少	淡灰	灰/黒灰	堅一普	正位焼成、外面内面・外面斑状あり	65411
92	708	5-10窯 床面	床面29-5黒灰色土	高坏E	14.3	—	(4.0)	18/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	堅一普	外面内面全体にヨコナデ調整加える。無蓋風、内外面斑状あり、30%と想定	65428
92	709	5-10窯 床面	床面29-5粉、褐色粘砂	高坏E	13.8	—	(4.4)	16/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	堅一普	外面内面全体にヨコナデ調整加える。無蓋風、30%と想定	65418
92	710	5-10窯 床面	5-10号窯(-120)床面黒灰、30-5粉黒灰色土、5-10号窯床面、10号窯床面30-4、29号粉黒灰色土層、10号窯床面褐色粘砂29-3粉	高坏E	(11.8)	—	(4.5)	23/36	細砂、礫少	黒灰	黒灰	堅一普	外面内面全体にヨコナデ調整加える。無蓋風、焼き金ふ顕著	65417
92	711	5-10窯 床面	床面30-1粘黒灰色土層	高坏E	12.9	—	(4.4)	14/36	精砂多、礫少	黒灰	暗灰	堅一普	外面内面全体にヨコナデ調整加える。正位焼成、外黒斑化、内黒斑化	65418
92	712	5-10窯 床面	床面	高坏E	14.0	—	4.7	18/36	精砂多、礫少	灰褐	灰褐	堅一普	外面内面全体にヨコナデ調整加える。無蓋風、外黒斑状	65424
92	713	5-10窯 床面	5号窯床面、10号窯床面30-1粉色土	高坏E	—	11.6	(1.7)	特 11/36	細砂	淡褐	淡褐	堅一普	泥質土多	66623
92	714	5-10窯 床面	床面29-4	高坏E	8.4	—	(3.4)	12/36	細砂、礫少	暗灰	黒灰	堅一普	体部下端と脚ボロに仕上げる、側面焼成か、外黒斑状・焼ぶ	65414
92	715	5-10窯 床面	床面29-5黒灰色土、5号窯床面	高坏E	9.7	—	(2.4)	6/36	精砂、礫少	灰	黒灰	堅一普	体部下端の泥溜り多、脚ボロに仕上げる、側面焼成か、外黒斑化	65417
92	716	5-10窯 床面	床面29-5粉黒灰色土層、29-5北東隅土黒灰色土層	高坏E	9.6	7.6	8.5	11/36	精砂、礫少	灰	灰	堅一普	体部下端に泥溜り多、脚ボロに仕上げる、側面焼成、脚内面焼成か	65378
92	717	5-10窯 床面	床面8-120	高坏E	—	—	(1.2)	—	精砂、礫少	灰	灰	堅一普	外面一部焼成か	66667
92	718	5-10窯 床面	床面8-120	高坏E	9.4	6.4	4.6	12/36	精砂少	灰	灰/黒灰	堅一普	無蓋か、内面・底黒化	65351
92	719	5-10窯 床面	床面	高坏E	—	7.8	(3.3)	12/36	精砂少	暗灰	暗灰	堅一普	脚ボロ付近なっとり、無蓋か	65404
92	720	5-10窯 床面	床面29-5粉黒色粘砂	平瓶	7.2	—	(5.2)	19/36	精砂多	暗灰	灰	軟	縦無蓋に泥溜之指者、内面斑状あり	65416
92	721	5-10窯 床面	床面	平瓶	7.6	—	(5.1)	17/36	精砂多	灰	灰	堅一普	泥質土、内外面斑状あり	65417
92	722	5-10窯 床面	床面黒灰色土、5-11号窯3-106床面	高坏A	—	—	(9.7)	-	精砂多、大型礫少	灰	灰	堅一普	脚部内整焼れる Ｗw	65402
92	723	5-10窯 床面	5-10号窯床面29-4、30-6粉黒灰色土層	鉢E2(注鉢)	—	6.4	(3.3)	特 36/36	精砂多、大型礫少	灰	灰	堅一普	内側から粗方形ヨコ ハケ不規則、正位焼成、焼き割れ顕著、脚端部に焼土痕者	65415
93	724	5-10窯 床面	床面黒灰色土29-3、29-5黒灰色土層	鉢E2(注鉢)	—	約9	(2.6)	8/36	精砂、大型礫少	灰	淡灰	堅一普	正位焼成、外黒斑状顕著	66762

第46表　窯跡出土遺物観察表17

（中：［ ］は復元径値、（ ）は現存法量を示す。

検出番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
93	925	5-10号窯周辺	灰原表面No.3	瓶か土師器	－	9.8	(4.2)	微 6/36	粗砂、大型礫少	暗灰	灰	堅一普	内底ハケ調整、外面一部ロキュ調整、正位焼成か	05419
93	926	5-10号窯周辺	5-10号窯3-2層中層色土、3号窯周辺表土	壺	12.2	－	(4.6)	10/36	粗砂多	灰	灰	堅一普	外面沈む上ぶりのハケ調整痕、正位焼成か	05380
93	927	5-10号窯周辺	灰焼C-886	鉢類	11.6	－	(4.4)	15/36	粗砂多	灰	黒灰	堅一普	高い底裏1条、高台・焼出は正つ	05426
93	928	5-10号窯周辺	灰焼D	鉢類	12.6	－	(5.5)	16/36	粗砂多	黒灰	灰	軟	底裏1条、細無溝在の浅無線痕跡、焼き分工置き台に転倒	05421
93	929	5-10号窯周辺	灰原2D-F、20-D配焼区色上層	壺	13.8	－	(3.9)	6/36	粗砂、細少	灰	灰	堅一普	内面横位ハケ調整・絞目、外面ヨコ一部調整痕、正位ヘラ調整、底裏1条ケ加筆	05429
93	930	5-10号窯周辺	灰原3D-D配焼区色上層	壺	14.8	－	(3.4)	6/36	粗砂、細少	淡灰	淡灰	堅一普	内面横位ヨコハケ調整か、外面ヨコ一部調整痕、正位ヘラ調整、底裏3条1条ケ加筆	05427
93	931	5-10号窯周辺	灰焼	鉢類	13.5	－	(5.9)	11/36	粗砂多	淡灰	淡灰	堅一普	内外面百間調整痕	05394
93	932	5-10号窯周辺	灰焼	鉢類	9.3	－	(6.8)	4/36	粗砂、細少	淡灰	淡灰	堅一普	正位無意焼成、内面調整あり	06786
93	933	5-10号窯周辺	小型窯	壺か	6.8	－	(2.5)	6/36	細少	淡灰	灰	堅一普	年輪、外面調整以下に隙間あり	05409
93	934	5-10号窯周辺	灰焼	小型壺	7.8	－	(6.1)	7/36	細砂少	淡灰	灰	堅一普	工輪なつくり、外面全体に隙間あり、側面焼成か	05405
93	935	5-10号窯周辺	灰焼2D-C	壺	21.8	－	(6.5)	6/36	粗砂多、細少	淡黒灰	淡黒灰	堅一普	内面横位、外面横位、生地ナデ、微細調整	06002
93	936	5-10号窯周辺	灰焼B-126、3号窯表上	壺	23.4	－	(8.1)	6/36	粗砂多、細少	灰	灰	堅一普	内面横位、外面横位、生地ナデに近い	06791
93	937	5-10号窯周辺	灰焼B-126	壺	22.6	－	(7.5)	5/36	粗砂、細少	黒灰	灰	堅一普	内面横位、外面横位、正位焼成、隙間あり	06801
93	938	5-10号窯周辺	灰焼	壺	22.8	－	(6.9)	10/36	粗砂、細少	淡黒灰	淡黒灰	堅一普/軟	内面横位、外面横位、底裏1条、正位焼成、隙間あり、頸部後、頸ナデ一部ヨコ生地ナデ(頸上)に転用	06805
93	939	5-10号窯周辺	灰焼B-126	壺	19.2	－	(9.6)	7/36	粗砂、細少	灰白	灰白	生一普	内面横位、外面横位、生地ナ	06799
93	940	5-10号窯周辺	3号窯周辺、5-10号窯周辺30-F横色土、5-10号窯20-S	壺	22.2	－	(7.0)	10/36	粗砂、細少	灰	黒灰	堅一普/軟	内面横位、外面横位、焼成第一ケ定ケ「ヘ」、正位焼成、隙間あり、頸ナデ一部ヨコ生地ナデ(頸上)に転用	06803
93	941	5-10号窯周辺	灰焼B-126	壺	20.8	－	(9.4)	5/36	粗砂、細少	淡黄灰	灰	堅一普	高い頸裏2条、正位焼成、隙間裏有	06798
93	942	5-10号窯周辺	3号窯周辺、10号窯周辺29-E	壺	22.8	－	(11.5)	11/36	粗砂多、細多	灰	灰褐	堅一普	内面横位、外面横位、正位焼成、隙間あり	06807
93	943	5-10号窯周辺	灰焼B-126	壺	24.6	－	(12.2)	6/36	細砂多、細少	淡灰黄	淡灰黄	堅一普	下頸の接ぎ文は指ナル、生地ナ成ナ有	06805
93	944	5-10号窯周辺	灰焼、5-10号窯29-S、29-D横	壺	36.6	－	(9.3)	12/36	粗砂、細少	灰	黒灰	堅一普	正位焼成、隙間あり	06791
93	945	5-10号窯周辺	灰焼、5号窯29-S、5号窯29-D、5-10号窯29-D、5-10号窯29-S、5-10号窯29-D、3号窯表土	壺	38.2	－	(14.2)	9/36	粗砂多、細多	黒灰	黒灰	堅一普	正位焼成、隙間あり、焼き金ふ跡有	06798
93	946	5-10号窯周辺	灰焼29-F、20-E、3号窯表層	壺	37.8	－	(14.9)	18/36	粗砂多、細多	灰褐	灰褐	堅一普/軟	正位焼成、隙間あり、頸ナデ一部ヨコ生地ナデ	06794
93	947	5-10号窯周辺	灰焼、29-D横色土層、表層No.2	壺	40.30	－	(15.6)	4/36	粗砂多、細多	灰	淡黒灰	堅一普	内面横位、外面横位、沈線、波状文その弦あり、正位焼成、隙間あり	06795
93	948	5-10号窯周辺	灰焼B-126	壺	40.8	－	(10.8)	5/36	粗砂多、細多	暗灰	灰	堅一普	正位焼成、隙間あり	06793
93	949	5-10号窯周辺	灰焼B-126、3号窯周辺	壺	39.2	－	(13.2)	5/36	粗砂、大型礫少	黒灰	灰	生/堅一普	内面横位、外面横位、頸ナデ一部ヨコ生地ナデ	06819
93	950	5-10号窯周辺	灰焼29-C	鉢(壺か)	－	6.6	(7.4)	32/36	粗砂多、細少	淡黒灰	暗灰	堅一普	外底円錐上げ行ラケズリ調整、外底ユナデ一部ヨコ生地ナデ、外面焼成	05403
94	951	5-10号窯周辺	5-10号窯周辺30-H、外ヨ字周辺色上、5-10号窯周辺20-D配焼区色上層	円面硯	－	(2.2)	(2.6)	微 29/36	粗砂少	黒灰	灰	堅一普	外周を面ボケ、沈線、潰ハ、孔ナ行編彫、5.5cm14ヶ所で加筆、焼成強、内面調整	05224
94	952	5-10号窯周辺	灰焼D-F、29-E横色土層	鉢か	－	－	(3.2)	－	細砂	淡黄褐	淡黄褐	堅一普		06817
94	953	5-10号窯周辺	灰焼30-D	鉢	－	－	(3.6)	－	粗砂多	淡黒灰	淡黒灰	堅一普	内面横ナデか、外面ヨコ一部調整痕、内面ナデ調整、白編編痕一ケ所上面ナデ編ケ編痕あり、生地ナ	06751
95	954	2号窯	焼成区東面焼ろ跡ヤトレンチ	蓋(焼台)	9.7	10.1	6.6	18/36	粗砂多	オリーブ黒	暗灰	軟	粗砂混ざり焼き編痕痕、焼き分蓋台に転用	06121
95	955	2号窯	焼成部中焼成東側色土層No.3b-31	蓋(焼台)	10.3	10.1	6.4	11/36	粗砂少	灰	灰オリーブ	堅一普	正位焼成、外面横位調整、調整不明	06123
95	956	2号窯	焼成部No.34	蓋(焼台)	10.4	10.2	6.0	14/36	粗砂多	灰	灰	堅一普	外面無ヒ	06111
95	957	2号窯	焼ロ付近	蓋(焼台)	9.8	10.1	6.0	12/36	粗砂多	暗赤褐	暗赤褐	堅/悪/軟3	外面に高ケ一ケ状上高ケ下ケ、縁の文様が連続、細無溝に焼土跡痕、焼き分(蓋)台ロに転用な	06149
95	958	2号窯	焼成部中焼ろ11型ロ付近	蓋(焼台)	9.8	10.1	6.2	26/36	粗砂多	灰	灰	堅/悪/軟3	正位焼成、外面横位ヘラ、縁ケ一ケ状ヨコ生ケ加工ケ正位焼成	06127
95	959	2号窯	焼成部No.34、焼ロ付近	蓋(焼台)	9.8	10.1	7.0	12/36	粗砂多、細少	暗灰	灰	堅一普	正位焼成、外面横位調整、焼き金ふ跡あり	06128
95	960	2号窯	焼成部焼ロ付近	蓋(焼台)	9.8	10.1	6.2	6/36	粗砂多	灰	灰	堅/悪/軟3	縁ケ一ケ状ヨコ生ケ(蓋)台ロに転用	06130
95	961	2号窯	焼成部中焼ろ26、焼成部上層黒色土層No.	蓋(焼台)	－	10.1	(2.2)	－	粗砂、細少	灰	黒灰	堅一普	焼成1.5cm、内面に大ガケ多し、外面無ヒ	06126
95	962	2号窯	焼成部中焼成東側色土、焼成部中焼成東側色上層No.1	蓋(焼台)	9.8	10.1	7.0	3/36	粗砂多、細少	淡黒灰	灰	堅一普	焼成1.5cm、正位焼成、外面横位ヨコ、焼き金ふ跡有	06115
95	963	2号窯	焼成部No.34、焼成部	蓋(焼台)	9.8	10.1	5.8	26/36	粗砂多、細少	淡黒灰	灰	堅一普	焼成1.5cm、正位焼成、外面横位ヨコ、中央部焼き金ふ跡	06124
95	964	2号窯	焼ロ付近	蓋(焼台)	9.8	10.1	5.8	36/36	粗砂少	淡褐	灰	堅/悪/軟	焼成1.5cm、正位焼成、外面横位ヨコ、内面は歪状況1	06121
95	965	2号窯	焼成部中焼No.20-D-34	蓋(焼台)	9.8	10.1	6.0	36/36	粗砂多	淡黒灰	淡褐灰	堅一普	焼成1.5cm、正位焼成、外面一部無ヒ	06117
95	966	2号窯	焼成部東面下層焼ロ	蓋(焼台)	10.0	10.1	6.4	36/36	粗砂多、細少	淡黒灰	灰	堅一普	焼成1.5cm、正位焼成、外面横位ヨコ、若干焼き金ふ有	06123
95	967	2号窯	焼成部No.34、焼成部	蓋(焼台)	10.0	10.1	5.9	26/36	粗砂多	淡灰	灰	堅一普	焼成1.5cm、天井部外面は回転ケヤ調整痕、口縁部下ナデ調整を加える、正位焼成、外面横灰あり	06116
95	968	2号窯	焼ロ付近	蓋(焼台)	10.4	10.1	5.5	22/36	粗砂多	暗赤褐	暗赤褐	堅一普	焼成1.5cm、外面横灰あり、焼き金ふあり	06112
95	969	2号窯	焼成部中焼、焼成部中焼東側色上層No.2b	蓋(焼台)	10.2	10.1	5.4	14/36	粗砂多、細少	灰	灰	堅一普	焼成1.6cm、正位焼成、外面横灰あり、縁ケ一ケ状ヨコ生ケ(蓋)台ロに転用	06119
95	970	2号窯	焼成部中焼成東側色上層No.20	蓋(焼台)	10.2	10.1	5.4	28/36	粗砂多、細少	灰	灰	堅一普/軟	焼成1.5cm、正位焼成、外面横灰あり、焼き金ふ跡有	06118
95	971	2号窯	焼成部焼成部下層焼ロ	蓋(焼台)	10.2	10.1	5.8	36/36	粗砂多、細少	淡灰	灰	堅一普	焼成1.5cm、正位焼成、外面横灰あり、焼き金ふ跡有	06123
95	972	2号窯	焼成部中焼No.26、焼成部中焼東側色上層No.20、上層黒色土層No.1	蓋(焼台)	10.2	10.1	5.5	32/36	粗砂多、細少	淡黒灰	淡灰	堅一普	焼成1.7cm、生地ナ、外面無ヒ	06122
95	973	2号窯	焼成部	蓋(焼台)	10.3	10.1	7.0	11/36	粗砂多、細少	淡灰	暗灰	堅一普	正位焼成、外面無ヒ、若干焼き金ふあり	06128
95	974	2号窯	焼成部No.6-66	蓋(焼台)	9.8	10.1	7.7	11/36	粗砂多、細少	淡灰	暗灰	堅一普	外面無ヒ	06117
95	975	2号窯	焼成部中焼成東側色上層No.23	蓋(焼台)	10.2	10.1	6.2	18/36	粗砂多、細少	淡灰	灰	堅一普	焼成1.5cm、外面横灰あり	06132
95	976	2号窯	焼成部D-9号No.19東側色上層	蓋(焼台)	－	10.1	(2.6)	－	粗砂多、大型礫少	淡灰	灰	堅一普	焼成1.5cm	06133
95	977	2号窯	焼成部中焼成東側色上層No.39	蓋(焼台)	9.5	10.1	7.6	3/36	粗砂多	淡灰	淡灰褐	堅一普	焼成1.5cm、正位焼成、外面横灰あり	06134
95	978	2号窯	焼成部B2100～P60-6	蓋(焼台)	10.2	10.1	6.8	4/36	粗砂少	灰	灰	堅一普	焼成1.5cm、焼き金ふあり	06134
95	979	2号窯	焼成部	蓋(焼台)	10.6	10.1	5.9	2/36	粗砂少	淡黒灰	淡灰	堅一普	焼成1.7cm、生地ナ、外面無ヒ	06135

第47表　窯跡出土遺物観察表18

中：（ ）は復元法量、〔 〕は現存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
95	980	2号窯	前庭部上層黄色土層№2	蓋(須恵)	10.8	〔6.1〕	3.7	17/36	精砂、雲少	灰黄	灰	堅一普	稜線1.6cm、正位焼成、外面自然釉溜まり	68130
95	981	2号窯	前庭部上層黄色土層№2	蓋(須恵)	9.8	〔6.4〕	3.1	29/36	精砂、雲少	灰黄	灰黄	堅一普	稜線1.5cm、正位焼成、外面風化ひどい	68133
95	982	2号窯	前庭部中層黄褐色土層№17	蓋(須恵)	9.9	〔6.1〕	3.1	36/36	精砂、雲少	灰黄	灰オリーブ	堅一普	稜線1.5cm、倒位で焼ミ跡あり、風化ひどい	68128
95	983	2号窯	前庭部中層黄褐色土層№21	蓋(須恵)	〔9.4〕	—	3.4	12/36	精砂、雲少	灰オリーブ	灰黄	堅一普	内面に無調整の工具痕、正位焼成ヘラ、内面風化ひどい、倒位で焼ミ跡	68129
95	984	2号窯	焼成部No.33	椀	9.0	6.0	3.2	17/36	精砂、大型雲少	赤褐/灰	赤褐/灰	堅/普/軟	底ヘラ一部は粗ナデ/雲少/白石粒/黒雲	68026
95	985	2号窯	焼成部No.33、焚口付近No.39	椀	9.6	6.4	3.6	28/36	精砂、大型雲少	赤褐/灰	赤褐/灰	堅一普	外面は粗ハケ/調整ヘラ/正工具痕、内面に無調整の工具痕、焼き割り裏雲	68000
95	986	2号窯	焼成部No.34	椀	8.8	5.8	3.4	12/36	精砂、大型雲少	赤黄褐	赤黄褐	堅一軟	外面は粗ハケ/調整ヘラ/正工具痕、内面に二次焼の無調整の工具痕、焼き割り裏雲	68060
95	987	2号窯	燃焼部前面下層黄色土層№2	椀	9.2	5.7	3.2	26/36	精砂、雲少	灰	褐灰	堅一普	回転ヘラ切り十分ナデ、倒位に焼ミ痕、焼き割り裏雲	68081
95	988	2号窯	焼成部No.34、前庭部上層黄色土層№16	椀	9.1	6.0	3.3	7/36	精砂、大型雲少	褐灰	灰	堅一普	内面ヘラ磨/正工具痕、外面煤付、焼き割り裏雲	68084
95	989	2号窯	焚口付近	椀	9.4	6.4	3.1	11/36	精砂、雲少	灰	褐灰	堅一普	内面に自然釉溜まり、焼き割り裏雲	68091
95	990	2号窯	焚口付近焼成部No.36、焼成部東面	椀	9.4	6.2	3.6	11/36	1mm大の砂粒	褐灰黄	褐灰黄	堅一軟	外面は粗ハケ/調整ヘラ/正工具痕、焼き割り裏雲	68040
95	991	2号窯	燃焼部中層	椀	8.8	5.4	3.3	7/36	精砂、大型雲少	褐灰	灰	堅一普	外面は回転ヘラ切り後ヘラナデ調整、外底に点状ナデを施あり。	68064
95	992	2号窯	焚口付近、前庭部中層黄褐色土層№14、燃焼部西側上層№14	椀	8.7	6.0	3.0	20/36	精砂、大型雲少	灰	褐灰	堅一普	内面に無調整の工具痕、外面煤付、底部焼き割り入り	68034
95	993	2号窯	焼成部No.34、焚口付近	椀	8.9	6.2	3.3	36/36	精砂、大型雲少	褐灰黄	褐灰黄	堅一軟	内面に無調整の工具痕、外面煤付	68053
95	994	2号窯	焚口、焚口付近No.34	椀	9.2	5.8	3.2	6/36	精砂少	灰	灰	堅一普	回転ヘラ切り十分ナデ、倒位に焼ミ痕、外面に煤付、内面煤付	68082
95	995	2号窯	燃焼部中層No.31、前庭部上層黄色土層№4	椀	9.2	6.0	3.1	2/36	精砂少	褐灰	褐灰	堅一普	底部焼き割り裏雲	68011
95	996	2号窯	焼成部No.34	椀	9.3	5.6	3.5	14/36	精砂、雲少	灰	褐灰	堅一普	内面に無調整の工具痕、外側面煤付、外底に点状ナデを施あり。	68006
95	997	2号窯	焼成部No.34	椀	9.4	6.1	3.4	35/36	精砂多	黄褐	黄褐	堅一軟	内面は回転ヘラ切り後ヘラナデ調整、焼き割り裏雲	68051
95	998	2号窯	焼成部No.34	椀	9.3	5.4	3.6	16/36	精砂少	褐灰	灰/黒灰	堅一普	正位焼成、外側煤付、外底に点状ナデを施あり。	68063
95	999	2号窯	焼成部No.34-35、焚口付近、焼成部No.39	椀	9.4	6.2	3.5	9/36	精砂、雲少	褐黄褐	褐黄褐	堅一軟	内面に無調整の工具痕、外面煤付	68097
95	1000	2号窯	焼成部No.33前庭部、燃焼部中層黄褐色土層№21	椀	9.1	6.1	3.5	26/36	精砂、大型雲少	灰	灰/褐灰	堅一普	外側面煤付、外底に点状ナデを施、焼き割り裏雲	68106
95	1001	2号窯	燃焼部前面下層黄色土層№2	椀	9.8	6.3	3.4	12/36	精砂少	灰	褐灰	堅一普	外底のナデ調整は丁寧、内面に無調整の工具痕	68111
95	1002	2号窯	上層黄色土層№7-14	椀	9.9	5.2	3.6	15/36	精砂多	褐灰、オリーブ	黒灰	堅一普	内面自然釉、外底煤付(更改あり)	68071
95	1003	2号窯	焚口付近No.34	椀	9.4	6.2	3.4	6/36	精砂多	黄褐	黄褐	堅一軟	内面に無調整の工具痕、外底に点状ナデを施あり	68089
95	1004	2号窯	焚口付近	椀	9.1	6.0	3.5	36/36	精砂、大型雲少	灰褐	褐灰	堅一軟	外底のナデ調整は丁寧、外底に点状ナデを施、焼き割り入り	68033
95	1005	2号窯	焚口付近、焚成部No.34	椀	9.6	6.2	3.6	17/36	精砂多、雲少	灰	灰	堅一普/軟	底ヘラに灰被りを見る	68037
95	1006	2号窯	焼成部東面	椀	9.7	6.3	3.1	1/36	精砂、雲少	黄褐	黄褐	堅一軟	内面に無調整の工具痕、焼き割り、外底に点状ナデを施あり。	68080
95	1007	2号窯	燃焼部中層No.23	椀	9.2	5.9	3.6	15/36	精砂少	褐灰	褐灰	堅一普	外面煤付(更改あり)、火ぶくれあり	68045
95	1008	2号窯	焚口付近、前庭部上層黄色土層№4	椀	9.1	6.0	3.6	16/36	精砂多	褐黄褐	褐黄褐	堅一軟	内面に無調整の工具痕、焼き割り、外底にヘラ状工具痕あり。	68065
95	1009	2号窯	焼成部No.34、前庭部中層黄褐色土層№11	椀	9.4	6.3	3.4	36/36	精砂少	灰	灰	堅一普	外面煤付、底部焼き割り裏雲	68032
95	1010	2号窯	焼成部No.34、焚口付近	椀	9.2	6.3	3.4	35/36	精砂、大型雲少	褐灰黄	褐灰黄	堅一軟	内面に無調整の工具痕、焼き割り裏雲	68099
95	1011	2号窯	焼成部No.34、燃焼部中層No.31、焚口付近	椀	9.8	6.4	3.4	31/36	精砂少、大型雲少	灰/褐灰	灰/褐灰黄	堅一軟/普	底部焼き割り裏雲、釉ヨウ注意点固い	68052
95	1012	2号窯	燃焼部下層、前庭部中層黄褐色土層№19	椀	9.3	6.2	3.2	26/36	精砂、雲少	灰	褐灰	堅一軟	回転ヘラ切り十分粗ナ、倒位に焼ミ痕、外面煤付	68059
95	1013	2号窯	焼成部東面、焚口付近	椀	9.2	6.1	3.3	16/36	精砂、大型雲少	黄褐	黄褐	堅一軟	内面に無調整の工具痕、外底に点状ナデを施あり。	68054
95	1014	2号窯	焼成部No.34	椀	9.4	6.0	3.4	32/36	精砂、雲少	灰	灰	堅一普	内面は回転ヘラ切り後ヘラ調整に近い、正位焼成、外側煤付/内底点状ナデを施あり。	68100
95	1015	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層黄褐色土層№21	椀	9.4	6.3	3.6	31/36	精砂、大型雲少	褐灰	褐灰	堅一普	内面に無調整の工具痕1条、外底は粗ナデ調整、焼き割り裏雲あり。	68101
95	1016	2号窯	焼成部No.34、E-60～F-60G	椀	9.7	6.6	2.9	2/36	細砂、粗砂少	灰	灰	堅一普	内面は回転ヘラ切り後ヘラ調整に近い、外面煤付、10Y2.5/1-褐灰	68091
95	1017	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層黄褐色土層№22	椀	9.7	6.5	3.5	16/36	精砂、大型雲少	褐黄灰	褐黄灰	堅一軟	内面に無調整の工具痕1条、外底は生地ナデ、外側面煤付、底部焼き割り裏雲	68102
95	1018	2号窯	焼成部No.34	椀	9.7	6.4	3.3	10/36	精砂、大型雲少	黄褐/灰	黄褐/灰	堅一軟	底ヘラ一部は粗ハケ調整	68056
95	1019	2号窯	焼成部No.34、焚口付近	椀	9.2	6.6	3.7	3/36	精砂多	褐灰黄	黄褐	堅一軟	外面の回転ヘラ切りは小心に近けず、転上痕あり。外底に点状ナデを施、焼き割り裏雲	68096
95	1020	2号窯	焼成部No.34	椀	9.1	6.7	3.5	8/36	精砂、大型雲少	灰	褐灰	堅一普	外面煤付、外底に点状ナデを施あり。	68070
95	1021	2号窯	燃焼部前面下層黄色土層、燃焼部上層黄色土層№2、燃焼部東面上層№19	椀	9.4	6.5	3.3	28/36	精砂、雲少	灰	黒灰	堅一普	外面は回転ヘラ切り後ヘラ調整に近い、正位焼成、外側煤付/内底点状ナデを施あり。焼き割り裏雲	68101
95	1022	2号窯	燃焼部中層No.21	椀	9.4	6.7	3.7	5/36	精砂、雲少	灰	褐灰	堅一普	外面煤付、焼き足あり。10Y6.2-褐灰	68045
95	1023	2号窯	燃焼部中層No.31、前庭部前面上層№-7-6G	椀	9.1	6.1	3.6	8/36	精砂多	褐灰	黒	堅一軟	正位焼成ヘラ、内面風化、外面煤付/裏雲	68079
95	1024	2号窯	燃焼部前面下層黄色土層、前庭部No.3	椀	9.2	6.7	3.5	22/36	精砂少、大型雲少	褐灰	灰	堅一普	内面に無調整の工具痕1条、外側面煤付/内底点状ナデを施あり。	68108
95	1025	2号窯	燃焼部下層黄色土層No.31、燃焼部	椀	9.2	6.5	3.6	7/36	精砂多、雲少	褐灰	灰/黒灰	堅一普/軟	内面に無調整の工具痕1条、外側面煤付/内底点状ナデを施、底ヘラ一部は粗ナデ/白石粒/雲少/粗砂	68096
95	1026	2号窯	焼成部No.34	椀	9.4	6.2	3.4	24/36	精砂、大型雲少	褐黄褐	褐黄褐	堅一軟	内面に無調整の工具痕1条、外側面煤付/焼き割り裏雲	68109
95	1027	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層黄褐色土層№11、中層No.21	椀	9.1	6.9	3.6	25/36	精砂、雲少	灰	灰/黒灰	堅一普	内面に無調整の工具痕1条、外側煤付/焼き割り裏雲	68050
95	1028	2号窯	焼成部No.33	椀	10.1	6.8	3.2	22/36	精砂少	褐灰	褐灰	堅一普/軟	外底は回転ヘラ切り後ヘラナデ調整、外側煤付、焼き割り裏雲	68055
95	1029	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層黄褐色土層No.20	椀	9.8	—	〔3.0〕	8/36	精砂多、雲少	褐灰	褐灰	堅一普	外側煤付(更改)、外底に点状ナデを施あり。底部焼き足あり。	68072
95	1030	2号窯	焚口付近、燃焼部東面	椀	9.6	6.6	3.6	27/36	精砂多、大型雲少	褐黄褐	褐黄褐	堅一軟	底部焼き割り裏雲、釉ヨウ注意 α aa	68050
95	1031	2号窯	焚成部No.34	椀	9.6	6.2	3.6	26/36	精砂多、雲少	灰/明褐	灰/明褐	堅一軟/普	外底は回転ヘラ切り後ヘラ調整、ヨウ注意点固い、外面煤付(更改)	68037
95	1032	2号窯	燃焼部中層No.20	椀	10.0	7.3	3.5	12/36	精砂多	褐灰	灰	堅一普	内面に無調整の工具痕、外側面煤付/内底点状ナデを施あり	68085
95	1033	2号窯	焚口付近No.34	椀	10.6	6.9	3.2	31/36	精砂多、大型雲少	褐灰	褐灰	堅一軟	外底の回転ヘラ切り痕ミミ、回転ケズリ痕を残す。外面煤付	68103
95	1034	2号窯	焚口付近、燃焼部、前庭部下層黄色土層、燃焼部No.31	椀	10.2	5.2	3.6	11/36	精砂多、大型雲少	褐灰黄	褐灰	堅一軟	生地ナデ、回転ヘラ切り十分粗ナ/焼ハケ、底ヘラ一部は粗ナデ/白石粒/雲少/粗砂	68112
95	1035	2号窯	燃焼部上層黄色土層No.6	椀	9.8	6.5	3.6	16/36	精砂、雲少	褐灰	褐灰黄	堅一普	生地ナデ、外底のヘラ調整は丁寧	68043

第48表　窯跡出土遺物観察表19

（ ）は復元径値、〔 〕は現存法量を示す。

検出遺構名	番号	出土層位	出土状況等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	胎・土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
96	1036	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.22	甕	8.8	5.3	3.5	7/36	粗砂、雲母	灰	灰	堅一堅	口縁部外面黒化	00077
96	1037	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.16	甕	6.1	5.2	3.9	9/36	粗砂、雲母	灰	灰	堅一堅	外底に大穴で抜あり	00078
96	1038	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.17	甕	8.7	6.8	3.4	29/36	粗砂、雲母	淡灰	暗灰	堅一堅	正位焼成、内面降灰あり、焼き足あり	00040
96	1039	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.21、樹脂固化剤塗布	甕	9.3	6.4	3.6	16/36	粗砂、雲母、左型編み	淡灰	灰	堅一堅	焼き割れ顕著	00039
96	1040	2号窯	樹脂固化剤塗布	甕	8.6	6.5	3.2	17/36	粗砂多	灰	灰	堅一堅	外底に大穴で抜あり	00062
96	1041	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.11	甕	8.7	6.6	3.6	7/36	粗砂多	灰	灰	堅一堅	外底のタテ状工具痕非正立	00076
96	1042	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.14	甕	9.2	5.6	3.4	8/36	粗砂多、雲母	灰	灰	堅一堅	底部歪む、内底に圧痕模様の工具痕あり、外面黒化、底部焼き割れあり	00081
96	1043	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.3	甕	8.8	6.8	3.5	24/36	粗砂、雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	正位焼成、外面黒化、焼き足あり	00038
96	1044	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.19	甕	8.8	5.9	3.9	28/36	粗砂、雲母、左型編み	淡灰	黒灰/灰	堅一堅	正位焼成、外面黒化、焼き足あり	00041
96	1045	2号窯	樹脂固化剤塗布	甕	8.2	6.8	5.9	16/36	粗砂、雲母、左型編み	淡灰	灰	堅一堅	外底に焼成第一？記号「//」、外面黒化	00046
96	1046	2号窯	樹脂固化剤塗布	甕	8.6	6.4	(2.6)	16/36	粗砂多	灰	灰	堅一堅	外底に大穴で抜あり	00089
96	1047	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.6	甕	9.0	6.3	(2.9)	9/36	粗砂多	灰	暗灰	堅一堅	外面黒化(光沢)	00074
96	1048	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.23	甕	8.1	6.5	3.6	11/36	粗砂少	灰	暗灰	堅一堅	焼成一？記号有り調整、正位有意焼成、外面黒化(光沢)、外底に大穴で抜あり	00085
96	1049	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.7	甕	8.6	6.3	3.6	4/36	粗砂少	淡灰	淡灰	堅一堅	焼き割れあり	00091
96	1050	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.25	甕	9.2	6.3	3.6	16/36	粗砂多、雲母	灰	暗灰	堅一堅	外底に大穴で抜あり、底部焼き割れあり	00068
96	1051	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土、樹脂固化剤塗	甕	9.1	6.3	3.7	16/36	粗砂多、雲母	灰白	灰/暗灰	堅一堅	正位焼成、内面降灰、外面降灰・黒化	00042
96	1052	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.10	甕	9.8	6.1	3.2	23/36	粗砂、雲母	淡灰	淡黄	堅一堅	外底は第一？記号後未調整、一部歪む部	00107
96	1053	2号窯	樹脂固化剤塗布	甕	9.8	6.2	3.1	4/36	粗砂、左型編み	灰	黒灰	堅一堅	外側面黒化顕著、外底に大穴で抜あり	00092
96	1054	2号窯	樹脂固化剤塗布	甕	9.1	6.7	(3.1)	8/36	粗砂多、雲母	淡黄灰	暗灰	堅一堅	外底は工具痕の非平調整、内面降灰、外面黒化、焼き足あり	00075
96	1055	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.1-12	甕	(8.6)	6.3	3.4	5/36	粗砂、雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	体部焼き歪み、正位有意焼成、外底に大穴で抜あり	00087
96	1056	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土	甕	9.8	6.6	3.5	11/36	粗砂多、雲母	淡灰	灰	堅一堅	外底は重心低く、工具痕非平調整	00035
96	1057	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.2、中地蔵系胎色土層 No.22	甕	10.8	6.4	3.6	11/36	粗砂多、雲母	淡灰	灰	堅一堅	内底に圧痕模様の工具痕あり、外面黒化、底部焼き割れあり	00097
96	1058	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.28	甕	10.9	7.1	3.9	5/36	粗砂多、雲母	淡黄灰	暗灰	堅一堅	正位焼成、内面降灰、外面降灰・黒化	00083
96	1059	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.26	甕	(8.0)	(6.7)	3.1	9/36	粗砂少	淡灰	淡灰	堅一堅	外底にタテ状工具痕、焼き割れあり	00090
96	1060	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.4	甕	(8.0)	(6.0)	3.9	7/36	粗砂多、雲母	灰	暗灰	堅一堅	外面黒化、焼き足あり外底に平定明す	00073
96	1061	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.8	甕	9.8	6.4	3.6	6/36	粗砂、雲母	灰	暗灰	堅一堅	外面黒化、底部焼き割れ顕著	00110
96	1062	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.1-400	甕	(12.0)	7.5	3.9	15/36	粗砂多、雲母	灰	黒灰	堅一堅	内底に圧痕模様の工具痕あり、有意正位焼成、外側面黒化、外底に大穴で抜あり、焼き足あり、焼き割れ顕著	00105
96	1063	2号窯	中地蔵系胎色土層 No.13	甕	(8.1)	(6.7)	(3.1)	5/36	粗砂少	淡灰	淡灰	堅一堅	内底に圧痕模様の工具痕あり、焼き歪みの為傾斜不定あり	00090
96	1064	2号窯	焼成区No.24	甕	8.9	6.6	3.6	12/36	粗砂多、雲母	暗褐灰	暗灰	軟一堅	歪み部分の為、焼き足り(置き足)に転用	00047
96	1065	2号窯	焼成区No.43	甕	(8.1)	5	—	4/36	粗砂、雲母	淡灰	灰	堅一堅	焼成第一？記号調整、外底に焼成第一？記号「//」、転ミス印有、側面焼成ハ、外面黒化・炭素吸着、焼き足あり	00144
96	1066	2号窯	焼成区No.24	甕	(8.1)	—	(3.4)	4/36	粗砂、雲母	淡灰	灰	堅一堅	外面黒化	00143
97	1067	2号窯	焼成区No.22-38	甕	9.6	—	3.6	28/36	粗砂少	淡灰	淡灰黄	生一堅	焼成中に破損し、一部生焼?	00007
97	1068	2号窯	樹脂固化剤塗布下層焼土層	甕	9.9	6.1	3.5	25/36	粗砂多、雲母	灰	淡灰	堅一堅	焼き歪み・割れ顕著	00002
97	1069	2号窯	焼成区南面西寄下層焼土層、中地蔵系胎色土層西寄1付近、焼成20号焼成色土層No.11-21-24	甕	9.4	6.6	3.4	20/36	粗砂、雲母	灰	灰	堅一堅	底部焼き割れ顕著	00003
97	1070	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土 No.22、焼成区No.24、焼成区No.27	甕	9.8	—	3.6	13/36	粗砂多、雲母	淡黄灰/淡灰	淡黄灰/淡灰	生一堅	焼成時生焼け？調整、生焼け、外面の一部黒化	00005
97	1071	2号窯	樹脂固化剤塗布下層、焼成区No.14、焼成区No.17付近	甕	10.0	6.6	3.7	17/36	粗砂、雲母	明褐/灰	明褐/灰	生一堅	外底は生焼け、焼き歪み・割れ顕著	00010
97	1072	2号窯	焼成区No.26-43、樹脂固化剤塗布後出土 No.23	甕	10.3	6.2	4.4	12/36	粗砂多、雲母	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕、生焼け、外面の一部黒化	00004
97	1073	2号窯	焼成区No.24	甕	10.2	6.5	3.4	21/36	粗砂、左型編み	暗赤褐	灰/暗赤褐	生一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕、生焼け	00009
97	1074	2号窯	焼成区南東	甕	10.6	—	3.9	25/36	粗砂多、雲母	暗灰	灰褐/黄褐	堅一堅	外底は第一？記号後未調整に近い、外面上半分灰釉色を呈する黒灰焼き損	00026
97	1075	2号窯	焼成区南面西寄下層焼土層西寄土層No.21	甕	10.7	7.1	3.6	32/36	粗砂多、雲母	淡黄褐	淡黄褐	生一堅	生焼け	00028
97	1076	2号窯	焼成区No.24、焼成区No.18	甕	10.6	6.8	3.6	15/36	粗砂多、雲母	淡灰褐	淡灰褐	堅一堅	底部焼き割れ顕著	00023
97	1077	2号窯	焼成区No.24-43、焼成区	甕	(8.5)	6.7	(3.7)	22/36	粗砂多、雲母	淡黄褐	淡黄褐	生一堅	生焼け、焼き歪み顕著	00012
97	1078	2号窯	焼成区No.24、樹脂固化剤塗布後出土層No.22	甕	10.3	6.7	3.6	28/36	粗砂多	灰白	灰白	堅一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕、生焼け、外面の一部黒化	00025
97	1079	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土、樹脂固化剤塗布後出土層	甕	9.8	—	3.7	27/36	粗砂多、雲母	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	焼成中に破損し、一部生焼け	00029
97	1080	2号窯	樹脂固化剤塗布後出土層 No.2-32-33	甕	9.7	6.3	3.6	15/36	粗砂多、雲母	淡灰白	淡灰白	生一堅	生焼け	00015
97	1081	2号窯	焼成区No.24-33、焼成区	甕	10.1	6.4	3.7	21/36	粗砂多、雲母	灰/淡黄褐	淡黄褐	生一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕、生焼け、体部外面上半黒化、焼き割れ顕著	00019
97	1082	2号窯	焼成区No.24	甕	10.1	6.7	3.3	23/36	粗砂多、雲母	灰/淡黄褐	灰/淡黄褐	生一堅	生焼け、焼き割れ顕著	00020
97	1083	2号窯	焼成区南東、焼成区No.40	甕	10.1	7.2	3.6	35/36	粗砂多、雲母	淡黄灰	淡黄灰	生一堅	生焼け、外底焼き割れ顕著	00006
97	1084	2号窯	樹脂固化剤塗布下層焼土層、焼成区	甕	10.5	6.6	3.7	28/36	粗砂多、雲母	淡灰白	淡灰白	生一堅	生焼け	00014
97	1085	2号窯	焼成区No.24、焼成南東面	甕	10.5	7.0	3.9	31/36	粗砂多、雲母	淡黄褐	淡黄褐	生一堅	焼成生焼け、底部焼き割れ顕著	00008
97	1086	2号窯	樹脂固化剤塗布後、樹脂固化剤塗布後出土No.11	甕	(8.6)	6.3	(4.1)	37/36	粗砂多、雲母	淡灰	淡黄灰	生一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕、外底は生焼け、体部外面黒化、焼き割れ顕著	00030
97	1087	2号窯	焼成区No.24-35、焼成区	甕	10.9	6.6	3.3	23/36	粗砂多、雲母	灰/暗褐	灰/淡黄褐	生一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕、体部外面黒化、焼き歪み顕著、底部は正位焼成有り、焼き足り顕著、底部は一部黒化、焼き足り(置き足)に転用	00010
97	1088	2号窯	焼成区南東、焼成区 No.24-36	甕	10.6	6.7	3.8	27/36	粗砂多、雲母	淡黄褐	淡黄褐	生一堅	焼け、焼き歪み・割れ顕著	00021
97	1089	2号窯	樹脂固化剤塗布下層、焼成区No.24、樹脂固化剤塗布後出土層No.23	甕	10.1	—	3.7	32/36	粗砂多、雲母	淡灰	淡灰	堅一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕、生焼け、外面の一部黒化、焼き歪み・割れ顕著	00017
97	1090	2号窯	焼成区No.24、焼け付近	甕	10.7	7.1	3.9	26/36	粗砂少	淡黄褐	淡黄褐	生一堅	生焼け、焼き割れ顕著	00018
97	1091	2号窯	焼け付近	甕	10.7	6.9	3.8	14/36	粗砂多、雲母	灰褐	灰褐	堅一堅	焼成時生焼け？調整後、タテ状工具痕顕著、焼き歪み・割れ顕著	00027

第49表　窯跡出土遺物観察表20

（単：［ ］は復元値、（ ）は現存法量を示す）

掲図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
97	1092	2号窯	燃焼部前面下層焚口上端、前庭部中軸線東端色土層No.12	碗G	10.3	6.8	4.2	27/36	精砂、雲母	淡黄灰	淡黄灰	生一焼	生焼け、外底糸切あり	00014
97	1093	2号窯	焼成室No.24	碗G	10.0	–	(3.1)	12/36	精砂多、雲母少	淡黄橙	淡黄橙	生一焼		00013
97	1094	2号窯	焼成室第3付近No.14	碗G	11.0	6.9	3.7	32/36	精砂、雲母少	浅橙	明橙	生一焼	外底はナデ調整、口縁部内外面無色、焼き割れ異常	00001
97	1095	2号窯	燃焼部中軸線東端色土層No.23	碗G	9.8	6.5	3.8	4/36	精砂、雲母少	淡灰	淡灰	生一焼	外底は未調整で荒い、口縁部内外面無色	00022
97	1096	2号窯	煙道上先端	陶器小皿	12.0	7.1	3.2	1/36	精砂、雲母	暗灰	暗灰	生一焼	焼成室に一つ穴に其ってW機からもえて、焼き割れ。外底糸切。外面、焼き金ふあり	00031
97	1097	2号窯	焼成室No.42-34、第3付近	焼き台G(陶器)	12.4	6.7	6.4	28/36	雲母多、精砂少	浅橙	浅橙	生一焼	焼成室に一つ穴に其で機に掛る。焼き金ふあり	00154
97	1098	2号窯	燃焼部B60～F-60G	瓦質土器	–	–	(1.1)	–	雲母多、精砂少	淡黄灰	灰	生一焼	正位焼成。内面磨滅あり	00160
97	1099	2号窯	燃焼部E-60～F-60G	瓦質	9.2	–	(3.1)	14/36	精砂多、大型雲母少	灰	暗灰	生一焼	側位焼成か。外面磨滅あり	00014
97	1100	2号窯	燃焼部	瓦質土器	–	7.3	(1.9)	微/17/36	精砂少	灰	淡灰黄	生一焼	正位焼成。外面磨滅あり	00161
97	1101	2号窯	燃焼部上端黒色土層No.2	瓦質土器	–	8[7.5]	(1.6)	微/2/36	精砂少	淡灰黄	灰	生一焼	側位焼成か。外面磨滅あり	00162
97	1102	2号窯	燃焼部	瓦質土器	–	–	6.8	(2.6)	微/6/36	精砂少	淡灰黄	灰	生一焼	00192
97	1103	2号窯	焼成室東面略ろ翻ヤトレンチ	瓦質土器	–	–	8[9]	(1.0)	微/3/36	精砂多	淡灰	淡灰	生一焼	00164
97	1104	2号窯	焼成室No.36、燃焼部中軸線東側色土層No.11・22・30、燃焼部土層色土層No.12	瓦質土器	14.4	8.9	11.6	9/36	精砂多、雲母少	淡灰	灰	生一焼	縦方の一部は焼き台(置き台)に転用か	00048
97	1105	2号窯	焼成室No.24-G	瓦質土器	8[11.1]	–	(4.5)	5/36	精砂多	淡灰	灰	生一焼	胴上部丸。焼き金ふあり	00109
97	1106	2号窯	第3付近	瓦質土器	11.8	–	(3.3)	12/8	精砂少	淡灰	灰	生一焼	外面無色	00107
97	1107	2号窯	燃焼部黒色土層No.2、燃焼部E-60～F-60G	瓦質土器	12.3	–	(3.2)	17/36	精砂多、雲母	淡灰	灰	生一焼	胴上部丸。側位焼成か。外面磨滅あり	00108
97	1108	2号窯	焼成室No.24	瓦質土器	–	–	(7.6)	–	精砂、雲母少	明橙	明橙	生一焼	生焼け	00151
97	1109	2号窯	燃焼部東端木略色土層No.20	瓦質土器	10.8	–	(5.6)	14/36	精砂多、雲母少	淡灰	灰	生一焼	3方焼かし。淡焼成。側位焼成か。外面無色。口縁部焼き割れ	00150
97	1110	2号窯	燃焼部	瓦質土器	–	–	(7.8)	–	精砂、雲母少	淡灰オリーブ	灰	生一焼	3方焼かし。正位焼成。内面磨滅異常	00157
97	1111	2号窯	焼成室No.36、焼成室第3付近	鉄鍋か	14.3	–	(4.1)	29/36	精砂多、雲母少	淡橙	淡灰黄	生一焼	胴内側に、焼き金ふあり。縦方の一部は焼き台(置き台)に転用か。	00176
97	1112	2号窯	焼成室No.33-37	鉄ふ	15.7	–	4.6	12/36	精砂多	明橙	明橙	生一焼	口縁部外観、縦方に不安定。1113と同胴裏か。	00152
97	1113	2号窯	焼成室No.36、燃焼部中軸線東略色土層No.4、第3付近	鉢	12.5	–	(3.8)	5/36	精砂多、雲母	暗灰黄	暗灰黄	生一焼	波鍋か。内外面磨滅あり	00208
97	1114	2号窯	第3付近	鉢	12.6	–	(9.3)	15/36	精砂少	明橙	明橙	生一焼	外面にロクロの芯の残り痕。生焼け	00153
97	1115	2号窯	第3付近、焼成室No.33	鉢	–	10.2	(2.7)	微/20/36	精砂多	明橙	明橙	生一焼	外面に煤著しい。生焼け	00159
98	1116	2号窯	燃焼部E-60～F-60	小型鍋	6.8	–	(4.3)	11/36	精砂少	灰	灰	生一焼	正位焼成。内外面に磨滅あり。焼き金ふあり	00156
98	1117	2号窯	焼成室No.24	瓶か	8[9]	–	(2.7)	4/36	精砂多	淡灰黄	淡灰黄	生一焼	生焼け	00155
98	1118	2号窯	燃焼部D-60～F-60G、No.20	瓶か	–	9.1	(1.2)	–	精砂、雲母少	一	灰	生一焼	内面刺傷。外底ケズリ調整	00115
98	1119	2号窯	煙道上層黒色土層、燃焼部D-60～F-60G、燃焼部中軸No.31	平瓶	–	–	(8.7)	–	精砂、雲少	灰白	灰	生一焼	外底は粗い切糸ケズリ調整。正位焼成。外面立体編模様	00181
98	1120	2号窯	焼成室No.24-34	平瓶	–	–	(13.8)	–	精砂多、雲少	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。胴部にボタン状把手	00267
98	1121	2号窯	焼成室No.24、第3付近	平瓶	–	–	(11.8)	–	精砂多、雲少	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。波鍋か	00145
98	1122	2号窯	燃焼部中軸No.31、焼成室No.24	平瓶	–	–	(9.7)	–	細砂多、雲少	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。波鍋か	00146
98	1123	2号窯	焼成室No.24	平瓶	–	–	(12.4)	–	精砂多、雲多	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。胴部にボタン状把手	00148
98	1124	2号窯	焼成室No.24-34、中軸No.31	壺瓶	–	–	(20.6)	–	細砂多、雲少	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。胴部内面下面1段ケズ痕。片面立体編模様	00272
98	1125	2号窯	燃焼部	壺瓶	–	–	(23.8)	–	細砂多、雲少、赤色粒少	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。頸部内面、内面ケズ調整。外面無模様	00147
98	1126	2号窯	焼成室No.24	壺瓶	–	–	(25.9)	–	精砂多、雲少	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。頸部内面、内面ケズ調整。外面無模様。ケキ、ケキ2調整。ヒズミ調整	00149
99	1127	2号窯	燃焼部中軸東側色土層No.12	鉢	–	–	(7.4)	–	精砂多、雲多	灰	灰	焼一部焼	口縁部ヘラケズ上端で切上げ。内面調整ナデ調整。外面無整。頸部側に立体編模様。小断面は丸。縦方に焼き台(置き台)に転用	00142
99	1128	2号窯	第3付近	壺	17.4	–	(1.3)	4/36	精砂多	灰	灰	生一焼		00070
99	1129	2号窯	焼成室No.36、第3付近	壺	22.5	–	(2.6)	7/36	精砂多	灰黄	灰黄	生一焼		00069
99	1130	2号窯	焼成室、燃焼部下層、中軸東側色土層No.11・14・22	壺	20.1	–	(10.8)	28/36	細砂、雲少	灰	灰	生一焼	内面ロ縁、外面胴部。口縁部に焼き金ふあり。縦方の一部は焼き台(置き台)に転用か。	00068
99	1131	2号窯	焼成室No.24-30-36、燃焼部中第3付近	壺	16.1	開口部径:20	37.6	36/36	精砂多、雲少	灰	灰	生一焼	内面ロ縁、外面ロ縁	00171/00171
99	1132	2号窯	焼成室第3付近No.24-34	壺	–	–	(27.5)	–	精砂、雲	淡黄橙	淡黄橙	生一焼	生焼け。内面ケズ、外面胴部	00013
100	1133	2号窯	焼成室No.31-30-37-39-43	壺	–	開口部径:20	(27.5)	–	精砂、雲	淡黄橙	淡黄橙	生一焼	生焼け。内面ケズ、外面胴部	00089
100	1134	2号窯	焼成室No.24、第3付近	壺	22.8	開口部径:18	(40.8)	4/36	精砂多、雲多、赤色粒多	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け口縁ヘ。内面ケズ→ハケ。外面胴部	00177/00091
100	1135	2号窯	第3付近、燃焼部中軸No.1	壺	26.8	開口部径:18	(59.3)	36/36	精砂多、雲多、赤色粒多	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け口縁ヘ。内面ケズ。外面胴部か	00219
100	1136	2号窯	焼成室No.24、燃焼部No.31中軸	壺	25.6	開口部径:18	65.2	24/36	精砂多、雲多、赤色粒多	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。内面ケズ。外面胴部か	00701/00171
100	1137	2号窯	焼成室中軸No.32、焼成室No.24、焼成室No.31、第3付近	壺	–	開口部径:18	(36.1)	–	精砂多、雲多、赤色粒多	茶橙	茶橙	生一焼	生焼け。内面ケズ→ハケ。外面胴部	00174
101	1138	9号窯	流込土、6.7号溝跡上	皿(陶器)	12.0	–	4.6	14/36	細砂多、雲	灰白	淡灰	生一焼	外面に大だすき。焼き金ふあり	00458
101	1139	9号窯	流込土	鉢G	11.6	–	(4.3)	7/36	細砂多、雲少	灰白	淡灰	生一焼	外面無色・陽炎。中心焼き金ふあり	00460
101	1140	9号窯	流込土	平瓶	[13.6]	–	21.7	11/36	精砂多、雲少	淡灰	灰	生一焼	底部内面に粗い削ずり痕。体部外面下半は平行タタキ痕。口縁ヘ。頸部内面、正位焼成。焼き金ふあり。焼き割れあり	00464
102	1141	堅穴式遺構	堅穴式遺構埋土	甕	10.8	–	(3.2)	14/36	精砂多、雲少	灰白	白灰	生一焼	外面上部ケズリの痕跡とナデ。内側ヒズミ。ナデ	00318
102	1142	堅穴式遺構	堅穴式遺構埋土	甕	11.4	–	(4.4)	2/36	精砂多、雲少	灰白	灰	生一焼	外面自然釉除者	00454
102	1143	堅穴式遺構	「竪穴式遺構」と第1遺構の中間色土、堅穴式遺構	甕	28.4	–	(5.9)	15/36	細砂多、雲少	淡灰	淡灰	生一焼	口縁端部は丸。内面はナデ調整。外面はケズリ調整。波鍋か。ヒビ入り調整を加える。焼き金ふあり。	00242
102	1144	堅穴式遺構	堅穴式遺構埋土	鉢G	10.1	–	(3.6)	5/36	細砂多、雲少	灰	灰	生一焼	焼け歪	00461

第 50 表　窯跡出土遺物観察表 21

中：［ ］は復元法量、（ ）は現存法量を示す。

掲図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	胎土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
102	1145	堅穴式遺構	堅穴式遺構埋土	高坏か	11.3	–	(3.2)	15/36	植砂多、礫含	淡灰	灰	堅一普	体部上半は張り焼き雑作	45149
102	1146	堅穴式遺構	高坏C	–	7.7	(5.7)	脚 21/36	植砂多、礫少	淡灰	淡灰	灰	堅一普	生焼け	45149
102	1147	堅穴式遺構	堅穴式遺構埋土	平瓶	6.8	–	(5.4)	36/36	植砂多、礫少	灰	灰	堅一普	正位焼成、頑無混色の焼き雑れ、自然釉掛着	45146
102	1148	堅穴式遺構	堅穴式遺構埋土	鉢類	12.5	–	(5.1)	5/36	植砂多、礫少	淡灰	淡灰	堅一普	内面ハケ整、外面自然釉掛着	45147
102	1149	堅穴式遺構	堅穴式遺構埋土、下の層 鉢状遺構SE2-9	鉢類	8.8	–	28.6	9/36	植砂多、礫少	灰白	淡灰	堅一普	正位焼成、焼き雑れ、焼き雑れあり、頑無混色	45281
102	1150	堅穴式遺構	堅穴式遺構	鉢類	–	–	(5.6)	–	砂粒少	灰白	灰白	生一普	生焼け、頑無混色、頑砂中に外周剥離、粒子様分散は見とめられる	45271
103	1151	1×3ボ トレンチ	1号トレンチ堅穴遺構	蓋(坏H)	[12.4]	–	4.7	11/36	植砂多、礫少	灰白	淡灰	堅一普	天井部内面ナシ状工具痕、焼き歪み顕著	46188
103	1152	1×3ボ トレンチ	2号トレンチ堅穴	蓋(坏G)	11.9	底1.8	(1.7)	5/36	植砂多	淡灰	灰褐	堅一普	正位焼成、内面自然釉掛着、調整不明	45465
103	1153	1×3ボ トレンチ	2号トレンチ堅穴	鉢か	15.1	–	(10.7)	5/36	植砂多、礫少	淡灰	淡灰	堅一普	外面に沈線、底部内面ナデ調整	45459
103	1154	1×3ボ トレンチ	堅穴遺構周辺（1号トレンチ堅穴遺構上、6・7号竪穴遺構	蓋(坏HA)	13.6	脚1.5	4.9	16/36	植砂多、礫少	淡灰	淡灰	堅一普	回転整元、横ヨコ不定性す、端無部に輪郭線	45463
103	1155	1×3ボ トレンチ	1号トレンチ堅穴遺構	高坏B	16.7	11.1	13.7	5/36	植砂多、礫少	灰白	淡灰	堅一普	脚部上3cm、天井部内面同心円ナデ痕、張り焼き雑れあり	45442
103	1157	1×3ボ トレンチ	堅穴遺構周辺	壺	–	–	(6.4)	–	植砂、礫少	灰白	オリーブ灰	堅一普	外面自然釉・陶泥、頑部内面シボ目あり	45452
103	1158	1×3ボ トレンチ	2号トレンチ堅穴、堅穴遺構周辺	壺	–	5.7	(12.4)	–	植砂多、礫微	灰褐	淡灰 オリーブ	粗	頑無部に自然釉・陶泥上掛着、底部にあり	45292
103	1159	1×3ボ トレンチ	堅穴遺構周辺	鉢か	–	8.9	(3.2)	脚 15/36	植砂多、礫微	淡灰	淡灰	堅一普	焼成甲に焼き雑れ、内外面自然釉あり	45464
103	1160	1×3ボ トレンチ	堅穴遺構周辺、3号トレンチ堅穴	鉢・蓋類	–	12.4	3.6	脚 6/24	植砂多、礫少	淡灰 オリーブ	淡灰	堅一普	全面に自然釉、脚部焼成か	45479
103	1161	当古墳群	表土	坏B	16.7	5.1	6.2	28/36	植砂、礫少	淡灰	淡灰	堅一普	内外面回転方向ヨコ状痕あり、底部、外面自然釉掛着	45134
103	1162	当古墳群	表土、3-6遺見層	坏B	12.1	–	14.1	21/36	植砂、礫少	淡灰	灰	堅一普	外面自然釉掛着、脚部焼成、焼き歪み・焼き雑れあり	45158
103	1163	当古墳群	表土	坏B	11.7	–	3.9	5/36	植砂多、礫少	灰白	灰白	堅一普	外面自然釉掛着、脚部焼成か	46132
103	1164	当古墳群	表土	坏B	12.4	–	3.6	16/36	植砂多、礫多	淡灰	灰	堅一普	外面自然釉掛着、脚部焼成か	45122
103	1165	当古墳群	表土、区画3-5西区か、C-106表土	坏B	12.3	6.0	3.7	22/36	植砂多、礫少	灰	暗灰	粗	正位で焼き甘く転用、外面自然釉掛着	45280
103	1166	当古墳群	表土	坏B	12.4	–	3.9	16/36	植砂多、礫少	淡灰	灰	堅一普	脚部焼成、外面陶泥あり	46123
103	1167	当古墳群	表土、3-6遺見層	坏B	12.8	4.6	3.9	12/36	植砂多、礫少	淡灰	灰褐	堅一普	脚部焼成、外面自然釉掛着	45284
103	1168	当古墳群	3-6遺見層	坏B	12.4	–	4.2	15/36	植砂多、礫少	灰オリーブ	灰褐	堅一普	底部外面ナシ状工具痕、正位焼成、外面自然釉掛着	45289
104	1169	当古墳群	表土	坏B	12.6	7.8	3.9	1/36	植砂多、礫少	灰白	灰白	堅一普	外面自然釉掛着	46134
104	1170	当古墳群	表土	坏B	12.8	–	14.1	9/36	植砂多、礫少	灰白	淡灰黄	堅一普	正位焼成、外面自然釉掛着	46021
104	1171	当古墳群	表土	蓋(坏G)	10.4	底1.6	3.7	18/36	植砂、礫少	灰白	灰白	生一普	脚部上3cm、生焼け	45139
104	1172	当古墳群	表土	坏G	10.5	–	3.9	11/36	植砂、礫少	淡灰	淡灰	堅一普		45136
104	1173	当古墳群	表土	坏G	10.5	–	3.6	7/36	植砂多、礫少	灰褐	灰	堅一普	有蓋焼成、外面灰釉色自然釉、底部内面粗ハケ痕を表存もいくつ	46045
104	1174	当古墳群	表土	鉢	[12.2]	–	[2.6]	7/36	植砂多、礫多	淡灰	淡灰	堅一普	外面を沈線・カキメで加飾、焼き歪み顕著	45139
104	1175	当古墳群	表土	鉢か	13.8	–	(5.6)	7/36	植砂多	灰	淡黄	堅一普	無蓋正位焼成、内外面陶泥・自然釉掛着、焼成甲可能性残す	45177
104	1176	当古墳群	表土	蓋(坏HA)	–	–	(2.2)	–	植砂少	灰白	淡灰	堅一普	脚部上2cm、内面同心円ナデキ	46119
104	1177	当古墳群	表土	蓋(坏HA)	13.9	–	(3.9)	11/36	植砂多	淡灰	灰	堅一普	外面焼成	46128
104	1178	当古墳群	表土	高坏A	–	16.6	(11.4)	12/36	植砂多、礫少	灰	淡灰	堅一普	2段カスカシ、脚部焼成	45237
104	1179	当古墳群	表土	蓋(坏H)	13.7	–	(4.5)	16/36	植砂少	灰白	淡灰	堅一普	外面焼成、外面中央に焼き雑れ	46122
104	1180	当古墳群	表土	高坏E	13.1	–	(4.6)	11/36	植砂、礫少	灰	灰	堅一普	無蓋正位焼成、内外面陶泥	46123
104	1181	当古墳群	3-6、4-6遺見層	壺	–	–	(12.5)	–	植砂多、礫少	灰白	淡灰 オリーブ	堅一普	沈線、刺突文で加飾、外面自然釉掛着	45245
104	1182	当古墳群	壺		–	–	(4.8)	–	植砂多、礫少	灰白	淡灰 オリーブ	堅一普	沈線、刺突文で加飾、外面自然釉掛着	46129
104	1183	当古墳群	平瓶	5-6	–	–	(4.8)	7/36	植砂、礫少	灰	灰	堅一普	外面を沈線・カキメで加飾	46127
104	1184	当古墳群	平瓶	6-1	–	–	(5.6)	10/36	植砂、礫少	淡灰	淡灰	粗	頑無混色の自然釉・焼成甲不安定	46128
104	1185	当古墳群	瓶	7-7	–	(6.2)	15/36	植砂多、礫少	灰	淡灰 オリーブ	灰	堅一普	自然釉掛着	46126
104	1186	当古墳群	瓶	13-2	–	–	(5.8)	6/36	植砂、礫少	灰	淡灰	堅一普	無蓋焼成、陶泥可能性残す	46124
104	1187	当古墳群	壺		–	–	(5.8)	–	植砂、礫少	灰白	灰	堅一普	外面陶泥あり	46137
104	1188	当古墳群	6-4遺見層、1号トレンチ堅穴遺構周辺	壺	–	–	(8.5)	–	植砂、礫多	灰	灰	堅一普	破片の一つは焼き白粘土	45152
104	1189	当古墳群	表土	高坏A	–	11.1	3.6	脚 6/36	植砂少	灰白	淡黄	堅一普	透かし孔4か所か、外面陶泥あり	45480
104	1190	当古墳群	坏・蓋類か	–	–	16.1	(4.1)	脚 6/36	植砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	堅一普	透かし孔あり	46135
104	1191	当古墳群	小型壺	10-8	–	(4.4)	7/36	植砂、礫少	淡灰黄	淡灰	灰	堅一普	頸部に張りあり	45174
104	1192	当古墳群	小型壺	10-2	–	(5.9)	15/36	植砂、礫少	淡灰	灰	淡灰	堅一普	自然釉掛着	45226
104	1193	当古墳群	小型壺	10-5	–	(5.7)	16/36	植砂、礫少	灰	淡灰	淡灰	堅一普	正位焼成、自然釉掛着	45227
105	1194	当古墳群	3-6遺見層	鉢か	16.4	–	(11.5)	2/36	植砂多、礫少	黒灰	淡灰	堅一普	粘土上塗、内外面陶泥カキメ状調整、脚位焼成か、外面陶泥	45287
105	1195	当古墳群	小型壺	8-4	–	(2.7)	12/36	植少	灰	淡黄	灰	堅一普	外面陶泥掛着	45171
105	1196	当古墳群	坏・蓋類	12-8	–	(3.8)	–	植砂、礫少	灰白	灰白	灰白	堅一普	内外面自然釉あり	46100
105	1197	当古墳群	蓋類か	15-7	–	(3.8)	5/36	植砂多、礫少	淡灰	淡灰	淡灰	堅一普	内面自然釉掛着	46136
105	1198	当古墳群	壺	16-7	–	(7.6)	6/36	植砂多、礫多	淡灰	淡灰	淡灰	堅一普	正位焼成、外面陶泥あり	45224
105	1199	当古墳群	壺	17-6	–	(7.8)	22/36	植砂多、礫少	淡灰	淡オリーブ	淡灰	堅一普	正位焼成、自然釉掛着、口縁部端ケ割れ	45233
105	1200	当古墳群	壺	18-8	–	(6.1)	10/36	植砂少	灰	灰	淡灰	堅一普	陶泥あり	45223
105	1201	当古墳群	3-5遺見層	壺	22.6	–	5.6	5/36	植砂、礫少	灰白	灰白	生一普	生焼け	46132
105	1202	当古墳群	不明	壺	22.5	–	(6.9)	–	植砂、礫少	灰白	灰白	堅一普		45282

第 51 表　窯跡出土遺物観察表 22

（単：［ ］は復元値、（ ）は現存法量を示す）

図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	釉・土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
105	1305	当古墳群	表土	壺	約23	－	(3.4)	4/36	鬼形多、雲	灰	灰	焼一普		46634
105	1306	当古墳群	表土	壺	－	－	(2.6)	－	細砂、雲少	灰オリーブ	灰	焼一普	沈線2本、波状文	46572
105	1305	当古墳群	表土	壺	14.6	－	(3.1)	2/36	鬼形多	淡灰オリーブ	淡灰	焼一普	内面凝灰あり	46533
105	1306	当古墳群	表土	壺	16.2	－	(4.6)	7/36	細砂、雲少	淡灰	淡灰	焼一普	内外面自然釉・珠状凝固	46497
105	1307	当古墳群	表土	壺	約21	－	(3.9)	5/36	鬼形多、雲少	灰	灰	焼一普	焼土あり	46511
105	1308	当古墳群	表土	壺	21.7	－	(5.3)	3/36	細砂多、鬼形	淡黄褐	灰	焼一普	生焼け	46532
105	1309	当古墳群	6-5遺見層、1号トレンチ配石遺構底上	壺	24.6	－	5.2	－	細砂多	灰白	灰白	焼一普		45190
105	1310	当古墳群	表土	壺	26.4	－	(5.7)	2/36	細砂、雲少	灰	灰	焼一普		46446
105	1311	当古墳群	表土	壺	27.8	－	(3.8)	4/36	鬼形多、雲多	灰	灰	焼一普	内面に降灰あり	46566
105	1312	当古墳群	表土	壺	約27	－	(4.6)	4/36	鬼形、細砂多	淡灰	淡灰	焼一普	内外面自然釉溶着	46499
105	1313	当古墳群	斜面(埋没)	－	9.0	5.3	8.1	底 16/36	鬼形多	－	灰	焼一普	正位焼成、内面剥離あり	45341
105	1314	当古墳群	表土	斜面(埋没)	14.2	9.6	8.6	14/36	鬼形多、雲	灰白	淡灰オリーブ		側部焼成、底部外面剥離体片収容	45277
106	1315	当古墳群	表土	壺	約30	－	(6.7)	5/36	細砂、雲多	淡灰黄	淡灰	焼一普		46574
106	1316	当古墳群	5-5遺見層	壺	約40	－	(9.6)	7/36	細砂、雲少	灰オリーブ	灰	焼一普	頸下の一つは焼き台転用、自然釉溶着	46575
106	1317	当古墳群	表土	壺	約41	－	(12.6)	5/36	細砂、雲少	黄灰	黄灰	焼一普	沈線、刺突文で加飾	46568
106	1318	当古墳群	表土	壺	47.8	－	(17.2)	4/36	鬼形多、雲	淡灰	淡灰	焼一普	頸上2同一個体か	45314・45295
106	1319	当古墳群	表土	壺	約41	－	(9.5)	5/36	鬼形多、雲	淡灰	淡灰	焼一普	1217と同一個体か、焼き歪みあり	46571
106	1320	当古墳群	5-5遺見層	蓋(坏身)	13.2	－	(4.7)	－	細砂多	灰	灰	焼一普		45157
106	1321	当古墳群	5-5、6-5遺見層	坏身	12.4	－	4.6	26/36	鬼形多、雲多	淡灰	淡灰オリーブ		外面自然釉溶着	45047
106	1322	当古墳群	6-5遺見層	坏身	13.4	7.6	3.3	15/36	鬼形多、雲多	灰	灰	焼一普	焼き歪み顕著	45151
106	1323	当古墳群	5-5遺見層	蓋(坏身)	11.5	約5.8	(1.5)	7/36	鬼形少	灰白	淡灰オリーブ		正位焼成、外面凝灰顕著	45516
106	1324	当古墳群	5-5遺見層	蓋(坏身)	12.8	約5.9	(2.0)	16/36	鬼形多、雲多	灰白	淡灰オリーブ		正位焼成、外面凝灰顕著	45501
106	1325	当古墳群	6-5遺見層	蓋(坏身)	12.2	約5.9	(2.6)	5/36	細砂少	灰白	灰	焼一普	外面凝灰あり	45511
106	1326	当古墳群	6-5遺見層	蓋(坏身)	11.6	約5.8	(2.7)	12/36	鬼形多、雲少	淡灰	灰	焼一普	焼き歪みあり	45504
106	1327	当古墳群	5-5遺見層	高坏脚	12.5	－	(8.0)	25/36	鬼形多、雲	淡灰	淡灰	焼一普	2段2方透かし、中心焼き歪みあり	45261
106	1328	当古墳群	5-5遺見層	高坏脚	－	－	12.5	(6.7)	微 6/36	鬼形、細砂少	灰	淡灰	2段2方透かし	45263
106	1329	当古墳群	5-5遺見層	鉢	－	－	(4.5)	－	鬼形、細砂多	灰白	灰	転	細胞質を含む自然釉溶着	46626
106	1330	当古墳群	5-5、5-9遺見層	鉢脚か	9.8	－	(8.0)	15/36	細砂多、雲少	淡灰	淡灰	焼一普		45296
106	1331	当古墳群	30-7G、暗褐色粘砂	甕類か	－	－	10.7	(1.4)	9/36	細砂多、雲少	灰白	灰白	胴取り痕か	46538
106	1332	当古墳群	3-5遺構色土	小型甕	5.8	－	9.6	18/36	鬼形多、雲多	灰白	灰白	焼一普	生焼け、底部外面子持ちナデ調整	45263
106	1333	当古墳群	5-5遺見層	壺	17.8	－	(5.1)	2/36	細砂、雲少	淡灰	淡灰	焼一普	小砂噛みあり	46559
106	1334	当古墳群	5-5遺見層	壺	22.7	－	(4.2)	4/36	鬼形多、雲少	灰	灰	焼一普		46556
106	1335	当古墳群	5-5遺見層	壺	30.0	－	(6.9)	5/36	鬼形多、雲	淡灰黄	淡灰黄	焼一普	生焼け	46558
106	1336	当古墳群	5-5遺見層	壺	－	－	(7.5)	－	細砂多、雲少	淡灰、灰	淡灰	焼一普	正位焼成、外面凝灰あり	46560
107	1337	当古墳群	表土	蓋(坏身)	[16.6]	約5.8	(2.6)	7/36	細砂、雲少	灰白	淡灰	焼一普	外面に自然釉	46188
107	1338	当古墳群	表土	蓋(坏身)	(11.4)	約5.9	(1.5)	－	細砂、雲少	灰褐	灰褐	焼一普	自然釉溶着	46190
107	1339	当古墳群	6-5遺見層	蓋(坏身)	11.8	約5.9	(1.5)	6/36	細砂少	灰緑	灰緑	転	焼き台転用、自然釉溶着	45513
107	1340	当古墳群	表土	蓋(坏身)	(11.9)	約5.9	(2.0)	3/36	鬼形少	淡灰	淡灰	焼一普	外面凝灰あり	46189
107	1341	当古墳群	表土	蓋(坏身)	13.8	約5.9	3.3	6/36	細砂多、雲少	灰白	灰緑	焼一普	天井部内面ハケ調整、外面自然釉溶着で調整不明	46192
107	1342	当古墳群	30-5G南西隅黒灰色土	蓋(坏身)	10.8	約5.8	3.1	21/36	鬼形多、雲多	淡青灰	淡灰	焼一普	焼歪み3cm、焼き異状顕著、煙灰(3cm)の雲状焼き痕	45363
107	1343	当古墳群	4-110、灰原	蓋(坏身)	－	約5.9	(2.4)	－	細砂多、鬼形	淡灰黄	淡灰黄	焼一普	焼歪み3cm、天井部内面は乾燥に伴い平滑、外面ヘラ	45486
107	1344	当古墳群	表土	蓋(坏身)	－	約5.1	(2.6)	16/36	鬼形多	淡灰	淡	焼一普	外面自然釉、焼き歪みあり	45467
107	1345	当古墳群	C-68G	坏身か	約13	－	(3.6)	2/36	細砂少	赤褐	灰	焼一普	内面に赤色付着物	46197
107	1346	当古墳群	B-68G	坏身か	約12	－	(3.6)	4/36	細砂、雲少	灰	淡灰	焼一普		46196
107	1347	当古墳群	29-E、北東隅黒土黒灰色土	坏G	9.2	－	5.3	12/36	細砂多、雲微	淡灰	灰	焼一普	底部外面未調整、有蓋焼成、外面黒化	45366
107	1348	当古墳群	30-5G、暗褐色粘砂	坏G	8.9	6.1	3.6	11/36	細砂多、雲微	淡灰	淡灰	焼一普	底部外面生焼けがこわい	45366
107	1349	当古墳群	表土	有台坏	14.1	9.4	4.5	9/36	細砂多、鬼形	灰	灰	焼一普	8世紀後葉	45547
107	1350	8号窯	暗褐黒灰色黒灰色土	鉢か	－	10.4	(2.5)	微 1/36	細砂多、鬼形	淡灰黄	淡灰	焼一普	生焼け、外面黒化、正位焼成	45548
107	1351	当古墳群	C-66G表土	壺B	－	約16	(1.5)	－	細砂多、鬼形	淡灰	淡灰	焼一普	8世紀後半か	46195
107	1352	当古墳群	B-66G表土	壺B	約17	約15	5.7	小片	細砂多、鬼形	淡灰	灰	焼一普	外面黒化	46194
107	1353	当古墳群	E-100表土	高坏E	15.3	－	(6.1)	9/36	鬼形多、雲少	淡灰	淡灰	焼一普	有蓋か、ロクロ巾広立つ	45331
107	1354	当古墳群	B-68G表土	高坏E	－	14.3	(10.6)	微 4/36	細砂、雲少	淡灰	暗灰	焼一普	2段2方透かし、正位焼成、型縁	45456
107	1355	当古墳群	4-9号窯周辺表土	高坏E	12.8	－	(5.6)	12/36	鬼形多、雲微	淡灰オリーブ	淡灰	焼一普	内外面自然釉溶着	46329
107	1356	当古墳群	灰原、M1	音無瓶	7.5	－	(7.3)	7/36	細砂多、鬼形	灰	灰	焼一普		45470
107	1357	当古墳群	A-110表土	小型壺	8.8	－	(1.6)	6/36	細砂少	灰褐	灰褐	焼一普	無蓋焼成、内外面黒化	45507
107	1358	当古墳群	B-68G表土	小型壺	12.1	－	(5.3)	4/36	細砂多	灰	灰	焼一普		45496
107	1359	7～9号窯	7～9号窯前庭、2-7暗色土黒灰色土	小型壺	－	－	(6.6)	－	細砂多	灰白	淡灰	焼一普	外面に自然釉溶着	46413
107	1360	当古墳群	D-39表土	小型壺	(16.4)	－	(20.1)	10/36	細砂、雲少	灰白	灰	焼一普	正位焼成、内外面自然釉溶着	45471
107	1361	当古墳群	表土	鉢・壺類	約36	－	(3.2)	6/36	細砂、雲少	灰白	灰白	焼一普		46196

第 52 表　窯跡出土遺物観察表 23

中：［ ］は復元径値、（ ）は現存法量を示す。

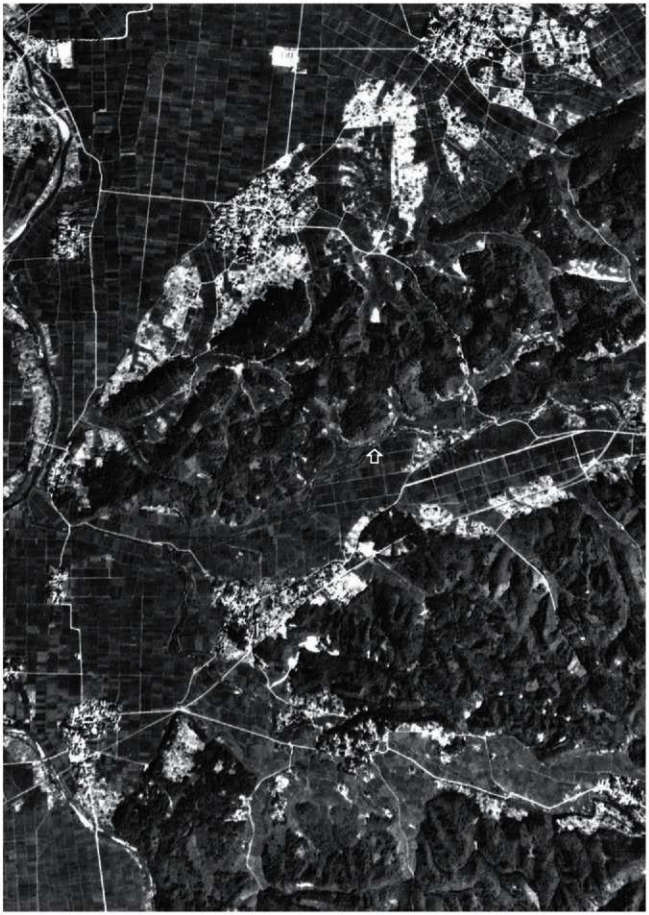
図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	胎土	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	備考	整理番号
107	126②	包含層帯	第-96、南西隅焚焼出土	壺	26.5	–	(6.3)	4/24	細砂、雲少	灰	暗灰	堅-良	三足焼成、内外面刷毛調整	05309
107	126③	包含層帯	表土	壺	約27	–	(6.3)	7/24	細砂、雲少	灰	灰オリーブ	堅-良	三足焼成、外面刷毛調整	00191
107	126④	包含層帯	6-7号第間間	鉢	–	–	(5.1)	1/24	粗砂、雲少	灰	灰	堅-良	内面ロクロ調整、外面未調整とカキメ調整	00734
107	126⑤	包含層帯	6-7号第間間	鉢	–	–	(4.7)	2/24	細砂多、雲少	灰白	灰白	堅-良	生地けず、調整、内面ロクロ、外面未調整	00735
108	126⑥	4号第	南面第下層(第41)、第1-2、同第(C-96)上方	鉢類	–	–	(25.6)	–	粗砂多、雲多	灰	暗灰	軟	胴部焼成、頸部調整カキ目整備調整、内面ロクロ、外面ヘラ整	00733
108	126⑦	7-1号第	焼成被覆上	高坏C	–	9.7	11.0	6/24	粗砂少	暗灰	灰	堅-良	外面箆状ヘラ	00632
108	126⑧	包含層帯	表土	壺	–	–	(7.0)	–	粗砂多	暗灰	暗灰	堅-良	底部、底部文字当初、外面刷毛目ロク	00571
109	126⑨	7-1号第間	2号第間の付近(第面図-80)-7-85、7-1号第間第間-第面ヘル-、11号第焼成第、6-7号第第上	平瓦類製品	長(23.0)	短(22.0)	高 3.0-10.9	約2/3	粗砂多、大型雲多	灰/黒灰	灰	堅-良/軟	斜ヒーラ状工具で分割して成形/紀平はハリ状工具で成形、内面平板ナデ調整、外面平板ナデ/タタキ-上半ナデ調整、内面平板ナデ/タタキ-上半ナデ調整、成形仕直し-折曲げ生地を分離合分に転用	03235
109	126⑩	7-1号第間	2号第焼成間、2号第焼成間第間(第-20-30-40、2号第焼成第間-第面ヘル-)、7-1号第焼成第ヘル-	平瓦類製品	長(23.0)	短(22.0)	高 3.0-6.9	完形	粗砂多、大型雲多	暗灰黒	灰黒/灰	堅/軟-良	斜ヒーラ状工具で分割して成形/紀平はハリ状工具で成形、内面平板ナデ調整、外面平板ナデ/タタキ-上半ナデ調整、内面平板ナデ/タタキ-上半ナデ調整、成形仕直し-折曲げ生地を分離合分に転用	03236
109	127①	11号第間	11号第第焼成上-焼成間焼成上、型石状遺構第上	平瓦類製品	長(23.0)	短(20.0)	高 3.0-14.0	約2/3	粗砂多、大型雲多	灰白	灰黒	堅-良	生地けず、斜ヒーラ状工具で分割して成形、内面平板ナデ調整/上半ナデ調整、外面平板ナデ/タタキ-上半ナデ調整	03237
109	127②	2号第	2号第焼成間第34-36-45、2号第焼成第中央第間第第間第間之第20-21	平瓦類製品	長(23.0)	短(22.5)	高4.1	約1/3	粗砂多、大型雲多	灰/暗灰	灰/暗灰	堅/軟-良	斜ヒーラ状工具で分割して成形、内面下半平板ナデ調整/上半ナデ調整、外面下半平板ナデ/タタキ-上半板状工具によるナデ調整、成形あり、成形仕直し-折曲げ生地を分離合分に転用	03238
110・111	127③	7号第間	7号第間焼成色上、7号第2-7区第間色上、2-4区色上、6-10号第区第間、第-36(相焼成色上)、7-5相焼成色上、4-7号第第上	陶製	長(60.2)	幅(56.4)	高 (37)-41.5	–	粗砂多、雲多	灰-淡灰	灰-淡灰	堅/生-良	上端(口縁)部外面に沿帯状の盗受け、胴部生地け、内面間ナデ平板-間ヘラ/外面ハ間ナデ平行平板状工具によるナデ調整、成形の一部は生地分離合分に転用	03277
111	127④	7号第間	3-1-1 焼土十焼色上、6-7号第第第、11号第焼成上、7号第2-7区第間色上	陶製	–	17.1	19.2)	脚 26/36	粗砂、雲少	灰白	灰白	堅-良	外面ヨコナデ調整、生地け	00451
111	127⑤	3-10号第	3-10号第色上	陶製	–	約17	(6.6)	脚 2/12	粗砂、雲少	灰白	灰白	堅-良	外面ヨコナデ調整、生地け、127は復合	00797
112	127⑥	6号第間	6号第焼成第前第、7-1号第第第上、11号第第第焼成上、7号第第第2-7相色上-3-6号第色上	円筒埴	11.7/15.8	14.8/17.8	3.6/4.9	底/30-35/36	粗砂、雲少	灰白	灰白	堅-良	底部を上下逆の主と脚に付けた接体に、脚部(底部)第下の盗り出し痕あり、外面ヨコナデ調整、内面ロクロ調整、7号第間第間に粗整体との接着痕あり	03278
112	127⑦	7-1号第間	7-1号第前第-焼成間、7-1号第焼成第間第、7号第焼成第第第、7号第2-3上第第第上-7号第色上	円筒埴	14.4	15.3	5.7	脚 25/36	粗砂、雲少	灰白	灰オリーブ	堅-良	三足焼成、脚主部外面第、外面全体に赤黒顔料塗	03279
112	127⑧	6-7号第付近第上	第上	円筒埴	–	21.0	(4.6)	脚 4/36	粗砂多	灰	灰	堅-良	透かし孔(17-キャ)痕、赤黒顔料塗	05496
112	127⑨	11号第	第体成上	土師	約36.20	長(22.5)	短(22.5)	–	粗砂、大型雲少	–	灰白	堅-良	外面箆、胴下半で幅こ成形。	05289
112	128①	2号第	南面第上-第第-第-40-(第面)、区形(第面)焼成第-34	土師	長(15.7)	高(10.9)	–	–	粗砂-雲少	–	灰	堅-良	箆出、左箆胴-横箆、胴部最は-ケズ上端立て軸に成形、横箆は胴下で成形、胴部最周円形、最は-ヘラ状工具の横箆で横箆を調整、中空の可能性あり	05237
112	128②	2号第	南面第上-第第-第上-第-34	土師	長(18.0)	高(6.4)	幅(4.1)	–	粗砂-雲少	–	灰	堅-良	箆出、横箆、中空、胴下箆を-ケズ上端立て軸に成形、胴部下箆ケズ上軸に成形、横箆は-ヘラ状工具の横箆で横箆を調整、中空の可能性あり	05236
112	128③	2号第	南面第第-第-40	土師	長(6.6)	高(6.7)	厚(3.6)	–	粗砂-雲少	–	淡灰	堅-良	箆出、南面上半を指ナデで成形、粘土で立て成形、指ナデを右横に横-横箆指痕(ナデ)-横箆を-ヘラ状工具の縦ナデ-横-ヨコ-ヨコ箆痕、薄く自然剥離面	00431
112	128④	2号第	南面第第-第-40	土師	長(7.7)	長(2.5)	短(2.1)	–	粗砂-雲少	–	灰	堅-良	左箆痕ヨコ、胴部を-ケズ上端立て軸に成形、胴部最周円形、最は箆を-ヨコ箆痕	05241
112	128⑤	2号第	南面第上-第第-第上-第-34	土師	長(5.0)	長(2.5)	短(2.1)	–	粗砂-雲少	–	灰	堅-良	左箆痕ヨコ、胴部を-ケズ上端立て軸に成形、胴部最周円形、外面箆を-ヨコ箆痕	05238
112	128⑥	2号第	南面第上-第第-第上-第-34	土師	長(5.7)	長(2.5)	短(2.1)	–	粗砂-雲少	–	灰	堅-良	左箆痕ヨコ、胴部を-ケズ上端立て軸に成形、胴部最周円形、外面箆を-ヨコ箆痕	05242
112	128⑦	7-1号第	焼成間第-34	土師	長(6.0)	高(4.7)	厚(3.6)	–	粗砂-雲多	–	淡灰	堅-良	箆出、横箆、胴下半で-ケズ上端立て軸に成形、粘土で立て成形、胴部下半-ヨコ箆痕、胴部最周円形、最は箆を-ヨコ箆痕、薄く自然剥離面	05243
112	128⑧	7-1号第	焼成間第-34	土師	長(2.0)	幅(4.6)	–	–	粗砂多-雲多	–	淡灰	堅-良	箆出、尻箆痕、胴下半で成形、粘土で立て成形、胴部最周円形、尻上半のみに横-横箆痕あり、尻箆を横痕ヨコ尻箆痕あり	05278
112	128⑨	6-7号第	河原第上	土師	長(6.3)	高(2.7)	–	–	細砂、大型雲少	–	灰白	堅-良	箆出、粘土-中空、胴下半で-ケズ中央で成形、粘土-胴下端、縦、尻箆を横痕	05273
112	129①	7-1号第	焼成間第上	土師	長(2.7)	幅(6.2)	–	–	細砂、大型雲少	–	淡灰	堅-良	箆出、左箆痕、中央、胴下半で-ケズ中央で成形、粘土-上方は尻型に-を箆痕ヨコ左箆痕ヨコ-を箆痕ヨコ上部ヨコ箆痕	05288
112	129②	7号第	河原3-5間尻上	土師	–	幅(4.8)	(6.2)	–	細砂、大型雲少	–	淡灰	堅-良	左箆痕、胴下半で-ケズ中央で成形、胴部最周円形	05286
112	129③	1号第	焼成床面	土師	長(5.0)	幅(4.2)	–	–	粗砂-雲少	–	暗灰	堅-良	箆出、-ヘラ状工具の横は胴下で成形、胴部最周円形、全体が熱化、上半は高温(2)焼成とは	05271
113	129④	1号第	5-30	壺	–	–	(9.8)	–	粗砂、雲少	灰	灰	堅-良	内面箆痕、外面箆痕ヨコ、焼成型痕	00719
113	129⑤	1号第	焼成床面第	壺	–	–	(16.2)	–	粗砂、雲	灰	青海	堅-良	内面箆痕、外面箆痕ヨコ、焼成型痕	00717
113	129⑥	1号第	5-41	壺	–	–	(15.4)	–	粗砂、雲	淡灰	灰/淡黒灰	軟	内面箆痕、外面箆痕、焼き分転用	00720
113	129⑦	1号第	焼成床面第	壺	–	–	(13.1)	–	粗砂、雲	暗灰	灰	軟	内面箆痕、外面箆痕、焼き分転用	00722
113	129⑧	1号第	焼成床面第	壺	–	–	(11.9)	–	粗砂、雲	灰	暗灰	軟	内面箆痕、外面箆痕	00718
113	129⑨	1号第	焼成床面第、2階	壺	–	–	(18.9)	–	粗砂-雲多	灰	灰	堅-良	内面箆痕、外面箆痕、焼き分転用	00721
113	129⑩	1号第	5-21	壺	–	–	(19.3)	–	粗砂、雲多	灰	灰	軟	内面箆痕、外面箆痕、焼き分転用	00723

第 53 表　窯跡出土遺物観察表 24

単〔 〕は復元計測、[ ]は残存計測を示す。

図版番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
113	1299	4号窯	側面黒焦色土上層	壺	--	--	(15.5)	−	粗砂多、礫	灰白	灰	硬・堅	内面ロ縁、外面胴部	00715
113	1300	4号窯	灰原(C-98、Ka24)	鉢鉢	--	--	(14.1)	−	粗砂多、礫少	オリーブ灰	灰	硬・堅	口引面に縦灰あり、内面自然釉、内面ロ縁、外面胴部	00724
113	1301	4号窯	焼成面(Ka20-工.23)	壺	--	--	(7.6)	−	粗砂多、礫	灰	灰	硬・堅	底部付近、内面胴部、外面胴部	00716
113	1302	4号窯	焼成面(Ka.17)	壺	--	--	(16.6)	−	粗砂多、礫多	淡灰	灰	硬・堅	頸部粘土帯、内面ロ縁ハケ、外面胴部	00714
113	1303	4号窯	灰原(D-99・2-9.6L)	壺	--	--	(6.7)	−	粗砂多、礫多	淡灰	暗灰	硬・堅	内面ロ縁ハケ、外面胴部	00712
113	1304	4号窯	側面黒焦色土	壺	--	--	(6.5)	−	粗砂多、礫多	灰	黒灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00709
113	1305	4号窯	焼成面(Ka.22)	壺	--	--	(6.4)	−	粗砂多、礫	暗灰	暗灰	軟・粗	内面胴部、外面胴部、焼き台転用	00708
113	1306	4号窯	表面	壺	--	--	(4.7)	−	粗砂、礫	黒褐	黒褐	硬・堅	内面胴部、外面胴部、焼き台転用	00710
113	1307	4号窯	灰原(C-98、Ka.16)	壺	--	--	(6.3)	−	粗砂多、礫多	灰	青灰	硬・堅	内面胴部・頸部、外面胴部	00711
113	1308	6号窯	最終焼焼成面	壺	--	--	(12.9)	−	細砂多、礫多	淡灰	淡灰	硬・堅	内面ロ縁、外面胴部	00713
113	1309	11号窯	側面黒焦色土層	壺	--	--	(16.5)	−	粗砂、礫少	灰白	淡灰	硬・堅	内面ロ縁ハケ、外面胴部	00703
113	1310	11号窯	側面黒焦色土層	壺	--	--	(16.2)	−	粗砂、礫少	淡灰	灰	軟・粗	内面ロ縁、外面胴部、焼き台転用	00704
113	1311	11号窯	4・5号色土	壺	--	--	(10.2)	−	粗砂多、礫多	灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部、外面隆沈あり	00701
113	1312	11号窯	焼成面(天井部落土	壺	--	--	(12.9)	−	粗砂多、礫多	灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00709
113	1313	11号窯	4・5号色土	壺	--	--	(8.8)	−	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00705
113	1314	11号窯	側面黒焦色土	壺	--	--	(6.9)	−	粗砂多、礫少	淡黒褐	淡灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00706
113	1315	11号窯	側面黒焦色土層	壺	--	--	(14.4)	−	粗砂多、礫少	淡灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00702
113	1316	7・8号窯	焼成面第土	壺	--	--	(16.6)	−	粗砂多、礫少	灰白	灰白	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00726
113	1317	7・8号窯	焼成面第5.6層9.10	壺	--	--	(7.6)	−	粗砂多、礫少	灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部、外面隆沈あり	00729
113	1318	7・8号窯	側面黒焦	壺	--	--	(7.1)	−	粗砂多、礫多	淡灰	灰	軟・粗	全面釉が玻璃質に付着(焼き台転用)、内面胴部、外面胴部	00709
113	1319	7・8号窯	側面黒焦色土	壺	--	--	(6.5)	−	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00701
113	1320	7・8号窯	側面黒焦色土	壺	--	--	(6.7)	−	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00702
113	1321	9号窯	流出土	壺	--	--	(10.6)	−	粗砂多、礫少	淡灰	暗灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部か	00745
113	1322	9号窯	流出土	壺	--	--	(9.6)	−	粗砂多、礫少	淡灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00746
113	1323	9号窯	流出土	壺	--	--	(16.6)	−	粗砂多、礫	淡灰	淡灰オーブ	硬・堅	内面胴部、外面胴ロ縁	00747
113	1324	9号窯	流出土	壺	--	--	(21.3)	−	粗砂多、礫	淡灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00730
113	1325	9号窯	流出土	壺	--	--	(16.6)	−	粗砂多、礫	淡灰	灰	硬・堅	隆沈顕著	00749
113	1326	9号窯	流出土	壺	--	--	(15.5)	−	粗砂多、礫	淡灰	淡灰オーブ	硬・堅	内面胴部、外面胴部、焼き割れ	00748
113	1327	9号窯	側面流出土	壺	--	--	(9.9)	−	粗砂多、礫少	暗灰	暗灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部か	00727
113	1328	9号窯	側面(Ka.5)、黒灰色土	壺	--	--	(7.4)	−	粗砂多、礫少	灰	暗灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00728
113	1329	9号窯	側面灰、赤表土ベルト、褐色土	壺	--	--	(12.6)	−	粗砂、礫多	灰白	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00725
113	1330	5号窯	焼成ピット、表面下数地層、同焼窯地層埋土最終層)	壺	--	--	(11.1)	−	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	軟・粗	内面胴部、外面胴部、焼き台(置き台)転用	00763
113	1331	5号窯	焼成面埋土	壺	--	--	(13.6)	−	粗砂多、礫少	灰	灰、黒褐	硬・堅	内面胴部、外面胴部、外面隆沈顕著	00764
113	1332	5号窯	焼成面天井部落土	壺	--	--	(9.6)	−	粗砂多、礫少	暗灰	灰	軟・粗	内面胴部(二つの粘土)、外面胴部、焼き台(置き台)転用、(同じ同一個体か)	00765
113	1333	5号窯	焼成面天井部埋土	壺	--	--	(11.3)	−	粗砂多、礫多	オリーブ灰	黒灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部、焼き割れあり	00768
113	1334	5号窯	側面黒焦色土	壺	--	--	(7.5)	−	粗砂多、礫多	灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00769
113	1335	5号窯	焼成面第土	壺	--	--	(25.6)	−	粗砂多、礫多	黒灰	淡灰	軟・粗	内面胴部、外面胴部、焼き台(置き台)転用	00766
113	1336	5号窯	側面黒褐色土	壺	--	--	(9.5)	−	細砂、礫少	淡黒灰	黒灰	硬・堅	内面胴部か、外面胴部、内面隆沈顕著	00767
113	1337	5号窯	焼成ピット、表面下数地層、同焼窯地層埋土最終層)	壺	--	--	(4.4)	−	細砂、礫少	淡灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00785
113	1338	11号窯	側面黒焦色土	壺	--	--	(6.7)	−	粗砂多	淡黒灰	淡黒灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部、生焼けに近い	00777
113	1339	5号窯	焼成埋土	壺	--	--	(4.9)	−	粗砂多、礫多	黒灰	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00786
113	1340	10号窯	鉄水溝Ka.14	壺	--	--	(11.6)	−	粗砂多、礫少	灰	黒灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00779
113	1341	10号窯	鉄水溝Ka.10	壺	--	--	(13.1)	−	粗砂多、礫多	淡灰	灰白	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00779
113	1342	10号窯	埋土最終床	壺	--	--	(9.4)	−	粗砂、大型礫少	淡黒	灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部、焼き割れあり	00780
113	1343	10号窯	埋土最終床	壺	--	--	(9.6)	−	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部か	00787
113	1344	10号窯	埋土最終床	壺	--	--	(9.2)	−	粗砂多	淡灰	淡灰	硬・堅	内面胴部か、外面胴部、内面隆沈あり	00789
113	1345	10号窯	焼成面天井部落土	壺	--	--	(11.5)	−	粗砂多、大型礫多	灰	暗灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00782
113	1346	2号窯	Ka.24	壺	--	--	(12.6)	−	粗砂多、礫	暗褐	暗褐	軟・粗	内面ロ縁ハケ調整、外面胴部、焼き台(置き台)に転用	00736
113	1347	2号窯	Ka.24	壺	--	--	(16.7)	−	粗砂、礫	黒灰	黒灰	軟・粗	内面ロ縁、外面胴部、焼き台(置き台)に転用	00737
113	1348	2号窯	側面黒土層黒色土層Ka.11	壺	--	--	(8.6)	−	粗砂少	淡灰黒	暗灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00744
113	1349	2号窯	Ka.24・26	壺	--	--	(17.6)	−	粗砂多、大型礫多	灰褐	灰褐	軟・粗	内面ロ縁か、外面胴部不定、焼き台(置き台)に転用	00741
113	1350	2号窯	Ka.24	壺	--	--	(15.3)	−	粗砂多、大型礫多	赤褐	暗灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00740
113	1351	2号窯	側面黒土層黒色層Ka.11	鉢鉢か	--	--	(6.6)	−	粗砂多	淡灰オーブ	淡灰	硬・堅	内面胴部、外面胴部	00738
113	1352	2号窯	焼成面Ka.35	壺	--	--	(11.6)	−	粗砂多、大型礫多	暗褐	赤灰	軟・粗	内面胴部、外面胴部、焼き台(置き台)に転用	00739
113	1353	2号窯	焼成面Ka.37	壺	--	--	(10.2)	−	粗砂多、礫少	灰	灰褐	硬・堅	内面胴部、外面格子状	00743

図版第1　空中写真



那谷金比羅山古墳・那谷金比羅山窯跡群（矢印）の位置（昭和23年米軍撮影）

図版第2　金比羅山全景

金比羅山全景1（東上空から）

金比羅山全景2（南東から）

図版第3　金比羅山全景

金比羅山全景3（第1次調査）南東上空から

金比羅山全景4（第1次調査）南西から

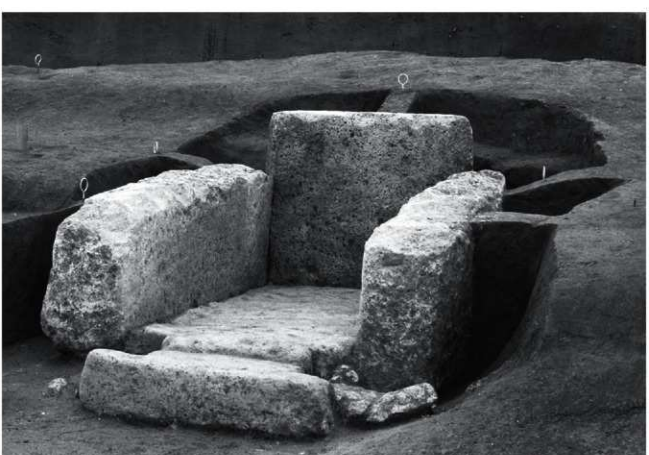
図版第4　那谷金比羅山古墳

全景（南から）

石槨正面

図版第5　那谷金比羅山古墳

石槨左側壁



石槨右側壁

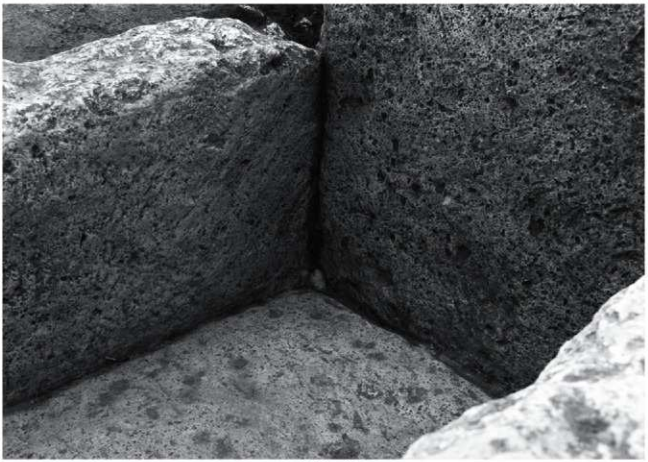
図版第6　那谷金比羅山古墳

石槨全景

石槨玄門部

前庭部石列1

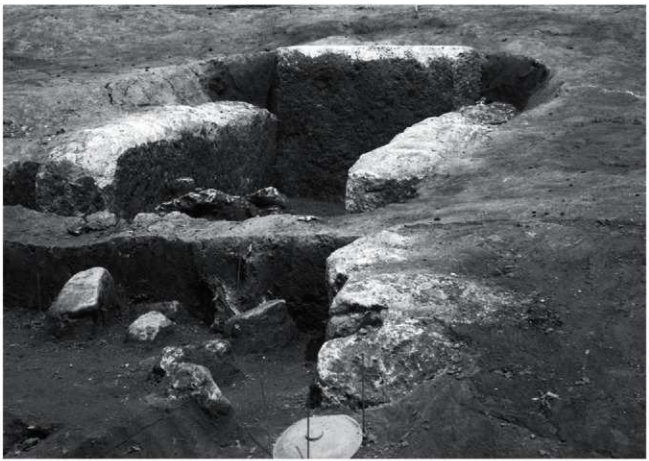
前庭部石列2



石槨組合わせ 1

石槨組合わせ 2

図版第9　那谷金比羅山古墳



前庭部埋土状況

石槨内埋土状況

玄門部埋土状況

前庭部石材状況

玄門部石材状況

図版第10　那谷金比羅山古墳

周溝埋土状況

掘り形埋土状況

掘り形埋土状況

周溝遺物出土状況

図版第11　那谷金比羅山古墳

古墳完掘状況

石槨検出状況

調査状況

調査状況

石材搬出状況

1354

1355

1357

1356

1360

1359

1358

1362

1361

石鏃A
石鏃B
石鏃C
鉄A
鉄B
鉄C
石槨南撹乱部出土土器片

第３次調査区全景１（南西上空から）

第３次調査区全景２

図版第14　那谷金比羅山窯跡群

1号窯全景1（南西から）

1号窯全景2（北東から）

図版第15　那谷金比羅山窯跡群

1号窯窯体（北東から）

2号窯全景（北東から）

2号窯排煙口

2号窯前庭部（北東から）

3号窯全景（東から）

図版第18　那谷金比羅山窯跡群

4号窯全景1（南西から）

4号窯全景2（北東から）

5号窯全景（東から）

5号窯焼成部（東から）

5号窯窯体北側壁工具痕

5号・10号窯前庭部調査風景（南東から）

5号・10号窯全景（東から）

5号・10号窯排煙口（東から）

図版第22　那谷金比羅山窯跡群

6号窯全景（南西から）

6号窯前庭部断面（南から）

6号窯煙道（東から）

6号・7号・11号窯（南西から）

7-1 号窯全景（南西から）

7-1 号窯第 1 次床舟底状ピット（北東から）

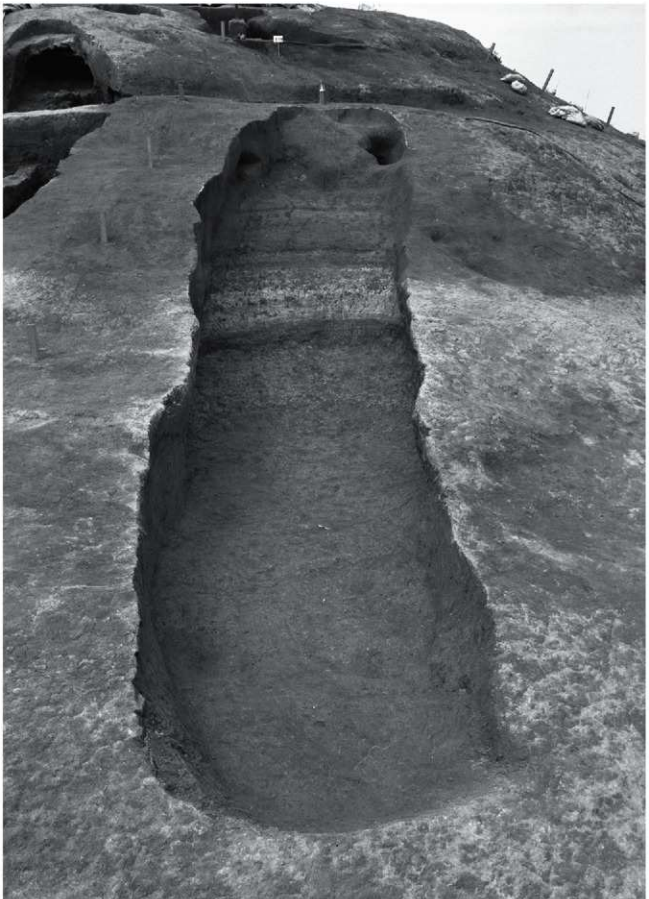
7-2 号窯全景（南西から）

7-2 号窯焼成部須恵器出土状況 1（北東から）

7-2 号窯焼成部須恵器出土状況 2（南西から）

8号窯と7-1号窯排煙通構（南から）

8号窯（北から）



9号窯全景（南から）

10号窯（東から）

10号窯焼成部（東から）

10号窯焼成部床面排水施設（東から）

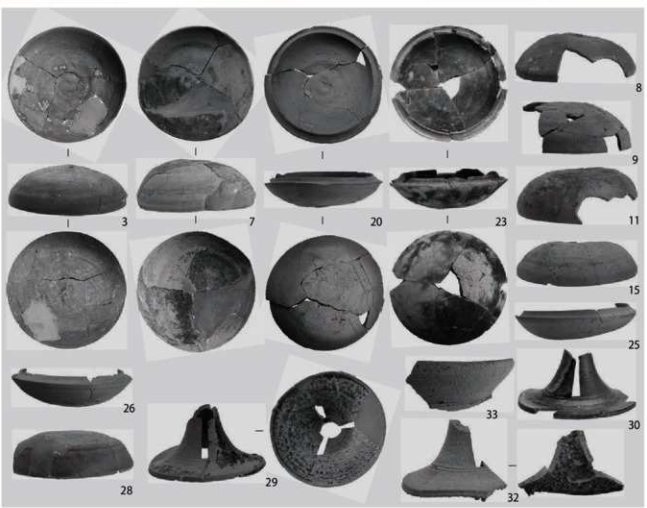
11号窯全景（南西から）

11号窯排煙施設（北東から）

整穴状遺構（北から）

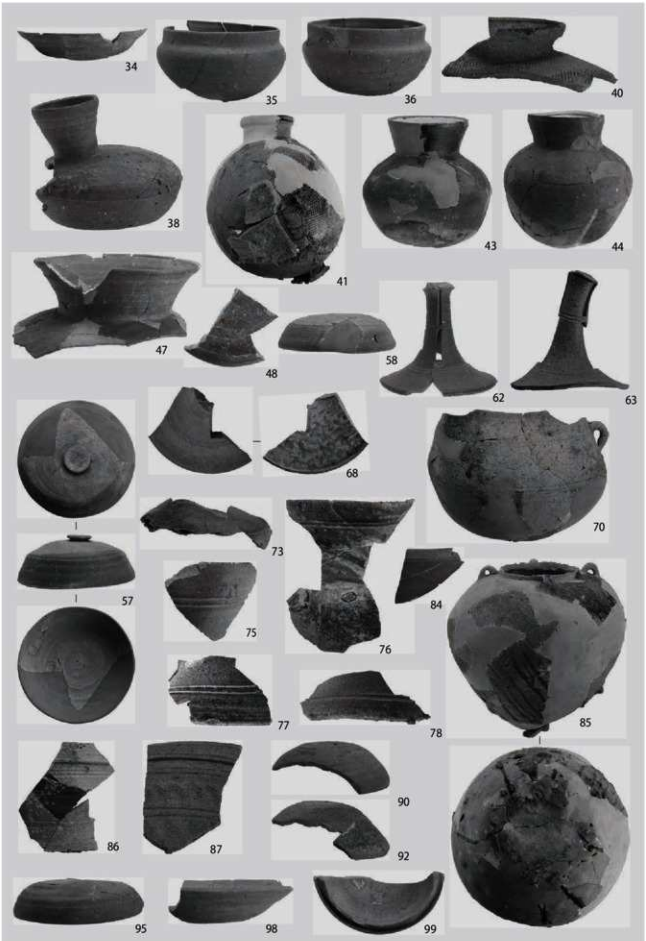
整穴状遺構（南から）

図版第32　那谷金比羅山窯跡群出土遺物1



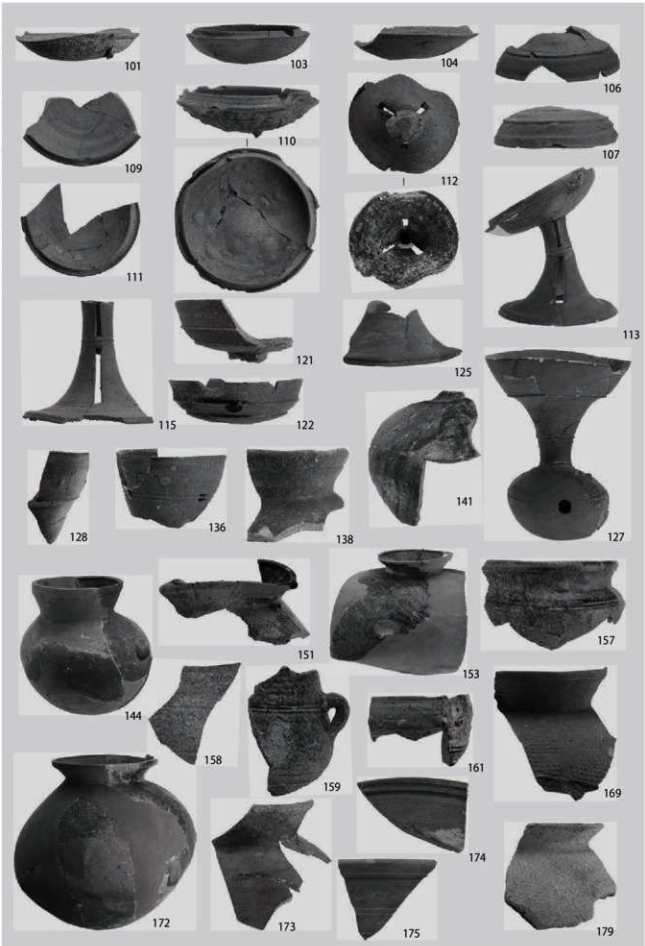
4号窯1

図版第33　那谷金比羅山窯跡群出土遺物2



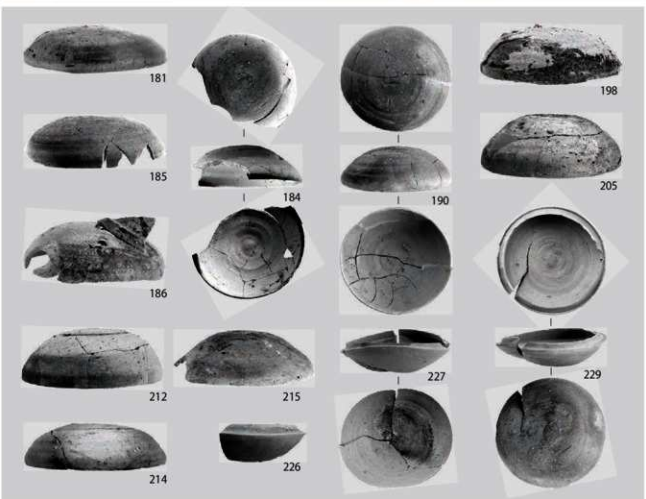
4号窯2

図版第34　那谷金比羅山窯跡群出土遺物3

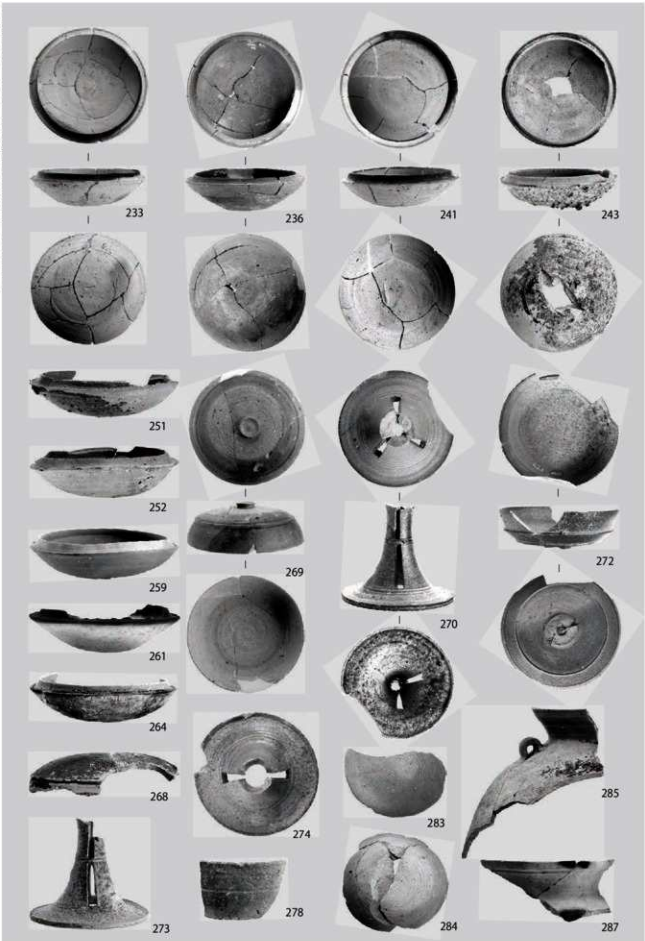


4号窯3

図版第35　那谷金比羅山窯跡群出土遺物4



1号窯1

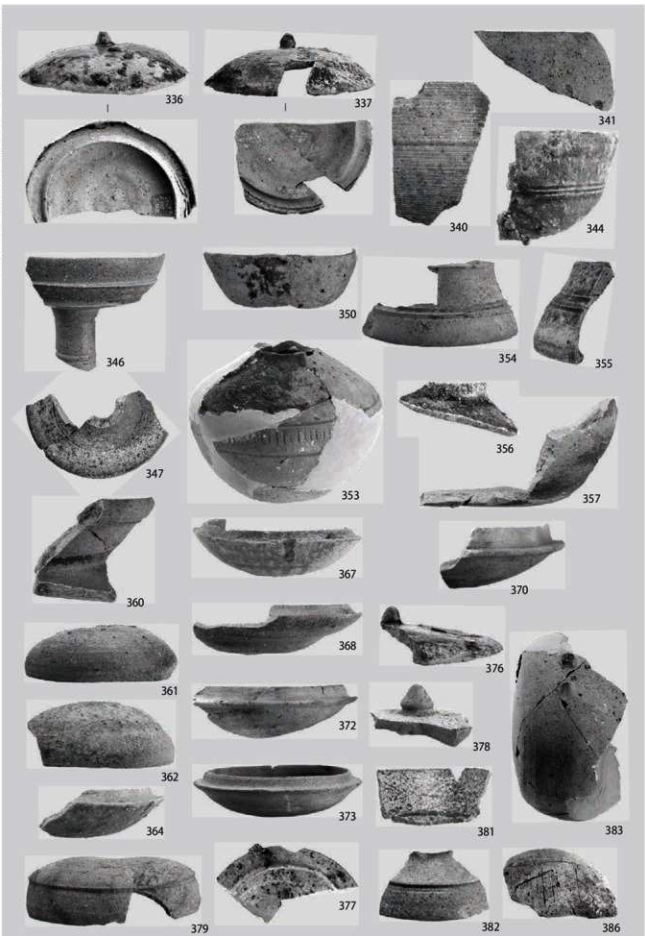

233
236
241
243
251
252
259
261
264
268
273
269
274
278
270
283
284
272
285
287

1号窯2

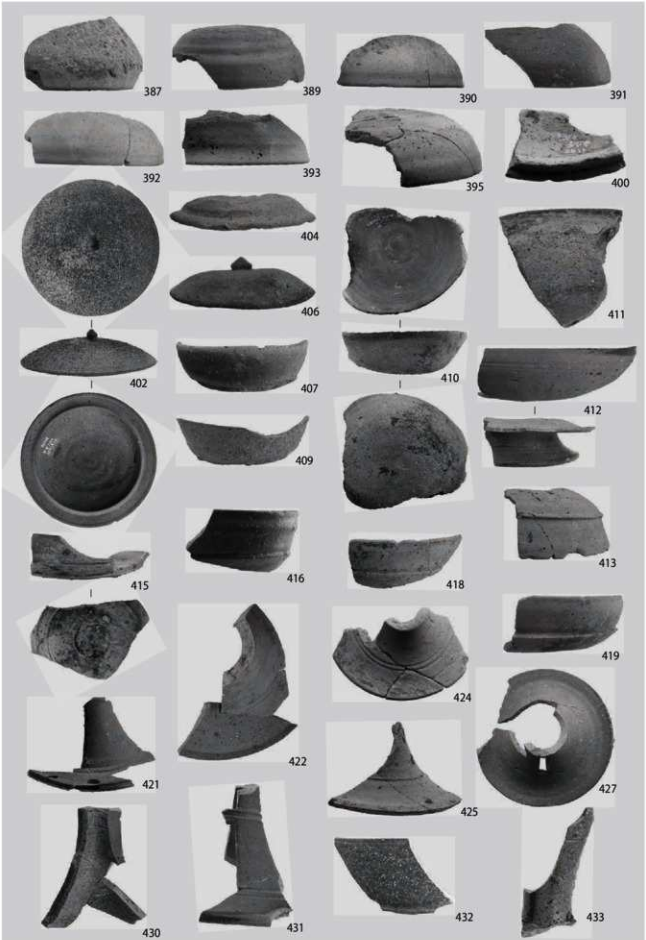
図版第37　那谷金比羅山窯跡群出土遺物6

289
305
306
309
292
307
311
316
297
310
313
317
300
318
326
323
328
320
327
写真のみ
332

6号窯1


336
337
341
340
344
346
350
354
355
347
353
356
357
360
367
370
368
376
361
372
378
362
373
381
383
364
377
379
382
386

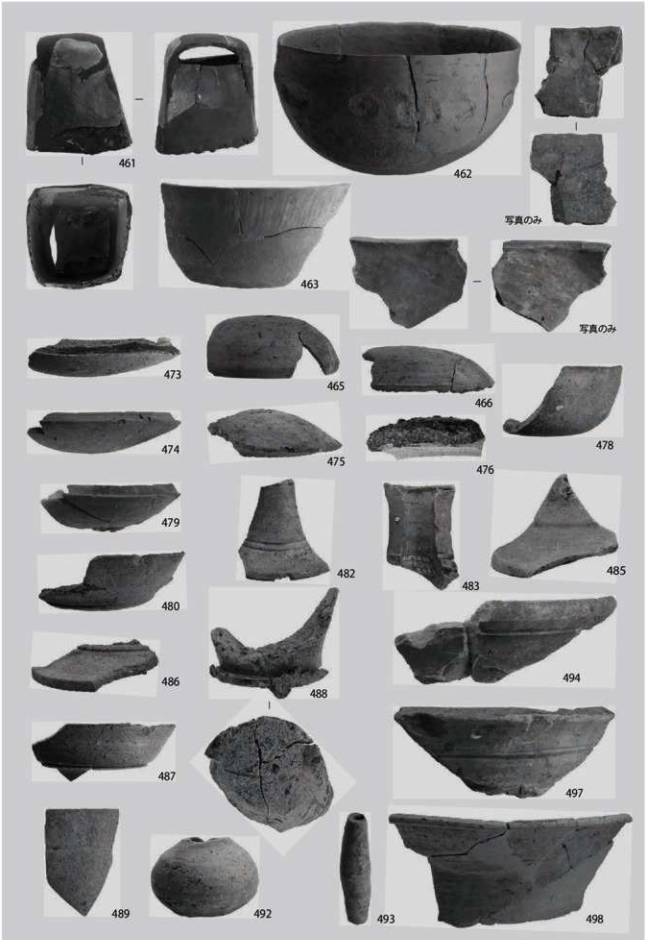
6号窯2


387
389
390
391
392
393
395
400
404
406
411
402
407
410
412
409
413
415
416
418
419
424
421
422
427
425
430
431
432
433

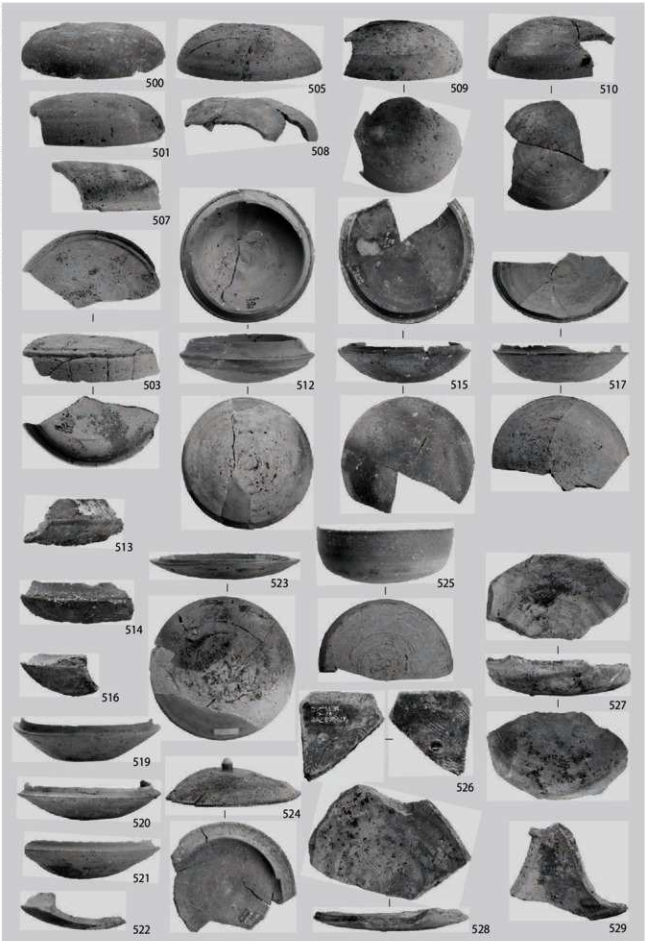
11号窯1

434
435
436
438
441
442
443
444
449
453
447
454
455
450
460
458
459

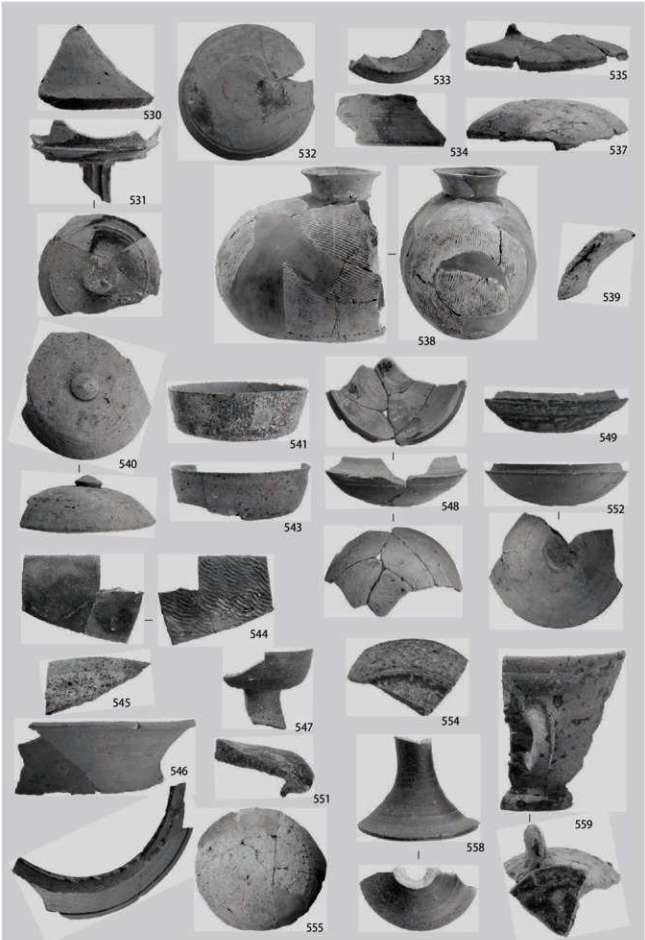
11 号窯 2


461
462
写真のみ
463
写真のみ
473
465
466
474
475
476
478
479
482
483
485
480
486
488
494
487
497
489
492
493
498

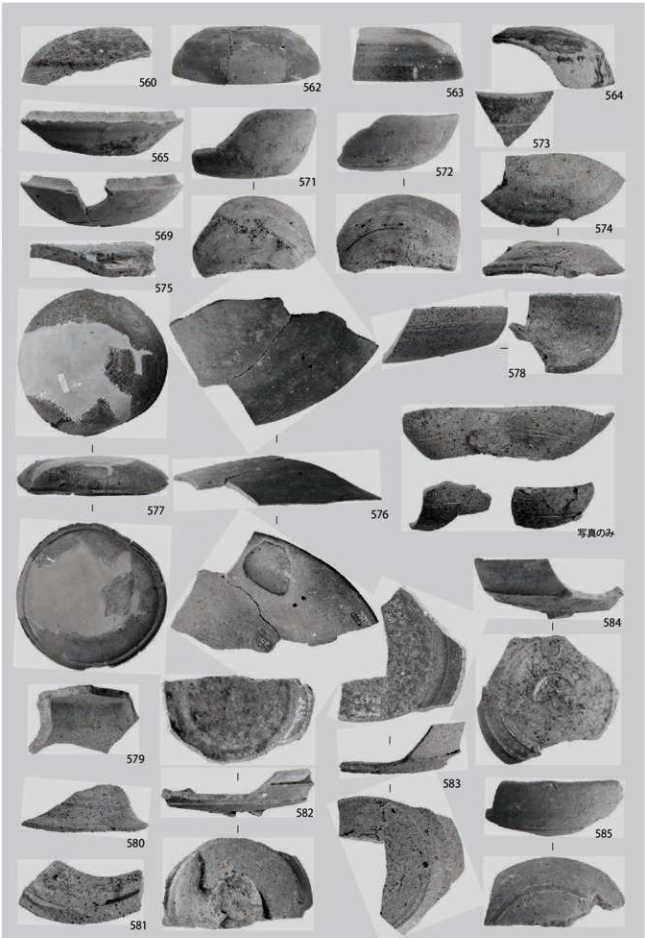
11号窯3


500
505
509
510
501
508
507
503
512
515
517
513
523
525
514
516
527
519
526
520
524
521
522
528
529

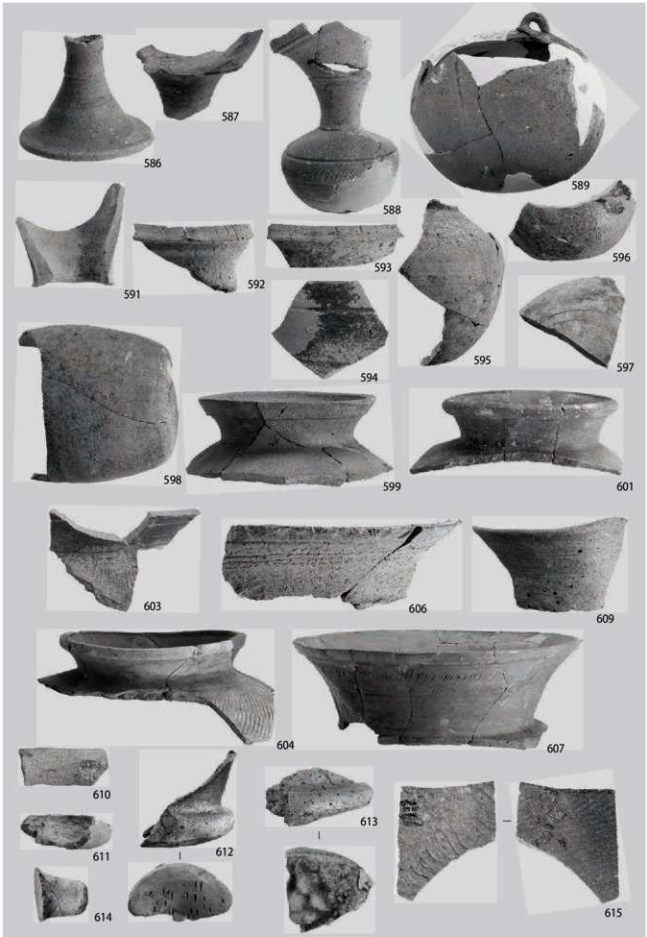
7-1 号窯 1


530
531
532
533
534
535
537
538
539
540
541
543
544
545
546
547
548
549
551
552
554
555
558
559

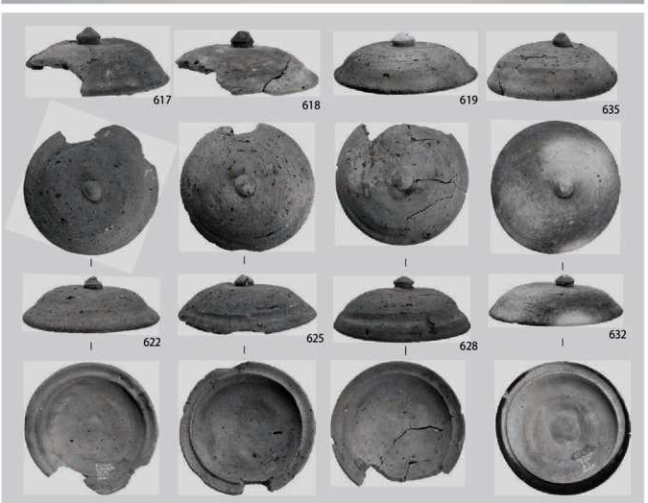
7-1 号窯 2


560
562
563
564
565
571
572
573
569
574
575
578
577
576
写真のみ
584
579
583
582
580
585
581

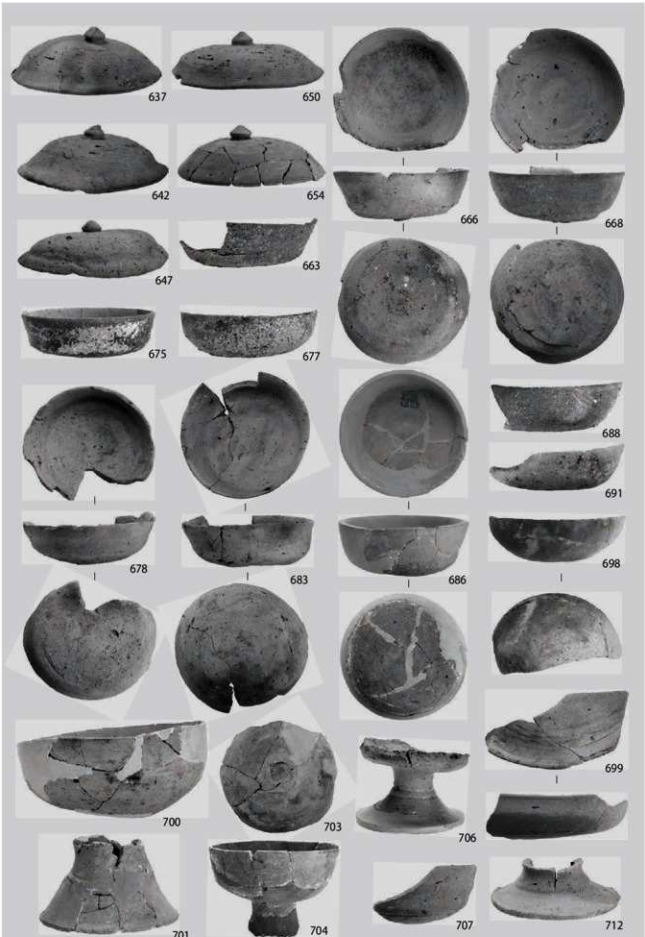
7-1・2号窯灰原1


586
587
588
589
591
592
593
594
595
596
597
598
599
601
603
606
609
604
607
610
611
612
613
614
615

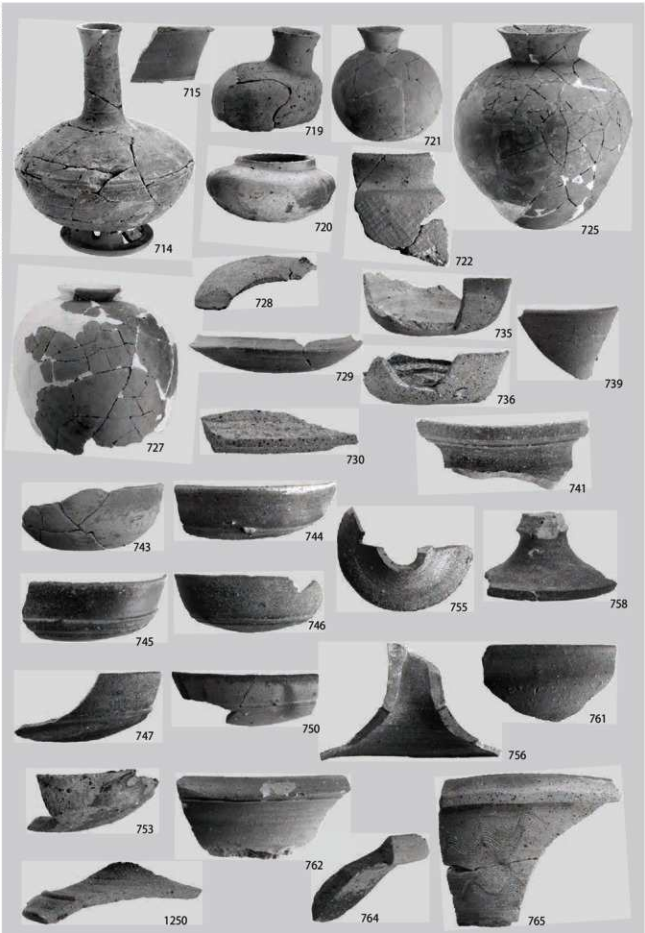
7-1 号窯灰原 2



7-2 号窯 1


637
650
642
654
666
668
647
663
675
677
688
691
678
683
686
698
700
703
706
699
701
704
707
712

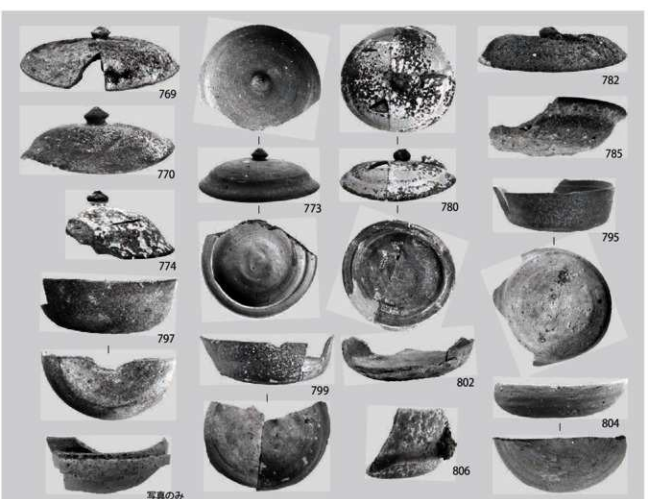
7-2 号窯 2


715
719
721
714
720
722
725
728
735
727
729
736
739
730
741
743
744
755
758
745
746
747
750
756
761
753
762
764
765
1250

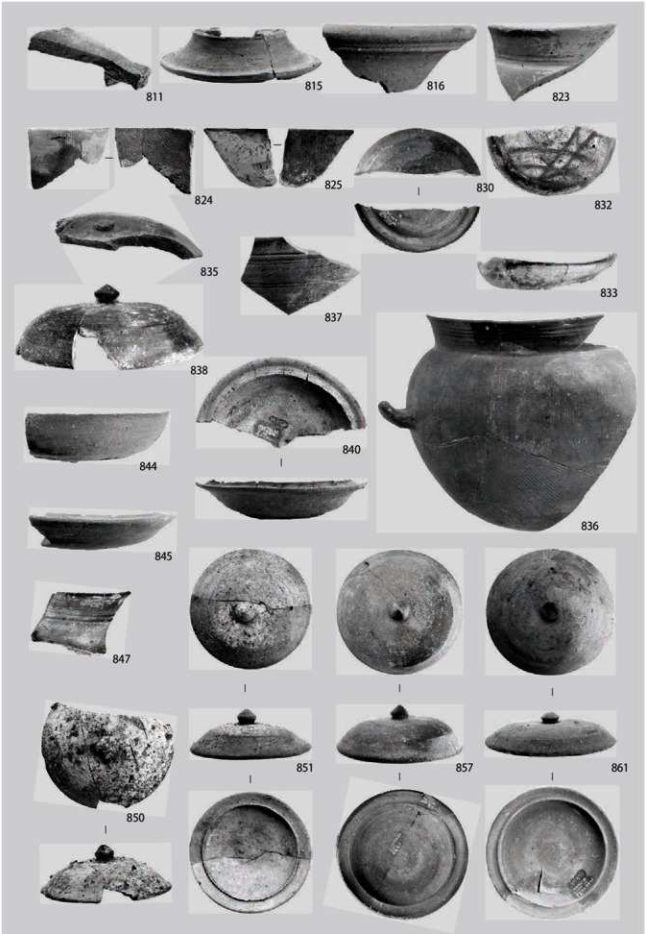
7-2 号窯3・8 号窯

図版第49　那谷金比羅山窯跡群出土遺物18　刻書平瓶

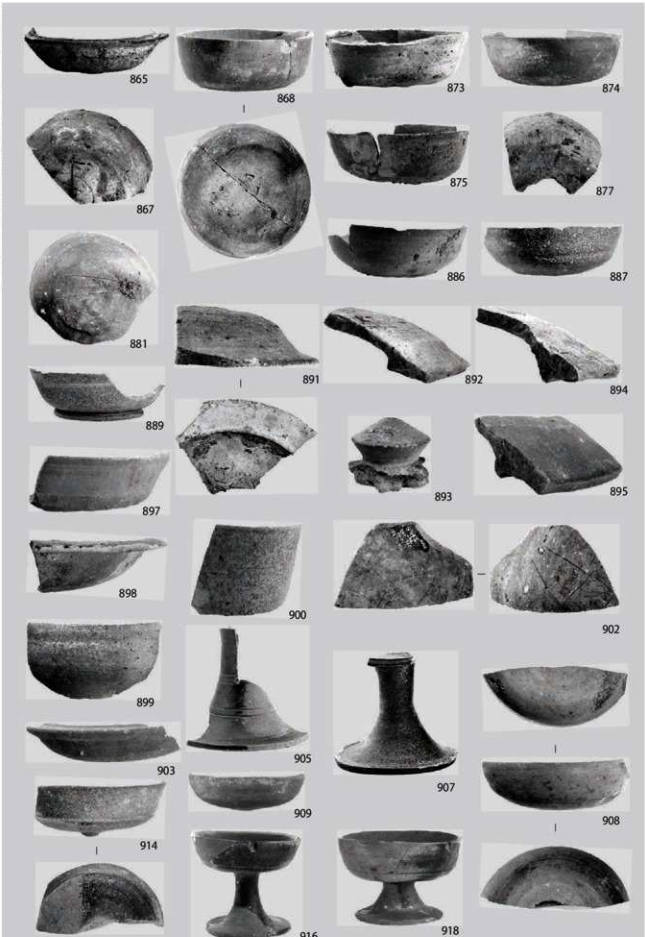
5・10号窯灰原



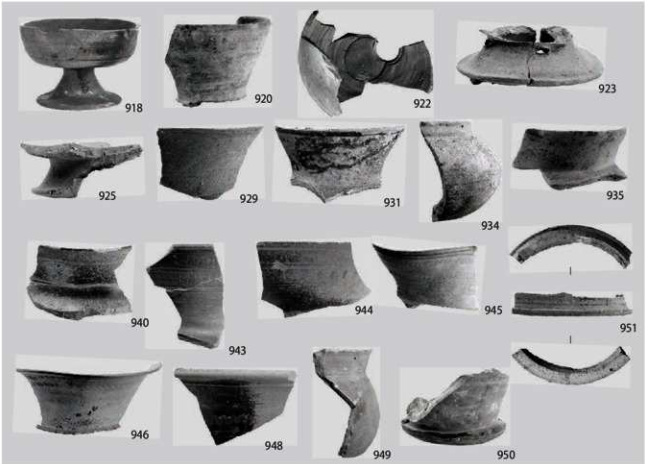
5号窯


811
815
816
823
824
825
830
832
835
833
837
838
840
836
844
845
847
850
851
857
861

10号窯


865
868
873
874
867
875
877
886
887
881
891
892
894
889
893
895
897
898
900
902
899
905
907
903
909
908
914
916
918

5・10号窯灰原1

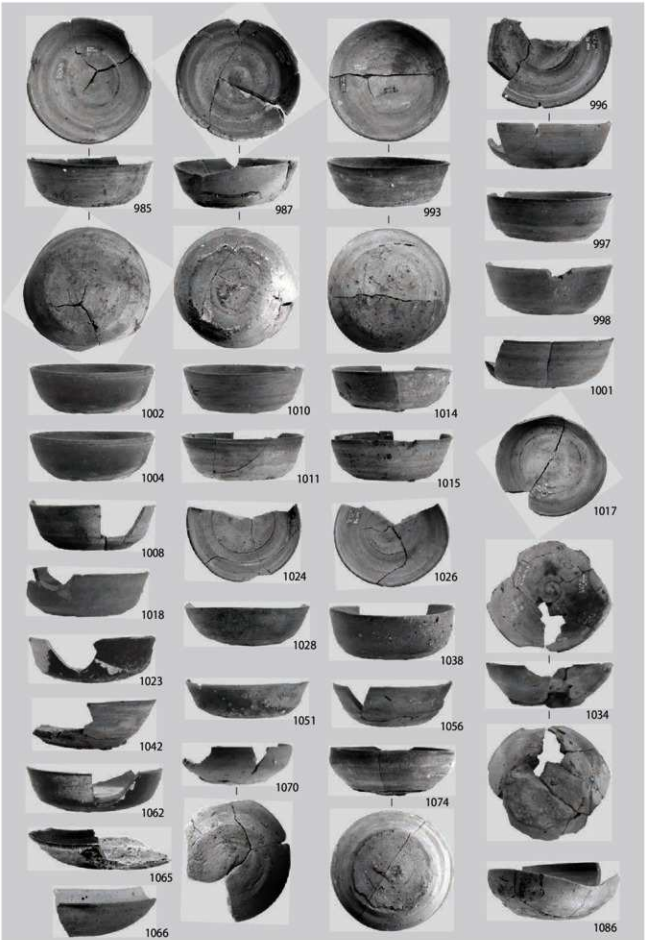


5・10号窯灰原2

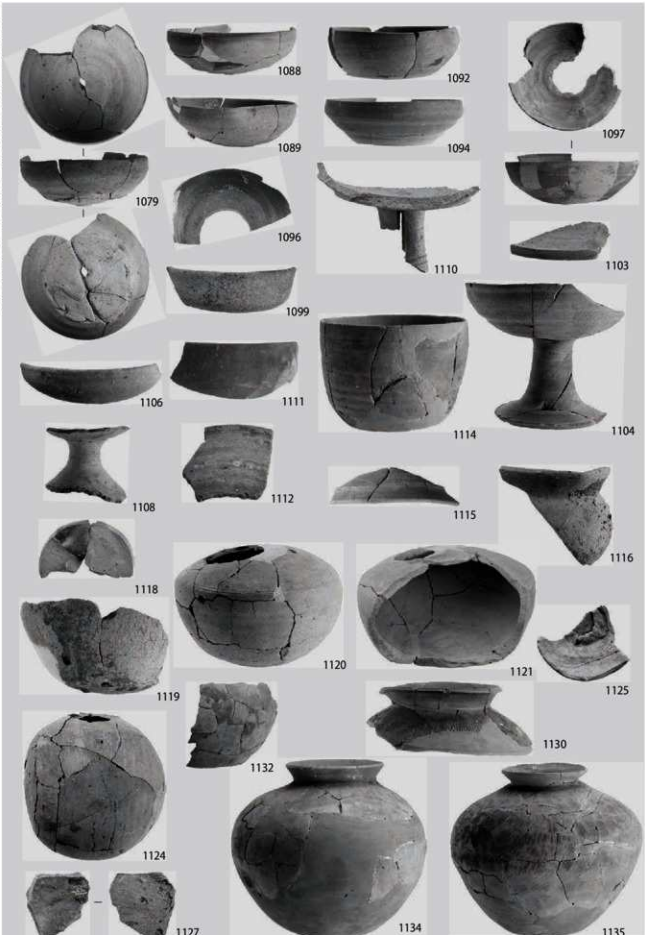
2号窯1

958
955
960
962
963
964
977
980
981
966
971
972
982・983
985

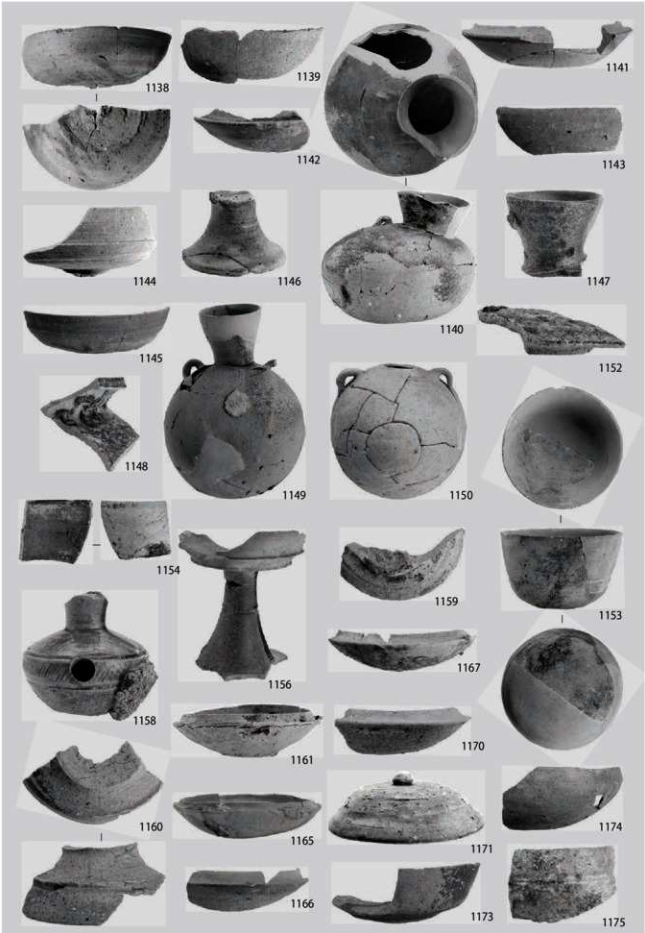
2号窯2


985
987
993
996
997
998
1001
1002
1004
1008
1010
1011
1014
1015
1017
1018
1023
1024
1026
1028
1034
1038
1042
1051
1056
1062
1065
1066
1070
1074
1086

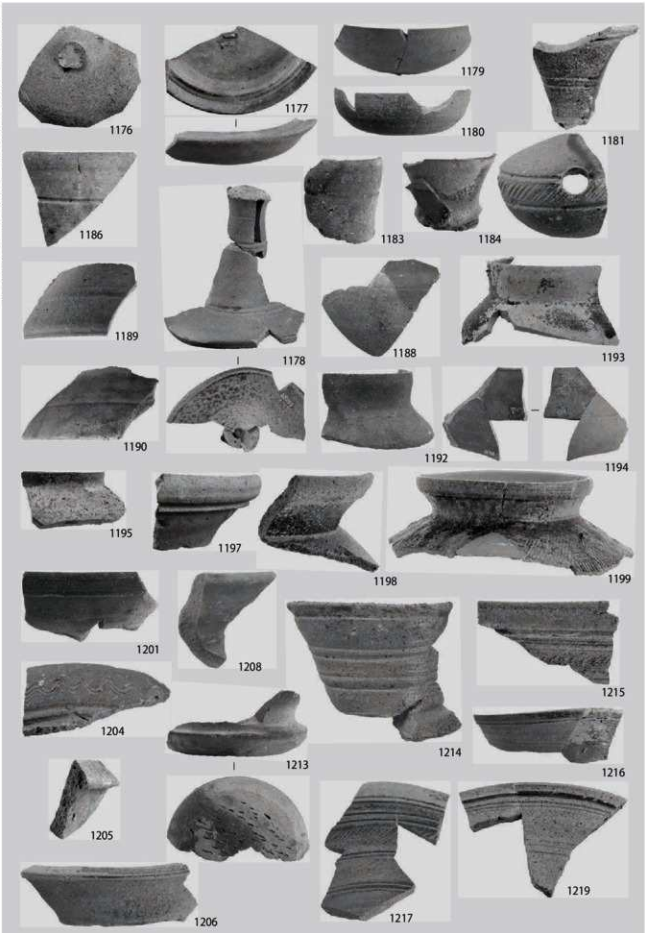
2号窯3


1088
1092
1097
1089
1094
1079
1096
1110
1103
1099
1106
1111
1114
1104
1108
1112
1115
1116
1118
1120
1121
1125
1119
1130
1132
1124
1127
1134
1135

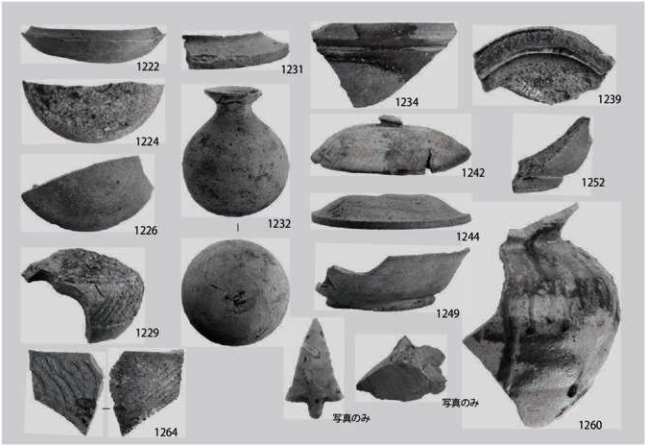
2号窯4



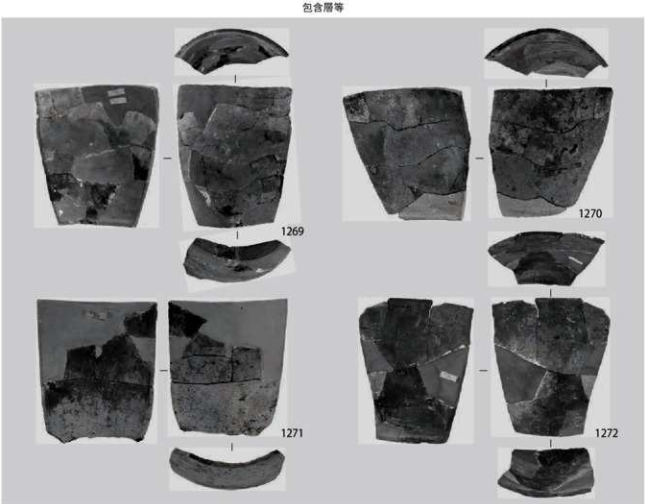
9号窯流込土・竪穴状遺構・包含層等


1176
1177
1179
1180
1181
1186
1183
1184
1189
1178
1188
1193
1190
1192
1194
1195
1197
1198
1199
1201
1208
1215
1204
1213
1214
1216
1205
1206
1217
1219

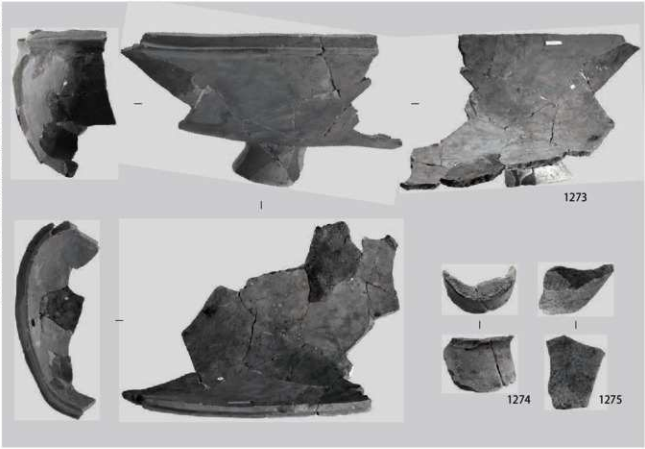
包含層等

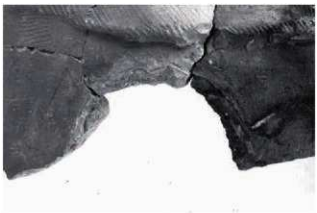

1222
1231
1234
1239
1224
1232
1242
1252
1226
1244
1229
1249
1264
写真のみ
写真のみ
1260

包含層等


1269
1270
1271
1272

平瓦様製品





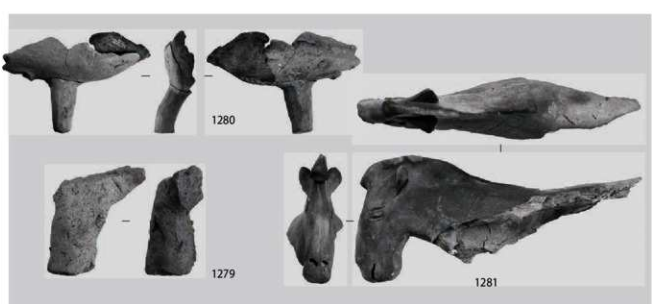
短側面脚部接合部

長側面受け部接合部

写真のみ

陶棺

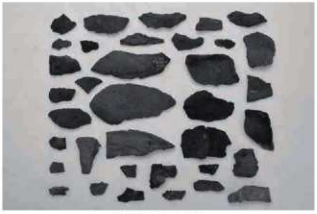
円面硯



土馬 1

1282
1283
1284
1286
1285
1287
1289
1290
1291
1288

土馬 2



土馬片（写真のみ）

胴部切り落とし残欠（写真のみ）

那谷金比羅山古墳
那谷金比羅山窯跡群

発行日　平成元年(1989)3月31日
発行者　石川県立埋蔵文化財センター